
マテリアルドライブ

ユーリアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアルドライブ

【Nコード】

N3117U

【作者名】

ユーリアル

【あらすじ】

古い歴史を持つMMORPG【マテリアルドライブ】

ほとんどのプレイヤーが戦闘職で遊ぶ中、数少ない生産職を選ぶアクト。

生産系廃人プレイとでも言うべき生活をする彼がある日目覚めると森の中だった!?

金属方面の生産、アイテムチートっばいです。

戦闘能力はそこそこの程度。単独では中堅までが限界。強敵は相打ち

覚悟。

イメージとしては某ネットゲームの純製造職のキャラクター達（S
TR微妙）

お母さんの万能包丁がまな板ごと肉を斬っちゃってるよ!？
そんな感じです。

08/15

更新頻度はおおよそ3日に1話です。（主に残業都合）

09/01

10000P突破！ 感謝感謝です。

感想、お待ちしております。

キャラ紹介他（最終更新：2011/09/16）（前書き）

後々の更新日は出てこないようなのでタイトルに加えることに。

09/16

キャラ、武器設定追加

キャラ紹介他（最終更新：2011/09/16）

本文中だと長くなりそうなものなんかを掲載

マテリアルドライブについて

ネットゲーム初期からある古いMMORPG。

アイテム名、モンスター名なんかはその分、オーソドックスなファンタジー物がほとんどだった。

アップデートのたびに追加された模様。

なお、Lvキャップは初期800、最終的には1200。

クエスト類を攻略することで各種スキルの取得が開放される仕様。

作中表記は主に【MD】

レベル主体、スキル魔法による傾向選択。

各行動に熟練度あり。

マテリアルドライブ（転移先？）

作中表記は便宜上、【MD2】

原因不明の状態でファクトが目覚めた世界。

MDでのシステムが1部使える等、共通事項あり。

現在、他のプレイヤーと思われる存在には出会っていない。

NPC存在がおらず、全てが生身の存在に感じる様子。

簡易キャラ紹介

・ファクト

苗字は無し。本人的には必要なら捏造するか、という状態。

現実での名前は「金崎白徒」きんざきはくと

ファクト、はここから。

実年齢は20台半ば。

ゲーム及びこの世界だと20代にも30代にも見える様子。

身長は180後半。

髪は短め、ツンツンしてます。

ストレス解消は作った武器を地面に突き刺しまくって

誰もいないのに「ここは通さん！」とか「貯蔵は十分か？」みたい
にやること。

転生？時のLvは912。

まさにちりも積もれば。

ステータス的には器用さは抜群。

腕力や速度などはゲーム的には中堅。

・ジエームズ

元傭兵。27歳。

幼い頃は苦労人だった。

その反動からか、大人になることに大雑把かつ、陽気な性格に。

各地で小競り合いや街の用心棒、盗賊退治等、

戦闘メインの冒険者のようなことをしていた。

小国間の戦争に雇われ、乗り気でないまま戦うも、

クレイとコーラルの実情を知って戦争終了後傭兵を引退。

以後、2人と共に冒険者として各地を放浪している。

メイン武器は大剣。
冒険者らしく、一通りは他の武器も扱える。
魔法は使用できない。

・クレイ

10代の若い冒険者。

コーラルとはご近所同士だった。

ジェームズの参加した小国間の戦争で親を亡くした戦争孤児。
彼のことは恨んでおらず、世界を見てみたいとジェームズに望み、
一緒に行動するようになる。

武器はオーソドックスな長剣タイプ。

戦闘に関係のない細かいことは苦手な様子。

・コーラル

10代の若い冒険者兼魔法使い。

小国で細々と続いてきた家系。

伸び白は大国にスカウトされるほどだが、まだ開花には至っていない。

暗いところ、不死系などが苦手。

理由はクレイに散々脅かされたから。

苦手魔法はないが、乙女な理由で空は飛べない。

親も魔法使いとして戦争に参加していた。

家系の存在意義、何より他の魔法使いとの出会いを求めて
2人と一緒に行動している。

最近ではファクト自身ではない何かがかげにかかっている様子。

・イリス

とある遺物研究者。

身綺麗にすればかなりの容姿だが、研究に熱心で残念な姿に。

今も様々な遺物候補を研究している。

お金

ゲーム中だと1ガルド銀貨は最低単価。

小判の改鑄のごとく、徐々に質は落ちていく。

数枚で生活には困らない。

一応、金貨 > 銀貨 > 銅貨だが、一般人は金貨を持つことはごく稀。
ほとんどは銅貨で生活している。

銀貨1枚 ≡ 数万円ぐらい

モンスター

全てのモンスターは自分の生存と領域のために
常に人類と争っている。

人語を話し、理解する存在はリーダーになるほどいる。

ゴブリン、コボルト、オーク、ケンタウロス、といった他、
動物が巨大化したようなタイプもいるが、モンスターとは厳密には

呼べない状態。

どこから産まれて来ているかは不明。

MD2の学者達の間では、撲滅は不可能ではないか？との噂も。

もちろん、ドラゴンもいる。

スキル紹介

・武器生成 クリエイトウェポン

武器全般が作成可能。

アイテムボックスや手に持った状態の素材から作成する方法と、フィールドにある素材を用いるものが選択可能。

フィールドの素材を用いる場合、その性能や属性などはフィールドに依存する。

10分から数時間の間でカウント表示され、それが尽きると消滅し始める。

攻撃をしたり、防御を行ったりするとカウントは早く減っていく。

アイテムボックスや手持ちの素材を用いる場合、消えることは無い。MD設定では、稀に祝福された〜となり、微妙に性能が上がる。

近距離、中距離、遠距離のほか、特殊項目がある。

ランクはCからSとなり、ランクが上がるほど特殊効果や装備依存のスキルなどが実装可能。

高ランク、高性能のものを作ろうとするほど消費魔力は増える。

・盾生成 クリエイトシールド

基本事項は武器生成と同様。

小盾、通常盾、丸盾、壁盾などがある。

クリエイトアーマー
・鎧生成

基本事項は武器生成と同様。

金属、皮、植物などがある。

素材の都合上、殆どが金属か皮となる。

ランクが上がるほど、高品質の鉱石が使えることになる。

・ファストブレイク

小手狙いをフェイントに救い上げるように喉元を狙うアクティブスキル。

MDにおける剣士タイプの基本スキルの一つ。

運が悪いと小手で1回、喉元で1回、と2回攻撃を食らうことになる。

ダメージ補正は通常攻撃に1.1倍程度。

喉元への攻撃の速さを利用するタイプ。

斧等、重量のある武器では使用できない。

スカーレットホーン
・赤き暴虐の角

長剣 スカーレットホーン の装備依存スキル。

使用者のSTRに応じた変動%の魔力を消費して発動するアクティブスキル。

STRが上がると、威力は上昇するが消費量も増加する。
Lvが上がって、総魔力が上昇しても、%消費なので旨みは少ない。

効果は武器を突き出した前面への範囲攻撃。

STRにより効果範囲が拡大する。

直線状の攻撃以外にも、周囲に舞う赤光に触れてもダメージがある。

見た目は派手だが、ネットゲームの宿命としてモンスターを数多く倒す必要のあるMDでは、

使い勝手から敬遠されていたスキル。

・栄光の輝き

金色と銀色の長剣、 栄光の双剣 の装備依存スキル。

装備する限り発動しているパッシブスキル。

使用者のLvに応じて、範囲内の味方のステータスを%上昇。

ゲームではパーティーメンバー限定。

この世界では使用者が味方だと思っている範囲内のメンバー全てが対象。

効果範囲もLvに応じて拡大する。

武器自身は同ランクの長剣と大差がない。

閑話「ある日のMD。中の人などいない！」（前書き）

時間軸はバラバラです。

ゲームであるマテリアルドライブ（MD）としての描写なので、本編中とは描写、設定に差異があります。

ファクトはこんな奴だ、スキルはこんな感じなんだ、という参考やお楽しみになれば幸いです。

閑話「ある日のMD。中の人などいない！」

ゲームとはデータである。

子供も大人も、男も女も、データの前では平等だ。

仮想現実でも持つ者、持たざる者が明確に出るのは、さびしくもあるが仕方のないことだ。

「ねー、聞ってるのー？」

故に、嫉妬や羨望、あるいは憧れというものはゲーム内でも当然のように存在する。

「ねーってばっ」

「ええいつ、少し黙ってる、ペイン！」

人がせつかく高尚な思考をしていたというのに。

街中のため、ノックバックしか産まない俺の裏拳が、見た目は小学生低学年ほどの少女を数歩、吹き飛ばす。

腰まで届くツインテールに、キラキラ光る金髪、敏捷そうなしなやかな体格に、動きやすい軽装に加えてスパッツ、といういでたちだ。

「いったーい！ 何するのやー」

耳に届く甲高い、少女特有のハイトーン。

「急にやってきて、無理難題を言うからだろ。というか、俺の前でそのロールは控えて欲しいんだけどな、中を知ってるだけに」

「中を知ってるだなんて、ファクトお兄ちゃんの、えっち！」

「……………(ブチッ)」

無言で、俺は愛用の長剣を2本構え、ダメージは無いとわかっていても少女、表示名は違うがペインへと切りかかり、連続でひたすら切り込んでいく。

「わっ、ひっ、うわわっ。わかった！ わかったからやめろって！」

「わかればいいんだ、わかれば」

剣を収め、いつもの場所に腰を下ろす。

ここは、自分の所属する王国の首都、その市場の隅だ。

「俺的にはこの姿でこの喋りのほうが辛いんだけど？」

「我慢しろ。プレイヤーを実際に知っていたら、微妙な気分になって仕方が無いんだ」

そう、この少女の別キャラであるペインのプレイヤーとは現実に出会ったことがあるのだ。

確か、レアアイテムの出る依頼の相談中、意外と近くに住んでることがわかったので1度飯でも、ということになったからだったはず

だ。

引越し業者に勤めているかなり鍛えられた感じの好青年だった。

「それに、俺の脳内ではリアルな男性声に変換されるから問題ない」
言い放った俺に、ペインはため息をついて横に座る。

「オーケー。とりあえず、これでレイピアタイプを頼むわ」

と、放り投げられたのは武器素材になる金属塊。

チエックをした俺の手が止まる。

「ほー、聖属性込みのアダマンチウムじゃないか。これならもっと
攻撃力重視の武器のほうでいいんじゃないのか？」

かなり堅く、たたきつけるタイプの鈍器や、しっかりとした剣タイ
プのほうが良いような気もする。

「いや、レイピアでいいんだ。実は、男アカのほう休止する予定で、
こっちメインになるんだわ」

見た目は少女の癖に、妙に疲れた様子に思わず事情を聞いてしまう。

「珍しいじゃないか。『俺は最強のアタッカーになる！』とか言っ
てたのに」

作る武器のステータスの調整をしつつ、必要な情報メモをウィンド
ウに出していく。

「ああ、最近は高火力、高HPのボスが増えてきて、壁役が必須なんだよ」

ペインが言うには、アタッカーというより、壁役で呼ばれることが多くなっただけらしい。

「もちろん、そうじゃないと攻略できないからそれはいいんだけどよ。だからって、元の壁役をパーティーから外して、アタッカー募集されたら…ねえ？」

「なるほどね。ペインほどとなれば、どこに行っても同じような可能性が高いか」

ペインのメインキャラは前衛系、オーソドックスな剣士系統で、ひたすら力押しだ。

武器防具を状況に応じて、常に最大火力、最大耐久！というまさに戦鬪馬鹿。

俺も素材集めなんかによくお世話になっている。

「そうなんだよ。すこーし、名前が知られてるからトラブルを起こした後だとそのパーティーにも迷惑かけるしさあ」

「いきなり、タダで一式作れ！って言うてくるわけだ。アイテム移動でもして売り払っていくのは駄目なのか？」

ペインのメインキャラはキャップに近い状態のはずだ。新規キャラの初期投資金ぐらいいはすぐに稼げそうだが……。

「あつちはログイン状態がすぐわかる相手が多いから、たくさんは持ち出せないんだよ。せめてと思っただけはな」

指差すのは先ほどの塊。

「良くわかった。ちょっとそこで待ってる。というか、一緒に来いよ」

ペインの手を取り、キャンプを起動、工房へと転移する。

「最近来てなかったが、相変わらず薄暗いな」

「ほっとけ。仕様なんだからさ。適当に座ってるよ」

中の人が男とわかっていても、女の子の声で否定的なことを言われると少しへこみそうだ。

「で、どんな感じにする？」

作成の準備をしながら、武器の希望を聞いてみる。

「おう、とにかく貫通力、んでもって耐久性、そして、魔法との親和性、で頼むわ」

ペインの言葉に、考えをまとめていく。

レイピア系統の特徴として、勝手に重量自体は軽くなる、というものがあ

それ以外には、武器そのもので与えるダメージは低目ということになるぐら

「高速戦闘で急所を連続襲撃、多少の無茶をしても折れず、魔法剣ならぬ魔法レイピア、と」

俺の答えに満足そうに頷くペインを見、作成に取り掛かる。

炉に塊をいれ、溶かしながら形を整える器に移し、器具を使って赤いままの塊を掴み取る。

武器生成 - 近距離S - 《クリエイト・ウェポン》

俺の周囲に、金色のオーラのような光のラインが幾条も舞い、ハンマーと一緒にやわらかいままのソレに叩き込まれる。

何度も、何度も打ち込んで形を整え、効力を練りこんでいく。

(手ごたえアリ！ これはいける！)

確実な手ごたえに、思わず表情も緩む。

「よいつしよつとー！」

最後となる一発をたたきつけ、息を大きく吐く。

後に残るのは、荘厳な雰囲気を持った1本のレイピア。刀身はルビーのように赤く染まっている。

持ち手部分は、比較的がっしりしたものにしてある。

「よし、さっそく装備してくれ」

ペインにレイピアを渡し、装備してもらおう。

「おおっ、いいじゃないか。完全に上位互換だぜ」

空気を切る音を立てて振り回されるレイピアに俺も満足し、片づけをすばやく済ませる。

「名前はどうすっかな、ファクト、何か良いのあるか？」

(名前ねえ…)

「うーん、ホーリー・コンビクテッドってところでどうだ？」

聖属性だし、死を持って、断罪ってことで。

「よし、それで行こう。専用処理頼むわ」

頷き、レイピアに手を触れて武器のステータス呼び出し、専用化の手順を踏む。

一定以上のスキルで作成した武具は、こうして名前と専用の使用者を決めることで、その性能を1割常時増すことが出来る。

ただ、専用化を解除する際には10%程度で消滅してしまうので、後で売り払おうという場合には注意が必要なのだ。

なお、店売りの武具はいつでも専用化が可能なので、ある程度までは店売り武具を専用化して過ごすのもベターな手段となっている。

嬉しそうなペインを見送り、次の狩場を探して、マップ情報などにらめっことを開始する。

後日、タフで有名なユニークモンスターをソロで撃破した少女剣士がいるという話が耳に入ったが、ペインかどうかは確かめていない。

作成武器

ホーリー・コンビクテッド

タイプ：レイピア

付与効果

- ・不死特攻
- ・精神体接触（幽霊等、肉体を持たない相手を攻撃の対象に出来る）
- ・破壊無効（所有者の手に持っている限り、破壊されない）
- ・魔法武器（一定時間、武器に向けた魔法の効力が攻撃に宿る）
- ・貫通（強）（使用者のラックに応じて、防御無視効果が発生する）

閑話「ある日のM.D。中の人などいない！」（後書き）

作成武具が本編に遺物として出てくるかは、長く続けば…となりま
す。

閑話「ある日のMDその1」。ラッシュラッシュラッシュ！」（前書き）

スキルや特殊効果は膨大ですが、それをどう活かすのかはマニュアルには記載されていないのがゲーム的設定となります。

閑話「ある日のMDその1。ラッシュヨラッシュヨラッシュ！」

その日、俺達は追われていた。

何にだって？ そんなもの決まっている！

「っだああああああっっ！！」

『ギヤオオオオオンッ』

走る！ 走る！

背後に響く咆哮、地竜の地味な茶色の巨体から少しでも離れるべく、全力疾走である。

仮想現実であるがゆえに、実際には上がらないはずの息も律儀に脳みそがゲームからの信号を刺激として受け取り、あたかも実際に全力で走ったかのように疲労を錯覚する。

無論、これがなければ仮想現実、VRゲームの類はすぐに健康を害するものとして制限を受けているのだが。

ゲーム内の自分の体も、必死に動かす手足にあわせて汗をかき、疲労を感じていく。

その背中にチリチリと迫る殺気代わりのカーソル。

フライトシミュレータのロックオン時のごとく、俺の周囲に赤い円がじわりと迫る。

これに体が捕らえられたらその瞬間、回避しなければならない。

何故かと言えば……

「ファクト、飛べ！」

相方の声に従い、とっさに左に向けて飛ぶ。

轟音、そして肌に感じる熱風。

背後の敵、飛ぶことを辞めた強者、地竜がその大きな口から火球を吐き出したのだ。

プレイヤーの使うファイヤボールを何倍も強くしたような迫力と、それに恥じない威力。

直撃でも即死は無いが、その後が無いだろう。

「ええいつ、コイツのポップ周期が変わってるなんて聞いてないぞ！」

「目の前に奴がいる。それが事実だ！」

叫ぶ相方、薄着でありながら鍛え上げられた肉体を誇る刃物を使わない前衛、モンクというべきスキル群を選択した青年が反対側で回復薬を飲み干していた。

何とか間合いを取り、装備をメニューから選択して変更。

一瞬の輝きとともに、資源確保用のゆつたりとしたものから、対地竜ともいえる防具達へと着替える。

一見、青いステンドグラスのような輝きを放つ表面の鎧に、盾は妙に毛羽立ったフェルトのような防護を施した丸盾。

俺も武器は、無い。

だが、策はある。

「合図で目くらまし展開。その後、時計回りに行くぞ」

「逃げるって選択肢は無いのね？ ま、自分もそうだけど！」

俺の指示に相方はあきれたように良いながらも、構えなおした。

その間も地竜は俺たち2人を攻撃しては回避されている。

体を生かした体当たりは受け流し、火球は回避か、盾で防ぐ。

「3・2・1・今！」

瞬間、俺の手から放たれた光が周囲、如何にも鉾山に向いています、と言いたげな山肌の渓谷を満たす。

『ギヤワウツ！』

地竜がひるんだその隙に、俺はアイテムボックスから次々と剣や槍、その他にも刺せるタイプの武器を取り出し、地面に角度をつけて刺

していく。

「よっしゃ、行くぜ！ マシンガンキック 連弾蹴撃！！！」

相方は俺が刺した武器達に駆け寄ると、器用に足に引っ掛け、地竜へ向けて独特の動きで投げていく。

仮に、サッカー選手が丈夫な靴をはき、小石を蹴ったらその小石はどうなるだろうか？

かなりの威力を持ち、当たれば痛いではすまない可能性もある。

相方の強靱な足により、速度を乗せられた武器達が地竜に迫り、無遠慮にその肌食い込む。

生々しく、鏝まで剣が刺さる音、持ち手しか残らない槍等等。

時計回りに走りながら、二人で地竜に次々と攻撃を仕掛ける。

『グアッ！』

いつしか、全身剣山のようなになった地竜は、全身を勢い良く振るい、何かの塊を撒き散らしながら駆け出していった。

後に残るのは静寂と、そこに響く荒い2人の息。

「行った……か？」

「みたいだな」

警戒を解き、装備を戻す。

「おい、ダイキ。ポップは明日じゃなかったのか？」

「情報屋に行ったのが日付きりぎりだったからな。1日間違えたか？」

悪びれなく言う相方、見た目は旧世紀の格ゲーに出てくる日本人のムエタイ使用キャラのようだ。

「まあ、無事だったからいいけどさ」

彼がこういう間違いをするのは今日が初めてではないので、俺も深くは追求しない。

トラブルは起きてても、何とかするということタイプなので最後は何かなるのだ。

「そうそう、無事であれば何でも良し！　って、おい、あれ」

ダイキの指差す先にあるのは地竜の落とした何か。

「おお！　オジハルコンじゃないか！」

オジハルコン、決してオリハルコンの誤字ではない。

どこの聖剣のカリパーのごとき、下位素材とでも言うべききものである。

オリハルコンはまさにドラゴン　2本足で立ち、空を飛び、下手をすれば話すという　から稀に手に入る素材だ。

対して地竜は、倒すのは今の俺では困難だが、こうして撃退をすることで体の鱗、その塊であるオジハルコンなんかが入ることがある。

下位素材とは言え、これを使った武具の性能はお墨付きだ。

「ファクトが持って行けよ。要るんだろ？」

気前良くダイキが言い、ブロック氷ほどもあるそれらを投げてよこした。

「いいのか？ 安くないぜ、これ」

当然、良い武具の元となれば売る時も高くなる。

彼の普段の狩効率からすれば、大金のはずだ。

「俺が持っても売るしかないからな、いっていいって」

笑うダイキに、俺は苦笑しながらアイテムボックスからあるものを取り出す。

「ありがとう、じゃあ変わりに」

取り出した袋を見、ダイキは首を傾げる。

「ん？ なんだよ、急に。ってこいつは！」

ダイキが驚きながら出したのは一対の靴。

一見すると、重そうな金属製のブーツという感じだが実際は違う。

「今度、誕生日だろ？ ちょっと早いけどな」

プレゼントだ、と言って笑う。

戸惑った様子のダイキを促し、それを履かせようとする。

「プレゼントって…：こんな市場で買ったらいくらすんだよ！」

「作ったから、鉱石代のみだな」

俺の言葉に、ダイキはあんぐりとした様子で押し黙る。

その後、静々とブーツを履き、動きを確かめる。

「履けばすぐわかるけど、軽い。んでもって蹴ってもそうそう痛くない。さらには微妙だが滞空に近い効果もあるぜ！ ついでにそこからジャンプも出来る！」

名づけて『エアリアル・フォース』である。

「よっ、ほっ！ いいね、いいじゃん！」

一通りの型を試したダイキが笑う。

「それに今みたいに魔力を込めれば、滞空するから。じわじわと落ちるけど」

完全に滞空するのは逆にまずいかな？と調整した結果なのである。

「おっけ！ これで出来る。夢の空中コンボ！」

そう、格闘を選んだ人間なら1度はあこがれる空中殺法。

浮かせた相手に何度も攻撃を決めるのである。

ご機嫌のダイキを伴い、俺は街へと帰っていく。

その日から夜な夜な、公園でバスケットボールを空中で蹴る人影がいたとかいないとか。

- - - - -

作成防具

エアリアル・フォース

タイプ：靴

付与効果

・反動軽減 通常、肉体攻撃時に伴う相手の防御強度による反動を軽減する

・昏倒攻撃（弱） 攻撃命中時、相手を昏倒させることがある。

・落下防止 魔力を込める事により、その魔力量に応じて重力に逆らって装着者はすぐには落下しなくなる。込める魔力が少なければすぐに落下する。

透明な足場があるかのように連続移動（跳躍含む）が可能。崖からの落下防止の他、意識して用いれば上空に攻撃で浮かす、追いつがる、攻撃する、を魔力の限り続けられる。

閑話「ある日のMDそのさん。モチベーションって大事よね」(前書き)

そのいち相当の前になります。

閑話「ある日のMDそのさん。モチベーションって大事よね」

「うーん……これください！」

「まいどー、頑張つてな」

かれこれ1時間も悩んだ末、少年が1本の槍を買っていくのを俺はニコニコと笑みを浮かべて見送った。

目立った汚れの無い初期装備。間違いなく初心者だ。

俺が今、店を出しているのはゲーム開始時に自動的に到着する街の1つだ。

マテリアルドライブはキャラ作成後、自分で街を選ぶか、初期アイテム有りだが街は指定された場所、ということを選ぶことが出来る。当然、街によって狩場の違いがあったり、特定のスキル群を覚えるには向いている場所、向いていない場所がある。

そんな街の中、俺がいるのはオーソドックスな前衛タイプを選んだ時に出てくる街だ。

賑わう中心地ではなく、少し離れた、

慣れてきて少し街中を見回ったとき

に見つかりそうな場所にいるのだ。

そこで、不定期にNPCよりは少しだけ高性能な武具を売っている。周囲のモンスターから得たお金で、なんとか買えるかな？といった具合だ。

もちろん、高Lvとなった俺ならば、二束三文程度の原価でこの程度の武具は量産できる。

だが、敢えてある程度の高値はつけている。

何故かと言えば……

「よっ、売れてるか？」

「ペインか、そっちこそ元気そうじゃないか。聞いたぜ、今度のユニークボス、耐え切った拳句に最後持っていったんだって？」

声をかけてきた剣士、素材集めなどでもなじみの相手、ペインに向き直る。

「へへっ、まあな！ ちょうど手持ちの最強武器の属性が当たってよ、ばっちりさ」

ペインは俺が武具作成に凝り始めた頃にお客になってくれた1人だ。大多数のプレイヤーが便利なアイテムのように作成メインのプレイヤーを扱う中、長い付き合いだ。

比較的長身の青年で、逆毛の頭は真っ赤、目つきはやや鋭く、体躯

はがっちりとステータスを表現している。

「そりゃよかった。作った甲斐があるってもんだ」

ペインの報告に自分もうれしくなる。

ペインが今装備している斧は俺が少し前に作った奴だからだ。

確か、火山に住むモンスターの素材から作った炎系統のはずだ。

「また頼むぜ。ところで、前から思っていたんだが、なんでこんなところでこのクラスを売ってるんだ？」

露店に並べている武具を適当に手に取りながらのペインの疑問に俺は口を開く。

「簡単に言えば自己満足だし、楽しみを知って欲しいから、かな」
ネットゲームにはゴールが無いという。

当然、エンディングもないし、最終ボスだって基本的にはいない。

特定のタイミングでサーバーがリセットされるゲームもあるにはあるが、基本的にはエンドレスだ。

そんな中、ゲームをやる理由は様々だ。

一緒にプレイする仲間であったり、自分なりの目標であったり。

いずれにしても、強くなりたい、というのは理由の多くを占めるだ

ろう。

ゲームではかけた時間と手間の分だけ、確実に強くなれる。

ハードの限界に如何にプレイヤーの反応や思考が迫れるか、ではあるので厳密には誰でも同じだけ強くなれるとは言えないのではあるが……。

ともあれ、強い武具を手に入れる、強いスキルや魔法で強い相手を倒す、といったことは簡単でわかりやすい目標だ。

「ほら、序盤を乗り切ると大体なんとかなるからさ、楽しめるプレイヤーが1人でも増えたらいいかなとね」

こういったゲームに慣れたベテランであれば何とかなるだろうが、そうでなければ意外と最初の仮想現実であるという状況に慣れぬまま、戦えずに終わるということもあるのだ。

「ふむ…確かに、最初は相手はこえーし、武器あたんねーし、なんだよって思ったなあ」

俺の言葉に自分の初心者の頃を思い出したのか、ペインが妙に頷く。

ゲームシステム上、どの武器を使ってもシステムの補助はある。

弓を撃とうとすれば自然と構えるし、魔法を唱えれば自然と魔方陣やらは出る。

そして、攻撃を行おうとしたり、スキルを使うと自動的に最適な威力でそのままであれば当たる動きをしてくれるのだ。

ただ、モンスターも当然動くので余程序盤でない限りはまともに対
たらない。

序盤で合っても、まとも当たるのは何回かに1度ぐらいだ。

それ以上はプレイヤー自身が相手の動きを見て、少し右だ、だとか
もっと踏み込まないと、と調整をする必要がある。

その状況に持って行きさえすれば、後はシステムの補正でしっかりと
最適なダメージが与えられる。

段々と慣れてくればほとんどは無意識に行えるのだが、序盤では中
々難しい。

何せ、近接武器であった場合、リアルなモンスターに勝手に自分が
飛び込んでいくのだ。

これはかなり怖い。

チュートリアル戦闘部分を飛ばさずにやっていたら大丈夫だろう
が、もし飛ばしていると悲惨なことになる。

法律上の問題で、年齢制限のあるゲーム以外の描写はある程度ほか
されているとはいえ、それでも目の前に生きているかのように荒く
息を吐くモンスターがいた日には、びびる。

事実、今でも女性プレイヤーが本気で泣いているのを見かけるぐら
いだ。

まあ、中には最初から平気なプレイヤーもいるのだが……。

「そうそう、そんなときでもちよこつと強い武具があれば生き残れるかもしれないだろ？」

頑張って買った武具のおかげで生き残った！ 買い物って大切！とか思ってくれば万歳である。

「良くわかった。だから今度は、リジェネーションと対麻痺の腰装備作ってくれよ。モチ、今以上で！」

「いきなりだな！ よーし、じゃあユークト火山のレッドドラゴンの鱗取りに行こうぜ！っていうか横で手伝うから狩ってくれよ。そうしたら作るから」

いつものごとく、難題を言ってくるペインには難題で返す。

レッドドラゴン、名前の通り炎系統の強モンスターである。

棲息する火山によって、まったく中身が違つので注意が必要な相手だ。

ユークト火山の場合、俺1人では中腹が限界だがペインがいれば飽きるまでいられるだろう。

「げっ、死ななくても熱いんだぞ、プレス……」

それはわかる。地味に真夏のように暑いので、精神的にきついのだ。

「なあに、たったの10枚だから、10枚」

脱力した様子のペインを引きずりながら俺の歩む先はユークト火山。

今から行けば半日いらぬはず！

閑話「ある日のMDそのよん。料理マスターになれ？」（前書き）

閑話の時間軸はお話ごとに違いますので、

キャラと出会ってお話が出てきたりもする予定です。

閑話「ある日のMDそのよん。料理マスターになれ？」

「我が蒼紋刀に切れぬものなど！」

「いや、それはいいから作ってくれよ」

空高く掲げた彼の右手に光るのは、

俺の作った青い刀身の細い刃物、その名もずばり、蒼紋刀。

刀とかいいながら、ジョークアイテムとして名高い、刺身包丁である。

この武器で特定の種族を倒すと、アイテムとして様々な魚介類が手に入るのだ。

しかも、新鮮そのもの。

ちなみに場所はとある浜辺。

照り付ける太陽は現実と同じ様にその熱を伝えている。

「いや、だってよー。現実じゃこんなでっかい鯛、やらせてくれな
いんだ」

「そりゃあ、安くは無いよな。お金は有限だし」

蒼紋刀を持った彼は現実では料理学校に通うという学生で、
ゲーム内ネームはスレインという。

ゲーム機による脳への電気信号により、様々な質感などを体験できるマテリアルドライブ。

その他のゲームも仮想現実、VRとしての機能を実装する形で新しい世界をプレイヤーに提供している。

その中には、飲食も含まれた。

当然、ゲーム内部で飲食したからと栄養が取れるわけではない。

MDでも、現実での空腹や栄養状態によって、ゲーム内部に警告が出るようになっていいる。

ともあれ、実際には摂取してないとしても、ゲームをプレイする上で飲食はプレイヤーの楽しみの1つである。

冒険の途中や、強敵を倒したあとの騒ぎなど、出番は多い。

MDでもスキルや魔法、アイテムにも戦闘には不要な、こういった部分をカバーするものがそれなりにあるのだ。

これらは通常のスキル割り振りなどと違い、クエストをこなすことで自動入手できるものがほとんどということもあり、ゲーム性を損なうことなく好みのスキルや魔法をプレイヤーは身につけている。

スレインはそんなプレイヤーの1人で、現実だとお金も手間も、様々にかかる料理に関することを、ゲームを楽しみながら実践しているようだ。

バーチャルでの経験はそのまま現実に反映されるわけではないが、まったくやったことがないことをやったり、何度も反復が必要なことをやるといった、特定の範囲ではゲームを含んだVR系での経験は非常に有効らしい。

一説では、軍の新人訓練や銃器の取り扱いの訓練に使われているとかなんとか。

ちなみに俺とは、今持っている蒼紋刀を依頼されてからの付き合いだ。

「それで、やっぱり刺身にするのか？」

「いやー、醤油アイテム手に入れるのも面倒だし、ここは塩焼きで行こうかなと」

「じゃあなんで刺身包丁出したんだよ！」

思わず俺は突っ込むが、スレインは「えー」という顔で向き直り、次のような言葉を言い放った。

「金がないから今はこれしかない！ 今度作ってくれ！」

「さ、さいですか……」

変な口調になりながら、俺は脱力した。

気を取り直したのか、スレインは慣れた手つきで大きさは60cmもあるうかという鯛を捌いて行く。

色合いからして真鯛だろうか？ 気にしたことも無かったが。

「ほいよつと、後は焼くぜ！ 赤き恵み、ここに！ ファントムバ
ーナー！」

スレインの叫びと共に、名前の割りにささやかな炎が用意してあった薪の束にまとわりつき、適度に燃やしていく。

「名前だけ聞くと、攻撃魔法なんだよなあ、それ」

「確かに。でも、ちゃんとこのまま火力調整も出来るんだぜ？」

長い串に鯛を刺し、豪快に囲炉裏焼きのごとく焼いていくスレイン。

漂う匂いに、鼻が思わずひくつく。

バーチャルだとわかっていても、こういうときは反応してしまうのだ。

鯛にカーソルを合わせると、生だったステータスがそれっぽいものになり、名前も塩焼きとか付いてきた。

「そろそろか」

「おう！ さあてー！」

いざ！という時、二人を影が覆う。

え？と上を向くと、ぬめった白い肌の何かが1匹。

叫ぶまもなく、2人は跳ねるようにその場から離れる。

轟音、そして砂煙。

「な、なんだあ？ ファクト、わかるか？」

「そういやここ、こいつが出る可能性があったな。ノービスクラークェンだ！」

ノービスクラークェンは名前の通り、イカのでかいアレだ。

その中でも、弱い部類に入る。

ただ、共通能力として持っている墨吐きを含め、能力低下の攻撃が多いのだ。

ゆえに、攻略サイトなどの数値だけを見て単独で挑んだりすると、あっさりやられる。

「ちよっ！ なんかぬるぬるするし、抜けられないんだけど!？」

そう、今のスレインのように触手のような足に絡まれたりするのだ。

「動くなよっ！」

俺は叫び、アイテムボックスから切れ味重視の一振りを取り出してスレインを捕らえる足の根元付近を切りつける。

いやな悲鳴をあげ、ノービスクラークェンはスレインを手放した。

砂浜に落下し、全身を粘液とそれによってめいっばいついてきな砂に覆われるスレイン。

「うええ、どーすんだよコレ」

「我慢だ我慢！ こいつのドロップは料理的な意味で美味いからな。最後はスレイン、頼むぞ！」

なお、鯛は最初のボディプレスでパーである。

なんとしてもこいつから食材を入手しなければならぬ。

「頼むぞたって、俺レベル低いよ？」

そう、俺の戦闘力も高くないが、スレインはそれに輪をかけている。

確かにドラゴンの肉だとかも食材としては美味いらしいが、あくまでスレインは現実での経験になる材料を優先しているため、そんなにLvを上げていないのだ。

今もノービスクラーケンの攻撃を必死に回避している。

「大丈夫大丈夫！ クリエイト・ウエボン 武器生成 - 近距離 B - ！！！」

アイテムボックスから微妙に緑というか、青く光る石を取り出し、俺はスキルを発動する。

制限有りの武器作成で、雷属性のナイフを作ったのだ。

続けて何度もスキルを発動し、何本もナイフを作り出す。

「よいしょっと！」

何本も同時に迫る攻撃を手に持った長剣で俺は器用に回避すると、すぐさま攻撃を仕返すが倒れる様子はない。

ノービスクラークンに限らず、なぜか湖や海だったり、沼といった水系統のモンスターはタフだ。

俺の攻撃も効いているはずだが、まだまだといったところだ。

「スレイン！一緒に投げてくれ！」

作ったナイフのうち何本かをスレインの方向に投げ、俺は反対側に回りこむ。

「おっけー！おおっ、俺のメイン装備より強いとか泣ける！」

冗談を交えながら、スレインはナイフを拾い、次々と投げつける。

巨体からすれば小さな攻撃。

それでもナイフが秘めた威力と属性効果は効果覿面で、その体をビクビクと震わせ、一時的な麻痺を産む。

「よし！スレイン、両目の真ん中あたりに突き刺せ！」

俺の叫びに従う形で、ゲームらしく高く飛び上がったスレインは見事に蒼紋刀をノービスクラークンの弱点に深々と差し込む。

砕けるポリゴン、そして静寂。

「終わった終わった。ついでだ、海に入っちゃおうか？」

「うん、確かにドロップ来たけど、砂はなんとかしたい……」

ほぼ完全回避していた俺と比べ、スレインは全身粘液と砂まみれのままだった。

その後、汚れを落としたスレインは、入手したイカっぽい身とイカ墨（なぜかボトルに入っている）を使って、パスタを作ってくれた。

夕暮れの美しい海を眺めながら、2人は拠点に戻るようになった。

作って欲しいという次の道具の打ち合わせをしながら、その日は過ぎていった。

作成武器

蒼紋刀せいもんとう

タイプ：刀

付与効果

魚介系統のモンスターを倒すとモチーフに近い魚介類が素材として

入手できる。

数等はランクに応じつつもある程度ランダム。

脇差に近い姿で、比較的短い。

威力はそこそこだが、切れ味は抜群。

閑話「ある日のMDその1」。ありがとう、忍者さん」（前書き）

ネットゲーは時間の貯金箱です！ 使えないけど。

閑話「ある日のMDその1」。ありがとう、忍者さん」

ネットゲームは苦行である。

楽しくないのなら何でやるのか？

正確にはネットゲームだけではなく、自分1人だけでやるゲームでも同じなのだが、大抵のゲームは、時に延々と同じペースで同じことをやらなければならぬ時がある。

費やした時間がイコール、ゲーム内部での強さといったものに直結するネットゲームではそれが顕著だ。

そもそもLv上げという行為自体、ほとんどのゲームでは後半は自分との勝負だろう。

そんな苦しみともいえるものを解決してくれるものが、ゲーム内部のコンテンツの楽しさであったり、パーティーというものだ。

だが、全てのプレイヤーがパーティーの恩恵を受けられるわけではない。

社会人であれば単純に時間が足りない。

あるいは、ゲームのプレイ人口やタイミングの問題もあるだろう。

ただ……

「俺みたいなのはそもそも、無理だよなあ……」

休憩中、頭をよぎったどうしようもない問題に、独り言が増える。

旧来のMDからリニューアルされ、所謂VRゲームへと移行してからはや数ヶ月。

世間は新しい刺激に活発になり、あらゆる場所で冒険が行われている。

圧倒的なモンスターの迫力、自らの手で生み出されるエフェクト。

全てにプレイヤーは魅了されていた。

俺は、プレイヤーの中でも少数派の生産タイプと言って良い。

Lvだけは高いが、その実力はランカーから見てもなく、一般的なプレイヤーからしても高いとは言いがたい。

どうしてもステータスやスキル類は生産用に偏っているからだ。

今は攻略重視の中、戦闘能力の低い自分を好んで誘ってくれるパーティーなどありはしない。

結果、どうなるかという……ソロでの時間が増える。

今日もスレッジビートルというモンスターが出現するフィールドに俺はいる。

まずいわけでもないが、パーティーだとまったく旨みはない。

ドロップするものも、ここだけしか入手できない、というものはほとんどない。

所謂過疎フィールドだ。

ここに籠って2週間ほどになるが、他のプレイヤーに遭遇したのは数えるほどしかない。

とはいえ、俺自身の戦闘能力からすると、ここが一番経験効率的に良いのだ。

「お、みつけ」

いい加減聞き飽きた斬撃の音と、見飽きたエフェクト。

木陰にいたスレッジビートルへと、俺の攻撃がすんなりと決まる。

昆虫らしい声と音をたて、敵が消滅する。

後に残るのは鈍く光る石と角部分。

この石は加工スキルを経由することで武具素材の金属になるのだ。

倒す、経験を稼ぐ。

倒す、素材を稼ぐ。

そして、素材を使ってスキル用の経験を稼ぐ。

この繰り返しだ。

勿論、運良くパーティーに入れば、その効率はまったく違うことだろう。

ただ、これまでの経験から言えば、こういった形で籠っているほうが最終的に効率が良い、というのも残念な現実だった。

どのゲームでも、非戦闘タイプは厳しいものだ。

「これで500つと。まだまだだな」

集まった素材の数を確認し、一人つぶやく。

別に喋らなくても良いといえば良いのだが、さすがにまったく無言というのもじわりと来るものがある。

と、視界に動く影。

追加か、と崖を見上げると、途中に小さな動くもの。

「ん？ あの角は…レアじゃね？」

少し離れているのではっきりとはわからないが、崖の中腹辺りにレアモンスターであるスレッジビートルの亜種というべき存在がいた。

通常2本しかない角が、中央に1本追加で合計3本になっている。

確か、公式発表では素材もレアなタイプだったはずである。

別に武器がすごいのが出来上がる！とか、強力な特殊効果が！というレア素材ではない。

なぜか、その素材を混ぜて作成すると、それによる経験が最大4000%になるという。

つまり、40倍である。

その上、通常の作成素材に好きに混ぜることが出来るのだ。

そんなアイテムだが、モンスターそのものの出現率も不明で見かけたという情報もほとんどない。

誰かが独占しているのではないか？という噂も出る始末だ。

そんな相手が見える位置にいる。

これは、狙うしかない！

「って、変な場所にはまってる……バグか？」

かなり急な崖の中腹なので、どこかに移動して戦えるのを舞っていたのだが、まったく動く気配がない。

正確には、動こうとしているようだが何かに引っかかったようにま

まったく動けていない。

フィールドを構成する障害物が1部バグっているのではないだろうか？

「となると……このまま放っておくとメンテまであのままか？」

遠距離攻撃が可能なプレイヤーが発見したら、先に倒されてしまうだろう。

かといって、さすがに50mはあろうかという崖の中腹にはジャンプしても届かない。

武器を投げるにも、当たる自信は無い。

一撃当たったとして、その衝撃で強制移動になり、その後には逃げられては意味がない。

(うーん、上から回り込むにも難しいし、どうしたものか)

構えていた武器、オーソドックスなスチールソードという長剣を地面に突き刺しながら悩む。

その状態は地面に刺さった杭のようである。

なんとなく突き刺したままの剣の柄に飛び乗ってみる。

視線は高くなるが、目的の場所に届くはずもない。

スチールソードもひたすら戦っていたせいか、その耐久を減らして刃も切れ味を鈍くしている。

今なら指でなぞっても、切れやしないだろう。

武器としての価値が低下した今は、ただの気分転換用の足場であった。

(さてよ?……触っても、切れない……。これだ!)

マテリアルサーチ
「鉱脈探知!!」

剣から飛び降りて、まったく使っていなかったスキルを発動し、フイールドの金属分布を確かめる。

反応は良好、かなり調整が効く分量だ。

「よし、ならば次は……このバインドダガーで。そして武器生成クリエイト - 近
距離C - !!」

馴染みのスキルを発動し、敢えて切れ味を落としたナイフや長剣等を思うままに作っていく。

カウントは6000から20000ほど。

今からやろうとしてることを考えれば十分な数値だ。

構えた武器の特殊効果は、拘束、である。

麻痺ではなく、自分と相手を特殊な力場で固定するのだ。

使い方によっては決闘のような形になるものだ。

さすがに離れた相手に投げつけてもこの効果は発動しないのだが……

「そうれつと！」

俺は狙いを定め、崖に向けて武器を次々と投げっていく。

良い感じに突き刺さっていく武器たち。

上のほうに行くほど、しつかりとは刺さらず、刃が見えている。

このまま持ち手部分を掴んでしまっただけはすぐに抜けてしまうだろう。

そこで、切れ味を落とした刃の出番である。

まずは崖の直線に突き刺した長めの槍へ向けて助走をつけて勢い良くジャンプし、武器を足場に崖に飛びつく。

そして俺は武器を足場、あるいは手で掴む形で昇っていく。

忍者の堀昇りのように行けば思ったが、時折、刺さり甘かったのか抜け落ちてくるものも数本あったが、なんとかほとんどは無事に役割を果たしてくれたようだった。

さすがに光る刃の部分をしっかりと掴まないといけないときにはひやりとしたが、狙い通りにダメージは発生しない。

そして……。

俺の目の前でカサカサと昆虫系らしい音を立てるレアモンスターに

俺はバインドダガーを突き立て、その効果が発動したことを確認する。

そのまま片方の手に持った武器で自分を固定し、逃げられない状態の相手を何回も攻撃していく。

いつ落下するかわからない恐怖と戦いながら、数分後に見事に撃破に成功したのだった。

「よっしゃー！」

そして目的の物、神秘の燐粉 が入手できたことに声をあげ、ずり落ちそうになる自分を慌てて支えなおし、アイテムボックスから帰還用のアイテムを取り出して使用する。

自分を包む極彩色の光に目を細めながら、俺は満足感に浸っていた。

街に戻り、手持ちの材料で一番経験の入る作成をこなした時、次回アップデート日決定のアナウンスが流れた。

そのアップデートは、MDを混乱の渦に巻き込むものだったが、その時の俺は久々に上がった作成Lvに興奮してまったく意識していなかったのだった。

作成武器

なまくらな武器

タイプ：各種

刃があるものでも、既に鈍器。

研ぎなおそうにも、初期能力がそうなので、意味がない。

耐久だけは抜群。

閑話」ある日のMDそのろく。果て無き追いかけっこ(前書き)

別キャラのときは表記が難しいものです。

町の一角

「ムスペル火山？ 俺に行けつてのは難儀すぎる話だと思っんだが」

その日、俺は注文を受けていたとあるギルドからの防具を作成していた。

なんでも加入した初心者達に支給する装備らしい。

俺自身は無償配布はどうか？とは思うところもあるが、やり方は人それぞれなので楽しんでくれればそれでいい。

ともあれ、ほとんど作成が終わり、数を数えていたところに知り合いであるペインがやってくるなり、ムスペル火山に行こうと言い出したのだ。

「そんなこと言わないでさ、行こうよ」

甘えるような少女の声、目の前の姿は以前作ったレイピアを腰に下げたツインテールの少女だ。

この体格では巨大なモンスターが相手のときに間合いが取りにくい

と思うのだが、なんとかしているのだろう。

今日は俺の知らないメンバーがPTにいるせいか、口調もキャラのままだ。

「リム、無理強いするものじゃないわ。それに、この方は製造タイプのようなし、無理じゃないの？」

ペイン改め、現在はリムの傍らに立っていた如何にも姉御！と言った様子の女性戦士がなおも迫ろうとするリムの肩を掴む。

極上、とまでは行かないようだが見てわかる上位素材よる赤色の多い防具一式、武器も青色の多いハンマー。

詳細は触ってみないとわからないが、行こうというからは十分な準備はしているようだった。

「え〜？ フェシアだってアレ、彼ぐらいじゃないと手に入らないって言ってたじゃん」

耳に届く声と目の前のリムの姿に、一瞬中身を想像しそうになるが、なんとか直前で押しとどめる。

なおも言い合う2人。

話の中身からすると、どうやら火山には何かアイテムか素材でもある様子。

それにはただの戦闘メンバーでは難しい条件でもあるようだった。

「はあ、二人とも、だったらこんな戦闘力ない人じゃなくて条件を満たしてる戦闘タイプを探しましょう」

横合いから、気になる言葉を発したのはこれまで口を閉じていた1名。

装備からして、回復役を担うタイプなのだろう。

手に持った杖には覚えがある。

確かあれは……。

「ダメだよ、ゲイル君。こんな、なんていっちゃ」

リムがたしなめるように言うが、ゲイルの視線は俺をあざけるようなもののみまだった。

「でも役に立たないのは確かでしょう?」

さすがにムカツと来たぞ……リム、というかペインが仲間にしてい
る以上、普段はこんな言動ではないのだろう。

「リム、パーティーくれ」

「え? あ、うん」

かすかな音とともに、パーティー勧誘のアイコンが表示され、俺は
許諾を示す。

瞬間、3人の頭上に表示されるHPなどのバー。

俺はパーティーに入ったことを確認したところで、ゲイルの杖をあっさりと奪う。

「え？ 今何をっ」

突然手の中にあつた重みがなくなったのだ。焦った様子でゲイルが俺の手元をにらむ。

単純に、片方の手で杖を持った手をはたき、緩んだところで引き抜いたのだ。

製造特化の都合上、俺の器用さは戦闘タイプからすれば有り得ない値だ。

手品の1つや2つ、余裕である。

「ふーん、かなり前のだな。まだこのランクに慣れてない頃のだ」

「一体何をっ！？ というか何でペナルティがないんですか！」

杖の具合を確かめた俺は、思ったとおりに自分が以前作ったものであることを確認できた。

数はそう多くなく、マニアックな補助効果をつけてあるので利用者は限られる。

彼に直接売った覚えはないので、自動販売中だったか、転売か。

「なんだ、ゲイルは知らないのか？ パーティーメンバーの間では

貸し借りをを行うことも推奨されている都合上、ルート扱いにはならないんだ」

目の前で起こったことにさして動揺した様子もなく、姉御肌の女性が説明してくれる。

「フェシアのいう通りよ。パーティー以外だと投げるとか、地面において、とか。トレード機能をちゃんと使う、ってぐらいよね」

リムがそう続ける。

MDにおいて、所謂ルートは制限を設けられている。

装備するアイテム、つまり武具やアクセサリ類は1時間以上あれこれ弄らないとルート出来ない、という強烈なものだ。

プレイヤーキラー、PK自体は戦闘可能な場所であればどこでも可能だし、装備するタイプではないアイテムやお金等は比較的容易にルートできる。

それらの制限がパーティーメンバーにはないのだ。

「そういうこと。で、これ作ったの俺ね」

杖を返しながらそういうと、ゲイルは啞然とした表情になる。

「え？ ああ……本当ですね」

杖のステータスの隅のほう。なぜか目立たない位置にある作成者の名前を見たのか、彼は頷いた。

「んで、こいつはそれのアップデート版。エフェクトが派手になってる。これでも役立たずかい？」

アイテムボックスから取り出した1本の杖はゲイルの持ったそれに良く似ている。

基本性能は当然上位。ついでにスキルネタ具合も同じ系統だ。

「貴方は……このランクで何作ってるんですか？」

ゲイルは無造作に渡された杖の、一線級の性能と付与スキルのアンバランスさにあきれたようだった。

かと思うと、真面目な顔になって頭を下げてきた。

「先ほどは失礼しました。以前組んだ製造タイプがたまたま寄生当然！な方々だったもので、気が立ってしまいました」

丁寧にそうされればこちらも相応に返さねばならない。

握手ひとつ、解決である。

「よーし！　じゃあ作戦会議だあ〜！」

少し気の抜けそうなリムの叫びを合図に、俺も詳しく話を聞くことにした。

「じゃあ、あの辺りにその巣がある、と」

「うん、そのはずなんだ」

再現された熱気はたとえるなら真夏のオフィス街。

じっとしているだけで汗が擬似的に噴出してくる。

この感覚自体はゲームが再現した電気信号でそう感じているだけというが、すごいものだ。

「へー、で、さすがに倒せないんだよね？」

前衛らしく、周囲を警戒しながらフェシアが不満そうに言う。

「いやいや、私たちだけでは無理ですよ、ここのドラゴンは」

ゲイルは額の汗を拭きながらそう答える。

そう、このムスペル火山は火山フィールドの中でも難易度的には上から数えたほうが早い。

登場するモンスターは雑魚扱いの奴らですらかなりの強敵だ。

俺ではアイテムをかなり消費してようやく1匹、といったところか。

となればフィールドの主であるドラゴンクラスになればさらにとんでもない。

なにせ……。

「そうよねー、復活するんだもんねー」

「このドラゴン、名前はレッドドラゴンだが中身は極悪だ。

一度倒しても10分もしないうちにゾンビとして復活する。

その上でレアドロップはゾンビ状態で無いと出てこないという噂だ。

リムのレイピア、ホーリー・コンビクテッドは以前作った不死特攻付の高性能武器ではあるが、それでも有効打、でしかない。

まともに倒すなら10人以上は必要だろう。

だが、今回の目的はレッドドラゴンのレア、ではない。

もしそうであるならば、ゲイルのいうように俺はさすがに足手まといになる。

その巢にとある素材とアイテムがあるのだという。

「ゆっくりと戦闘を回避しつつ、フィールド周回の際に潜入、だな」

「そうそう！ フェシアもゲイルもよろしく！」

魔力消費を条件にモンスターに発見されにくくなる指輪を発動し、4人は火山の奥へと進む。

「マップ的にはこの次ですね」

ゲイルが手元のアイコンを操作し、マップを確認している。

俺はといえばすぐそばの発掘ポイントで鉱石を集めている。

さすが高難易度のフィールドである。

良い素材がいくつも確保できた。

俺自身の戦闘能力はここでは余り役に立たないので、アイテムによる補助やこつしたアイテム集めに専念している。

「ファクト、いよいよ出番だ。任せる」

「勿論、そのために来たんだからな」

俺は笑って、採取に使う道具、小さいノミとハンマーを持つ。

「じゃー、ドラゴンがいたらファクト君以外が囿になって逃げないなかったら4人で潜入！で」

リムの合図とともに、4人がフィールドに突入する。

結論から言えば、目の前にいた。

正確には、暗いなあと思っで見上げたらなぜかいた。

しかも2匹。

片方は赤い、片方はどす黒い。

つまり、生きてるほうとゾンビなほうと、両方ということだ。

「なっ」

叫ぼうとしたゲイルの口をふさぎ、フィールド移動直後の無敵時間を利用して慌てて一度戻る。

フィールド移動後、息苦しさを誤魔化すように大きく息を吐く。

「こいつは……まずいな」

「まさか2匹同時とは。そんな報告ありましたっけ？」

レッドドラゴンは人気のモンスターだ。

勿論、危険度も高いがメリットも多い。

放置されることは少ないはずで、特にゾンビとなっている状態で長く放置された例は聞いたことが無い。

一応、次の固体が発生する条件自体は生きているほうが倒される」とだから

状況的には有り得る、のだが、なかなかの偶然だ。

「私の知る限りではないね。リム、どうしたの？」

既に疲労困憊の様子でゲイルに、苦渋の表情のフェシア、そして……。

「た、戦いたい！」

なぜかテカテカした様子で笑顔のリムであった。

そういえばいつも強敵と戦いたっていていたなあ……。

ただ、それはそれ、である。

「それはまた今度ね。今日はどうしましょ」

「無敵の間に可能な限り走って移動……の後は分散ですかねえ？」

「それしかないよな……」

なおも戦いたそうなりムは置いておき、3人の意見は一致した。

俺は目的地である巣がある場所を頭に叩き込み、駆け出す準備をする。

そして、フィールド移動。

それにしたって一撃でドラゴンが倒せるようなものはあるはずがない。

「ファクトつ、左前方でつかい柱の上！」

リムの声にちらりと向けば、鍾乳石を途中で切り取ったような太い柱の上にいかにもな塊。

ドラゴンの巣だ！

駆け上がれる高さでもなければ、そちらに向かえば2匹もより苛烈に追いかけてくるだろうからそのまま向かうことは得策ではない。

これは無理っと思ったところで視界に入る斜めになった壁。

今の速度なら思わず駆け上りそうな……これだ！

「右奥の壁を駆け上がる！ んでもって背後に着地して作った武器でそれぞれに攻撃！」

「おっけええー！ー！ー！」

覚悟を決めた俺とリムは速度を上げ、普段ならどうしようもない壁を駆け上がる！

ぎりぎりまで来たところでジャンプ、空中でぐるりと回転するよう
に大きく舞い上がる。

さかさまになつた視界で2匹のドラゴンが壁にぶつかり、ゾンビ側

が腐肉を撒き散らして吼えるのが聞こえる。

「クリエイト・ウエボン
武器生成 - 近距離S - ！！！」

着地と衝撃、痺れるような感覚に顔をしかめながら、手早くスキルを実行。

今回は耐久も威力も度外視、必要な能力はたった1つ。
その能力のために性能を調整する。

出来上がったナイフをリムに渡し、体勢を整えつつある2匹にはほぼ2人同時に切りかかる。

根元まで刺さったところで甲高い音を立て、2本とも砕けてしまっ
が、

2匹を覆うピンク色のエフェクトに俺は効果を確信した。

今回の狙いは、魅了。

一定時間プレイヤーではなく近くのモンスターを戦闘対象にする効果がある。

この場にいるのは2匹のドラゴンのみ。

怪獣決戦のごとき戦いが始まり、空間に轟音が響くことになる。

「今のうちに、上へ！」

叫び、巢がある柱へと駆け寄ってなんとか昇っていく。

「よいしょつと……あつた！」

2人の視線の先には、大きな卵とたくさんの巢材、その端に光る延べ棒のような何か。

それに触れると表示される発掘条件。

どうやら通常の素材と違い、はい発掘ね、というわけには行かないようだった。

ただ、条件自体は製造関係のいくつかが一定Lv以上であること、魔力を相応に消費する、ということだけだった。

確かに俺のような製造タイプであれば条件は満たせるが、ここに到達するのは難しい。

「それでも俺はここにいる」

「そ、頼むよ」

2匹の魅了効果が消えないか、警戒しているリムの声を背後に聞きながら、俺はその中にある信頼感を感じていた。

無言で発掘を開始、あっさりと入手に成功する。

入手素材はオリハルコン。そして炎属性付。

詳しくは帰ってみたいとわからないが、きっと品質もかなりのものだろう。

「よし、帰るぞ！」

振り返れば、大きなぬいぐるみを抱える小学生のように、大きな卵を抱えたリム。

「これもアイテムだからな、もったいない！」

少し地が出た口調でリムは笑い、落として割らないようになんとか柱から降りる。

思ったより時間がかかってしまった。

「2人は……帰ってるな。行こう」

「うんうん。……うん？」

フエシアとゲイルの状態を確認した俺が帰還を促した時、リムがあげた声に俺は振り返る。

覗く影。

「「あっ」「」

魅了の切れた2匹が、目の前にいた。

「最後のっ、最後までっ！」

「ネットゲームとは、走り続けることと見つけたらいいいいいいいい！！！」

フィールドの境目までの逃走劇で今回の冒険は幕となった。

.....

00「目覚めの前、その日々」(前書き)

・お知らせ

異世界でのファンタジー物、になるはずなのですが
こういったタイプでの執筆は初めてなのでよろしくお願いします。

戦闘無双、は無い予定です。

こまでは気にならない。意識すればなんとなく、その意味がわかるからだ。

備え付けのフリースペース、攻略用のメモのような部分にまとめた情報を放り込み、

クレイモア達を全て虚空のアイテムボックスに収納して立ち上がる。外に出て販売の準備をするためだ。

ドアを開け、外に出る。

直後、コンピューターに再現されたとは今も納得しがたい日差しそのものが俺に降り注ぐ。

耳に届くのは街中の喧騒、どの地域が効率がいいかの、レアを手に入れたあの、どのゲームでもありがちな当たり前の話。

後ろを振り返ればどこにも今までいた工房の扉どころか、工房の形は無い。

ファンタジー世界にありがちな、石と木材による住宅街のような街角があるだけだ。

それはこのゲームのシステムである、キャンプと呼ばれる物に秘密がある。

システムメニューにあるそれを実行すると移動できる空間は、

俺のように鍛冶、所謂アイテム作成を行うタイプには工房、

剣士のようなタイプなら小さなジムの様な設備を備え、

魔法を使うタイプなら瞑想をしたりする部屋が備わるといった個人用スペースだ。

ゲーム内のアイテムである程度レイアウトを変更できるし、クエストを達成すればより効率の良い設備に変える事も出来る。

当然戦闘中には実行できないし、街の外で使う時にはいきなり戦闘にならないように

注意して外に出る必要がある。

ただ、キャンプ中は襲われないし、一緒に入ると意識した他プレイヤーも一緒に入れるから作戦会議や戦闘準備には便利なシステムである。

そもそも、【マテリアルドライブ】は無駄に歴史の古いネットゲームである。

初期にはクライアントプログラムを実行し、モニターに表示されるウィンドウ内でゲームをプレイするタイプのオーソドックスなMMORPGだった。

ひたすらマウスを操作し、キーボードを叩き、椅子に座ったお尻の位置を気にしながらプレイするタイプだ。

時代は進化する。

ゴーグル型のモニターが出現し、アクションやスポーツゲームにおいては指の動きを感知して操作するグローブ型等が出現していくことで環境は変化する。

一時期はゲームをするにも体力がいる！なんていうのはた迷惑なシステムも出来たが、自然と淘汰されていった。

そしてついに出るのはよりリアルな感触の仮想現実であった。

360度、走る感覚まで実装したソレはある程度以上の痛覚等は娯楽に適した物、なんとなく痛い、なんとなく熱い、といった具合のぼかしたものではあったが、ファンタジー世界に行けば濃密な自然の臭いを感じ、その壮大な景色に全身で圧倒され、そして、戦いも興奮を呼んだ。

速度を活かした戦いで読み合いを楽しむ者、重量感のある武器で力自慢を楽しむ者、様々だ。

【マテリアルドライブ】もそんな世界に追いつくように、運営は完全リニューアルとしてスキルや魔法、Lv等のステータス、1部ユニークアイテムのみに限ったコンバートか、優遇アイテム満載による新規参加を旧MDにて告知した。

俺は前者を選び、新しい世界での生活を始め、1年になる。

リアルでの俺は特に不便の無い社会人だった。なんとなく仕事をし、帰ってきてはログインする。そんな生活。

このゲームには様々な生き方がある。

単純に剣士として戦闘系スキルを究めていく道、魔法使いとして魔法とそのスキルを求める道、

自分のようにアイテム作成、主に武器……のスキルを鍛える道。

とはいえ、わざわざ仮想現実に来たのに地味に工房に籠ったり、アイテムが売れるのを待つことが楽しいと思えるプレイヤーはそう多くは無かったようで、ほとんどは戦闘をするタイプのプレイヤーだった。

このゲームにメインとなる職業、は明確には無く覚えた魔法やスキルで結果的に称号のように職業が決まる。

素材を確保するために最低限の戦闘スキルや魔法を覚えたが、ほとんどは鍛冶やその他のアイテム作成関連のスキルに費やしている俺はそのまますばり鍛冶職人マテリアルスマスとなっている。

仕事から帰ってきては黙々とアイテムを作り、販売の為にログインしたまま放置する。

休みの日にはひたすらLv上げ。

そんな生活スタイルだったが、自分はこのプレイスタイルが気に入っていた。

旧MDの時代からプレイを続けている俺はコンバートを選ぶことでそのまま移行し、接続時間やゲーム内知識、アイテムの作成回数といった物だけは恐らく

ゲーム内でもトップクラスだろう。

Lvも、長年地道に稼いで来た為に高いと言って良い。

無論、戦闘能力はLvに比例しない物だが。

トロフィーがあるわけではないが、メニューに浮かぶそれらの数値を眺めたり、

旧時代からの馴染みなプレイヤーとオンライン時には雑談をしながら武具を修理してやり、欲しい武具を受注する日々。

確実に増えるスキル経験値とゲーム内資金。

これが現実だったら、とありきたりな妄想もたまにはした。

それに変化を与えたのはゲーム内でのアイテム作成に関するシステ

ム変更だった。

それはリニューアル後、三ヶ月ほどが過ぎた頃、運営から変更が明記されたわけではないので今も真実は不明だが、ある日のアップデートから世界に悲鳴が響いた。

ほとんどのプレイヤーがアイテム作成に失敗しだしたのだ。

なんでもないようなシステム売りされているような武具、回復薬等は大きく変化しなかったが、強力な物や属性付の物といったような武具やパーティー全体を癒すようなアイテム等が作れなくなった。

正確には作れなくも無いのだが、その成功率は極端に下がった上に武具はその耐久性も大きく減らした。

いくなれば、粗悪品になったのである。

これまでは明らかに無理な行動をしなければ壊れなかった武具が強敵を相手にしたり、変な使い方をするとすぐ壊れるようになったのだ。

俺自身はゲーム内のインフレ対策であったりするんじゃないかと思っっているが真実は定かではない。

結果、戦闘プレイヤーの所持金の使い道として武具が消耗品扱いになることで

街中の商店や、プレイヤーの露店が候補として加わることになる。

プレイヤー達の試行錯誤の上、とある事実が判明する。

高Lvに加え、アイテム作成を長くやっていたり、職業がその方面だと失敗する確率が減少し、比較的耐久性の高いものが出来上がることがあったのだ。

Lv以外は単純にスキル直結というわけではなかったために、時間帯が関係するんだ、あの、実際に作る工程を再現するんだ！などと様々に仮説が生まれ、検証されていった。

結果、ほとんどは外れだったが確実なのはたった1つだった。

それは実際に作るような行動をすること。
ポーション類ならゲーム内文献通りに薬草達を集めるといった具合だ。

この事実に関心を含めて、作成をメインにしていたプレイヤー達の動きは早かった。

すぐにリアルでの文献をコピーしてきたり、ゲーム内のNPCが口にする武具の作り方等を確認し、実践したのだ。

そこで生じるのがLvの問題だった。

当然、戦闘系スキルや魔法に乏しい生産者達のLvは殆どが中堅以下、
その戦闘向きではない構成からはすぐに上げようと思っても上がるものではない。

かといって俺のように高Lvのプレイヤーとして、
1日に大量かつ無限に生産できるわけではない。
自然とLvに応じた生産品を作るといふ暗黙のルールが作られ、

ゲーム内の経済は新しく循環を始める。

そしてやってくるオファー、端的に言えばRMTによる専属願いだ
った。

だが俺は断った。RMTのお誘いは来なくなったが、次は依頼が激
増した。

オンライン時でも延々とやってくる依頼やメールに辟易した俺は
外部にサイトを立ち上げ、受付のような物を作って受注を管理する
ことにした。

そのサイトが自動的に広告の載るタイプだったのは
俺が選んだわけではないが、利用者はそう思わなかったようだ。

最初に何かの請求書かと思った書類を見た俺はそこに記された
収入となる数値に歯ブラシを啜えたまま部屋で声を上げた。

適当に1人で生活するには生活必需品だけなら
まあ、なんとかなる、という数字だったのだ。

無論、高額商品をまとめて買うからなんとかしろ！というような
依頼にはお断りを添えてメールするようにし、利用者にも
気まぐれだから変に買わなくても良い、とは通達することにした。

だが、減らない。

どうやら俺が思っているよりある程度以上の

武具枯渇は深刻なようで、ユニークボスに店売りの装備で突撃した
ギルドがいる、

といった話も後で聞いた。

どちらかというと、お世話になってるから生活用品を購入した、というようなプレイヤーが多かったのも俺の後押しをした。

なんの事かと言うと、仕事を辞めたのだ。

ダメならまた何か始めればいい、そう思いながら数ヶ月。ゲームに集中していくと面白いように依頼が舞い込んだ。

定期的に作成し、販売することで自然と収入が安定し、寝たきり老人のようになってしまわないようにリアル運動以外には殆どがプレイ時間に当てられるような生活が続いた。

作成が進めば経験値も貯まり、スキルLvも上昇し、そして効率も上がり、と自然と対応できる依頼も増えていった。

「こんちやっす」

昔のことをそんな風に思いながら、俺はいつもの露店場所へと向かい、馴染みのプレイヤーの傍に立ち、適当に声をかけてから露店を展開する。

絨毯のような何かの上に木箱と机、椅子、そして武具立てといった具合だ。

「今日はどのギルド用だったんだい？」

「あー、なんだっけ、銀狼うんたらだったはず……」

アイテムボックスから販売に回せる余剰品から

適当に選び、剣や盾、槍などと出していく。

最近はある特定の団体から一式の受注を受け、時間的に余った物を露店で売る、という感じなのだ。

「そうか、銀狼師団もついにボスを狙うのか」

如何にも行商人です、といった風貌の顔をしたプレイヤーは自分の露店の在庫、ポジション類を眺めながらウィンドウを操作している。

恐らくは自分の商品の何が売りつけられるかの算段だろう。

「これ耐久いくつですー？」

「お、いらっしやーい」

若い声。

振り向けば少女。装備からして剣士タイプだろう。

「これっていうと、お嬢さんとシヨート？ ロング？ シヨートは……」

説明をしながら、最初のお客さんが女の子とは今日はきつと運が良い、なんてことを片隅で思っていた。

01 「近い様で遠い世界」

目覚めは唐突だった。

「なんで朝？」

果ての無いような青い空、まばらな白い雲。
体を撫でる爽やかな風。

俺は森を突き抜けるように伸びる道、その脇の草原で目覚めた。

太陽の位置からしてゲーム内部での時間はまだ朝。

「現在時刻はつと……なんじゃこりゃ？」

ステータスウィンドウを開くも、現在日時やプレイ時間、
ゲーム内の年月日の表示等、一部が文字化けを起こしている。

まだメンテ中なのだろうか？

首を傾げながら、俺は1つのスキルを実行する。

マテリアルサーチ
鉱脈探知

名前のまま、周辺の金属分布なんかを調べるスキル、というより魔法に近い。

鍛冶職人の経験とカンが周囲の金属を嗅ぎ分ける！と説明にはあったが、犬か、プレイヤーは。

結果は低Lvフィールドにありがちな、鉄をメインとした反応群。

剣士スキルにせよ、魔法にせよ、初期の物が問題なく使える反応だ。
鉱脈と名前は付く物の、正確にはそういう性質を持った
精霊のようなものがあるとかどうとか考察サイトがあった気がする
が、良く覚えていない。

確かにインゴット状の素材を手に入れるには如何にも、な場所に行かないといけないので、正しいのかもしれないが。

ともあれ、スキルが実行できた以上はメンテ中の不安定な状態ではないらしい。

となると、一部分だけ緊急メンテが入ることでのその区画にいたプレイヤーが周辺に弾き飛ばされたといったところか。

「えーっと、戦闘用ショートカット群は4、か」

どちらにせよここは戦闘の可能性があるフィールド。

街中で便利な製作用ショートカットではなく、数は少ないが戦闘に適したスキルや魔法を設定したショートカット群をメインに設定する。

時に街中にまで暇を持て余したプレイヤーがMPK同然にモンスターを引き連れることもあるわけで、油断する訳には行かない。

と、ここでメニュー全体に違和感を覚え、手を止める。

「何か足りないような？……あれ、マップがない。っていうかコンフィグも無い！」

慌ててアイテムボックスを開く。

「アイテムは……ある。むしろなんだこの数」

アイテム欄は大量としか言いようの無い武具でほとんど埋まっていた。

「あっ！　そうか、納品前か」

丁度大口の注文が納品直前だったことを思い出す。

良く見ていけば同一の意匠を掘り込まれた剣、盾なんかが満載だ。

「後はっと、うげっ。ログアウトもスリープも無いじゃないか」

スリープは放置用とでも言うべき状態のことだ。

一昔前ならAFKとでも言ってもモニターの前から離れたり、外出したりといった具合の状態である。

半透明な幽霊のような状態でゲーム内に存在し、メッセージやアイテムの受け渡しなんかが可能で、自動販売機のように露店の一部機能も持つ。

すぐに復帰できるし、そんな長時間離れることも基本的に俺には無いので、実際のプレイ中以外はほとんどはスリープだった。

システムメニューの1部がバグっているとすれば、

一度ログアウトしたほうがいいのだが、その術もない。

「参つたなこりゃ、っと待てよ?」

(そもそも今日はいつオンラインになった?)

所謂ネトゲ廃人に近いと自分でも思うスタイルは基本的にログアウトはしない。

食事も前述のスリープにすることですぐにゲームに復帰していた。

それでも曜日感覚は大事だと思っているので(主にメンテ日のためだが)、食事をしながらのニューステックは欠かさない。

確か金曜の夜、一番ゲームの賑わうタイミングの1つに納品をするべく、オンラインにしたはずだ。

だが今は朝。

(飲み会でもして記憶が無い? それにしてもなんでここにいるんだ)

ゲーム内でも飲酒は出来る。といっても酔った様に感じる、だけではあるが。

衣服に乱れた感じはないし、体調も悪いわけではない。

リアルそのままの190近い長身、それなりに鍛えられた体。

そのまま旅に出れそうな冒険者風の衣装にアイテムボックスである布袋。

特に異常はない。

そもそも納品したはずの武具が残っている以上、約束は果たせてい

ないということだ。

「うわっちゃん、久しぶりの違約金か？ こりゃ」

自主的なことだが、依頼を期限までにこなせなかった場合、違約金として相手にある程度の金額を払うことを依頼時に俺は決めている。自分への戒めでもあるし、相手への気遣いでもある。

これまでに違約金を払ったことは片手でも十分な程だが。

「とりあえず街に行くか」

こうしていても仕方が無いので、アイテムボックスから木製の杖を1本取り出し、適当に地面に立てる。

当然倒れる杖。

「よし、こつちな」

どちらに行っても大差は無いだろうと、杖の倒れた方向へと歩き出す。

既に自分が異世界にいることにその時は気が付いていなかった。

俺がここがおかしい、と気が付くのはそれから10分ほどした頃、

順調に足を進めた先での事件が終わってからのことだった。

「土煙？ 馬車……か？」

道の先から何やら声と音が響く、と立ち止まると何かが近づいてくる。

二頭引の馬車、なにやら荷物が満載だ。

そして必死に馬車を操る人物。

何かに追われている様子だ。

「プレイヤーならあんな馬車に荷物を積まないだろうし、突発クエストか？ にはしては何もアナウンスが無いな」

プレイヤーは当然アイテムボックスを使えるので、装備品以外は収納するのが当たり前だ。余程の暇人じゃない限り、馬車に乗せて運ぶなんてするはずが無い。

街中やフィールドで発生するクエストのNPCが操作しているなら有り得るが、だとしたらクエスト範囲内で響くアナウンスがまったく無い。

「ま、いいか。とりあえず助けよう、多分モンスターだし」

ちらちらと馬車の後ろを気にしているあたり、何かが後ろにいるのだ。

よしっ！と気合を入れた俺は、普段なら逃走用に使う高速移動用の魔法、

良い素材ほど強敵のいる場所であることが多いからかなり多用しているソレを自分にかける。

続けて脳内でイメージを練り、馴染みのスキルを実行する。

武器生成 - 近距離C - 《クリエイト・ウェポン》

虚空に右手を伸ばし、スキル実行。

少しの光と共に手の中へとオーソドックスなロングソードが産まれる。

その質感に満足しようとする、驚愕の数値が目に入る。

「カウント600!? 10分かよ!」

叫んだ後、状況を思い出し、かなり近くまで迫ってきていた馬車に向けて走り出す。

俺に気が付いた人物の顔がこれまでとは違う意味で驚きに変わるのを見、すれ違いざまに叫ぶ。

「逃げる!」

聞こえたかはわからないが、いきなり止まるなんてことはなかった

ので聞こえたのだろう。

馬車の後ろ、もう後30秒ほどもすれば接触しそうな距離に小柄な複数の影。

幼稚園児ほどの背丈で無骨なナイフを構えたその姿は異形だ。

(ゴブリンか、よかった)

初級モンスターのこいつらならいくらこの装備や俺でも余裕だ。

「せいっ!」

走る勢いそのまま、目の前に迫ったゴブリンの1匹へと刃を振るう。

耳障りな悲鳴を上げ、その1匹は右肩辺りからすっぱりと切り取られて転がる。

本当は真ん中から真っ二つ!と行きたがったが、仕方が無い。

残りは後2匹。

武器が持つかな?と考えながら、ゴブリンと向き合つと、いきなり2匹は逃げ出した。

「ちよっ!?! クエスト仕様じゃないのかよ!」

このゴブリン、普通に遭遇すると今のようにすぐに逃げ出すのだ。おかげで危険は少ないとも言えるが、少しでも早くLvを上げたい

序盤では別の意味で初心者泣かせだ。

なにせ、最初は集団でダメージを与えてくるくせに1匹倒すとすぐ逃げ出し、旨みは1匹分、と散々だからだ。他の初級モンスターより美味しいのが救いといえれば救いである。

例外は俺が叫んだように、クエスト中での襲撃役の時だ。

この時ばかりは全滅するまで襲い掛かってくるため、全部倒すことが出来る。

ゲーム序盤でLvをすぐに上げるにはゴブリンをある程度倒せるクエストを探るか、突発遭遇する幸運が必要となっていた。

「ま、楽だからいいけど」

負け惜しみとも取れる台詞を放ち、再襲撃を警戒する。

俺ぐらいのLvになるまでも無く、すぐに旨みを感じなくなる相手ではあるものの、何かもつたいない。

と、右手の重みが減っていく。

「うーむ、いかな、こりゃ」

視線を向ければゴブリンを斬った筈のロングソードが消えかけていた。

段々と光の粒子となって地面に落ちていく。

俺が使ったスキルは武器作成、それも剣を含んだ近接用の武器作成のスキルだ。

リニューアル前はアイテムボックスに素材があり、スキルが実行出来さえすれば

一定の確率で該当の武具が作成できた。

当然、その武具は消えたりすることは無かったのだが、別の作り方をした場合、消えることがある。

それは、アイテムとしての素材を使わずにフィールドの素材を使う方法だ。

水の力が強い場所で使えば水属性的に、火山なんかで使えば火を噴く斧が、といった具合に場所にあった武具が作成できる。

弱点は装備としての存在時間だ。

早ければ今のようにカウント600、つまり10分、そして長くても数時間だ。

何より強敵の鱗だったり、硬い物を切ろうとしたり、叩きつけたりするとそのカウントもさらに減る。

フィールドの素材の量と言うか、力のようなものが強いほど長く存在するし、性能もいいのだがこの辺りでは最低値になるようだ。

普通、低Lvフィールドでは当然低Lvプレイヤーが戦うため、事故の少ないようにある程度時間は持つ武具が作れたはずだが、この場所はそうではないのだろうか？

そしていつぞやのアップデート後、しっかりとした武具を作るには面倒な手順が必要となったわけだが、フィールドからの作成には何故か影響は無かった。

ただ、余り意味はない。

すぐ消える上に、出来るかわからない武具にゲームとはいえ命を預けられるプレイヤーがどれほどいるだろうか？

鍛冶職人を目指す中で比較的初期に習得できるものの、その使い勝手からすぐに別のスキルに枠を奪われる、そんなスキル。

だが俺は少しでも素材の節約をしたり、武具の性能や性質を確かめるために多用していた。

なにせアイテムとして素材を持っていなくても武具が作れるのである。その性能なんかをとりあえず確かめるには便利だった。

Lvも上がり、スキルとしての熟練具合も問題ない自分であれば、大抵の武具はその場でとりあえず作れる。

他にも大きなデメリットはあるのだが、今は問題無いだろう。

「お？ 馬車が戻ってくるな」

ゴブリンは戻ってこないようなので、倒した1匹がお金を持っていないかを確認していると、こちらに近づく馬車の音がした。

近くまで来ると馬車を操作していた人物をしっかりと見ることが出来る。

背丈はそう高くないが、引き締まった感じの……壮年の男性だ。

「助かったぜ。怪我は無いか？」

「そっちこそ、どうなんだ？」

かけられた声にそのまま返し、自分は大丈夫であることをアピール。男性も息が上がってる以外はなんでもない、と言いつつ笑う。

「見たところ冒険者みたいだな、どこに行く途中だったんだ？」

「特に決めてはいないんだ。ぶらぶらしつつ、天気が良いから散歩同然に歩いていたら、あんたが逃げてくるのが見えたんじゃね」

男性が乗るようにと手招きし、場所を移動したので馬車に乗り込みながら答える。

「散歩？ モンスターの出る外で散歩とは、さすが冒険者！つてか」

豪快に笑う男性が操作する馬車は元々俺が歩いていた方向、馬車が逃げてきた方向へと向かっていく。

「いやー、注文の品を届けに行く途中であいつらに遭遇してな。来た道を逃げ帰っていたんだ」

俺も目的には同じだと判断したのだろう。どこでも良いから街に着きたかった俺は文句を言うでもなく、そのまま話に頷く。

「それは災難なことだ。おっと、俺はファクトだ」

「おう、ガウディだ。一応鍛冶職人をしている」

字面は自分の鍛冶職人と一緒だが、どうも一般的な意味で鍛冶職人、マテリアルスミスのようだ。

しばらく雑談をしていると、どうも話題やその中に出てくる単語に違和感を覚える。

知らない地名や、事件が多いのだ。

「ところで、今マテリアル暦で何年何月なんだ？　しばらくカレンダーを見てなくてな」

何気ないように発した言葉に、ガウデイがは？という顔をしたらかと思っただらなぜか笑顔になる。

「今はマテリアル暦で2314年の5月だな。しかし、洒落てるな。旧時代よりも前の暦で挨拶とは。冒険者の間じゃ流行ってるのか？」

耳に届いた言葉を最初は理解できなかった。

ちなみに記憶にある限りでは俺が最後に確認した際には、マテリアル暦、700年代だったはずだ。

(1000年どころか1500年以上違う!?)

ガウデイが話しかけてくるのがわかったが、自分の意識がどこか遠くなるのを感じる。

使えない1部のシステム、ずれた時間、こんなこともあるかと気にしていなかった違和感、1つ1つは小さなピースだったそれらが脳内で組み上がっていく。

ここが俺の体験してきたマテリアルドライブと、近い様で遠い世界
であることを知らしめるために……

01 「近い様で遠い世界」 (後書き)

地の文を詰め込みすぎなような、そつでもないような。

02 「新しい生活へ - 1」 (前書き)

2011/07/08

銀塊描写を鉱石へ変更。

その他、微修正。

鉱石類は現実的にはトンクラスからキロ単位の産出となるはずですが、

通常のものゝ濃密度まであり、な

ファンタジー的鉱石類と解釈願います。

02 「新しい生活へ - 1」

意識を飛ばしていた時間はどのくらいだろうか？

「どうした？ 大丈夫か？」

何かショックを受けたように口を開けたままの自分に呼びかけてくるガウディ。

実際にはかなり衝撃的な事件が起きているわけだが、ここで焦るのもきつとマズイ。

「いや、あっさり答えてきたのは初めてだったからな、ちょっと驚いてて」

とっさの言い訳だったが、ガウディの言うとおりなら使われていない曆、それも1つ前、ってわけじゃないらしい。
なのに何故？

「なんてことはないさ、教会じゃ今も記録としてはマテリアル曆を使ってるからな、知ってる奴は知ってるんじゃないか？」

（教会というと、まだ金属精霊の信仰が残ってるのか？）

マテリアルドライブにも某宗教のような西洋的教会というか、信仰が設定上あった。

確か、万物には精霊が宿っていて、土の恵みも、鉄から作った武器の鋭さも、同化している精霊のおかげなのだという話。

どちらかというとなりの八百万な考えが混ざっていた記憶がある。

マテリアルサーチ
鉱脈探知で見つかる反応が精霊じゃないか、という話もここから来ているはずだ。ただ、ゲーム中でそれっぽいものに遭遇したという話は聞かなかった。

「なるほどな。ちなみに流行ってる訳じゃなくて、俺の村の風習でね。暦といえばマテリアル暦だったんだが、会う人会う人、ガウディみたいに言うから話の種に良いかなと思ってね」

俺は小さな村の出身であることを装い、そうして色々話をしていて嘘をつき、最近の事件なんかを教えてくれるように頼み込む。

そう考えるとさっきまでの雑談で変な単語を出さず、積荷やその届け先あたりを聞くことに留めておいてよかったといえる。

「知らないとまずいことといえば、例えば今はグランド帝国、今の暦のグラン暦を作った帝国が分裂して小国が乱立していることと、モンスターが場所によって何故か活発になっていること、それによって戦争同然の紛争が各地で起きてることぐらいか」

ちなみにグラン暦だと124年らしい。

典型的な一代で成り上がり、二代目、三代目で維持できなくなってきたパターンだろうか。

庶民にや違いは税金の納め先の名前が変わったり、モンスターに注意して外出するぐらいなものだ、とはガウディの弁。

「つまり、ガウディは忙しい立場ってことだな」

積荷は兵士用と思わしき武具だった。

質素な作りからして新兵用だろうか。

「ああ、そうだ。これを届けたらまたすぐに家に戻って続きを作る予定だ。ファクトがいなかったらそれも出来なかったところだがな！」

命の危機だったはずだというのに、豪快に笑うガウディ。

如何にも親方！といった性格のようだ。宴会でもやったら楽しそうだ。

「護衛も無しというのは物騒な気がするんだが、滅多に襲われない物なのか？」

「ああ、この街道自体はそのはずなんだ。街と街の距離も比較的近いし、互いの自警団が定期的に対処に行き来してる。今日は大荷物だから無理だったが、普段の荷物の量なら逃げれただろうしな」

肩をすくめて積荷を見るガウディになるほどと頷く。

確かに先ほどの追いかけてこども、すぐに追いつかれるという状態ではなかった。

襲われたのに元気なのは、いざという時は積荷を投げてでも逃げるつもりだったのだろうか？

「で、ファクトはどうするんだ、旅を続けるのか？」

ふと、ガウデイが聞いてくる。

下心無しに純粹に気にしている雰囲気が伝わってきたので、俺も答えられることにする。

実は高Lvの変な存在です、ということとは隠しつつ。

「いや、自分も実は鍛冶職人のようなことを村でやっていたんだ。金属製の食器作りや包丁なんかの手直し、初級武器の作成や武器の簡単な修理なら出来る。村を飛び出したものの、上手くいかなくつてな」

言葉を区切り、少し落ち込む演技をする。

「出来ればどこかの街にでも小さな金物屋でも開ければと思ってるんだが、なかなか。そんな訳で気長に散歩しながら気の向くままに一人旅の途中さ」

実際には包丁どころか使い古された武具が新品同様になるぐらいのことは多分出来るのだが、出身地的にはこのぐらいが妥当だろうと決めた設定を語る。

ここがどんな世界で状況にせよ、それを把握して今後のことを考える上で、拠点となる場所は必須だ。

現地のお金を稼ぎつつ、情報を集める。そのためにソロで戦闘することが回避できるなら言うまでも無い。

Lvだけなら恐らく圧倒的だろうが、戦闘能力に比例していない以上、無理は出来ない。

「そうか、何をやるにしても金は要る。先立つ物は、あるのか？」

俺の身なりを見たガウディの言葉に内心うめく俺。

一応、ゲームとしての通貨は少なからず表示されているし、多分取り出せるが、今の通貨が不明だ。

金塊やらを出しても怪しさ大爆発であろう。

「田舎だからな、金はほとんど無い。これが換金できれば一番なんだが」

そう言つて、アイテムボックス（ガウディからは大きな布袋にしか見えないだろう）から素材として持っていたサスペンスで凶器になりそうな大きさの銀鉱石をいくつか取り出す。

「……それはどうやって？」

「？ 村の山を掘っていたらたまたま銀鉱脈に当たつてね。何か問題でも？ あ、銀つて今、あまり価値が無いのか？ だったらまだあるけど」

銀はゲームじゃどこでもとは言わないが、結構な場所で作成できる素材の1つのはずだ。

その分、その鉱石も大量に出回っているのかもしれない。こういった素材がダメなら多少不自然でも在庫として持っている武器を売るしかないか？と考えているとガウディは銀鉱石を隠すように片手をかぶせ、ささやく。

「逆だ。ファクトの出身地がどこかは知らないが、街中でウチの山から出ました、っていうんじゃないぞ。すぐに自警団どころか、貴族の兵が飛んでくる。そして、山ごと掘尽くされるぞ」

ガウデイが言うには、長い人類同士やモンスターとの争いで資源は湯水のごとく消費され、今となってはモンスターの多い山の中や洞窟なんかにはいかなないとまとまった量の鉱脈は見つからないらしい。

ましてや、通貨の1つである銀貨を作るのに必須な銀は、金同様、高騰を続ける素材の1つなのだそうだ。

全部銀製の武器や装飾品なんかは上等の贈り物になるらしい。

今の銀貨数枚で庶民が一ヶ月一応、食べていけるらしい。

そりゃ貴重なわけだ。

(資源不足か。さっきのロングソードがすぐ消えたのはそのせいか)

道理で^{マテリアルサーチ}鉱脈探知を使った時の手ごたえというか、気配が薄く感じたわけだ。

「それは良かった。無駄に重し、なんとかしたかったんだ」

「街で馴染みの無いファクトじゃ換金できない可能性が高い。嫌じゃなければ俺に預けないか？」

ガウデイの提案は渡りに船である。

そもそも、換金手段もはつきりしないわけで、それが解決するのだ。

「むしろ、お願いしたいぐらいだ。ついでに空き家を探したりするのも手伝ってくれるとありがたいんだが」

「おう、これだけすぐにわかるほどの銀鉱石なら良い値段で売れるだろう。ファクトのことは仕事で知り合った奴の息子ってことにし

「ておこつじゃないか」

ガウディに釣られて視線を向けると、いつのまにか街の外壁と思わしき壁が見えてきた。

「10mほどはあるだろうか？」

「防御に十分なのかはわからないが、ぐるっと街を囲んでいる様子からしてかなりの規模だ。」

馬車が縦に2台は入りそうな高さの門に門番が2人。

「ようガウディ。ご苦労さん」

「ああ、今回は大荷物さ。運ぶ苦労も考えて欲しいぜ」

顔馴染みなのだろう、気さくに門番達とガウディは挨拶を交わしている。

「こいつは知り合いの息子のファクトだ。鍛冶職人でな。俺の話をお親から聞いたのか、村から出てきたんだよ。手ごろな武器作りや生活用品の簡単な修理とかなら出来るらしい。ここで修行がてら金物屋でもやりたいらしいんだ」

門番の探るような視線に気がついたガウディが打ち合わせどおりに語る。

「そいつは朗報だ。今は街に一人もない鍛冶職人！ いくらいても足りないし、この街に一人でも鍛冶職人がいることになればガウディだって武具作りに少しでも専念できるじゃないか」

笑う門番の言葉から、この街の置かれた状況がなんとなく見えてきた気がした。

それは戦いが多いということだ。戦争なのか、モンスター相手なのかはわからないが。

ガウディは修理も行っていたのだろう。

何故一人もいないのかは後で聞くとしよう。

「そういうことだ。よろしく頼むぜ」

「ファクト君、君の未来が明るいことを祈るよ。ようこそ、グランモールへ！」

引き締まった顔になった門番から挨拶を受け、俺も丁寧に返す。

グランモールの街に入ると、石畳の道がかなりの範囲で丁寧に広がっているのがわかった。

少し進むと広場のような場所に出る。

馬車や人が行き交い、道の脇には露店が立ち並ぶ。

食料品や衣服、雑貨が主なようだ。

武器を扱っている店は見たところ無いようだ。

ガウディにそれを問うと真面目な顔のままである方向を指差した。

「武器を売る奴がないわけじゃない。すぐに売れちまうのさ」

視線の先には片付け中の店。

看板には

【ナイフ、ショートソードあります。長剣在庫少!!】
とある。

「需要は多いが、作るための金属を手に入れるには街から離れるしかないからな。世間じゃ鍋に穴が開いたってなんとか使ってらあ！」

そう笑うガウデイの声を聞きながら、俺は1つの事実気がつく。

つまり、その中でもガウデイにこれだけの武具を依頼できるほどの経済力を持った人間がいて、戦力を整える必要がある状況がどこかにあるということ。

どうやら街に入る前に感じた懸念は気のせいどころか、思ったより火種は大きそうだ。

それでも平和すぎるよりは動きがあったほうが何かと便利だと思うことにする。

その後、ガウデイの依頼先だという大きなお屋敷（結構な貴族らしい）まで付き合い、荷降ろしを手伝う。

ガウデイはその場で、銀鉱石をツテで手に入れたと何でもないように言い放ち、その貴族の関係者と思わしき相手に売りつけていた。

屋敷からやってきた担当者と思わしき人間が、

鉱石を受け取って屋敷に戻っていく。

門番の人は鍛冶職人が1人もいないと言っていた。
にもかかわらず、何かを作る依頼はガウディに来ていない。
ということは別の何かに使うのか、
どこかに集めることにしているのか。

「大丈夫なのか？」

遠くなるお屋敷に視線を向けながら、口を開く。

「なあに、あちらとは長い付き合いだからな。売った事も1度じゃない。そんなこともあると思ってくれるさ」

担当者が戻ってくるまで小声で聞いてみると、
自信有り気な答えが返ってくる。

(そういえば、どうやって鉱石の値段を決めるんだ?)

疑問をそのまま口に出すと、明確な答えが返ってきた。

「むかーしむかし、すげえ技を持った冒険者やその支援者がいてな。
その頃の魔法や技を限定的に再現できる機械があるんだ。
結界を作る水晶球だったり、炎の玉が出る杖だったり、
今回みたいに、鉱石の良し悪しがわかる秤だったりな」

マテリアル暦が普通に使われていた時代からの骨董品だというから、
プレイヤー達のスキルなんかがこういった形で少しだが
伝わっているということになるのだろう。

と、屋敷から布袋を持った人間がやってきて、
ガウデイに袋を差し出す。

「銀貨で200枚だそうだ。大分良い感じだったみたいだな。どう
する?」

「任せるさ」

即答。当然である。

ガウデイがグルになって……という可能性も無いわけではないが、
そこまでは気にしてられない。

銀貨の元になるものを売って、銀貨が手に入るというのも不思議な
気分だが、

渡された代金が入った袋は想像より重かった。

恐らくだが銀以外にも混ぜ物をするので銀貨としているのだろう。

屋敷から離れる馬車の上で1枚取り出して眺めてみる。

(お? これは、まさか?)

明らかに見覚えのある模様。

さりげなく懐から取り出したように装いながら、所持金からゲーム
内でいうと1ゴールド、いくなれば1ギル、最低な単価だったはずの
銀色の1枚を取り出す。

見比べるとまったく一緒だ。

重さは違うようだから、銀の含有量を減らして増産したんじゃない
だろうか?

「饞別代りの虎の子の1枚がちゃんとしたお金で助かった気分だ」

「田舎じゃ銀貨1枚も大金だからな、良い村じゃないか」

何か言われる前にごまかすように言ってみたが、これは発見の上に驚きだ。

俺の銀貨は明らかに純銀に近い。

所持金をそのままか、素材としておおっぴらに使い始めたらこの街の経済がやばいことになる。

こそこそ使うことにしよう。

馬車はその間にも結構な距離を移動し、中心からは外れた、建物の建てられ方がずいぶんと散らかった感じのする街角へと到着した。

「ここに知り合いがいるんだ。確か工房に使えそうな広さの建物を持っていたはずだ。建てたはいいが、住むには向かないからって別の場所に住んでるがな」

そういつてガウディは傍の建物に入って行った。するとすぐになにやら話す声がある。

音を立て、扉が開くとガウディと同年代に見える男。

俺とガウディを交互に見ながら、笑顔で話している。

「銀貨50枚で売ってくれるとき。どうする？」

問うガウディにうなずき、先ほどの売却金から50枚を取り出す。

銀貨の価値を考えると、借りるならともかく、家を売るとなると安いような気がする。

念のためにガウディに確認する。

「掃除もしてないし、かなり古くなってらしいぞ」

「そうか、気ままな1人暮らしならそのぐらいでいいさ」

築XX年のアパートのようなものだろうか？

4分の1ほど減った売却金の重さを感じながら、ガウディの案内で目的の建物に向かう。

先ほどの場所から少し進んだところにその建物はあった。

「確かに、古いなこりゃ」

扉を開け、中を見た途端に思わずつぶやき、立ち尽くす。

簡単に言えば吹き抜け構造の居間を中心に寝室他を接続しました、とい感じだ。

大きな暖炉のある部屋の周囲に小部屋となっている。

「でもこれなら暖炉を溶鉱炉に交換するのもすぐじゃないか？」

暖炉を確かめたガウディの言うように、暖炉周りは無駄に立派な作りで、溶鉱炉に変えても問題はなさそうだ。

「確かに。さっきの代金で色々買いこんで揃えてみるさ」

窓に降り積もった埃を指で撫でながら、苦笑する。

「頑張れよ。俺はもう戻らないと日が暮れちまうからな、すまん」

「とんでもない。何から何まで助かったよ。また今度寄ってきてくれ」

太陽の高さに焦った様子のガウディに別れの挨拶を言う。

「さて……掃除の前に確かめるか」

建物の周囲に誰もいないことを確認し、中に入る。

そして、キャンプを起動。

すぐさま馴染みの空間に自分はいた。

「いざとなつたらここで本格的に作業することも出来そうだが、止めた方がいいな。アイテム類は無事、後は作成スキルがどうなるかか」

アイテムボックスから普通の鉄素材を取り出す。

ゴブリン相手にも使った、武器生成 - 近距離C - 《クリエイト・ウエポン》で作れるロングソードをちゃんと作ってみようと考えた。

理屈はわからないが、なぜか火の入ったままの溶鉱炉と金床の傍に向かい、準備をする。

ゲームでの仕様変更にあわせ、実際に素材を熱し、それを鍛えるべくハンマーを手に持つ。

ゲームだところから何度も叩き、整え、徐々に形にしていく必要がある。

その面倒臭さは、作成スキルの意味があるのかと本気で運営に問いかけたレベルだ。

赤く色を変えた鉄素材だったソレを金床に乗せ、ハンマーを振り上げる。

(ロングソード……シンプルでありながら実直な力の象徴！)

ゲーム中、意味はないのだが、俺はいつも作る武具のイメージを浮かべ、脳内でつぶやきながら叩く癖があった。

最初の1発目を振り下ろす瞬間、何かふわりとしたものが腕にまとわりついてきた気がした。

疑問に思うまもなく、響く快音。

まずは1回目、と考えたその時、ただの鉄素材だったはずのソレが光に包まれる。

「へ???」

思わず手を止め、見つめる俺。

光が収まったそこには、新品のロングソードが一振り、いきなり出来上がっていた。

おまけに、何か小さい半透明の人影が何匹も剣にまとわりついて、笑っている。
と思ったら消えた。

「なんだ今の……アレが精霊？」

ロングソードを手にとって見るが、カウント表示は無し。変に脆そうな感じもしない。どの程度かはすぐにはわからないが、かなり上質の一振りのようだ。

なにやらほのかに金属以外の光で包まれているような気さえする。

頭を疑問でいっぱいにしながらもキャンプから出、元の建物の中で剣を眺めてみるが変化は無い。

微妙に光っているのは目の錯覚ではないようだ。

「……掃除して生活する準備をするか」

考えるのを止め、とにかくにも掃除だと自分をこまかすことにす

る。

後はひたすらに掃除の時間だった。

なんとか寝る場所を整え、疲れた俺は適当に毛布を出して寝転がる。

恐らくは俺の異世界での一日目、そしてこの世界で祝福の武器などと呼ばれるようになる武具達の日目でもある夜が過ぎていく。

02 「新しい生活へ・1」 (後書き)

基本的には1つの依頼ごとにショートショートのみとした小話として作っていく予定です。

03 「新しい生活へ - 2」 (前書き)

結構勢いそのまま、書きたい事だけ、なので言い回しとかをいじる場合アリ、です。

03 「新しい生活へ - 2」

ファクトがグランモールに住み始めてはや1週間。

とある日、彼の家がある区画へと歩みを進める小柄な少年の姿があった。

年若く、皮鎧姿で少年兵といった様子の彼は手元に布で巻かれた短い棒状の包みを抱え、
何かを探すように辺りをきよろきよろと見渡している。

「この通りを抜けてすぐ、のはず……」

そして、目的の場所を見つけたのか、その建物へと駆け寄った。

- 工房内にて

「今日はマリーおばさんの包丁直しがあつたな」

家の掃除や、溶鉱炉の確保等に口を利いてくれた近くのおばさんに

頼まれた依頼をこなすべく、棚の1つから包丁を取り出し、状態を確認する。

刃がつぶれたり、壊れているわけではない。

これなら手持ちの鉄塊で余裕だな。

アイテムボックスの中にあるタブを切り替え、最初の頃に見ていたものとは別グループのアイテム群から、小さなピンポン球サイズの鉄球とも言つべき素材を取り出す。

これは工房を構えてからすぐに近所から不要な金物をもらって素材化したものだ。

スキル的には、熔解、というのだが精霊っぽいものが見えた今となつては、

各種精霊への原初転換とでも呼んだほうがよさそうな気がする。

ともあれ、これまでの出来事から、ゲーム中での素材サイズそのままだと非常にもつたいないと学んだ俺は、手持ちの素材の大きさを細かく分けることにした。

例えば、鉄塊もピンポン玉大であったり、バスケットボール大など、武器に見合った大きさに分けたりといった具合だ。

何度か試した結果、斧やそういつた多く素材を使いそうな武具はそのままずばり、大量に素材を使う必要があった。

途中で何個も塊を追加する必要があったのだ。

逆に、包丁やダガー程度ならその分、使う素材も小さくてすむこと

がわかった。

様々に作ってみたが、どれもこれも短い回数で出来た上に、ほのかに光ってるものだから

部屋の1つに押し込んである。

武具はともかく、鍋や包丁まで光るようではおかしなことになるので、

色々試した結果、2つの法則が見つかった。

1つ目は、元々、自分が持っていた素材だとなんでもかんでも確実に光るようなのだ。

この世界にある素材だと大体3分の1ぐらいの確率で光った。

それに、普通なので！と祈っていたらなぜか光ることは無かった。

きっと精霊さんが聞いていたに違いない、うん。

ちなみに、光ってしまった包丁はまた素材に戻しておいた。

2つ目としては、精霊っぽい何かに見守るように意識を向ければ

一叩きで出来上がり！ということが無いと言ったことだった。

急ぎの時は便利だが、普段であれば味気ないので、この発見は大事である。

そんな訳で、今日は包丁ということでごちらの世界での素材を使うことにする。

早く出来たほうが良いだろうから、今回は精霊サポート？にお任せすることにした。

熱し、溶かし、元の包丁と合わせて叩く！

後ろのほうは実際の鍛冶では有り得ない手順ではあるが、マテリアルドライブ中でもなくともかく、こちらではこの程度でもなぜか成功する。

半日カンカンと叩かなくていいのだから、大助かりである。

金床の上には綺麗になった包丁の姿がある。

熱が収まった様子の包丁を掲げ、窓からの光に反射させる。

「うん、骨付き肉も一刀両断！って感じだな」

これなら喜んでくれるだろう、と布を巻いたところで、ノック。

「どうやらお客さんらしい。」

「どうぞ、開いてますよ」

俺の声にゆっくりと扉が開き、入ってきたのは少年だった。体格にあった軽装ではあったが、兵士と言える装備。

まだまだ駆け出しという第一印象だが、はたして？

「あ、あの！　ここが武器の修理もしているって聞いて！」

緊張からか、いささかオーバーな声と動きで抱えていた包みを俺のほうへと差し出してくる。

（中の人は女性声優？）

高めの少年独特の声に、なんとなくそんな印象を受ける。

「ああ、やってる。何をどうしたい？」

「はいっ！ えっと……」

別に命令したわけでもないのだが、びしっと1度背筋を伸ばした少年はおどおどと工房内にやってきて包みを開ける。

「ずいぶん古いな」

そこにあっただのは半ばほどから折れてしまっている一振りのロングソード。

柄等からずいぶん使い込まれた印象を受ける。
長く大事にされたのだろう。

この時点で依頼は大体受けるつもりだった。

だって、ロングソードだし。

この世界に来てからの俺の生活を見ている神様がいたら、
ロングソード好きだなあ？と思うかもしれないが、当然である。

ファンタジーといえば剣と魔法！ 剣と魔法の剣といえば両刃のロングソードである！

魔法剣だって基本長剣！！！！

……まあ、それは誇張だが、わかりやすいじゃないか。

正直、斧や槍1つ作るより長剣を何本も作っていたほうが気が楽だし、楽しい。

「はい。先輩から頂いたんです。でも、自主訓練で折ってしまって俺が意識を横に飛ばしている間に少年が事情を説明してくれた。

(ふむ、元の長さにするには足りない感じだな)

「折ったとしても破片が足りないようだが？」

「そうなんです！ 勢い良く折れちゃったので、どこに行ったやら……」

落ち込む少年の言葉に、俺は思わず問いかける。

「って、何を斬ってたんだよ？」

第一、それは碎け散ったというのだ。

「い、岩です。先輩が『無茶を通してこそ鍛えられる！』っていうものですから」

(…多分、その先輩の言いたいことは少し違う)

「良くわかった。直すというより鍛えなおしになる。長さは短くなくても構わないか？」

「もちろん！ それで御代なんですけど……」

おどおどした様子でテーブルの上に出してきたのは銅貨の山。

相場は良くわからないが、十分と思っていなのは少年の顔からわかる。

だが、本人にとっては大金だろうこともわかる。

「暮らせるのか？」

「え？」

だから、俺は聞く。

「これだけ出して、君は暮らせるのか？と聞いているのよ」

目をあわせ、ゆっくりと俺はその言葉を吐き出した。

「……正直、何も買えません。自警団からの少しの給金が出るまで、エールどころかジュースの一杯も買えないですね」

肩を落としたまま、少年はつぶやく。

(あ、自警団なんだ。ここじゃ志願制っばいな、若いし)

出てきた単語にふと考える俺。

「でもっ！ 武器が無くちゃ戦えませんし、何より……強くなりた
いんです！」

俺の思考をさえぎるように、ぐいっと顔を上げ、強く言い放つ少年、その顔は本気だ。

「強くなつてどうするんだ？ 威張るのか？」

脳裏に浮かぶのは、マテリアルドライブ時代に俺のような生産者を自分では何も出来ない、と蔑み、自分のような強いプレイヤーに使われるのを誇りに思え、とばかりに作成を強要しようとしてきた微妙なプレイヤー達であった。

「いえ、守りたいんです。家族を、何より横に立つ仲間を！
だから、この剣にもう一度誓いたい！」

「誓う？」

少年の声に答えるように、剣の破片達からふわりとほのかな光。

それを視界に納めながら問い返す。

「先輩から譲ってもらった夜、剣に誓ったんです。

自分は強くなる、誰かを守る力になるって。

でも、多分自分が馬鹿だったから剣を折っちゃいました。

だから今度は、一緒に歩もう！って誓いたいんです」

自分一人じゃなく、剣と共に歩みたい。

少年はそう言ったのだ。

破片から昇る光は消えていない。

少年には見えていないようではあるが。

「よし、その半分でいい」

だから俺は銅貨の山を指差してこう言った。

「え？」

「半分の費用でやるって言ったんだ。若いんだ、買い食いだってしたいだろう？」

上手く行っているかはわからないが、茶目つ気を混ぜて半分戻すように促す。

「いいんですか？」

若さゆえの遠慮無さか、すぐさま袋に銅貨を戻す少年。

「その代わりに、皆に宣伝しておいてくれよ」

その姿に苦笑しながら、俺なりの報酬を要求する。

「はいっ！」

元気良く答えた少年に頷き、

出来上がるまで座っているように言い、準備に取り掛かる。

金床の上に破片を置き、大体の調整をする。

使う塊の大きさを定め、少し短い長さに足りるような大きさを選ん

で素材を取り出す。

(何か危なっかしいからな、おまけしておくか)

武器生成 - 近距離 B - 《クリエイト・ウェポン》

小声でささやき、スキル実行。

工房内に音が響き、ひたすらに俺はハンマーを振り下ろす。

Cは単純な作成、加工。Bからは特殊効果付与、Aとなると専用
品などが作れる。

B、Aと来ると色々とやれることは増えるが、主なところはこんな感
じだ。

また、良い素材だと良い効果が、という形になる。

つまるところ……

- ショートソード (状態異常耐性: 弱)

完成した剣は俺にはそう見えた。

長さ的にはショートソード扱いのようだが、ショートソードとして
は妙に長い。

ぎりぎり境界線の上にある長さのようだ。

素材が素材なので、効果としては1番下、毒や麻痺等に一応、強く
なる効果だ。

「ほれ、振ってみ」

ほわー……とこちらを見ていた少年に手渡し、先を促す。

「へ？ あ、はい！ あ……結構軽い」

少年は何度か素振りをしたところで満足したのか、鞘に剣を収め、振り向いた。

「ありがとうございます！ また来ます！！」

声の勢いそのまま、飛び出していった。

「また？ 手入れ以外には来ないほうが良いと思うんだがなあ……」

ドアから顔を出し、少年の後姿を眺めながらつぶやく。

「あ、スキル見せた上に、名前も聞いてないな」

新しい生活に気分が浮ついたままなのだろうか？

少々言動が若くなってきている気がする。

少年が騒がなかったところを見ると、その筋ではスキルは一般的なのかもしれない。

もしかしたら、少年が何も知らないだけかもしれないが。

その答えと少年との再会は1週間もしないうちにすぐ叶う事になる。

04 「新しい生活へ - 3 a」 (前書き)

今回は主人公はファクトではなく、武器を作った彼になります。

04 「新しい生活へ - 3 a」

「よし、出発だ！」

隊長の声を合図に、先輩達も隊列を組んで歩き出す。
20名ほどの集団、グランモールの自警団が一齐に動き出す。

定期巡回、僕にとっては初陣となるかもしれない街の周囲で行う巡回だ。

街道や街道沿いのモンスター退治や街道の破損箇所を確認するために行われる。

今はまだ整備された道の感触を足裏に感じながら、
手元の武器、一月ほど前に鍛えてもらったばかりの剣の感触を確かめる。

前より軽いはずなのに、前より感じる重さ。

(大丈夫だ、やれるさ)

訓練も剣に無理をさせない、先輩が言うには
悪い癖が抜けたものが出来ている。
きつと何とかなる、と思いたい。

休憩を挟みながら、確実に街から離れる。

「トモ、大丈夫か？」

「はい、先輩！ まだ行けます！ モンスターにも出会ってませんし」

僕、トモ・ビビアより2年先輩に当たる方にはっきりと答える。

事実、まだ街道沿いなので大きな問題は発生していない。

問題はここからだと聞いている。

「よし、では我々はモンスターが集まってきているという丘に向かい、

事実を確かめ、そこに集まっているモンスターを殲滅する！」

力強く宣言する隊長に武器を掲げることと答え、僕達は丘に向かうべく、森に入った。

濃密な緑の臭い、そして木漏れ日。

何も無ければそれで良いし、戦いは無いほうが良い。

でもそれではモンスターが集まっているという噂を消すことは出来ない。

集まっていないことを証明することは誰にも出来ない。

何かで読んだ気がする。

「はあはあ……あれ？」

「どうした？」

思ったより急勾配の道に上がった息を必死で整え、ふと手をついた木に違和感を感じ、声を上げるとすぐに先輩が近寄ってくる。

「いえ、これって、何の跡でしょう？」

僕の膝ぐらいにある何かをこすり付けたような跡を指差す。

「！ 隊長！ いますよ、奴ら！」

先輩が言うには、これはモンスター、ゴブリンやコボルトのような比較的小柄な奴らが縄張りの主張をするように行う行為だということだ。

削れた跡がまだ乾いていないところを見ると、最近のものだろうと。

「各員、装備を確認しろ。戦闘は近いぞ。新人は陣の中央へ」

隊長の指示で伸びていた陣形がまとまる。

当然、経験の無い自分は守られる位置になる。

そこに悔しさを感じながら、生き残ることが大事なのだと思います。

いつ襲い掛かってくるともしれない相手に神経を使いながら、
ゆっくりと歩を進める。

体力の消耗よりも先に緊張でだめになりそうだ。

やがて、差し込む日差しが増えた頃、
耳障りな叫び声が聞こえた。

「いたぞ！ ゴブリンだ！」

丘の中ほどに、小屋と呼ぶのも不釣合いな木材の寄せ集めがあり、
その周囲に20匹ほどのゴブリンが見える。

訓練の時に絵で見たとおりの醜悪な姿だ。

陣形も何も無く、ばらばらに襲い掛かってくる。

もし、まとまって襲ってきていたら大変なことになっていただろう。
隊長や先輩達の武器と、ゴブリンのナイフのようなものが音を立て
る。

「うわぁー！」

僕もそれに習うように、奴等の中でもさらに小柄な近寄ってきた1
匹と斬り合い、
何合かの末に武器を弾き飛ばすことに成功する。

『ギッ！ー！』

それでもゴブリンの目はひるんでいない。
自分と人間が殺しあう仲、どちらかが死ぬしかないことを知っているのか。

どちらにしても、彼らの爪や牙はそれだけでも僕の肌を貫通し、首に刺さることだろう。

「来るなっ!」

叫び、恐怖を隠すように剣を振るい、そのゴブリンを倒す。

初陣、そして初の戦果。

それを実感する前に全身を満たす、生き残っているという安堵。

「皆は!?!」

見渡せば、先輩達が押している。

見える範囲ではゴブリンは数えるほどに数を減らしている。

その時、森の奥からゴブリンの増援がやってくるのが見え、僕はゴブリンや隊長達から吹いてくる風に乗ってくる血の臭いにむせながら、合流しようと走り出す。

僕は夢中だった。

戦闘の興奮、そして増援への恐怖。

訓練どおりにやれば、なんとかなるという自信。

新しい武器への安心感。

全てが入り混じって、なんともいえない感情を生み出していた。

ゴブリンの数は思ったより多く、1匹1匹は思ったよりは強くなかった。

けど、終わらないという焦りが疲労を招く。

先輩の一人が背後から奇襲を受けようとしているのが目に入り、滑り込むように剣を突き出す。

「先輩っ！」

かみ合う金属音、訓練どおりに止まる相手の勢い。

『ギギッ』

悔しそうな声、僕が押し返すより先に先輩が振り返り、一閃。

それだけでゴブリンは息をしなくなる。

「助かったぜ。やるじゃないか」

「まだまだですよ」

上がった息を誤魔化すように、強がり言う。

「もう少しだ、行くぞ！」

「はいっ！」

その先輩と連れ立って隊長達が進んだはずの方向へと移動し、足が止まる。

隊長が、膝をついている。

あと少しのはずだった。

事実、ゴブリンは5匹程度に数を減らしている。
残ったそいつらだって、傷だらけだ。

なのに何故、隊長や先輩達がよろよろと後退しているのか。

そして、何故何名かは無残にも武器を生やして倒れているのか。

訳がわからなかった。

「逃げろっ、麻痺薬だっ！」

さすがは隊長というべきか、言葉の通りなら、
既に体の自由もおぼつかないはずなのに倒れこむことなく、

声を張り上げて僕たち、後続への指示を出す。

(逃げる？ 皆を見捨てて？)

僕の思いは先輩達も同じだったのか、一緒にいた先輩達が隊長達を助けようと駆け出す。

ワンテンポ遅れた僕の視界に、肥料でも撒くかのように僕らへと小袋から何かを振りまくゴブリンが見えた。

そう、なぜかこの戦いは最初から僕達は風下だった。

畏だったのだ。

思わず目を瞑って剣を突き出す。

うめき声、倒れる音。

目を開ければ、僕以外はほとんど地面に倒れ付し、じわじわと後退するか、匍匐前進のように移動するのが精一杯の様子だった。

そんな皆を襲おうと、包囲しながら近寄ってくるゴブリンが僕を見る。

『ギっっ』

自分だけが立っていることが不思議なのだろう。

僕だって不思議だ。

まだ消え去っていない麻痺薬の煙は周囲につつすらと漂っている。

良く見れば、僕の周囲に空間があった。

偶然じゃ、無い。

(しっかりとしろ！ 僕は、戦える！！ 皆を守るんだ！)

教え込まれた訓練の結果が、今を見逃すなと叫ぶ。
剣を握りなおし、駆け出す。

「そこだっ！」

一番重傷そうな1匹へと襲い掛かり、あっさりと葬り去る。
ゴブリンも重傷なのは間違いない。

(まずは1匹！ 囲みを破った！)

まだ何が起きたかわかっていない様子の残り4匹に順繰りに切りかかる。

3匹目へと切りかかったところで、背後に気配を感じた。

素人でもわかりそうな明確な殺気。

(しまったっ！ 最後の1匹がっ！)

3匹目に剣が食い込むのを感じたが、
当然剣は振り抜いているし、姿勢も崩れているっ！

『ギャツ!?!』

悲鳴に恐る恐る振り返ると、その1匹は剣が刺さったまま、丘に倒れていた。

「対複数の時は気を配れと言っただろう」

ささやくような声にそちらを向けば、その剣を投げたらしい隊長の姿。

「だが、よくやった。奴等の懐をあされ。麻痺用の薬があるはずだ」

「は、はいっ!」

今にも倒れそうな隊長の姿に我に返り、慌ててゴブリン達の荷物を確認し、

小瓶に入った液体を何本か見つけ出す。

隊長の指示に従い、面々に少しずつそれらを飲ませていく。

結果、全快とはいえないものの、歩くことは出来るようになった自警団メンバー。

無事を確認しあい、被害も確認する。

犠牲は、少なくなかった。

5名、それもかなりの経験者だ。

隊長が言うには、強そうな装備、つまり鎧であったりとかが

立派な相手を重点的に狙ってきたらしい。

立派な鎧や兜も、動けなければ隙間を狙われておしまいだった。

隊長はそんな中でもなんとか自分の身は守っていたのだからすごい。

「帰ったら色々と考え直さなきゃいかん」

でも、弔いのために部下であった彼らの亡骸を周囲の木の枝や

衣服で簡単な担架を作って運び出すその姿には

生き残った誇らしさより、部下を失った悲しみのほうが強く出ていた。

(僕は、生き残れた。それはきつと良いことだ。でも……)

殺し殺されて、続く戦い。

どこから産まれるかもわからないモンスターが相手では、終わりも見えない。

「……それでも、守れるものはきつとある」

「ああ、そうだ。お前は明日を守ったよ」

心に産まれる恐怖に震えながらも、剣を抱きしめて

誓う声に前に行く先輩が答えてくれた。

世界なんて大それたことは言えない。

僕には、僕が守れる世界がきつとある。

それは、小さな兵士の約束の話。

04 「新しい生活へ - 3a」 (後書き)

街で鍛冶チートも書きたい！

でもフィールドでパーティー組んで戦いもしたい！

なら両方すれば良いじゃない！という気もしますが悩みどころ。

05 「新しい生活へ - 3b」 (前書き)

・用語説明

【遺物】

昔存在したという魔法やスキルといったものを限定的に再現、発動できる機械。機械といっても見た目は杖であったり、時計のようなものであったり、ブーツだったり様々。所謂「マジックアイテム」に相当。

-
-
-

矛盾があったり、あいまいすぎないか？という部分もあるかと思いません。

適宜整合性は取るようにいたしますが、まったりとごらんいただければ幸いです。

05 「新しい生活へ - 3b」

夢を見ていた。

システム上の数字に一喜一憂し、はまっていたあの頃の夢を。

「朝、か」

まだすっきりしない起き抜けの思考を追いやるように、口に出して確かめる。

今が、少なくとも自分の認識では現実であることを。

当たり前前といえば当たり前だが、ゲームをしながら寝るプレイヤーはシステム上、いない。

ハード側でも寝ていると感知すれば大体は回線を切る。

旧世紀でも、一定時間以上操作がなければログアウトする仕様のゲームだってあったはずだ。

ましてや第二の現実ともいえる仮想空間でのゲームともなれば、接続したまま寝てしまったとすれば、脳には寝ていながらログインしているゲーム上のデータは送られ続けるし、影響だって受ける。

寝たことにはならなくなるのだ。

マテリアルドライブでも、スリープはそのためであった。

「怪我也生々しかったしな」

寝ぼけたままに、包丁でうっかり手のひらを切ってしまったときには、かなり勢い良く血が出てしまった。

ゲームのままであれば、もっとマイルドな描写になっていた記憶がある。

幸い、高レベルゆえの自然治癒からすぐに治ったが、突きつけられた現実は今更ながらに俺の意識を少なからず占めている。

「確実に残る、マテリアルドライブとしての痕跡。プレイヤースキルの残滓である道具達、か」

ゲーム時代の略称をMDとするなら、MD2とでも言おうか。上手い言い方がまだ無い。

いずれにせよ、どこの世界かは知らないが、まったく知らないというわけではない。

物語の数だけ世界があり、運命もある。

いざとなったら目が覚めて、胡蝶の夢だった、となるかもしれないがそれはそれだろう。

今は俺が俺のために出来ることを1つずつやっていくことにしよう。

「まずは食事だな」

普段着にしているこのあたりでも一般的な組み合わせの服に袖を通し、家である工房を出る。

服の元となる素材は確かめたことが無いが、現実の布とそう変わらない肌触りの服はまさに布の服、といった印象を受ける。

当たり前だが、装備的には防御性能は皆無に近い。

「いつものようには出来ないか」

「よう！ すぐに出来るぜ」

まだ日も高くないうちから、何人も屋台を出している区画へと向かい、長く利用しそうなとある店先に座る。

オープンカフェのようにテーブルと椅子、青空の下で食らいつけ！な感じである。

少し待ったところで、スープとパン、素朴な出来具合のベーコン、といったセットが用意される。

代金として銅貨を渡し、食事を始める。

早朝、ではないがまだ日は高くない時間ながら、人通りはそれなりにある。

彼らはNPCではない、人間なのだ。

彼らの姿や、そのやり取りを見ているとそう、感じる。

と、視界にランニングをする集団が目に入る。

同じような動き、違いはあれど武装された姿。

話に聞く自警団なのだろう。

(そういえば、彼は元気だろうか?)

1週間ほど前に武器を修理、作り直したと言ったほうが正しいかもしれない、そんな武器になった少年を思い出す。

見れば、集団の中に多分そうだろうという小柄な1人がいる。

集団は自分のほうへと進路を変え、不思議に思う間もなく、屋台の主たちへと声をかけ、荷物運びや雑用を始めた。

「あっ！ 貴方は！」

何をしているのか気になったままの俺へと、少年が駆け寄ってくる。

「元気そうで何よりだ」

「はいっ！ おかげさまでまだ剣は無事です！」

まだ?……少し天然なのだろうか?

不安を覚える台詞ではあるが、導く先達もいるだろうし、この先鍛えられるのだろう。

「それにしても、新しい鍛冶職人の方が、さらに遺物持ちなんてのは驚きですね！」

聞けば、この前のスキルは遺物、アイテムのおかげだと思っているようだ。

金床か、ハンマーかはわからないけどすごいです！と力説された。

ごまかすためにも、道具は同じものを使うようにしておいたほうが良いかもしれない。

なんにしても、失われたスキルを使える人物が！と騒がれなかったのはいいことだ。

このまま、火炎弾を撃てる炎の杖を持ってますよ、のごとく振舞うのもひとつの手かと、その時。

「トモ！ 何をやっている！ 早く手伝わんか！」

少年、トモへとお叱りの声。

「いけない！ 朝の奉仕の時間でした」

そう言って、俺の利用している店で何事かを手伝い始めるトモ。

街の何かを手伝うことで、街の事がわかるし、人同士のやり取りも密に出来る、とトモは教わったことを語ってくれた。

この後も、パトロール兼訓練として街中を走ったりして荷物運びをしたりするらしい。

「ではな、訓練頑張ってくれ」

食事を終えた俺はトモに声をかけてその場を立ち去る。

（自警団、か。冒険者時代も似たようなことをやっていた人がいたな）

特定の街で過ごし、周囲で定期的に戦闘する。

そうすることでゲーム上、その街での治安というか、モンスターの脅威は減るといふことが起きた。

貢献度のように街ごとに表示されるそのランキングに従い、その街の中ではアイテムが安くなったりと中々面白いシステムだった覚えがある。

実際に遭遇するモンスターは変わらないし、エンカウントしなくなるわけではないのでプレイ上の自己満足の1つではあったが。

確か、自分を登録するためのギルドのようなものがあつたはずだ。

まだまだ知らないことの多い街を探索すべく、適当に歩き出す。

目指すは酒場なんかの多い活気のありそうな区画だ。

「結構賑わってるな」

すっかり日も高くなり、もうすぐ昼かというところで恐らくは目的地であるう建物が目に入る。

【白兔亭】と看板のある、酒場のような建物。

カウンターに10席ほどのテーブル、といった具合だ。

壁には何枚ものポスターのような紙が貼られ、様々な装備をした男女が歓談している。

彼らは皆、冒険者なのだろう。

気を引き過ぎない程度に観察しながらカウンターに向かう。

「マスター、エール1杯」

「あいよ。ん？ 見ない顔だな。最近街に来たのか？」

手早く出されたエールの対価に銅貨を渡し、答える。

「ああ、一応鍛冶職人としてな。近場なら冒険も出来なくは無いが」
マスターは納得が言ったように頷き、笑顔になる。

「そうか、あんたがそうか。名前だけは聞いてるぜ、ファクトだったか」

「ああ、そうだ。出来れば冒険者について少し聞きたいんだが」
情報量代わりに、と食べ物も頼み、MDのような組織だった何かがあるかを探ろうとする。

周囲の喧騒に紛れ込むようなマスターの語るところによれば、
大小問わず、街ごとに登録用の酒場であったり、建物があるらしい。
自然と依頼なんかもそこに集約されるそうだ。

ただ、この街のように自警団がある程度設けられている街では、
長居する冒険者は少ないとのこと。

それは当然で、自警団が活動していれば街は安全になり、
冒険者が出張るような事件なんかは減るからだ。

安全に稼ぎたい時には良いが、危険を味わいたい奴らは安全ではな
い街に向かったり、拠点はここにして、遠征をする、といった具合
らしい。

MD時代にあった、貢献者への優遇はまだあるらしい。

例えば宿泊代が割り引かれたりといったことのようにだが、また1つの痕跡が見つかる。

「ありがとう。勉強になった」

マスターからの登録の誘いには1度断りを入れる。

まだこの世界どころか、当たり前前の常識が不足している状態では何が足元をすくうかわからない。

もっと学んでからにしようと思ったのだ。

いつかは俺自体、この街、工房を拠点として臨時にパーティーに加わる、といったことをしても面白いかもしれない。

また来ると言い残し、酒場を出る。

ちなみに壁に貼られたポスターは冒険者向けの依頼のようだった。

鉱山跡に潜む影、という文言が気になったが、今日は辞めておこう。

その後も、何日も様々に情報収集をしたり、酒場の冒険者と語り合うなどして、

自分の立ち位置、今後の身の振り方といったことに思考をめぐらす。

近所の依頼を受け、他愛ない会話をしながらも、今の常識を吸収することを忘れない。

生活にも慣れた頃、気がつけばほぼ一ヶ月が立っていた。

街のどこでもとまでは言わなくても、大体行けるようになったし、知り合いも増えた。

そうなれば、狩になるか、探索になるかはその時次第だろうが不定期に冒険を試してみたい欲求が沸いてきた。

今後の動きに少し悩んだそんな折、自警団が定期巡回の際に、最近噂の真相を確かめに遠征に行くことを聞いた。

なんでも、隣の街へと向かう街道から外れた丘にモンスターが集まっているらしい。

今は街道沿いで行方不明者が出た、といった具合のようだがひどくならないとも限らないということらしい。

もし、モンスターがいて戦いとなれば自分にも修理なんかの依頼が来ることだろう。

結論から言えば、俺の予想は半分外れた。

「君がトモの武器を手配してくれた鍛冶職人だな？ 事務所まで付き合って欲しい」

自警団が戻ってきたという話から、今か今かと待ち構えていた俺にやってきたのは依頼ではなく、目的不明の呼び出しだった。

後ろに少年 トモを従えて尋ねてきたのは、以前トモを叱っていた男性。流れからしてそれなりの立場なのだろう。

「事務所までつて、別にそれはどこからか盗んだわけじゃないんだけどな？」

「ああ、トモから目の前で鍛えなおしてくれたということは聞いている」

男性の視線は俺の後ろの仕事場に向かっている。

遺物で作ったんだろう？と言いたいのだろうか。

「お茶ぐらいは出るよな？」

「おかわり自由だ。出がらしになるがな」

堅いだけじゃない、ユニークな1面もあるようだ。

個人的にも気に入ったので、誘われるままに行くことにしよう。

火を落とし、出かける準備をする。

冒険に出る。

そんな目的があっさりと叶う事になるとは俺はその時、考えていなかった。

いや、工房を構えようとしたり、自分を売り込むようなことをして

いたのも、きつかけが欲しかったのではないだろうか。

自分が、MDのゲームプレイヤーであるファクトではなく、
この世界に生きる、一人の人間としての【力を持つ者】としてのフ
アクトとして生きる覚悟を決めるためのきつかけを……。

06「ベテラン無双、ただし格下に限る・1」（前書き）

戦闘は次になりました。

全体の中盤ぐらいまではファクトでも無双に近いことが可能という
うことになります。

残酷な描写アリ、ほどの程度から言うのかイマイチ。

わかる方いましたらコメントなどをお願いいたします。

06 「ベテラン無双、ただし格下に限る - 1」

ここに1つ、問題がある。

ゲームでも最弱、基本と良く扱われるスライム。それだけを延々と倒したらどうなるだろうか？

いつかLvは上がるが、途中で萎えることだろう。

スライムでなくても良い。

何か1度なら簡単な行為をひたすら続けることは精神的に疲弊する。

様々な考え方はあるだろうが、ネットゲーム的にはこの辺りを越えた所からベテランになるのだと思う。超えすぎると廃人とか呼ばれてしまうのだが。

1度には0.1%も上がらない熟練度であったり、経験であったり。後ろ指を挿されることもあるだろうが、その結果はその人を裏切らない。

圧倒的な攻撃力であったり、攻撃を耐え切る体力、風を切る速さ、全てを飲み込む極大魔法。

どれだって努力の結果なのだ。

「その遺物を使えばどの鍛冶職人でも、というわけではないのだな？」

「ああ、長く俺に馴染んだからこそだ」

呼び出された事務所で、副隊長だという彼に問われたことに答える。工房から持ってきたハンマーに視線をやりながら、副隊長がため息をつく。

明日からどこかで延々と言われるままに作ってる！みたいになっても人生面白くないので、遺物によるものだという勘違いをそのまま利用する。

「そうになると、代理の職人を用意して、君を外に引っ張りだすというわけにはいかないか」

話によれば、今の自警団は戦力が低下しており、その補充が不可欠だということだ。

街の誰かに聞いたかはわからないが、自分が鍛冶職人兼冒険者として旅の途中、ここにたどり着いた、という話が上手く伝わっているようだ。

建て直しに伴う期間、一時的にだが手伝ってほしいという依頼だった。

「何週間も街をあける、ということではなければ大丈夫だと思うが、出来ればフリーな立場でいたいのは確かだな」

そう答え、声がかかった時に余裕があれば同行する、という形で話を収める。

帰り際、訓練中と思わしき集団を眺める。

集団に声をかけているのは随分と迫力ある人物……隊長なのだろうか？

俺の視線に気がついたのか、隊長（？）が振り向いて近寄ってくる。

「君がファクト君か。トモが世話になったようだな。私はグランモール自警団の隊長、シルヴァだ。良い武器を作ってくれた。まるで遺物のマジックアイテムだな」

「運が良かったんですよ。きっと、精霊の祝福です」

握手に答え、そうごまかす。

と、シルヴァの動きが止まり、視線が俺の顔をまっすぐと捉える。

「随分と鍛えているようだ。器用そうな手先の中にも、自分以上の強さを感じるよ。こんな街中にいるのが不思議なほどだ。君は一体

……」

どきりとした。

数値としてのLvが見えていたわけではないだろうが、体つきや腕の感覚、身のこなしで見破られたのかもしれない。

俺が、一般的な人間や兵士からは相応に強い位置にいることを。

「大丈夫ですよ、手の届く範囲はやらせていただきます。色々と」
突然やってきた鍛冶職人、その相手が自分でも相手にならないだろ
う強さを持っているとなれば、怪しいのは当然なのだが、何かの時
は頼りにするさ、と背中を叩かれただけですんだ。

理由はあるのだろうか、今はありがたい。

先ほど、副隊長から受けた依頼の確認をしつつ、事務所を離れる。

「うーむ、色々あるなあ」

その足で白兔亭へと向かい、壁に貼られた依頼群を眺めていると1
枚の依頼が目に入る。

『坑道の落し物探しをお願いします』
とあった。

読み進めると、一攫千金を夢見た若者らが、街近くの鉱山跡に向か
うも、途中でモンスターに遭遇、なんとか逃げ帰るも親の形見であ
る懐中時計を落としたことに気がついた。なんとか取り戻せないか
?ということだった。

確かに、モンスターがいたとなつては二度目は無い。

特に外に出てくるわけではないようなので、自警団としても退治に

迎えないし、冒険者としては実入りが無い、といったところか。
少し紙が痛んでいるところから、他の依頼より長くここにあるのだ
ろう。

念のため、マスターに確認に行く。

「ああ、あれか。まだ有効だよ。依頼者は市場にいるはずだ。確か、
兄妹で野菜を売っているよ」

マスターに礼を言い、市場へと向かうことにする。

どの時間でも賑わう市場。

様々な物品が売られるのを眺めながら、目的の店を探す。

野菜を売っている店はいくつもあれど、男女ペアで、となればすぐ
にわかった。

「ちょっといいかい？」

「あ、いらっしやいませ！ 何をお求めですか？」

元気良く受け答えをする少女に首を横に振り、兄であろう男性、
どちらかというとまだ少年に近いほうへと顔を向ける。

「白兔亭で依頼を見たんだが」

俺の言葉に、2人の表情が明るくなる。

「受けてくださったんですね！　ありがとうございます！」
勢い良く手を取られ、ぶんぶんと上下に揺られる。

「カイン兄さんも落ち込み気味だし、誰も来ないし、もう駄目かと！」

妹さんも、きらきらとした視線を向けてくる。

「鉱山跡には2人だけで行ったのか？」

とてもそこまで無謀、いや、活発そうには見えなかった。

さすがにそんなことは無かったようで、

他にも何名かの男友達と一緒に、ということだった。

「襲ってきたモンスターなんですけど、特徴からゴブリンじゃないか、ということなんですけど。何匹か色が変なのがいたんです」

兄　カインが言うには、集団の中に目立つ奴らがいたということだ。

（色違い？　亜種か？）

MDでも街のそばといえばゴブリンなのだが、強さはかなり差があった。

色や武具が違うといったわかりやすいもの以外にも、単純に時折、妙に強い集団がいた覚えがあるのでここでも油断はしないほうがい

いだろう。

「元々そんなに奥に行けなかったので近くにあると思います。よろしく願います!」

街と鉱山跡の距離など、手元の紙に位置関係なんかを書き出してもらった。

(高さは俺の2倍ぐらい、横幅もそれなり…、か)

街近くとはいっても、相応に距離があるらしい鉱山跡へと足を進める。

ちなみに使う魔法はファストムーブ、速歩だとか呼ぶこともあった移動用魔法だ。

熟練により効果時間や、速度上昇の幅が広がる。

偶然誰かに遭遇して見られないとも限らないので、小走り程度に抑えておくことにする。

進みながらも、使う装備をアイテムボックスから選びながら街道を進む。

アイテムを捨てたり出来ない俺の性分に合うように、MDではアイテムボックスはほぼ無限の容量を持っている。

何故かこの世界でも使えるソレのタブ数は数えるのも面倒だ。

後ろの方に行くほど何を入れたか覚えていない。

それでも、RPGでは最後まで回復薬は取っておくぜ！な日本人ゲーマーには性に合っていたのだらう。MDでも溜め込む人は多かった。

途中の木陰で足を止め、自分が装備できた武器防具を入れるように決めていたタブを選び、無難そうな一式を取り出す。

内訳は

- ・ 状態異常用の耐性付きペンダント
 - ・ 一定時間事に自動回復する指輪
 - ・ 腕力要求の低いエルブンチェイン
 - ・ 素材狩りに良く使っていた電撃付与付きロングソード
- である。

そういえば、MDじゃエルフには遭遇したことが無い。

高難易度の森の奥なんかにいるらしく、戦闘プレイヤー達から素材を買い求めたぐらいの存在だ。

例に漏れず長寿だというから、今のままでは会えないのは確実ではあるが、もしかしたら……何かわかるかもしれない。

出した装備に着替え、剣を何度か振り回す。

恐らくは自分にだけ見えているショートカット群も戦闘用に切り替え、

いくつかの攻撃用スキルを発動し、動きを確かめる。

「よし、行くか！」

整った街道から離れ、そうであったことがわかる程度の鉱山跡へ続く道を進む。

鉱山にて

薄暗い岩壁の一角に、ぼんやりと灯りがある。

廃坑、つまりは真つ暗闇のはずの空間にある灯り。

金属音と、笑い声のような声が静寂を切り裂き、空間を満たす。

ゴブリンである。

どこから手に入れたのか、粗末な武具をまとい、各々食べ物を中心にしている。

その内の1匹が自分の手元で小さいものを転がす。依頼主の兄妹がいればすぐにわかったであろう時計。ファクトが受けた依頼の目的の品である懐中時計。

その時計を照らす灯りに下卑た笑いを上げるゴブリンの1匹。

赤黒い肌。

周囲のゴブリンが濃い緑が主な体色の中、明るい場所に行けば更に目立つだろう。

一頻り眺めて満足したのか、そのゴブリンは部屋を照らす灯り、ラントンのようなケースに視線を向け、何かを確かめるように覗き込む。

『ギイツ！』

その時、部下なのか、部屋に1匹の普通のゴブリンがやってきて声を上げる。

何事かを報告するように語り合った後、俄かにその部屋が騒がしくなる。

『ギイツ！ ギギツ！』

リーダー格の指示に従うようにゴブリン達は暗い坑道へと駆け出した。

入り口付近にて

「こっちは依頼人達のか、小さいのがゴブリン、と。多いな」

陽光がまだ届く鉱山の入り口付近、俺は足元を調べていた。

入り口まで追ってきたのだらうゴブリンの足跡はかなりの数だ。

数匹、では終わらないようだ。

もし鉱山跡を住処にしているとすればまだまだいると思うべきだろう。

どこかの1匹見たら30匹、な黒い奴とは違って命が危ない。

もしかしたら見えているHPゲージが尽きる様なダメージを負えば目が覚めるのかもしれないが、とても試せない事柄だ。

陽光が届かない部分には暗闇が広がっている。

夜目の利くモンスターならともかく、俺では何も見えない。

「何も見えないよりマシか」

灯りを頼りに奇襲されるかもしれないが、目の前に敵がいました、では話にならないので

小さくつぶやき、探索用にも使える魔法、ライティングを発動する。

何かか燃えているわけでもないし、電気というわけでもない、まさ

に魔法、な光源。

頭の少し上あたりをふよふよと漂い、歩けばついてくる。

ゲームの時には気がつかなかったが、火にしても水にしても、もしかして精霊さんが何かしてくれてるんじゃないだろうか？

冒険者で攻撃用の魔法使いは余りいないと聞くので、資源が減った、という話と無関係ではなさそうではある。

今のところ光の中にそれっぽいものは見えないが、いると仮定してよろしく、とつぶやいておく。

誰かが見たら変な光景だ。

気を取り直し、いざ、と踏み出した先で金属音。

しかも一気に遠ざかっていく。

（！ 見張り、か。どうやらカイン達が逃げられたのは偶然のようだ）

野良のゴブリンがたまたま中で暮らしてしまいました、なら見張りなど置くまい。

いつ襲われても良い様に姿勢を整え、奥へと向かう。

（なんだったかな、こういう時は……そうそう！）

「さあ、狩の始まりだ！」

……ちょっと違ったかもしれない。

06」ステラン無双、ただし格下に限る・1」（後書き）

いつも長さは4000程度の予定です。

07「ベテラン無双、ただし格下に限る・2」(前書き)

無双、でも無いような気がしてきた。

一応、描写設定変更。

07「ベテラン無双、ただし格下に限る - 2」

（静かだな……）

高さは2mと少しぐらい、幅はもう少しありそうな坑道を進むが、今のところはモンスターには遭遇していない。

砂利を踏んだ小さな音が若干の反響を伴いながら耳に届く。

時折、風が吹き、その冷たさが体を冷やしていく。

このままだと寒さに震えるかもしれない、と思い始めた頃。

耳に届く何かが走る多数の音。

（来たっ！？ いや、まだか）

前後を確認し、奇襲に備える。

（落ち着け、俺のLvならゴブリン相手じゃどうやっても死なない）

不安を押し消すように、空中に表示した自らのステータスの数字を確認する。

MDにおいては、前衛を除けばほぼ最高値といえるLv、その高Lvゆえの各種補正は尋常ではないはずだ。

現に、前に遭遇したゴブリンは一撃だった。

だが、本当に余裕なのだろうか？

日々を過ごし、この世界が現実であり、この世界に自分が今生きて
いるという実感。

隣人の笑顔、味わう食事、土と森、自然の臭い。

全てが、ゲームであった頃感覚を確実に蝕んでいく。

廃人とも呼ばれた自分への自信、強さ。

その代わりに現れる、死への恐怖。

あっさりと怪我をして自分は死ぬのではないだろうか？

そんな疑問が浮かんでは消える。

目や急所に何か刺さるだけで危険なのではないだろうか？
ゲームには無いような病気になるのでいきなり重篤になるのではないだ
ろうか？

試すわけにも、経験したくも無い疑問が考え始めると止まらなかつ
た。

不安を隠すだけなら、ずっと街に籠っていたらよかった。

依頼を受け、何かを作って、街でお金を消費し、街で過ごす。

そうすればきつと確実に生活できた。

でも、それではいけないのだ。

「いたっ！ 一匹目っ！」

曲がり角でばったり遭遇した1匹の緑色のゴブリンに、技術も何も無く切りかかる。

『ギツ！』

Lvと、そのステータス任せの一撃は左肩へと食い込み、そのままゴブリンを物言わぬ物体へと変化させる。

ゲームのように消えるわけでもなく、ポリゴンの破片と化すわけでもない。

静かに、現実のモノが視界にとどまる。

荒い息、痛いほどに剣の柄を握っているのがわかる。

「ははっ……そうだよな、ゲームならこんなハラスメントなモンスターの死体なんて存在しないよな」

汚れた剣の刃部分が、鈍い光を反射しながら俺の顔を写す。

明るいフィールドではなく、灯りの限られた坑道、というシチュエーションがその存在をさらに際立たせる。

街の住人やトモ、隊長などに見せていた当たり障りの無い、表向き

の顔が今は消えていくのがわかる。

剣を振るい、血を飛ばして構えなおす。

このまま1冒険者として過ごすのか、はたまた魔王でもいて世界を救うのかはわからないが、それでも俺には力がある。

続けて現れた数匹のゴブリン。

全てが俺に敵意とはつきりとわかる態度と視線で襲い掛かってくる。

先頭の一匹の首へ向けて剣を突き出し、一気に押し込むように剣を振るい、切り裂く。

飛び散る鮮血、妙におう気がするがなんとか意識を戻す。

1匹目の背後に抜けた時点で顔の辺りを狙ってくる2匹目の攻撃を、体を左にひねって回避し、右にひねり戻す形で、勢いを乗せて1番後ろにいた1匹へと斜めに振り落とし、首と体を分断する。

「ファストブレイク!!」

間髪いれず、染み付いた癖でスキルの発動と共に叫び、位置を入れ替える形になった2匹目へと先制攻撃にも良く使われる剣士系の初級技を繰り出す。

武器を持つ手元に攻撃するようにフェイントとして動いた剣が、すぐさま刺突となって

慣れ親しんだ動きで、確実にゴブリンに吸い込まれる。

訪れる静寂。

都合3匹、息の根を止めることに成功する。

普通に過ごせば先制ぐらいにしか意味のないスキル性能だが、このLv差と能力差なら十分だろう。

動けば水音を立てる剣から垂れ落ちるゴブリンの血。

ライティングの光に照らされる物言わぬゴブリンだったもの達。

「それっぽいものは……無いな。リーダー格が光物で集めてるのか？」

剣先でつつきながら、懐をあさるが時計は出てこない。

隠し持っていることを踏まえ、出来るだけむき出しの部位を狙っているが、早いところ持っている奴を見つけないとこらだ。

と、ゴロリとゴブリンの首がバランスを崩して転がり、その瞳が俺を見据える。

現実でも、ゲームでも味わったことの無いなんともいえない感覚。これはゲームの再現だと思いつくことは簡単だ。でも解決にはならない。

ステータス異常を受けていないことをチェックし、息を整える。

「……いいぜ、上等だ！ この世界に呼び込んだのが神様か、はた

また自分の無意識なのかはわかんないけどさ、やらせてもらっぜ！」

恐怖はまだ当然ある。

だが、立ち止まっているわけにも行かない。

この世界で、生きるのだ。

歩みを坑道の先へ先へと進める。

『ギャッ！』

「ええいつ！ こいつも違うっ！」

もう何匹目かは数えていないゴブリンを相手に叫び、いけるとわかった体術も交え、戦闘を続ける。

真正面から飛び掛ってきたゴブリンの攻撃を回避ついでにその胴体へとすれ違いざまに蹴りを入れ、待ち構えている群れへと蹴り飛ばす。

緑緑緑！

視界に入るのは普通のゴブリンばかりだ。
しかも、群れ。

幸いに今はアイテムボックスから回復アイテムを出す必要は無い。
試したいこともあったので石ころを拾い、思い切り投げつける！
システムにも、スキルにも無い当たり前の行為。

MDでは特に明言されていない行為にも意外と熟練度がある。

食事の早さなんかもあったりして、笑った記憶があるが。

投擲もその1つだ。

吸い込まれるように1匹の目元に石は命中し、その動きを大きく緩めた。

(ダメージが見えれば楽なんだがなあ)

現状、動きが止まる以外にHPなりを削りきった補償がどこにも無い。

オーバーキルなのか、案外微妙に火力不足なのか、さっぱりである。
群れに飛び込み、装備ごとゴブリンを両断し、次へと襲い掛かっていく。

段々と自分が振り返り血に染まるのがわかるが、なんとも出来ないことだ。

その後処理に一瞬、嫌な予感が浮かぶがそれも引っ込む。

粗方、群れのゴブリンを片付けた頃に逃げ出そうとする数匹が目に入り、増援をまた呼ばれても大変なので追いかけて、切りかかることにした。

思えば、この時点で一度後退して休息を取るべきだったのだ。

自分の力が通用することに高揚し、ゲーム時代のシステム外スキルである戦闘方法や考え方をおろそかにしていたツケがやってくる。

「うおっ!?!」

異音。

少し高い場所だからと、剣を上段気味に振りかぶったせいで、振り下ろす際に坑道の上部分のでっぱりに剣が食い込む。

変な入り方をしたのか、剣が抜けない。

(やばっ!)

やってきた増援の中に色違いを認めてすぐ、集団が襲い掛かってくる。

「っだああああっ!!」

俺は迷わず剣を放し、後ろに駆け出した。

素手ではさすがに取り付かれる恐れがあったからだ。

着かず離れずとは言わなくても、なかなか離せない距離、なんとかメインとなる通路部分の脇にある細い坑道へと逃げ込み、距離をとる。

すぐに追いついてくるだろうが、この時間で多分いけると思う。

今武器を選んでも、ここでは思うように振り回せない。かといってメインとなる坑道を逃げては1度に相手にする敵が増えるだけだ。

なので、一手しかけることにする。

「これだっ！ 盾生成 - 壁盾 - 《クリエイトシールド》！！」

屈強な戦士が防衛時に使うような壁盾、高さにして1mを越えるものを、

あえて耐久力や重さを極力下げて背後に生み出す。

結果、そう広くないその坑道はほとんどが盾で埋まる。

ゴブリン達が俺の逃げ込んだ坑道へと入ってきた瞬間、10kg以下と壁盾としては実質無意味なソレに向かって、目一杯蹴りを入れ、真横に蹴り飛ばす。

轟音、そして叫び声。

追いつがるゴブリン達へ向かって壁盾は倒れこみ、その先頭をひるませることに成功する。

確かゲームじゃ蝙蝠の集団なんかにかこうやったりした覚えがある。

一度に何匹も気絶させることが出来たのだ。

つぶれるわけでもなく、すぐに抜けれるわけでもない状態にゴブリン達が混乱しているのがわかる。

(武器武器、よしっ！)

なんとかアイテムボックスから確か麻痺武器だったはずのダガーを2本取り出し、両手に構えて迎え撃つことにする。

仲間意識からか、全てのゴブリンが再度襲い掛かってくる、ということは無く、潰されそうになっている仲間を助ける組とこちらを襲う組に分かれてくれた。

こちらの思う壺である。

左右のダガーで手数稼ぎ、着実にその数を減らすことに成功する。

最後の1匹、色違いの赤黒いゴブリンに止めを刺す。

「やっと終わりっつと!」

視界内で動く最後の1匹をしとめ、ようやく落ち着くことに成功する。

「こんなところで倒れたら骨も残らないからな……」

強さはあっても、現実の厄介さ、死んだら終わりかもしれない恐怖の影響、実際の殺気というものがどういったものか、良い経験になったと言えるだろう。

「お、こいつが当たりか」

依頼品であるう、聞いた特長と合致する懐中時計が出てきた。

「依頼はこれで終わりか。さて……この調子でなんか溜め込んでそ
うだな」

脱出中に遭遇する可能性を考えると、残りのゴブリンも可能な限り
倒し、ついでに物品を回収して、白兔亭なり、自警団なりで返して
もらえばいいと判断し、冒険を続行することにする。

耳を澄ませば、まだどこかでゴブリンであろう何か走っている音
がする。

やはり、リーダー格のこいつが最後というわけではないようだ。

前準備として、剣が食い込んだ場所に戻り、改めて抜こうとする。

「ふぬっ！ ……抜けない。いや、待てよ？」

まさかと思いなながらも、剣を握ったままアイテムボックスに戻すイ
メージを浮かべる。

すると、さっきまでの苦勞を馬鹿にするようにあっさりとロングソ
ードは消え去った。

「……まあ、いつか」

さっきの自分に言いたいことはあるが、気を取り直してマテリアルサーチ鉱脈探知を
発動し、周囲の地形を確認する。

当然、ゲームのようにマップが表示されているわけではないが、反
応がまったく無い場所は空洞と同じなので、大体の坑道の配置が浮
かんでくるのでマップ代わりになる。

廃鉱山とはいえ、岩部分はそこらのフィールドとは比べ物にならな
い反応が返って来たのだ。

火山なんかだと空気中にも火の精霊さんが反応してしまうかも知れ
ない。

と、妙に反応が強い場所がある。

これはMD時代の鉱石ポイント並みである。

丁度奥のほうだし、残りのゴブリンもいそうな気がする。

周囲を確認しながら、慎重に奥へと歩みを進めていく。

08「ペテラン無双、ただし格下に限る・3」（前書き）

地の文の言い回しなど、文章らしくない部分は後々修正予定です。

強さ的には圧倒ですが、

ズバッ！ 勝った！では面白くないので難しい所です。

08 「ベテラン無双、ただし格下に限る」

「……帰ればよかったかな」

後半は俺の後悔で始まった。

ゴブリンはまだまだいたのだった。

角を曲がっては遭遇し、小道があれば不意打ちが来る。

数値上はダメージは無いが、疲労と思われるものが蓄積されていく中、

1つ1つ、MD時代を思い出しながら落ち着いて対処をしていく。

まず、取り付かれないこと。

想像してみたい。

恐らくはダメージは受けないとわかっていても、何匹もの何かに胸元までよじ登られる感覚を。

いくら仮想現実、VRだとわかかっていても襲い来る嫌悪感。

ましてや、今は現実（と思わざるを得ない）である。

（恐怖を忘れるな、恐怖に麻痺するな！ 恐怖は……隣人だ）

かつて出会った、尊敬するMDプレイヤーの1人は強敵との戦いでのコツについてそう語っていた。

「動きは単純。しっかりとフェイントを混ぜ、一撃必殺！」

口に出して、動きを確認しながら一撃一撃を落ち着いてぶち込んでいく。

数をこなすうちに、大体返り血がひどい部位なども体が覚えてきたようだ。

『ギヒイツー!!』

浅く入ったゴブリンの1匹が、武器の効果である電撃の追加攻撃を受けて痙攣する。

その姿にいくつもの感情を交えながら、しっかりと止めを刺す。

ある程度、群れを倒したところでその体をあさり、硬貨を持っていないかとか、倒した証明になりそうなものを探す。

倒した証明として、余り気持ちのいいものではないが、その耳を切り取って、別のタブに放り込んでいく。

アイテムボックスに入るということは、耳という部位がただの身体的部位ではなく、アイテムと扱われているということになる。

ゲームだと、【ゴブリン討伐数 4 / 20】みたいな表記だったから、特にアイテムは無かったのが痛い所だ。

多分、これで合ってると思う。

牙や毛皮が有効そうな、アイテム名になっていたような奴らはその部位がアイテム化出来そうだ。

(チームに分かれて探索でもしてるのか?)

先ほどから、まとまった群れと、そうでない少数とのランダムな襲撃となっている。

「ま、そのほうがありがたいけどね」

自己突っ込みをした上で、更なる探索を続ける。

(ライティングの時間は2時間に設定した。明滅を始めているからもうすぐ2時間)

「ライティン…グ!？」

とっさの回避。

耳元を何かが高速で通り過ぎ、岩壁に当たる。

笑い声、そして現れる影。

暗闇で何かが光ったと思ったら物陰からの弓矢。

動き的に俺以外を警戒している様子は無い。

ゴブリン達には、何かしらで動きのわかる方法があるのかもしれない。

続く襲撃。

こいつらはさっきまでより体格が一回り大きい。

エリートゴブリンといったところか？

「ファストブレイク！ ついでに盾生成 - 大盾 - 《クリエイトシルド》！」

俺から見れば、無防備に襲い掛かってた先頭の1匹を突き刺し、絶命するのを確認しながら、大き目の盾を生み出して淵をがちりと掴んで構える。

ちなみに、かなり薄くした。

「どんな飛び方をするかは投げてからの楽しみ！ いっけええ！」

MD的にはそれなり、という数値だった腕力に任せて、水切り石の要領で横向きに投げつける。

腕力特化のタイプが本気で、きちんと作られた大盾を投げた時には森がひどいことになった記憶のある行為だが、俺ぐらいだとこの程度が限度だ。

空気を切る音を従え、正面の何匹かをあっさりと分断し、岩壁にぶつかすることで甲高い音を立てながら周囲を巻き込んでいく。

「……次は止めよう。自分のほうに来たらなんとも出来ないな、これ」

自分には跳ね返ってこなかった幸運を強く思うほどの、後に残る惨劇。

半端に両断された1匹や、まだ生きているが足だけ切れてしまった奴だとかが残ってしまったている。

前の壁盾も大盾も、盾としては微妙な作りをしたのですぐに光となつて消えていった。

後に残るのは何かに刻まれた姿のみ。

(凶器の無い完全犯罪!……でもないか)

放っておいてもどうしようもないので、ゴブリン達にそのまま襲い掛かり、壊滅させる。

どちらが正義というわけではないが、悪人の所業に思えて仕方が無い状況である。

「武器、変えるか」

いくら振るつても、ぬぐつても、なにやら赤黒い気がする。

このまま使い続けて、いきなり血まみれの剣、とか名前が変わつても嫌なので別の剣、確か混乱効果のある特殊効果のついた一振りを選ぶ。

混乱には精神的なものと、毒物的なものがあつたはずだが、これ

は後者だ。

マテリアルサーチ
鉱脈探知の結果によれば、後1分もすれば一番反応のあった場所の
はずだ。

と、前方に自分のライティング以外のほのかな明かりが見える。

まっすぐ進まず、その途中にあるわき道のようだ。

わらわらとそこから湧き出る集団。

中には色違いの1匹がいることが確認できた。

こちらを指差して何事が指示を叫んでいる。

「そつは……させないっ」

敢えて前方に駆け出し、相手の陣形が整わないうちに色違いに接近、
振りぬく。

残念ながら、身をよじった色違いの片腕を少し切り裂いただけだが、
俺の勝ちだ。

そのまま暗闇だった奥へと駆け抜け、振り返るとぼかんとした様子
の色違いが、奇声を上げて周囲に襲い掛かるところだった。

目に入るものが全て敵とと思っているのだろうか、必死の形相だ。

「悪いが、これも勝つ為ってことで」

MDであったなら、色々批判を受けそうな戦い方が続くが、ここでは文句を言うプレイヤーもいない。

せつかくの混乱効果が発動する者は少ないまま、ゴブリンを惨殺していく。

頭、首、肩、腰、腹と近寄ってくる相手を実にしとめていく。

（肉の感触がつ！ 終わったら川で水浴びでもするぞ！ 絶対だ！）

防戦も混じると、襲い掛かる不快な感覚。

人間に近い姿のモンスターの肉を切り裂く感覚というのも、慣れてはいけなさそうな感覚だった。

走る痛み。

見れば、脇から襲ってきた1匹の剣が俺の太ももに刺さっている。ぬめるような光を放つ刀身が半ばまで食い込んでいる。

嫌な笑みを浮かべるそのゴブリンの表情が驚きへと変わる。

「残念。予想済みだっ！」

効果を発揮したペンダントに視線をやりながら、ゴブリンの胸元にロングソードを迷わず突き出す。

体に降りかかる返り血に顔をしかめながら、太ももに刺さった剣を抜き、適当に投げつける。

不幸な1匹に命中し、すぐに顔色が黒くなっていく。

結構な猛毒のようだ。

「さあ、終わらせようか！」

実際の剣術なんかを学ぶ必要はあるかもしれない戦闘内容に反省点を自覚しつつも、終わりへ向けて声を荒げる。

「もっ……いないか？」

何度目かもわからない静寂。

今度こそ終わりのようだ。

周囲に転がるゴブリンだったものに注意しながら、脇道へと向かう。

小部屋、とは呼べない広さの部屋だった。

壁は元より、周囲に様々なものが散乱している。

光を受けて輝く貴金属のようなものから、ガラクタまで。

と、ライティングの灯りが不意に動き、ランタンのような何かに吸い寄せられていく。

(？ なんだあれ……)

中に油が入っているわけでもなく、まさかガス灯というわけでもない、光を放つ透明な何かで出来た箱。

「見えないけど、なんかいる……ような？」

箱の素材もタダのガラスではなさそうだ。

金属である剣であったり、鉱石なんかからはそれっぽいのが見えるので、これは魔法関係の精霊さんのだろう。

蓋を開けると、光はふわりと空中に舞い、しばらく俺の周囲を漂っていたかと思うと、岩壁に飛び込んでいった。

後には自分のライティングの光のみ。

「これ、何かのマジックアイテムか？」

しばらく箱を眺めた後、状況を思い出す。

(早く、帰ろう……疲れた)

意識したことで一気に襲い掛かってきた疲労に抗いながら、それっぽいのをどんとどんとアイテムボックスに放り込み、片付けていく。

根こそぎである。

「外だあああー！！！」

とりあえず叫ぶ。

ダンジョン、とは言いがたいが、何かに潜るのは久しぶりだった。

大体は、素材ポイントで確保！ アイテムで脱出！だったからだ。

太陽はまだ夕方前。今のうちに川へGOである。

地図を見ながら川のある方向へとダッシュダッシュ。

陽光に照らされたエルブンチェインは、まあ敢えて言うまい。

川を視界に捉え、後のことは考えず、飛び込む。

「冷てっ！」

叫んだ後で、川の汚れに驚く。

「うわちゃあー、魚よ、すまん」

少し動くだけでどこからか汚れがにじみ出る。

しばらくして、体も冷えてきたので岸に上がる。

「あー……よっしゃ、帰るか」

乾かすことを忘れていた自分のマヌケ具合に少し苦笑しつつ、武器達をアイテムボックスに戻し、換えの服を出して大自然の中で手早く着替える。

放り込んだアイテムボックスのアイテム達はステータス上、生乾きの衣服、みたいな感じになっているが仕方が無い。

達成感を胸に、俺はグランモールへと帰還して行った。

08「ベテラン無双、ただし格下に限る」3（後書き）

ユーザ情報などの通り、

7月後半までネット環境微妙のため、

書き溜めか、別途手段で更新予定です。

09「ベテラン無双、ただし格下に限る」4「(前書き)

帰ってまいりました。

次回分から文章量は倍ぐらいにしてから投稿しようかと想定中。

7/31：微修正

09 「ベテラン無双、ただし格下に限る - 4」

「ああっ！ その時計は！！」

市場に戻った俺を迎えたのは、カインの叫び声だった。

指の先にあるのは夕日を浴びて、光っている時計。

俺の右手の中にあるそれは依頼の目的である懐中時計である。

「特に壊れていないように見えるが、一応確認してくれ」

駆け寄ってきたカインに言いながら時計を渡す。

ゴブリンにとっても大事な獲物だったのだろうか？

奪い返した時計は汚れてはいたものの、何かされた様子は無かったが、

本来の状態と何かが違う可能性はある。

「はい！ …… 大丈夫みたいです。しっかり動いてます！」

時計をあちこち触っていたカインは笑顔で答える。

ほっとした様子なのは、形見だというこの時計が無事に戻ってきたからに違いないだろう。

妹と一緒に喜ぶカインを見、自分のやったことへの達成感を感じる

ことが出来た。

自分には何がどこまで出来るかはまだまだわからないが、誰かの笑顔が1つでも増えればいいかな、とそんなことを思った。

「それにしても、ずいぶんと早かったですね？ 自分達が行った時には二日ぐらいかかったんですが」

興奮が収まってきたのか、カインは不思議そうに尋ねてくる。

確かに、帰りは行きほど急がなかったので、それなりの時間はかかっているとはいえ、

普通に歩いているのでは、随分と違うはずだ。

「ま、冒険者の特技の1つさ。ろくに休憩を取らずに逃げ続ける事だって……やりたくはないが、ありえるしな」

少しおどけた様子で言った後、真面目な顔で2人に向き直る。

「それより、今度は無くさないように気をつけるんだぞ。

次に無くした時に、自分のように引き受けられる人間がいるとも限らないし、

そもそも無事に帰ってこられるかもわからないんだしな」

今度は2人とも神妙な表情で頷いてくれた。

そして、わずかながらの報酬を受け取って俺は自分の工房へと戻ることにした。

「さてっと。戦利品の整理でもしますかね」

帰る場所となった工房の一室で、俺はゴブリン達から強奪した品々を整理し始めることにした。

一応、工房の外には在宅中であることを示す看板は出してあるので、尋ねてくる人がいるかもしれないが。

「……うーん、普通だな」

当然といえば当然の結果であるが、ゴブリン程度の戦利品では、ありきたりな初期装備や、少量の銀貨といった具合であった。

武器も質的には良くはない。何度か斬り合えばすぐ折れてしまいうだ。

だが、他が平凡であればあるほど、当たりが際立つものである。

手に持つのは、籠のようなランタンのような入れ物。

状況的には、魔法なんかを遮断する技術が、素材が使われているはずだ。

いつか何かに使えるかもしれないので、適当にアイテムボックスに放り込む。

……こうしてモノが貯まっていく気もするが、仕方が無い。

そして、ありきたりな鉄製品を含む、武具達は素材へと変換していくことにした。

敵対相手に使えれば楽勝なスキルの1つだが、当然ながら所有権が自分に無いアイテムには発動しない。

MDと同様、この世界でも変わらず、ゴブリンが持っていた武器そのものを変換！というわけにはいかなかった。

フィールドから素材に変化させ、それで武具を作る、というサイクルだけ見ると

世の中から素材が消え、精霊がいなくなっているのもわかる気がする。

MDでは各種素材を地面に置くなどして、一定の手順を取ればその素材はフィールドに吸収されることになっていた。

これを繰り返すと、最初はその戦闘中ぐらいの短時間、大規模にやれば一定期間は火山なのに火に関する属性が普通のフィールド並みになる、
といったことも出来た。

やったことは無いが、そういったときに鉱石探知をすれば、いつもと違う反応が返ってきたことだろう。

この世界では変換できるスキルや人材が伝わっていないのか、枯渇していく一方のようだ。

遺物に同様のことが出来るものがあつたとしても、数は少なそうで

ある。

危険ではあるが、大規模な戦場跡をめぐるなどして朽ちている武器をフィールドに戻していくのもやりがいのあることなのかもしれない。

フィールドの素材、多分精霊、をなるべく姿に戻していく。

1人ではきつと困難な作業だと思う。

信用できる相手が出来たら、自分のスキルが伝えられるか、試すのも必要になってくるのだろう。

「まずは、出来ることの把握、かな？」

つぶやきながら、一定の法則で武器を作っては素材に戻し、別の条件で作成、を繰り返す。

ステータスウィンドウでは、HPとは違うゲージがじわじわ減りながらも、作業の合間にぐいぐいと回復する、という動きを繰り返している。

羽ペンのように軽い短剣から、文鎮を何個も一度に持ったかのような重さの物まで。

長さや細さ、刃の厚みなども様々に変えていく。

盾類で坑道でもやったことだが、MDでは剣士というか、前衛用のスキルや魔法も

大量に用意されており、大多数はそういったものを用いていた。

だが、大半は素材に関することや、作成に関連するスキル類に費やしている俺は、
戦闘に使えるものとなるとかなり数が少ない。

そこで、システム外スキルとでも言うべき方法を様々に実験していた。

持っていない遠距離攻撃スキルの代わりであったり、範囲攻撃の代用法などである。

通常、該当するスキルを覚え、上昇させていくとスキルとしての威力、精度、補正值などが上昇していく。

俺の方法だと、単純にゲームシステムへの慣れと、使うものの威力や性能に単純に比例した結果となる。

鍛えたスキル保持者であれば、竹串でもダメージがあるが、自分であれば相応の武器なりを使わなくてはいけない、といった具合だ。

持ちやすいように調整したハンマーを投げたり、槍を足場にしたりなど、

対応できる強さの範囲であれば、かなり汎用性のある戦い方が出来ると思っっている。

今日のようなゴブリン相手なら、かなりの数まで相手が出来る。

ゴブリンの防御力はそう高くないので、鉄板のような何かでも切ろうと思えば切れるし、投げつければダメージも追うのだ。

だが、ドラゴンとなればかなり危うい。

余程の上位武器を使わない限り、はじかれて終わりだろう。

それに普段は気まぐれに動くドラゴンが、今日のゴブリンのように上位存在のような何かに導かれ、目的のある動きをしたらこの世界の危機といっても言い状況になるだろう。

そして、そんな事態は夢物語ではないと思う。

なぜなら、世界に英雄となるような強者がいるかはわからないが、そついった存在が相手をするべき何かが起きているように思うからだ。

モンスターの増加は何かの前触れに間違いは無いだろう。

メンテナンスのたびに、告知の無いシステム変更を敏感に察知、研究してきたカンとでも言うしかない何かがそう、俺に訴えかけている。

俺程度でも何とかできる状況ならばそれはそれで良い。

問題は、前述のような存在がいなければなんともならないような事態だった場合だ。

「こんなもんか、さて……」

思考しながら、手になじむバランスにした投擲用ナイフと名づけるべきそれを10本ほど作成し、

適当な木板を目標に、次々と投げ込んでいく。

小気味いい音を立て、木板にナイフは吸い込まれていく。

出来れば、自分の実力がこの世界のモンスター相手にどこまで有効

か、
しっかりと確かめたいところである。

大口を叩いた割りに、意外とそこらのモンスターで限界かもしれないからだ。

そうなつては自分が勇者代わりになるところではないし、力ある存在に話を信じてもらえないだろう。

となると、それなりに実力のある冒険者のパーティーにでも入り、一緒に冒険や依頼をこなすということになるだろうか？

強いモンスターの出る地域を探し、向かう必要があるのかもしれない。

グランモールから俺が行ける距離に遺跡なり、やばそうな地域でもあれば別だが、上手く見つかるだろうか？

唐突に響く金属音。

「あつ、やべっ」

考え事をしすぎたのか、最後一本が既に刺さっていたナイフにぶつかり、
床を入り口のほうへと転がっていった。

「危ない危ない。刃物は大事に扱わないとな」

ナイフを拾い上げた時、人の気配を外に感じた。

「ん？ お客さんか？」

まっすぐ工房に向かってくる感じから、間違いなくこちらに用事のようにだ。

兵士のような気配ではないので、近所のおばちゃんかもしれない。

ノック、そして差し込む光。

「失礼、こちらがファクト氏の工房かな？」

入ってきたのは1人の女性。

中年手前、と言った様子の眼鏡さんだ。

スタイルは悪くない……が、明らかに仕事が恋人、のような研究者風だ。

「ああ、そうなる。何か修理の依頼かい？」

ナイフを仕舞い込みながら、そう尋ねると首を横に振った。

「いや、そうじゃない。連れて行って欲しい場所があるんだ」

この世の神が機械仕掛けなのかはわからないが、
どうやら退屈はお嫌いのようである。

次の事件は行き着く暇も無いまま、俺へ降りかかってきたのだった。

09「ステラン無双、ただし格下に限る」4「(後書き)

エピソード的な感じで妙に短い気がする……。

10 「カワリモノ、二人・1」 (前書き)

妙に難産でした。

後々修正するかもしれません。

10 「カワリモノ、二人 - 1」

唐突に俺を訪ねてきた、微妙な年齢の様子の眼鏡姿の女性。
髪は肩ぐらいまで、色は黒、と日本を思い出す感じた。

スタイルは悪くなく、服の上からでも整っていきそうなことがわかる
が、

その姿からは、学者というか、研究者のような空気を強く感じる。

いずれにしても、戦闘をするイメージは無い。

となると護衛の用事だろうか？

「危ない場所に行くなら、俺じゃなくて白兔亭に行った方がいいんじゃないか？」

実際問題、俺はここに来てからは倒したといってもゴブリンぐらい
だ。

その規模はともかく、単独の強さとしては一般的な冒険者でも余裕
のほすだ。

話に変な尾ひれがついているわけでもなさそうだが……

「いや、君じゃなくてはいけないのさ」

女性にはやりとした笑みを浮かべ、そんなことを言った。

「おっと、私の名前はイリスだ。他でもない、遺物使いの君に用が
あるんだ」

遺物、MD時代のものと思われる魔法やスキルが限定的に再現可能なアイテム達

俺の場合には、自分の能力ではなく、武器作成のために使える遺物を持っていると思われる。

それも、今のところは武器がすごいことに！ぐらいの…はず。

「ほう？ でも、武器を作って欲しい、じゃなく連れて行って欲しいとはどういうことなんだ？」

俺の疑問に答えるように、イリスの懐から取り出される小さな箱。妙に古めかしい。

「これも遺物さ、対象に向けて起動させると、年齢がわかる。……それだけだがね。私は遺物関連を研究して回ってるんだ。その中でわかったことはいくつもある」

授業をする先生のように、イリスは語っていく。

- ・遺物は基本1機能しか持たない
- ・使うたびに何かしらを消耗する
- ・とりあえずは誰でも使えるものと、そうでないものがある等々

「後、動かせないものがある。建物そのものが遺物だったりとかね。でもこういうタイプの場合、複数の効果を持っていることが多いんだ」

イリスの話によれば、それに目をつけて、戦争に有効な遺物を下手

に動かそうとして1部が破損し、効果が無くなったものもあつたらしい。

中々に興味深い話だ。

「遺物を1度でも使った人間は、他の遺物を起動させやすいという説もある。そこで聞こえた遺物使いの話、というわけさ」

「じゃあ近くにそういった遺物があるから、そこに連れて行け、と？」

ただの探索や護衛ではないというなら、そのぐらいしか理由が無い。

「話が早くて助かる。近くといっても、馬で2日といったぐらいの距離がある。だから、今すぐじゃ無く、準備が出来てからと思ってるよ」

そう言ったイリスが無遠慮に工房の奥に向かうのを慌てて止める。

「おい、何してる！」

「特には。噂の人物の仕事場だ。見学したいじゃないか」

しれつと言い放つイリスの表情は本気だ。

(こいつ……いや、悪気は無さそうだ)

イリスの瞳は、興味で一杯の様子だ。

「下手に触らないでくれよ。見る分にはいいからさ」

なんとなくだが、説得できない感じを覚えた。

イリスは、トラブルを起こしても「ん、そうか？」とか言ってもも気にし無さそうだ。

実際、工房そのものはありふれたものなのだから、すぐに飽きるだろう。

どうしたものかと考えた時、扉が勢い良く開け放たれる。

「こんばんは！ 母ちゃんがここに包丁持って行けって」

胸元に布で包まれた何か 多分包丁を抱える姿には見覚えがある。

確か近くに住んでいる子だ。

「ああ、見せてもらおう」

少年から受け取った包丁は微妙に右に反っていた。

「？ 何かに挟んだのか？」

「よくわかんないけど、頼むよ！」

漬物石でも落としたか、変に力を入れたのか。

その辺りは渡す時にでも聞くでしょう。

「わかったわかった。終わったら届けるから帰っても大丈夫だぞ」

少年に帰宅を促し、椅子に座って包丁を改めて眺める。

イリスが時折歩く音と、火の入ったままの炉の音だけが部屋に響く。

「……………すぐに直さないのか？」

作業を始めない俺を疑問に思ったのか、問いかけるイリス。

「包丁は普通なら研ぎなおすぐらいしか出来ない。そこで遺物の出番というわけさ。ちよっと庶民的だけどな、使うにも手順があるんでね」

答えながら、俺は包丁を指先で撫でていく。

イリスには見えていないとは思うが、俺は包丁の精霊の様子を見ていた。

素材に宿っているのか、包丁という形に宿っているのかはまだわからないが、微妙に不健康そうな様子の小人が見える。

その姿は、男の子のようにも、女の子のようにも見える。

もしかしたら、人間である自分に合わせた姿なだけで、不定形という可能性もある。

普通に直すかどうか悩んだが、イリスは俺のことを遺物使いだとわかって来ているわけだから、多少は使っても問題ないだろう。

そう考え、俺は小さなハンマーを手に取り、視線だけで虚空のメニューを操作する。

ネットゲームの中には、無駄と思える魔法やスキルなんかは結構存在する。

MDにもそういったものはあり、衣服の破れを直す魔法や、裁縫方法のほか、刺繍なんかも結構自由に出来た。

鍋の穴をふさぐだとか、本来のゲーム的にはまったく無意味なことも、なぜか生活スキル詰め合わせ、みたいな形で持っている。

泥水をろ過するスキルなんかは、旅先の雰囲気作りにばっちりだった。

いざとなれば、器用な家政婦のようなことも出来るだろう。

今からやるのはそんなスキルの1つだ。

包丁を金床の上に置き、刃先から手持ち部分までを指先でなぞっていく。

このとき、ちょっと指先に魔力を混めるのがポイントだ。

魔法を使える冒険者なんかであれば、うっすらと包丁に光の線が残るのが見えたはずだ。

後は決まった強さの魔力を込めてハンマーで軽く叩くだけ！

小気味良い音を立てて、ハンマーが振り落とされた後には綺麗な包丁が一振り。

武器修理に関連するスキルを覚えるために必要な前提スキル、その名も、台所のお母さんの味方、である。

微妙に長いし、水場の汚れも落とす同じ名前のスキルがある。

どちらかというと、スキル群の総称みたいな感じだ。

「ほう、見事なものだな」

イリスの言葉どおり、包丁は反りも直り、新品同様に光っている。彼女も、この結果が遺物の効力だと思っているようだ。

「さて、もう少ししたらこれを届けに出かけるが、イリスはどうする？」

「そうだな、工房はありきたりなものだったし、一度戻らせてもらおう」

好き勝手なことを言い放ったイリスが出口へと向かう。

「ではな。また来る」

残る静寂。

「……なんだかなー」

かなり、自由人だ。

(まさか危険な場所でも勝手にあっちこっち行くんじゃないだろうな?)

妙な不安にかられたが、行き先にモンスターがいるようなら、変に動かないようにしつかり言っておかないといけない。

それにしても、遺物に関する良い話が聞けた。

もし、前衛系統の最強ランクスキルたちも遺物になっているとしたら?

きっとそれは聖剣だとか、魔槍だとか呼ばれているに違いない。

魔法であれば魔道書であったり、無駄に豪華な杖なのかもしれない。

代償にもよるだろうが、相応にそれらを使える存在がいたとしたら、きっとそれはこの世界の存在では対処できない脅威になるだろう。

ファンタジーでありがちな、古代文明の遺産ということになるのだろうか。

「そうすると、俺は無限の遺物を持っているようなものか……」

コンフィグによる設定1つ取っても、きっと使いようによってはすごいことになる。

一人つぶやきながら、包丁を届けに行くべく工房を出た。

帰り際、白兔亭によって、近くにあるらしい遺物について聞いてみることにした。

「ここ10年は動いたことが無いって、壊れてるのか？」

マスターに情報料を払って聞いた情報は、
そうであるう遺跡では、最近は何かあったという話は聞かないということだった。

「いや、まるで都会の噴水みたいな遺跡なんだが、街道から離れる都合上、ほとんど訪れる人間はいない上に、何も起きないらしいぜ？」

それでも、昔は色々と不思議なことが起こったらしい。

曰く、モンスターに追われて逃げ込んだら、なぜかモンスターはどこかにいった

曰く、怪我が寝てる間に治っていた
といったものから、狩の獲物である鹿を追い込んだと思ったら、見失った拳銃、帰ろうとしたら無傷の鹿が反対側から出てきた、といった話もあった。

遺跡自体は、大きい柱がいくつもあるものの、本来であれば見失うような場所ではないそうだ。

(……………？ それってもしか……………)

過去に起こったことから、俺は遺物の正体に見当がついた。

恐らくだが、危険の無い状態、かつ無事な状態でそこに行っても、何も起きないように見えるはずだ。

特に、この世界の人間にとっては他の効果も無意味だろう。

「わかった。ありがとう」

マスターに礼を言い、ついでに依頼達に面白いものが無いかを確認する。

物資の輸送から、商隊の護衛、貴族からの討伐依頼等等。

「お？ オークもいるんだな」

モンスターの部位確保の依頼の中に、オークの牙を可能な限り多く、というものがあつた。

期限は依頼が取り下げられるまで無期限、入手した分だけ白兔亭に持ち込めば良いようだ。

特に依頼を受ける表明も無くて良いようなので、覚えておこう。

他にも、狼の毛皮などの入手希望の依頼があつたのでいくつかメモを取ったり、必要であれば依頼を受けることをマスターに告げに行くことにした。

回復用のアイテムも、まだアイテムボックスには相応に所持している。

一気に致命傷となるダメージを受けないようにすれば、かなりの無理は効くだろう。

「ええーっと、麻痺武器に自動回復の…短剣でいいか」

後日、出発日をイリスから伝えられた俺は、準備のために虚空のメニューを視線で動かしていた。

出発日と言っても、伝えてきた翌日、つまり今日なのだが。

メニューは指での操作のほか、視線や意識を向けるだけでも動くよ
うなので、
パントマイムのような姿にならなくてもすむのが地味に嬉しい。

機械のサポートはなさそうだから、魔法の1種になるのだろうか？

世界を探せば、このメニュー操作を見れる人物も見つかるのかもしれない。

独りなら、状況に応じて入れたり出したりが1番早いのだが、
今回は同行者がいるので、出来るだけ最初から出しておくことにする。

いざ戦闘となれば、守りながら戦うことには困難が予想されるので、

イリスに渡すアイテムも準備しなくてはいけない。

普通の布袋に、携帯用の食料などを入れ、水筒も用意する。

各所に剣やらポーション類やらを備え付けていく。

目立ったところでは、長剣2本に、投げナイフ10本、ロープ類と
いった具合だ。

後はイリスの準備具合を見て、調整することにしよう。

「そろそろか？」

工房の扉を開けて外に出ると、道の向こうから二頭の馬を従えて歩いてくるイリスが見えた。

工房に不在の札を出して、イリスを迎えることにする。

「やあ、準備はよさそうじゃないか。ほら、君の馬だ」

言われてようやく、馬の準備をしていないことに気がついた。

「？ 馬が無いって俺、言っただけかな？」

「どこにも飼ってる様子は無かったから、そうじゃないかと思ったよ。君は歩いて行けるかもしれないが、私は普通の体力しかないからな」

肩をすくめて言うイリスから、一頭の手綱を預かる。

「最近乗ってなかったな、よつと」

ゲームじゃ大抵、乗ろうというアクションをするだけで乗れてしま
うせいで、特に練習した覚えは無かったが、なんとか行ける様だ。

「では行くのか。丸一日は街道を進むことになる。暇かもしれない
がね」

先に行くイリスに従う形で、街を出る。

暇つぶしが意外な形で出来ることになるのは、半日ほど進んだ頃の
ことだった。

10「カワリモノ、二人・1」（後書き）

そろそろ新しいアイテムや、鉱石を用意しなくては……。

それとも生産依頼は、外伝やらで別枠にしようか？とも企画中。

11「カワリモノ、二人・2」(前書き)

名前に悩みます。

「ああああ」「じゃつまらないなあと思いつつながら、名づけに1時間以上かけてしまうタイプです。」

11「カワリモノ、二人・2」

のどかな馬の足音。

まだ朝といえる時間帯、俺はイリスと一緒に街道を進む。

ゆったりとした外套に、汚れてもかまわないようにか、地味な色合いの布の服に皮鎧。

女性用に作られたものなのか、胸元は少し突き出ており、弓道の防具のような質感を感じる。

「その鎧は何の皮なんだ？」

イリスのその姿に、ふとそんなことを聞いてみた。

「これか？ 名前は確か、スケイラー……だったような？ 何種類

かいてな、とある種は身を守るために丸くなれるそうだ」

アルマジロっぽい奴なんだろうか？

（今更だが、今喋ってるのは何語になるんだ……？）

スケイラー、つまりは鱗のなんたら、という意味になるであろう単語に、

俺は馬上でそんな疑問を抱いた。

だが、確かめようが無い。

文字を見ればなぜか読めるし、喋れば相手に通じ、相手の言葉もわ

かるのだ。

これが、何らかの力で自動翻訳されているのか、はたまた同じ言語を用いているのか、俺には証明できない。

「結構良い質感だが、高いのか？」

「安くは無いな。だが贅沢品というわけでもない。値段言えば、君のその鎧のほうが圧倒的に高いだろうさ」

結局、こんな質問で誤魔化したのが、イリスの目利き具合は俺の予想を超えていた。

特に紹介した覚えは無いのだが、今の俺の装備であるエルブンチエイン、どこか緑色を感じるソレ、を好奇心の瞳で見つめている。

「そんな鎧を平然と着込んでいる辺り、私のカンは当たっていると
いうことだ。次は何が出てくるやら。目的の遺物も期待できそうだ」

この場での追求をするつもりはないのか、イリスは小さく笑うと姿勢を整えた。

その表情は真面目そのもの。

先ほどまでの緊張感の無い表情からの変化に、俺は内心戸惑いを隠せないでいた。

「君には言うまでも無いかもしれないが、遺物は危険なものも多い。故に、発見してもすぐに接收されてしまう。貴族であったり、王であったり。わかりやすい利益は独占されやすいのだな」

最初は何を言い出したかと思ったが、その中身に黙って聞くことにした。

「ある時解明した遺物は、モンスターを退治する切り札になるような人の背丈の倍ほどもある炎の弾が変哲も無い棒から飛すものだった」

街道沿いの木々の小枝を指差し、あのぐらいだ、とつぶやく。

「その時のスポンサーは貴族だったが、いつもは村々のために戦っていた彼はそれを奪い、褒美だと言って私を無理やり横に従え、モンスターではなく税金を納めていないという名目で村を焼いた。彼が村々を守っていたのは、自分に税金が良く集まるようにする為だったんだ」

その棒はオーソドックスな攻撃魔法であるファイヤボールなりを再現する遺物だったのだろう。

ゲームとして当たり前に経験してきた俺にしてみればどうということはない威力だろうが、何の防御も無く、Lvも足りないとなれば致命傷のラインを遥かに超えた威力になったのだ。

語るイリスの表情はどこか暗い。

俺も釣られるように神妙な顔をして先を聞く。

「次に解明したのは、使用者の疲労と引き換えに治癒の効果を発揮する水がめだった。水がめに入れた水を飲めば、大抵の怪我や病気は快方に向かったんだ。でも、それは無償の施しをする教会から、積んだお金の量で治療の優先度が変わる教会に成り果てるきっかけになってしまった」

他にも指折り数え、イリスは自分の発見した、わかりやすい効果を持った遺物が生み出した結果を語っていく。

「それは……遺物が悪いわけでも、見つけたイリスが悪いわけでもないじゃないか」

俺は思わず、そういつていた。

どんな道具、どんな力も、使い方次第だ。

「そうなんだとは思いつし、わかってもいるんだ。人は何故、遺物を敬い、恐れ、惹かれるのか？ まさに力だからという面があるのだと思う。人は弱い生き物だ。強さ、力に惹かれてしまう」

どこか遠くを見つめるイリス。

慰めようと何かを言おうとした俺を制するように、イリスはまだ言葉が続ける。

「だが、私は諦めない。ちゃんと正しく使ってくれる人もいる」

言葉を区切り、イリスがこちらを見つめ、わずかに微笑む。

「今回の話もそんな流れだね。君の事をそのスポンサーの1人、自警団の上層部が伝えてくれたんだ」

「だと思ったよ。でも俺だって遺物に目の色を変えるかもしれないぜ？」

わざと意地悪く言うと、イリスは笑顔ですぐさま返してきた。

「何故だか、君なら、遺物が遺物ではなく、理解できる何かのだと扱ってくれそうな気がするんだ。正しく理解し、正しく伝えてくれそうな気がする」

俺の何を感じているのか、そんなことを堂々とイリスは言い放った。

「俺はそんな大層な存在じゃないさ。買いかぶりってやつだ」

俺が言うと、イリスは何も言わずに微笑み、前に向き直った。

それからしばらくは会話も無く、街道を進んでいった。

数時間ほど進んだ頃、耳に悲鳴が届く。

女性の金切り声、というわけではなく、純粹に現状に対する男性の恐怖の悲鳴。

命の危機をこめた叫びだった。

「!?!? 盗賊か、モンスターか。遠くは無いが、どうする」

俺は馬上で警戒の姿勢を取り、イリスに確認する。

「行ってくれ。自分の身を守るぐらいは出来るさ」

俺が渡した武器を構えるイリスの姿は、妙にしっくりしていた。

自信満々のその様子に、俺は頷き、馬を走らせるべく手綱に力を入

れる。

「後からゆっくり来てくれ。そりゃっ！」

俺の合図に、馬は力強く走り出す。

小さくなるイリスを視界に収めながら、悲鳴の聞こえた方向、街道の先へと向かっていく。

林の中

男は逃げながら心の中で全力で愚痴る。

「こんなはずじゃなかった！」と。

枝や植物の棘などから身を守るために何枚も着込んだ服が今は汗を吸い、重みとなり男の走りを妨げている。

その背中に迫るようにいくつもの影が迫る。

(なんでグレイウルフがこんなところに！)

男は商隊の一員だった。

といっても、今回は周辺にある街の情報収集のために数名での移動だったのだが。

後半日も進めば街に着けるだろうというところで、嫌な遠吠えとともに、影が馬を襲った。

グレイウルフ モンスターというよりは、獣に近い彼らは体格は大人の腰ぐらいいまである巨大な狼であった。

毛並みによつては高値で取引されることもあることもある毛皮は滑らかで、半端な攻撃は受け流してしまう。

お守りにもなるその牙は、かなりの厚みの木板もやすやすと貫通させてしまう。

噛まれればどうなるかは言うまでも無い。

狼特有のすばやい動き、攻撃は群れとなれば時に格上のモンスターも逃げていくという。

青い宝石のような瞳に見つめられては、並みの人間ではその場を動くことすら出来ないだろう。

林に逃げ込んだ、最初は3人いた男以外の仲間は散り散りとなっている。

聞こえていた悲鳴もいつしか聞こえなくなっている。

うまく逃げ切れたのか、それとも息絶えたのか。

必死に逃げる男にはわからないが、男が今も命の危機にいることは間違いは無い。

「俺が何したっていうんだっ」

疲労に息が上がりながらも、男は思わず叫ぶ。

何より、この逃避行も長くはない。

男の冷静な部分、商売で鍛えられた計算部分がそう告げる。

今は遊んでいるのか、すぐに仕留めに来る様子は無いが、グレイウルフが飽きれば今の膠着状態はすぐに終わりを告げるだろう。

そうなれば、自分の命は終わる。

仮に誰かが通りすがったとしても、それが冒険者でもなければ、犠牲者が増えるだけなのである。

そして、戦争や冒険者の好みそんな依頼がある場所からは離れているこの辺りではその幸運もそうそう無いこともわかっていた。

わかっていたのではあるが……

「誰かつ、誰かああああ……！」

その叫びが呼吸を乱し、追いつかれる危険を増やすことはわかっていても男は叫んでしまった。

見えた街道に誰もいないこと。

その現実が男の心を押しつぶしそうになったのだ。

「！ あれかつ！」

再度の叫び。

耳にしたそれはかなり近かった。

馬を走らせたまま、俺は視線をめぐらす。

街道沿いの林の奥、鳥が飛び立っていくその中に何かが動いていた。

近づけばすぐにわかった。

人だ。

「後ろに何かいる……でかい！」

この距離からでもわかる。あれはモンスターだ。そうなれば俺がやることは1つ。

モンスターを止め、人影、男性を助けることだ。

「まずは足を止めないと……当たれ！」

左手で手綱を持ったまま、右手でナイフを二振り、人影の後ろを走る巨大な狼に投げつける！

残念ながら直撃はしなかったが、相手は俺に気がついたのか、動きを止め、後ろに大きく距離をとった。

「大丈夫かっ!？」

俺はその間に商人風の男性の傍に駆け寄り、無事確かめる。傷は多かったが、大きな怪我は無いようだからすぐにどうとどうということはないだろう。

「はっはっ！ た、助けに来てくれたのか？」

俺がここにいることが信じられないとでもいうように、男性の顔は驚愕に染まっている。

「話は後だ。この馬で俺の来たほうへ！ 連れが途中にいる！」

狼に抜き放った剣を向け、警戒しながら男性に手綱を手渡す。

「わかった！ グレイウルフは1匹だけじゃないはずだ、注意してくれ！」

手馴れた様子で男性は馬に乗り、駆け出していく。

問題は、目の前の狼、グレイウルフとかいう奴だ。

『グルルルルル……』

俺という存在を図りかねているのか、微妙に間合いを取りながらじりじりと動いている。

その牙、爪は体躯と相まってかなりの威力を発揮するだろう。

恐らく、受けても死ぬことはないだろうが、試すつもりも無い。

ゴブリンとは違う、獣としての殺気。

瞳に感じるのはペットでは有り得ない、強烈な意思。

落ち葉も無い地面は、しっかりと足に力を感じさせる。

林の木々は、どこまで邪魔をしてくれるかはわからない。

この足場であれば相手の動きも、十分発揮されるだろう。

男性がまともに走って逃げ切れるような相手ではなさそうところを見ると、遊びだけの知能はあるようだ。

そうならば、簡単にはいかないかもしれない。

いつの間にか少なくなっていた呼吸を整え、俺は武器である麻痺効果のある長剣を構えなおす。

わずかな金属音に、グレイウルフの背中が反応する。

（来るっ！）

MD時代に回避のコツであった、相手の肉体的な動きを感じる感覚がグレイウルフの動きを掴んだ。

高速で走る車のように一瞬で間合いを詰めたグレイウルフの爪が回避した俺の脇を通過し、腕ほどの太さの若木にぶつかる。

嫌な音を立て、半ばからへし折られたその若木に驚きを隠せず、更なる攻撃の回避は大きくなってしまふ。

よだれを撒き散らしながら開かれた口には、これまた幾多の獲物を噛み砕いてきたであろう、がっしりとした牙が並ぶ。

「どわわっ！」

下手に武器でガードすれば、その力で武器ごと体を持っていかれそうなのがした俺は、過剰とも言える距離で間合いを取ること回避する。

（落ち着け。俺はこんな相手に負けはしない！）

どこかの俺が、そう強く叫ぶ。

ステータスと、スキル差をアイテムや経験で埋めてきたあの頃を、思い出せと。

「ははっ、良くみたら序盤クエストの防具材料の相手にそっくりだな、お前」

記憶の片隅に合ったそんな思い出とともに、俺は落ち着きを取り戻す。

ふつつつと湧き上がる闘志。

やってやるっじゃないか！

「悪いが、ここで終わらせてもらっつー！」

叫び、大胆に俺は狼へと攻撃をしかける。

正面ではなく、右後ろにいつの間にかいたもう1匹の元へ向かって！

12「カワリモノ、二人・3」（前書き）

攻撃先の描写や、仕方などはなかなかイメージが伝えにくい感じ
です。

後1か2話でこの節は終わり予定です。

12 「カワリモノ、二人 - 3」

見下ろし型のゲームと、FPSのようにプレイヤー視点のゲームとで、

一番プレイヤーが気にしなければいけないのは何であろうか？

それは、死角だと俺は考える。

(やっぱり、いたか！)

体を刺す殺気に目の前の相手ではなく、後ろを見た視線の先にはもう1匹。

目の前の1匹に注意をひきつけて、別の存在が奇襲する。

群れで行動する狼らしい流れだ。

「悪いが、ここで終わらせてもらおう！」

棒高跳びの選手のように大きく後方へと飛び上がり、右にひねりながら長剣を迷うことなく振り下ろす。

手に伝わる、生々しい肉を切り裂く感覚。

だが、浅い。

『ギヤウッー！』

剣を振りぬいたままで着地し、俺、追加の1匹、最初の1匹、という順番になる。

相手も攻撃のために突撃してきていたので、俺の攻撃は追加の1匹の背中を切っただけだったようだ。

麻痺効果は今の攻撃では発生しなかったようで、2匹とも攻撃の姿勢をとっている。

ゲームでは有り得ない、獣の息遣い、迫る殺気。だが、先ほどはこの殺気が俺に奇襲を教えてくれた。

MDではモンスター側の攻撃はターゲットサイトのような円が該当箇所にやってくることで察知できる。

もちろん、相手が強ければそのターゲット速度も速い上に、わかって防げない攻撃であることだってある。

ブレスのような範囲攻撃の場合、こちら全体が円に収まることもあるので、注意しないといけなかった。

だが、今は円は当然ながら、見えない。

(どちらが来る!? 前っ!)

迷う間に手前の1匹が、力強く跳躍し飛び掛ってくる。

その迫力は言うまでも無く、止まりそうになる足を叱咤し、感じたままに右へと回避する。

前の攻撃とは違い、服をかすりそうな距離でのぎりぎりの回避。

真横を通り過ぎた固体の毛皮がほほをなせる。

堅い、それでいて柔軟さを感じる質感だった。

間髪いれず、あわせてきたもう1匹！

その口が回避先の俺を丁度口に入れるように開かれ、目の前に迫る。

「どうせならここだっ！」

俺は立ち止まらず、走ったままで剣を横にしてグレイウルフの牙に向けて繰り出す。

鈍いが、何かを砕く音。

グレイウルフの牙が想像より長いことに気がついた俺は、その牙に向けて剣を振るったのだ。

悲鳴を上げて転げまわる1匹。

牙を折っただけでは剣は止まらず、その口を半ばまで切り裂いていた。

(すまん。楽にしてやる)

ぶらりと垂れ落ちそうな下顎に憐憫を隠せず、

もう1匹が動揺している間にベルトからナイフを取り出し、止めを刺すべく投げる。

丁度首の辺りに刺さり、痙攣をしたまま1匹は横たわる。

「さ、どうしようかね」

今回の目標は遺物の探索である。

余計な時間をとられないことに越したことは無いのだ。

間合いを取って離れた先にいる相手を威嚇するようにと剣を突き出し、願わくば逃げてくれれば、と考える。

だが、願いは通じず攻撃の構えを取ったその1匹が駆け出してくる。合わせて走り出した俺と衝突するかと思う前に、グレイウルフが視界から消えた。

「しまった!？」

気配を感じるままに右を向けば、横に飛んだ勢いを利用して巨木を蹴り飛ばし、上空から襲い掛かってくる場所だった。

俺は回避行動が出来ず、攻撃自体は受けなかったものの、その巨体はたやすく俺を組み伏した。

背中に感じる堅い地面の感触。

胸元に垂れるよだれと、赤い液体。

『ハツハツ』

視線の先には、巨大なグレイウルフの顔と、その後ろに突き出た剣の姿。

その牙は俺の手前で止まり、俺の右手はグレイウルフの喉元に半ばまで埋まっていた。

地面に叩きつけると同時に噛み付こうとした相手に、なんとかカウンターを合わせたのだ。

ゲームではない生身の俺だったら到底不可能な動き。

ここがゲームではないと思ってから、心のどこかで勝手にかけていたブレーキを解除できた気分だ。

俺はステータス通りに、ある意味では人外な動きが出来る。

強さとしての頭打ちの前に来るのは、俺自身の理解というものだった。

急所は外れているのか、まだなんとか息のあるグレイウルフが体を震わせ、麻痺していることを感じた俺は手を横に動かし、その巨体をずらすことに成功する。

大きな音を立て、地面に倒れるグレイウルフ。

今はL.V的には序盤も序盤と思われる相手でもこの体たらくである。

俺自身の身体的能力は無理が効く様だが、俺自身は鍛えなおす必要があるかもしれない。

体は無理を実行できても、意識がそれを実行しなければ追いつかない。

前衛タイプのような、岩砕きやら空中三回転なんかは多分無理だろうが、色々やれるかもしれない。

出来ないと思ったことは出来なくなってしまふのだ。

(ありがとう。そしてさよならだ)

もうすぐ息絶えるであろうグレイウルフに近寄り、自身の手で止めを刺す。

俺をにらむ瞳から光が消えるのを見、警戒を解く。

周囲に攻撃的な気配は無い。

「さて、イリス達を迎えに行かないと」

剣の血をぬぐい、鞘に収めて2匹を放置したまま街道に向かおうとする。

「なんだ、素材は剥がないのか？」

背中にかかる思っても見なかった声に緊張しながら振り向く。

見れば、逃げた男性を引き連れてイリスがやってきていた。

「剥がないのか？って言われてもな。どこが使えるんだ？」

ゲームの相手と同じなら、毛皮と牙だが…さて？

「グレイウルフの毛皮と牙、後爪は高いぜ」

馬上で簡単な治療を終えたのか、男性は赤らんだ顔でそういった。

「なるほどな。じゃあ俺はコイツを剥ぐから、二人はあっちを頼む」

指差した先にもう1匹倒れてることを知った2人が、なぜか動きを止める。

「……1人でグレイウルフを2匹仕留めたのか？」

「ああ。ちょっとミスして、見事に汚れてるけどな」

イリスに答え、涎と血でまみれた服を苦笑しながらつまみ、後で着替えを出そうと心に決めた。

グレイウルフがこの辺りでは遭遇したら終わり、な脅威であることを知ったのは少し先だった。

死骸特有のにおいを我慢しつつ、必要な採取を終えて改めて男性に向き直る。

「俺の名前はファクト。あっちはイリス。この先に用があるんだが、どうする?」

グレイウルフがこれで片がついたとしても、他にも何かいるかもしれない。

(このまま歩いて行け、というのはさすがに……なあ?)

「本当は街まで着いてきてくれるとありがたいんだが、そうもいかないだろう?」

「簡単なことさ。私がファクトの後ろに乗って、私の分の馬で街に向かえばいい」

イリスが何でも無いように言い、自分の分の手綱を男性に渡してしまふ。

確かに、速度は下がるが、2人何とか乗れるだろう。

「いいのか? 助かったよ!」

俺とイリスの手を取り、ぶんぶんと振る男性。

「馬は自警団に預けておいてくれ。さ、行こうか」

イリスに促され、俺は馬に乗り、イリスの手を取って後ろに乗せる。

1人の時と比べてゆっくりと、だが確実に馬は歩みを始めた。

見えなくなるまでこちらに手を振る男性に答えながら、街道を再び

進むことになった。

(うーん、出来れば日が暮れるまでにもう少し進みたいところだな)

今は休憩中。泉を見つけた俺達は交代で足を洗うなどしていた。

俺は服の汚れを落とし、予備の服に着替えることが出来た。

今はイリスの番であり、俺は少し離れた場所で周囲を警戒しながら馬の様子を見ている。

男性と別れてからの、のんびりとした馬の歩みにわずかな危機感を感じた俺は、

こっそりと馬にある布をマフラーのようにかける。

驚いた様子の馬をなだめていると、その効果を感じたのか馬もおとなしくなる。

本来は自然回復用のアクセサリー、リジェネーションシートとかいう布である。

バンダナのように装備したり、腕にくくりつけたりして使うのだ。

初心者用のクエストで手に入った、微々たる効果のものである。

それでもないよりはマシだし、馬もその効果を馬なりに感じているようだ。

心なしか機嫌もよさそうである。

その結果に満足した俺は、鞍の隙間にそれを差込、常備装備のよう
にしてしまう。

これで馬も元気に進んでくれるはずだ。

「お待たせした。行こうか」

「ああ、夕日になったらキャンプの準備をしないといけないしな」

どこかさっぱりした様子のイリスを乗せ、再び進む。

夕暮れ

「良い岩場があったな、これは楽だ」

「焚き火の跡もあるところからして、冒険者も良く使ってるようだな」

予定通りの夕暮れ。

街道沿いゆえに、点在するキャンプ跡の1つに陣取り、野営の準備
をする。

川も傍にあり、背後は大きな岩、囲むように小さな椅子代わりの石
と

それなりの人数がキャンプした跡が残っていたので、それを使わせ
てもらっている。

イリスも旅に慣れているのか、俺が薪を集め終わる頃にはしっかりと火を起こしていた。

干し肉などをあぶりながら口にし、一時の休息を得る。

「見張りは俺がするから、先に寝てもらってかまわない」

片づけを終え、自分から見張りを申し出る。

夜中にポップするレアモンスターを相手にした頃を脳裏に浮かべながら言うと、イリスは待ってましたとばかりに荷物から、鶏のような置物を取り出す。

「ふふふ、コイツはな、近くにある程度大きい何か近づいてくると鳴くんだ。便利だぞ。原理はわからんし、動力もわからんがな」

どうやらスイッチはあるらしく、小さなレバーが左右に動くことで切り替えられるようだ。

「弱点は、起動した時に範囲内にいる相手は反応しないから、既に傍にいたら無意味、ってとこだな」

「いいじゃないか。早速使おうぜ」

街中だと、使いにくそうではある。

焚き火の傍に鶏もどきを置き、

黄色い鶏のような何かは焚き火の傍に置き、夜を過ごすことにする。

明日は、順調に行けば現地入りとなるはずだ。

13 「カワリモノ、二人・4」 (前書き)

夏風邪と同時に日焼け跡が炎症をつ！

風邪薬と皮膚科の薬塗り塗り。その意味では夏は嫌いです。

08/19：誤字修正

13 「カワリモノ、二人 - 4」

人生にセーブポイントは無い。

それはその他でも共通だ。

MMOGとて、変わらない。

稀にあるサーバー異常などによる巻き戻りを除けば、自分がいてもいなくても世界は変わっていく。

となれば、この世界に来てしまった俺を除いた世界が今もどこかでその時間を刻んでいるのだろうか？

「この丘を越えた辺りらしいのだが……あれか？」

「のようだ。何か周囲に動いてる。でかいな」

イリスの声に俺もそちらを向けば、丘の下、坂を降りた先の平坦な土地にある、廃墟のような建物のそばに動く何かが見える。

この距離からでは正確にはわからないが、人間にしてはでかい。そして、建物全体がなにやらつつすらと緑色に光る何かに覆われている。

「イリスは何か見えるか？」

「いや、何か動いているというぐらいしか」

なんでもない対応の中、俺は確信を深める。

イリスにはあの光が見えていない

自分が選ばれた存在だとか言うつもりは無いが、やはり俺は何かが違うようだ。

馬を止め、準備を行うことにする。

イリスにも何本かの状態異常回復用のポーション類を渡し、自分はベルトなどの各所にナイフやアイテム類を装備し、突撃に備える。

頭には何もつけず、首には小さなペンダント。時計のように丸いそれには小さな宝石が何個も時計の数字のように埋め込まれている。各色が状態異常に対応しており、その影響から遠ざけてくれる。

背中には防刃の効果がある黒いマント。

紙やすりのような印象を受けるその表面は、

撒きつけてしまえば大概の剣や刃物は切り裂くことは出来ない効果を持っている。

鎧は愛用のエルブンチェインだ。陽光を浴びてもそう熱くならない辺り、

普通の金属ではないのだろう。

手に持つのは一見、何の変哲も無いロングソード。

幾本も用意してきた中で、正面から戦闘をするのに用いるための1本。

主なメリットの1つが、補正として入る筋力への多数のボーナスだ。代償として、1度の攻撃の度に魔力を消耗する。

遺物の調査にはあの影の排除が必要だろう中、

一撃一撃の威力を上げる必要があるので、これにしたのだ。

MDでは狩に使うには代償が激しいので使いにくかった1本だ。

柄と、鍔、本体とが交差する位置に光るルビーのような赤い宝石。意識して魔力をそこに注げば、体がふつと軽くなる印象を受ける。

俺の予想が正しければあの建物に今のまま影が入っている状態ではまずい。

あくまでも俺か、イリスだけが入らなければ。

光を、青にした上で。

そうすると、まずは先手を取ってこちらに注意をひきつける必要がある。

「イリス、俺があそこにいる奴らをひきつけるからその隙にあの建物に突入してくれ。ただし、突入は笛で合図をしたらだ」

手元に運動会に使いそうな小さな笛を持ち、俺はイリスに見せながらそんなことを言った。

「ほう？　もう見当がついているのか、なら任せよう」

俺の作戦は何も知らなければ異常な話だ。

だがイリスは、俺が何かを知って提案したことを察し、乗ってくれた。

(さあ、来いよ…!)

イリスが俺から離れていくのを見、剣を右手に持って駆け出す。

「うおおおーっ!!」

わざと大きな声を出し、遺跡へと走り寄る。

坂の半ばほどまで来た時点で、影はこちらに気がついたのかいくつかの影が動きを変える。

相手は オーク!

ゲームグラフィックの向上は全ての描写に恩恵を与えた。

当然、敵も味方も。そして、良くも悪くも。

アンデッドはもとより、虫系やら、ほとんどのファンタジー作品のモンスターは、3D描写はリアルであればよい、という法則から例外的に外れた存在だ。

旧世紀から今にいたるまで、粗い、もしくはデフォルメされたモンスターが存在するゲームが生き残っているのはそのせいだ。

リアルすぎるモンスターの口やは怖すぎたのだ。

当然、この世界ではそんな配慮はない。

醜悪な姿から想像しやすい声が俺に呼応するように響き、先頭の1体が右手にその武器、棍棒を構える。

坂を駆け下りる俺に合わせるように俺から見て左上から振り下ろされる圧倒的な質感を、ぎりぎり左に少しかがむことで回避する。

と同時に右手を突き出し、駆け下りた勢いのままにオークの右わき腹付近に深く差し込む。

脂ぎった肉を突き抜ける嫌な感触。

巨体であるオークすら、その勢いに少し後退し、俺はそのおかげで動きを止める。

『ピギイイ!?!』

甲高いが耳に残したくない悲鳴を聞き流しながら、柄までとは言わないが、かなりの長さが食い込んだ剣を一時的に装備から外してアイテム化し、消滅させる。

痛みにか、倒れこむそのオークを尻目に集まってきた他のオークたちを眺め、改めて虚空から剣を実体化する。

アイテムボックスである布袋を使うのが雰囲気は出るし、周囲から見て違和感は無いのだが今は仕方が無い。

「さて、派手に集まってもらおうか！」

オークの体格は2m半ばから3mほど。

やはり、でかいにも程がある。

このクラスでこの巨体なのだから、オーガや巨人クラスはどれだけでかいのか。

俺から見れば無防備に近寄ってきた2匹目の間合いにすばやく踏み込み、振り上げた右手の前腕に上段から切り下ろすことで剣をたたきつける。

肉を切り、骨に到達した手ごたえとともに反対側へと俺の体ごと剣が抜ける。

今はたまたま即死になった以外では殺さない。

多対一だし、声に集まってもらわないといけない。

俺の目論見どおり、右手を切られたオークは悲鳴を上げて後退する。

生々しい断面と噴出す血には意識を向けないように努力し、次の相手へと向かう。

戦闘そのものは10分ぐらいだろうか？

死角の多いオークをかく乱するように動き、その腹を、足を、手を

と次々と切り裂き、辺りはその血で段々とひどい有様になってきた。怒りに勢いを増すオークの攻撃に段々と俺も大雑把な回避になってくる。

「なんとかのひとつ覚えってかあっ！」

大きく後方へと跳んで回避した棍棒が地面へとたたきつけられ、大きな音を立てた。

そのオークの右側へ回り込もうとしたとき、オークは裏拳を繰り出すようにたたきつけたはずの棍棒を振り上げてくる！

「くっ！ 重いつ！」

顔面を狙うその一撃に回避が間に合わないと考えた俺は、とっさに両腕で剣を構え、棍棒の勢いに乗るように後退した。

剣にぶつかった棍棒の威力を利用し、大きく間合いを取ることに成功する。

オークが、笑った気がした。

それは仲間の復讐を果たせる喜びだろうか？ それとも矮小な人間に対する侮蔑の笑みだろうか？

「どつちにしてもここまでだ！」

集まってきたいるオークはざっと10。

見えない位置にまだいる可能性もあるが、状況は変わった。

視界にある建物の光が、薄い青に変わったのだ。

魔力の残量もこの連続戦闘では回復する暇も無い。

確実にその量を減らしていた。

(よしっ！ あと一息っ！)

視線がそちらに向いたのを狙って、オークの1匹が上段から力強く棍棒を振り下ろしてきた。

回避しようにも、周囲はオークや建物などで上手い広さとはいえない。

そのまま剣を構えていたのでは、防御しきれない。

「っ！ こなくそっ！」

とっさに左手をマントを巻き込むように突き上げ、剣を横にして棍棒をまともに剣で受ける。

『グウツ？』

砕けたスイカのようになっている俺を予想していたのだろう。

疑問の声を出すオークの前の俺は無事だ。

そのままなら左手を切っていたであろう刃はマントの効力によりその鋭さを発揮せず、結果として俺は左手を剣の先のほうで支えることに成功する。

体に響く衝撃、補正を受けた筋力はオークの一撃を軽く耐え、逆に押しかえす！

（ここで決めるっ！）

心中で叫び、俺は剣の象徴でもある宝石に決まった量の魔力を注ぎ込む。

光る宝石、建物を覆う光とは比較できないほどの強い赤い光が俺を中心に発生する。

この剣、スカーレットホーンには固有のスキルがある。

スキルそのものは、剣や槍を習得していけば覚えることが可能になるメジャーなスキルとほぼ同じものだ。

この武器を装備している時のみ使用可能なスキルということになる。

こうして実際の戦闘となれば筋力補正と同様に頼りがいのある能力だが、ある程度継続して長時間戦闘する必要のあるMD時代にはネタアイテムでしかなかった1本。

「貫き、消し飛べ！ スカーレットホーン 赤き暴虐の角！！」

武器の名前と同じ技名を叫び、剣を槍の一撃のように突き出すと赤い光が衝撃を伴ってオークたちを飲み込んだ。

真正面の光の前にいたオークは何かにくぐられるように大きく体に穴をあけて吹き飛び、

周囲に舞う濃い光が接した部分が噛まれたようにちぎれ、オークが息絶えていく。

後に残るのは屍のみだ。

このスキルの代償は 筋力に比例した魔力 である。

元から筋力に補正があるのに、さらにその筋力が消費を底上げする、というネタ具合だ。

筋力優先で育てていたキャラの場合、通常の戦闘は可能でもスキル発動が出来ない、ということも有り得たらしい。

Lvの都合から相応に魔力を持っているさすがの俺も無視できない程度の消耗だ。

なぎ倒された様子の射線上の木々、MDだと敵にしか影響が無かったからわからなかったが、フィールドへの影響はかなりあるようだ。

今回は相手が相手なのでなんとなくなっているが、この攻撃ですらあくまでも序盤の切り札に過ぎない。

そうそう連発も出来ないし、中堅以上の相手には打つ手にはなかったとしても、決め技になるようなものではない。

そう考えると上級者が使っているスキルや魔法群が如何にすごいものか、わかるというものだ。

相手を全滅、とまではいかなかったが数えられる程度に数は減っている。

程なく、好機と見た俺は笛を咥え、音を響かせる。

近くの林に身を隠していたイリスが飛び出し、オークの後ろを大きく回りこむようにして建物に向かうのが見えた。

「そのまま中にいてくれ！ 絶対に出ないように！」

俺の声とイリスの動きにオークが慌てて遺跡の中に入ろうとするが、何かにはじかれたように立ち止まったり、なぜか遺跡をよけているものまでいる。

遺跡を覆う光は緑。

「よし。効果が出てる！」

自分の予想結果に満足した俺は、慌てた様子のオークたちの掃討にかかった。

「それで、ここは何なんだ？」

「ここはな、休息用の結界なんだよ」

オークを倒した俺はあっさりと光をくぐって遺跡に入り、中央付近にある噴水跡の様な物の前に立つ。

「結果？ あの結果か？」

「そう、ここに入った物と同じパーティー、まあ仲間を入れるが、敵対者、今回で言うオークたちは入れない。どこか認識が壊れていて、誰でも入った相手をメインにした判定だったみたいだけどな」

そう、ここはMD時代に各所にあった回復の泉とか呼ばれていた中継ポイントだ。

今は枯れているようだが、この噴水みたいなものからは本当に水が出、ゲーム内通貨を支払うことで状態異常が回復したし、この施設の範囲内にいるだけで自然回復が一時的に早くなった。

ぺたぺたと噴水部分を触っていた俺は、コイン投入口と思わしき部分を見つけたが、明らかにさびている。

一応、手持ちの銀貨を数枚入れてみたが反応はない。

小さな金属音が聞こえたただけだ。

「動かない、か」

「早く調査しないか？ オークがまたいつ来るか……」

「大丈夫さ」

心配そうないリスに俺は笑みを浮かべ、答える。

範囲内にはモンスターが入ってこない安全地帯なのである。

狩場と街の中間ぐらいにあることが多く、人気の狩場傍の泉にはプレイヤーの露店も多く賑わっていた記憶がある。

MDとまったく同じならオークは使えないはずだが、別のものなのか、認識が少し壊れているのか。

ゆえに、逃げ込んだらモンスターは襲ってこないし、いつもより怪我は速く治るし、先に入られたら見失う。

獲物を追いかけていた猟師も、武器を構えて必死に探そうとしたら、見失うだけではなくはじかれていただろう。

「誰かが逃げ込めば守ってくれるけど、先に人間以外だったり、その人に敵対している相手がいると守ってはくれない、そんなところかな」

「見たところ持ち運びも出来ないようだし、戦争のキャンプ代わりに使われるということもなさそうだ」

俺の解説にほっとした様子のイリス。

安心した様子のイリスは意気揚々と遺物を探索し、色々と調査し始めた。

俺はその間に外に出てオークの装備やらをあさり、めばしいものを確認していた。

素材になりそうな金属武具を奪っては素材にしたり、フィールドに返していくことを続ける。

「こいつらも大丈夫……さて、俺の限界はどこかな？」

ゲームと違い、限界はイコール死、である。

適当に挑んでいく訳もないだろう。

「限界は自分の思い込みが作り出すものさ」

「イリス、もういいのか？」

背後にかかった声に振り返れば、イリスが小さな何かを手を持っていた。

「ああ、壊れて落ちていたこいつだけでも持って帰って研究するさ。ま、私からすれば君は既に十分に英雄の域だな。戦争にすぐ引く張られるぞ」

息絶えたオークの足を、棒でつついて死んでいることを確認しているイリス。

「かもな。でも密告はしないだろう？」

俺は予感を持って答えていた。

「当たり前だ。こんな面白い研究材料、渡してたまるか。今回もグレイルを退けた後は無事にたどり着きました、ってとこさ。まあ、あの商人からどんな噂になってるかは心配だな」

イリスの顔はまさにおもちゃを見つけた子供そのもの、輝いていた。

「ぷつ。変な奴だな、イリスって」

「お互い様だ。オークをなぎ倒す鍛冶職人がどこにいるんだ」

どちらからともなく笑いあい、馬を置きっぱなしの丘に向かい、ゆつくりと街へと戻る。

誰もいなくなり、緑の光から青い光に戻った遺物である遺跡の中。

何かのエンジン音のような重低音。

そして、水音。

見るものも、使うものもない中、遺跡は静かに一定量の水を作り出し、そしてまた沈黙した。

13 「カワリモノ、二人・4」 (後書き)

オークって焼いたらくさそうですよね。

14 「冒険者稼業・1」(前書き)

登場の3名はレギュラー予定です。

14 「冒険者稼業 - 1」

その日の俺は朝から落ち着きが無かった。

体調が悪いわけでもなく、待ち合わせがあるわけでもない。

何故だがふと目が覚めたようで、ぼんやりしたまま工房で何をするでもなく、

武具用の鉄の塊を手にとっていじっていた。

何かに呼ばれているような、見られているような。

イリスと共に街に戻ってから数日、何かわかったら知らせると言うイリスと別れ、

一人工房で作業を続け、昨日は市場で実用には耐えうるが最低品質、というような短剣や長剣、槍、小盾等を販売していた。

想像以上の売り上げに、気前良く白兔亭でエールを飲んだことが理由だろうか？と一人、考える。

これまでたしなみ程度ぐらいいしかまともにアルコールを摂取したことも無かったが、

これが二日酔いか？と苦笑しながら、次は何を作ろうかと思考をめぐらせていると工房の前に気配が立ち止まるのを感じた。

来客か、と小さくつぶやき、棚に鉄を戻すと同時に扉が開く。

と、背中に走る気配。

それは先ほどまで感じていた何かが濃くなったものだった。

(イベントの誘蛾灯……つてのは遠慮したいんだがなあ)

来客である冒険者風の男女に向き直り、1人胸中でつぶやいた。

「よう、元気してるか」

最初に口を開いたのは白兔亭でも見覚えのある冒険者の男。
最近グランモールに立ち寄ったらしく、一緒にいる少女と、
今はいないようだが、少年と3人パーティーのようだ。

昨日も白兔亭で隣の席だった人物達だ。

鍛えられた体ははつきりと前衛だとわかり、装備も金属鎧に大剣、
とわかりやすい。

色合いは地味ながら、堅実そうな衣服と日焼けした肌、体と装備に
は小さな傷が無数にあるところから、相応に戦いはこなしているよ
うだ。

赤いバンダナに硬そうな逆毛の髪に加え、笑みからは十分な迫力を
感じる。

といつてもリアル年齢だと20台半ばの自分とそう変わらない年の
はずだ。

一緒にいる少女は見た限りではもうすぐ少女は卒業か?と思われる

容姿だ。

ゆったりとした白いローブにバトンのような杖、各所に身に着けたアクセサリーもただの飾りではないのだろう。

幼さが抜け、女性へと羽化しそうな…とそこまで考えたところで少女が身じろぐ。

どうもじろじろと見てしまっていたらしい。

「おっと、そういつつもりじゃなかったんだが、すまないな、コーラルちゃん」

「いえ、いいです。そういうのじゃないってわかってますから、でもちゃんはやめてください」

むすつとした顔の少女、コーラルは怒っていないようだった。

「ははっ、可愛いからつい、な」

最初に出会った時は、まさに魔法使い！な姿に感動し、声も美少女、となおも驚きだった。

「ファクト、余りコーラルをからかわないでくれ。後で面倒だ」

「了解だ」

その割には迷惑そうではない様子の男、ジエームズに答える。

と、ようやくもう1人が駆け寄ってくるのが足音でわかった。

「はっはっはっ。やっとおわったあー！」

汗だくになりながら、何かを抱えて走ってきた少年の名前はクレイ。活発そうな瞳に少年らしさを感じる体躯、そして後ろで縛った金色の髪、それが荒い息に合わせて上下する。

「遅いぞクレイ。ほら、とつととよこせ」

「訓練代わりに遠回りしてこいって言ったのはジェームズじゃないか！ はあはあ……」

愚痴をこぼしながら、クレイはジェームズへと包みを投げ、それは俺に渡される。

「ん？ お土産か？」

受け取った瞬間、ずっと感じていた気配が手の中のソレから感じているのだと悟る。

「感じるか？」

ジェームズの声聞きながら、俺は包みの上からソレをなぞっていた。

大きさとしてはコーラルが持っているような長さの棒。

だが、折れている。

作業台の上に包みを置き、ゆっくりと開く。

「これは……どこでこれを？」

半ばほどで折れている杖。先には今もなお光を鈍く放つ、新緑の石。透明感のあるそれはエメラルドを思い出すが、それにしても大きい上に色も濃い。

「この前言った、大規模な国のモンスター退治の時に相手の砦にあった奴さ。貴族にやるのももったいないからこっさりな」

なんでもないようにジェームズは言うが、ばれれば騒動だろう。

俺はゆっくりと杖だったものに触り、状態を確かめる。

俺にだけは見えているであろうウィンドウが虚空に開き、杖の状態や性質、名前が見えてくる。

これまで触ったものはただのスチールナイフであったり、劣化したハンドアックス、などと表示されていた項目には 壊れた眠れし森スリーピングフォレストとある。

「壊れてるな、でも生きている。コーラルちゃんならわかるんじゃないか？」

「だからちゃんは……もういいです。はい、強い力を感じます」

俺の問いかけに諦めた様子で答えるコーラル。

「へー、俺にはわかんねーや、すごいんだ」

とぼけた様子のクレイは興味津々と様子ではあるが、難しいことは

嫌だと顔に書いてある。

「とということでな、直してくれ」

「……は？ 直せ？ これを？」

いきなりなことを言い出したジエームズの顔をまじまじと見るが、冗談ではなさそうだった。

「ファクトなら出来るだろ？」

「え？ 杖も直せるんだ！ すげー！」

感心した様子のクレイに慌てて手を振りながら俺は叫ぶ。

「いやいや、剣を直せならまだわかるけど、杖直せ、はないだろう。あれか、木の部分を何かでくっつければ『はい、直った』じゃあないだろう？」

恐らくだが、杖の素材、長さ、形状を含めての品だ。

宝石部分だけ他に移しても別物になるか、機能しないだろう。

触った限りでは、ただの木材ではない。

そう、まるで『最初からそう出現した』ような感触。

「ソイツは預ける。どうせそのままじゃ意味が無いしな。頼んだぜ」

「なんだ、どこかに行くのか？」

俺がどうするかを見学していくと思っていたのだが、
ジェームズはクレイとコーラルを伴って出て行こうとした。

「へへっ、ちょっと作戦に参加して来るんだ！」

やる気満々のクレイの口から少々不穏な言葉が飛び出す。

「えっと、隣街がモンスターの集団に襲われたそうなんです。撃退に冒険者達も借り出されてるみたいで、いい稼ぎだからってジェームズさんが……」

コーラルの丁寧な？説明に視線をジェームズに向ける。

「そういうことだ。出発は先だがな、手続きやらが面倒なんだ」

そう言ってまた会おう、と言い残して3人は立ち去った。

「作戦……か」

ジェームズは悪い奴ではない。面白いことが好きなようで、ああやって俺をからかってくるのだ。

最初は気に障ったものだが、今は面白い。

「とりあえずはこいつか」

杖と近いものが無いか、手持ちのアイテム群をスクロールさせていく中、

同じ規格で作った武具群のページが目に残る。

この世界で目覚めてしばらくの時に、いざとなったら売ることを考えていた武具。

1本でも、1着でも戦力のための装備が無いか、俺のところにも誰かしらの使者が来るだろうことは間違いない。

とりあえず、10人分ほどの鎧兜、盾にいくつかの武器を具現化して壁に並べる。

1つ1つ手に取ってみるが、特別な性能はついていない。品質は普通といったところだ。

MD時代の初心者向けの大量在庫だ。

もっと最初に目に付いた銀狼師団用に作っていた武具達は性能が違いすぎる。

下手に流通させては事だろう。

アイテムに変な変化が無いことを確認し、来客があるまでは預かった杖の様子を見ることに使うことにした。

「宝石部分はジェネレーターってところか？」

指でつんつんと宝石部分をつつきながら、俺は思案する。

杖の先に力を持った宝石がはまる、というのはわかりやすいアイデアだし、MD時代の杖も殆どがそうだった。

手持ちでは杖用の材料が多くないので、試すにも勇氣はいるが同じような系統のものは作れるだろう。

ソレは即ち、この杖が遺物か、それに相当する古いものである可能性を表している。

俺の記憶にあるMDの時代、今から1000年以上前だという時代。もしそうだとしたら、この杖は何を見、何を聞いて時を越えてきたのか。

もしかしたら、プレイヤー達も手に取っていたかもしれない。

そう考えると、妙な感傷を覚えるのだった。

「精霊は喋らないしなあ……」

ふっと魔力を宝石部分に向けると、染み出すように緑色の精霊が起き上がってくる。

俺を見ると、生き別れの肉親に出会ったかのように突撃してくるが、ぶつかることなく突き抜けていく。

「すまないな、触れないみたいだ」

精霊に向けてつぶやき、次に折れた杖部分を手に取る。

（力いっぱい折り曲げられた！って感じではないなあ）

断面などを見た正直な感想だ。

見る限り、どちらかというところ切れたというのが正しいような……。

でも、杖が千切れるってどういう状況だ。

飛び降りた相手を助けるのにこの杖につかまって！ってか？

ん？ 助ける？

「確か杖以外にもそんな性能が……あつたあつた」

MDのアイテムには当然、様々な性能や効果がある。

アイテムとして使えば火を噴くものであったり、癒しを与えるものであったり。

中には、アイテムの破損と引き換えに強い効果を生み出すものもある。

例えば今アイテム欄で見ている 影縫いの短剣 はそのままでも低確率で麻痺効果があるが、使用者の魔力を半分消費しつつ、武器破損を引き換えにして麻痺効果を視界内の敵全てに与えることが出来る。

そのほか、いざとなったら！というこれらは切り札としていくつか持っているのがベテランの生き抜く術の1つだった。

ゲームだと破損したアイテムはそのまま消えるか、なんともいえないいごちゃごちゃしたガラクタになっていた。

そう、四方八方から引きちぎられたような破片になっていたのだ。

そうになると、この杖は効果を発揮した後になるのだろうか。

(いや、宝石は力を感じる)

今もなお、俺を呼ぶようにこの宝石、正確には精霊は俺を見てくる。

途中で効果を発揮できずに所有者の手から離れたか、それとも…

様々な仮説が脳裏をよぎるが、結局はMDと違うだろうからわから
ない、ということになる。

1度、同じような魔法用の杖を作ってみて比べることを決め、作成
のレシピを思い出すべく、記憶をたどっていく。

作成のめどがつき、何から作るかを悩んでいる俺の元に、街の貴族
からの使者が到着し、壁の武具を見るや「全て買います」と言い放
ってきたのはそれから数時間後だった。

14 「冒険者稼業・1」 (後書き)

次回は作って作って売りまくる? . . . かも?

15 「冒険者稼業・2」 (前書き)

大分過ぎやすくなってきましたが、今度は日々眠い。
体調に注意しつつ、頑張ります。

15 「冒険者稼業 - 2」

一般的にはゲームでの武器はただの道具だ。

数値や見た目、自分の好みで取り替えられるだけの存在。

より強い武器、より格好いい武器。

そこに、製作者が思いを込めたか、適当に作ったか、は関係が無い。

何せ、倒す相手はいずれにしてもデータなのだから。

使う人間が満足すればそれはアイテムとして、正解なのだ。

「抱えて持って行きますか？」

突然の来客の言葉に、俺は皮肉を混ぜて丁寧に聞き返してしまう。

名乗りを上げた使者はグランモールを管理する貴族の者だという。

街の自警団の大元でもあり、私兵ともいえる集団を抱えているらしい。

当然、貴族の上には国としての王がいるので、

当たり前といえば当たり前前の構図だ。

「丁度馬車で来ておりますので、それで運ばせていただきます」

若い背格好の執事風の使者はそう答え、早速とばかりに値段交渉に入るようだ。

市場で買いあさった後か、最初からある程度は見越していたか……。いずれにしても、随分と急な話だ。

「値段は、ああ……このぐらいなら妥当かと思うのでそれで」

使者として来たからには相応の目利きだったようで、提示してきた額は相場からしても離れてはおらず、妥当なところだった。

事前に聞いていた、職人に対する態度や扱いからは拍子抜けするほどだ。

もっと買い叩かれると思ったのだが……

「まだ用意できますか？ 出来るだけ早く、多く」

そんな思考が顔に出ていたのか、使者はにこりともせず言葉を送ってきた。

やはり、そう甘くは無いらしい。

「いつまでかによるが、何のために？」

使者が語った内容は、ジエームズ達の言っていたことと同じだった。

まずは出せるだけ、援軍は後から、ということだ。

現実では戦力の逐次投入など、と怒られそうな気もするが、モンスター相手ならありなのかもしれない。

そうでなくても、当然戦っていれば武具は消耗する。

補給的な意味もあるのだろう。

「主はモンスター達の侵略が始まったものとして、既に王の下に陳情に向かっております」

つまり、急いで結果を出せということだ。

「武器だけなら5日で50人、なんとかやってみよう。鎧は、期待しないでくれ」

それでは5日後に、と言い残して使者は去っていった。

「さてっと……手抜きしすぎず、目立たずっと」

一般的な鍛冶職人と同じペースではそれはそれで遺物があるのに、と疑われる。

便利な存在と思われて使われるのもそれはそれで面倒だが、なんとかもしがたい。

ある程度稼げたらいつそのこと、作って戦える鍛冶&冒険者として行ってみようか。

(まずは鎧から行くか、材料を多く使うし。1個もありません、はまずいだろう)

武器は部屋に詰め込んである微妙に光る武器にしようかと一瞬考え、何故光ってるか、でややこしくなりそうだと考え直し、やはりやめることにする。

シンプルに行こう、シンプルに。

「付与無し、シンプルに……クリエイト・アーマー 鎧生成 - 金属C - 」

鍛冶職人スキルのには、武器とは比べ物にならない謎な変化をするのが防具だ。

武器はまあ、槍なんかは伸びるだけなんだが鎧は、なぜか膨らむんだよなあ……。

素材となる鉄塊を引っ張り出し、スキルを唱えてハンマーを振り下ろすと、見る間に光に包まれた鉄塊だったものが膨らんでいく。

飛び出てくる部分を押さえ込むようにハンマーで叩いていくと、段々と膨らみ方は収まり、1着の肩当て付きの上半身用の鉄鎧が出来る。

銘は単純な スチールアーマー だ。

継ぎ目の調整をすることである程度の体格差はカバーできる造りだ。隙間を狙ってくるような対人だと厳しい時もあるだろうが、そこまでの腕を持った相手や状況であれば、別の意味で苦戦しているだろうから、大丈夫だろう。

出来栄えを確かめるために、手加減をして適当に剣で斬りつける。

金属音、そしてわずかに傷がつく鎧。

問題はなさそうである。

「さて、じゃあ次行きますかね」

とりあえず、今日は鎧を3つと、武器を多少終わらせておこう。

見分けるために、スペック上は同じだが微妙に形が違うようにと意識して作っていくことにする。

MDの時や、他のゲームでも疑問といえば疑問だが、こうしてリアルな感覚の中で出来上がると疑問に思うことがある。

主材料となる素材以外の部分はどこからどう来てるんだろうか？

もしかしたら、俺が現実世界の感覚で鉄だとか言っているだけで、実際には俺の知っている純粋な鉄、Fe元素からではないのかもしれない。

ここには成分分析に必要な機材も無ければ、自分にもその知識は無いので不明なままである。

武器を作った時の柄であったり握りであったりと謎は尽きないが、便利だし、気にしないほうがいいのだろうか？

オリハルコンなんかは元素記号自体が無いわけだし、うん。そうしよう。

「これで終わりつと。まあ、こんなもんか」

この瞬間に使用者が戻ってきて、いきなり扉を開けられたら実はまずいわけだが、幸いにもそんなことは無かった。

目立たないように物陰に鎧は置きつつ、武器に取り掛かる。

(補給の問題を考えると、壊れにくい物がいいだろう)

多少肉厚なものがいいのかもしれない。

所謂、ツーハンデッドソードまでくると誰でも、というわけには行かないだろう。

となると……これだ。

「武器生成・近距離C・《クリエイト・ウェポン》」

作る武器は ディフェンダー だ。

MDにおけるディフェンダーや、俺の知っているものは、

普通のロングソードと違い鍔が大きく、手首を保護することが出来る他、

受ける、はじく、といった行動に適した造りをしている。

何故適しているのか、までは調べた覚えは無いので、
文献を調べるなり、さりげなく同業者に聞いてみることにしよう。

幸いにも、スキルを使えば厳密に武具の造りや細かい意匠を知らなくても出来上がる。

きっと俺の脳内の記憶だとか、イメージだとかを参考にしているのだろう。

武器の出来具合や、カスタム具合を見る限りでは知っていれば知っていただけ、自由は利くようだ。

神様だろうか、精霊だろうか、どこに感謝すべきかはわからないが、ありがたいことである。

一人感謝を心に浮かべながらも特殊効果は何も付けず、何本もディフェンダーを量産していく。

考え事もしていたためか、昼というには少し遅い時間になっていた。

少し考え、気分転換をかねて市場に行つて、色々と買い込むことに決めた。

まだ売り払っていないモンスターの素材なんかも買い取ってくれる業者がいるかもしれない。

市場にて

「薬草、か。ポーションも無限ではないし、あるに越したことはないな」

最初は野菜でも売っているのかと思ったが、良く見れば乾燥させた色々な薬草を売っている様子の店を見つける。

「いらっしやい。ウチのは1つ1つ丁寧に処理してるよ」

店番をしていた若い女の子がそう言い、確かめるとばかりに一番多い山の薬草を一つまみ、渡してくる。

「今のところお世話になったことは無いんだが、どう使うんだ？」

「あんだ、運が良いんだね。普通に暮らしてても、あんだぐらいまでに一度はお世話になるもんだ」

女の子は豪快に笑い、直接食べてもいいし、濡れた布で巻いて怪我に貼り付けても効果があるのだと教えてくれる。

摂取して栄養を取ることで効果がある形と、成分が作用する形とがあるということのようだ。

両方の効果があるというのは驚きだが、さすがファンタジーというところだろうか。

銀貨1枚で10束、ということだ。1束が豪華な栄養ドリンク、ぐらいだとすると妥当といえば妥当なのか？

「この先も運が良いとは限らないな。1枚分もらつよ」

懐から今の時代の銀貨を1枚出し、女の子から薬草の束を受け取る。

瞬間、ウィンドウが浮かび上がりアイテム名として 生命の薬草と名前が出てきた。

「ありがとね！ 最近は物騒だから外もおちおち採取してられないんだよ。お兄さんも良かったら採取の護衛や、代理採取受けてみてね！」

女の子はそう言い、そういった事情から販売できる日は不定期だが、場所はいつもここだという情報にお礼を言い、足を他の店へと向ける。

途中、名前に何か覚えがあるなあと考えていると、初級の回復ポーション作成イベントで、採取をしなければいけなかったアイテムの名前だと思いつく。

ある程度稼げるようになってからは、直接ポーションをNPCから購入していたのですっかり忘れていた。

今度の機会に、こういった初期アイテムの作成レシピやイベントを思い出してみよう。

同行者にさりげなく配るには使い勝手はいいかもしれないからだ。

色々な店を回りながら、冷やかしつつ色々と触ってみる。

ウィンドウが出て名前がわかるのは日常生活には不要な、冒険用のアイテムの類だという共通点が見えてくる。

例えば、果物では名前は出なかった。

逆に、フィールドにいる獣の肉なんかは、なんとかの肉、という表示が出た。

全て見覚えがある名前が出るということはMD時代にもあったもの、ということになるのだろう。

MDでも、クエスト用の素材を除いてはいちいち木材や布の名前はなかったはずだ。

行く先々で問題の起きない範囲で様々に触ってみようと決め、遅い昼食を取って工房に戻る。

「初期装備に近い武器に防具、ポーション類……と」

つぶやきながら出来上がったディフェンダーを大きな布で包んでいく。

最初の時には準備もしていなかったのでそのまま渡したが、せっか

くの自分の作品なのだからちゃんと渡したいと思い、市場で購入したのだ。

鞆は適当に必要ななら準備してもらおうことにしよう。

旅路ならばともかく、戦争となればいちいち鞆に戻すことは少ないはずだ。

出来ている分を包み終えた時、俺は1つのことを決めていた。

「うん。地図を手に入れよう」

(ソレが出来なくても地形を把握したい)

MD時代のクエストやアイテムを再現するにしても、どこに何があるのか、どこがどんなクエストだったかを思い出す必要がある。

そうなる、ここが実際にどこでどういう場所になっているのか、少しでも広い範囲で地図を手に入れたいところだ。

これまで思いつかなかったことから見て、目の前の生活に思ったより視野が狭くなっていたようだ。

大陸の移動でもあったなら意味を成さないだろうが、1000年程度じゃ大きく違わないだろうし、大体でも位置関係がわかればいい。

ただ、問題なのはそうそう地図が売っているかということだ。

現実世界でもそうだったように、地形を含んだ情報というのは非常

に重要だ。

ましてや、国が乱立しているという今の状況では、自分の国の情報をほいほいと入手できる状態にあるとは思えない。

そうなるか……これが早そうか。

俺は荷物をまとめ、白兔亭へと向かうべく工房を出る。

貴族が行うという作戦の会議場所、集合場所を聞き出すためだ。

理由はもちろん、冒険者、理想はその場にいるであろうジエームズに地図とまではいかなくても地形や街の情報を得るための交渉をするためだ。

善は急げということだ、俺は早足で目的地へ向かうのであった。

15 「冒険者稼業・2」 (後書き)

なかなか書きたいことにお話が追いつきませんが、着実に書いていこうと思います。

時折「キャラ紹介他」には追記されてることがあるので、お暇でしたらそちらもどうぞ。

16 「冒険者稼業・3」（前書き）

思うままにかいていたら文字数大目の割には駆け足になってしまいました。

後々、加筆するかもしれません。

16 「冒険者稼業 - 3」

目の前にある差し出された手。

それを取れば、後に困難が待ち構えている。

でも、見逃せば心を満たす罪悪感。

そんな選択、世界にはあふれている。

それでも、選択しなくてはいけないし、見逃すことも……出来ないことが多いだろう。

「あれか……」

俺は馬上から、目的地となる街の壁を見つめる。

「もう少しだ、頑張ってくれよ」

馬をぼんぼんと軽く叩くと、任せると言わんばかりに力強く歩き出す。

くくりつけたいくつもの布袋は随分と重そうだ。

あれから急いでジェームズ達を探したが、やはりというべきか既にグランモールにはいなかった。

白兔亭に残っていた冒険者に話を聞いたが、彼らは近くの街ぐらゐしか知らず、

広い各地を旅するような冒険者はいないようだった。

ましてや他の国の情報などは、商人から聞くぐらゐしか、という状態だ。

となると、酒のつまみにと、遠い土地での冒険話を聞かせてくれたジェームズたちは、

今のところ誰よりも俺の欲しい情報に近いことになる。

集合場所が馬で3日ほど、大規模な作戦の集合が1週間ほど先であることを確認し、工房に戻る。

約束した武器の準備だけはしないといけない。

その後であれば多少の距離はなんとか出来る……と思う。

じわりと足元に迫る焦りを抑えながら、5日目を明日に迎える。

冷静に考えれば、普通に鍛冶による作成であれば、5日であっても到底有り得ない速度なのだが、遺物ということでなんとか押し通すことが出来るだろうか？

あのときの使者の顔も、半ば疑っていたし、今後も作れとうるさいかもしれない。

期間短縮の理由はどうしたもんかと考えていると、来客。イリスだ

った。

「元気してるかー？つと、何か悩み事か？」

顔に出ていたのだろう、イリスが俺の顔を見るなりそついい、近づいてくる。

「ああ、実は……」

作成を手加減しているという部分は隠し、
ジエームズたちに聞きたいことがあることと、手伝いに行きたいがために頑張つて、
なんとか間に合いはしたが、そのままでは早すぎて後々問題になる
だろうことを伝える。

「なるほどな。……使えるかもしれないな。仮に、毎日寝ずに作業
出来たら不可能ではないのか？」

「まあ、遺物もあるし、多分」

そついうことにおつづ。

「よし、じゃあ心当たりがある。任せてくれ」

そついったイリスから、とある提案がされたのだった。

「すまないな、イリス」

「なあに、知らない相手じゃないからね、大した話ではない」

その後、馬車を借りて武器を詰め込み、貴族の元へ向かっている。まずはこちらから出向いて意表をつき、話をやりやすくするのだとイリスが言うからだ。

「助かる。そういえばイリスは何の用事だったんだ？」

「ああ、そうだったそうだった。これだ」

イリスが取り出したのは、古ぼけた小箱ほどの何か。

ときはきと操作して出来上がったそれは、覗き込む部分がついている。

イリスの使い方からすると、双眼鏡のようにも思えるが……。

「以前、街の古物屋で見つけたんだがな、私が覗いても何も起きないんだ。でも君だったらと思うってね」

覗いても向こう側が見えるだけで変化が無いそうで、ただのガラクタか？とほづつておいたそうだ。

受け取り、隅っこに変なスイッチでも無いかと確認をする俺。

覗き込むと、確かに向こう側がただ見えるだけだ。

「へー。見た目からすればこうして覗くのはアタリだと思うんだが、小さい石がくっついてるじゃないか」

丁度、おでこのあたりに来る位置に、良くみると小さい、ゴマ粒ほどの石が埋め込まれているのを見つける。

となると……

覗き込んだまま、そこを意識してスキルを使うように魔力を込めてみる。

すると、距離の都合からぼやけて見えていた市場の景色が鮮明に見えた。

双眼鏡としての拡大ではなく、単純に視界としての距離が拡大された感じだ。

「おおっと？ 見えた見えた。うん、遺物か、魔法のアイテムだな、これ」

機能からして、コンフィグにあった視点変更の1種か、戦闘時のズーム部分か、いずれにしてもピンポイントにシステムの1部が切り取られた状態のようだ。

高性能なマジックアイテムという可能性もあるが、遺物だとしたらコンフィグや基本システムも遺物になっていることになる。

オン・オフを設定できるような項目まで遺物になっていたとしたら、その可能性は、様々な危険も孕んでいる。

「魔力を通すのを止めると、すぐに元に戻るのか……」

考え事に、双眼鏡モドキへの魔力供給が止まったことで判明した条件をつぶやき、この双眼鏡モドキはレンズを利用した拡大ではないからか、視力が上がったかのような見え方になることを確認する。

イリスに渡し、使い方をレクチャーする。

魔法を使わずとも、魔力そのものは冒険者等には常識的な話のようで、イリスも簡単な説明でコツを掴んでいた。

「なるほどな。しかし、私程度だとすぐ疲れるな」

鍛えていない魔力では少くない消費のようで、すぐにイリスは双眼鏡モドキから顔を離す。

「でも、偵察だとかにはばっちりじゃないか、それ」

俺が言うと、イリスは頷いてそれを手渡してきた。

イリスも噂は聞いていたようで、「行くんだらう?」「の声とともにおもちゃを見つけた子供のような笑みを浮かべる。

「使用感をレポートで頼む。しっかりとな」

……ちやつかりしてるな、うん。

そうこうしているうちに到着した貴族の館のでかさに驚く。

迎えに出てきた使者は、馬車に積まれた武器の量に驚愕し、1日早い理由を求めてくる。

「私が以前、着けていると疲れなくなるペンダントを持ってきたのを覚えているだろう？ 同じようなものを発見できてね、彼に売ったんだ。理由は、わかるだろう？」

後で聞いた話によると、その遺物はすぐに壊れてしまい、二度と動かなかったそうだ。

そんな使い捨て状態では、使い所が難しいということとで貴族もそう興味を示さなかったそうで、

使者はその話に納得して代金を支払ってくれた。

行くなら早いほうが良いというイリスに礼を言い、

丈夫そうな馬を借りて、目的の街へと旅路を急ぐことにした。

今回は一人旅である。

街を出てすぐに、馬に移動用の補助アイテムを使い、全力で走ってもらう。

まるで自動車のような速度で移動する馬に、途中にいたゴブリンも追いつけずにいた。

そして……冒頭に戻る。

「何者だ！」

声をかけてくる門番。

グランモールと同じか、それ以上に感じる街の規模、その門番とな

ればやはり、ちゃんとしている。

殺気混じりの声に、俺は馬にくくりつけてあった袋の1つを持ち、袋の口を開く。

「グランモールから武器の補充と、増援だ。多少は腕に覚えがある」
袋の中には、話を円滑に進めるためのディフェンダーが5振り。

「おお！ そうか！ よし、今あけるぞ」

強張っていた門番の表情がほころび、いそいそと門が開けられる。

中にいた兵士らしき1人に武器を渡し、頑張ってくれた馬を撫せて、厩舎に預ける。

荷物を背負い、案内を受けて冒険者が集まっているという酒場へと足を向ける。

「さて、いるかな？」

賑わう酒場に顔を出し、きよろきよろと周囲を見渡した瞬間、背後から迫る殺気！

「のわっ！？」

荷物もあるので大げさに回避し、襲撃者を……

「はっはっはっ！ やるじゃないか」

豪快に笑っていたのはジェームズ。

手には筭、つて筭であんな殺気を出さなくても……

そんな心の声が聞こえるはずもなく、ジェームズは筭を壁に戻して俺の肩をバンバンと叩く。

「なんだ、結局来たのか」

「商売だ、商売。 たんまり武器の代金はもらったさ」

俺の言葉に、「そっぴええば鍛冶職人だったな。忘れてた」などと言いつつジェームズは酒場の奥に歩き出す。

そちらについていくと、同じテーブルには若い男女、クレイとコーラルだ。

「よう、まだ問題は起きてないみたいだな」

酒場に緊張はあるが、一戦交えた、という感じでもない。

となると例の襲撃の続きや作戦はまだ始まっていないということだ。

「それがそうでもないの。 今日、西門の方角に敵の集団が見えたの。 まだ遠いようだし、すぐに戻っていったけど」

そう言うコーラルの表情は硬い。

彼女は前衛2人が怪我をしないかを良く心配していた。

今回も、大規模らしい敵の集団に突っ込むであろう2人のことを気にしているのだろう。

魔法を使う人間らしく、少女の見た目の割には、敵を倒すことに遠慮がないのは心強い。

「俺やクレイ達は貴族の主力と一緒に西門で迎え撃つ予定だ。一応、他の門も警戒の戦力は置くんだがな。どこに行く？」

「余り目立ちたくないからな。西以外にするよ」

日当たりも良いし、南かな、などと言って場を濁す。肩をすくめると、背負ったままの荷物が音を立てる。

「そうか。背中のは武器か？」

「そうそう。俺も手ぶらじゃ戦えないからな」

アイテムボックスから先に取り出しておいた武器達、そして腰にぶら下げた何本かのポーション。

ちなみにポーションの入っている管は、ガラスのように見えて妙に丈夫だ。

たたきつけても壊れないものだから、塩化ビニールかよ！などと呼んだ覚えがある。

と、そのときである。

遠くから怒号のような叫びが聞こえ、俄かにあわただしくなる。

「大変だ！ モンスターが来たぞ！」

酒場の雰囲気が一変し、冒険者や兵士は表情を固くさせる。

「ジエームズ！ 行こう！」

クレイが叫び、飲みかけのジョッキをテーブルに残したままで立ち上がる。

黙っていたのは緊張からだろうか？

良くみれば飲んでいたのはエールではない。水だ。

他のテーブルも殆どが水か、それに近いものだった。

「北西からゴブリンの集団だ！ オークもいるぞ！」

続報に何人かが駆け出し、他の面々も装備を身に付けて酒場を出て行く。

「んじゃあな。ファクト、何かあったら頼んだぜ」

「何も無いほうが良いよ。クレイ、コーラル、気をつけてな」

残っていた南門に行く予定の集団と合流し、俺も歩き出す。

俺の頭の中は、ある懸念でいっぱいだった。

今まで、特に襲ってこなかったモンスターが街を襲う

さらには単一ではなく、複数の種族が同時に襲撃

何かが俺の頭に引っかけたり、その疑問を解決しようと思考をめぐらせる。

(そうか、単純にイベントと考えるべきか)

MMORPGらしく、MDにも襲撃イベントやら、集団を倒すクエスト等は多彩だった。

ソロでいけるようなイベントであれば、敵アジトを襲撃！ 終わり！という感じだが、複数プレイヤー前提のイベントでは複数の戦線が出来ることも珍しくなかった。

そう、今回のように守るべき場所が複数の場合には、2箇所目の襲撃ということもあったのだ。

そんな記憶が、俺の緊張を持続させる結果となり、遠くに戦闘の騒動を聞きながらも、どこか貧乏くじを引かずにすんだとばかりに
落ち着いた様子仲間を見る、落ち着かない様子俺、という構図を作り出していた。

「よう兄ちゃん。緊張か？」

話しかけてきたのは、山男！という風味の男性。

恐らくは普段は獵師なのだろう。

「まあね。こつもモンスターが来るんじゃ、商売上がったりじゃないかい？」

「まったくだ。とつとと終わって欲しいね」

しばらく男性と談笑し、他の有志の民兵の人達と南門の外にある柵のそばで待機する。

「お、おいっ！ あれはなんだよ！」

自分達だけ危険を犯さずに終わっていいのかな？と心のどこかで思っていた頃、

神様はそれを見ていたように、トラブルを巻き起こすのだった。

メンバーの中でも目の良い、獵師だったおっちゃんが叫び、慌てて弓を構える。

「ははっ……まいったね、こりゃ」

こんなところまでセオリー通りでなくなつて、いいと思うよ、自分
は。

俺の視界には、本隊と思われた西門のモンスター軍団とは別の集団。

気配のなかった森に、急に現れたいくつもの影。

懐から準備しておいた双眼鏡モドキを取り出し、
目を凝らして見れば、前衛としてのゴブリン、背後に見えるオーク、
そして

杖のようなものを持った影、何よりやばいのがウッドゴーレム、
そして……さらに後ろに、地上を走ってくる何かと思われる土煙。

門と森とはかなりの距離があり、土煙はさらに遠くなので詳しくは
わからない。

ただ、この配置で雑魚なわけがない。

単体ずつなら多分、勝てる。

土煙の正体が予想の範囲内であれば、特に。

だが、俺の周りには人間がいる。

恐らくは英雄ではない、なんとか戦えるだけの人間が。

犠牲を減らそうと思えば、無茶をしなくてはならない。

その意味では有り得ない、湧き出るアイテム、見たこともないスキル、
といったものを駆使しなくてはならないだろう。

最初からこつそりアイテムを出しておけば良いとも思えるが、それ
にしたって名も知れない存在が駆使していい量では収まらない。

ここを切り抜けても、その後は俺は街にはいられない。

困おつとする貴族に追われ、下手をすれば人を斬らねばならぬだろう。

(……何を悩むことがある?)

強く握っていた手を開き、にじんだ汗を見る。

ぬめる手、不快感を覚える息苦しき。

それらが否応にも、目の前が現実であることを、正しくは現実としか思えないことを示していく。

ならば、当たり前前の心を持った人間としてやることはただひとつ。

勝つ！

「迎撃する！ 何人かは伝令を！ 弓の担当者は射撃用意！ 前衛は集まれ！ バラバラは死ぬだけだ！」

スカーレットホーンを抜き放ち、頭上へと高く掲げ、その赤い光を周囲に示す。

幸いにも、俺の思惑通りに、及び腰だった面々の顔がやるべきことを取り戻した顔となり、集団に動きが戻っていく。

武器を構え、陣形を組み、やるべきことを心に思い描く。

俺も、背中に武器を入れた袋を背負い、いつでも突撃可能なスタイル

ルになる。

双眼鏡モドキがなくてもゴブリンであることがわかる距離になったとき、

視界の半分近くはゴブリンで埋まっていた。

まるでファンタジー映画の草原での戦争画面を見ているようだ。

だが、数で言えば、まだなんとかなるだろう。

ゴブリンだけなら……

覚悟を決めて右手をベルトに回し、

1本のポーションを手取る。

赤色の液体、回復用ではなく、マジックポーションの1種だ。

正直、こいつの在庫はわずかだし、その後が問題だがそれも言っていられない。

そのままでは、勝てない状況。

覆すには、実力そのものを覆すしかない。

ならば、俺のやるべきことは……

「まっすぐ来るとはなっ！
スカーレットホーン 赤き暴虐の角！！」

赤色の液体を飲み干し、効果が体を満たすのを感じてすぐにスキル

を発動する。

いつぞやの対オークとは段違いの威力と範囲で、赤い光がまっすぐに集団に襲い掛かる。

ぐぐつと、魔力が減る手ごたえとともに、一気に俺の魔力が3分の1ほど消えたのがわかる。

ゴブリンの集団を光が飲み込み、俺の正面の集団が全て消える。

埃だらけのフローリングを通販で買うような掃除機をかけたように、いきなりの空白。

突然のことに、ゴブリンもこちらも動きを止め、困惑が周囲を満たす。

赤色のポーションは筋力増強、STR上昇のポーションだ。

時間は1分、在庫が少ない理由はこれだ。

効果は絶大だが、ゲーム中の日常で使うには意味がない。

今の俺のように、ユニークボスに手堅い一撃を、という使い方をしていた記憶がある。

スカレットホーンを袋に収め、取り出すのは金色と銀色に輝く長剣。

うつすらと周囲にじんできていくその光は、周りにいた集団をやわらかく包む。

「さあ、皆で始めようか。勝てる戦いを！」

「ああっ！ やるぜ、皆！」

怒号のような叫び、満ちる気合。

ようやく正気を取り戻したゴブリンと、追いついてきたオークたち
へと、

こちら側の集団が突撃していく。

とある小国の史実に、ファクトらしき存在の記述が刻まれる最
初の戦いが、今始まる。

16 「冒険者稼業・3」 (後書き)

いよいよ9月。秋の夜長に頑張ります。

17 「冒険者稼業・4」 (前書き)

台風都合で諸々遅延しました。

17 「冒険者稼業 - 4」

俺は大きくジャンプし、敵陣のど真ん中に着地していた。

目に入った大柄のオークに迷わず突撃していく。

「せいっ!」

オークの右側に抜けながら力任せに右手に握った金色の剣を袈裟懸けに振りぬく。

武器を振り上げた状態の、無防備なオークの右腕はバターナイフで切られたバターのようにすんなりと切り落とすことができた。

(後20秒ぐらいか?)

脳裏にカウントを浮かべながら、とにかく両手の剣を振るうことに集中する。

掬い上げるように振るった左手に握った銀色の剣がゴブリンを無造作に両断し、返り血とともにその命を草原に散らした。

ポーションの効力が切れるまであとわずか。

1匹でも多く切り裂くべく、手近な相手にえり好みせず襲い掛かる。

体に満ちていた高揚感が消え去り、重さが戻ってきた時、戦況は拮抗していた。

冷静になり、あたりを見渡せば各所で人間側は奮闘していた。

何名かでグルーブを作り、互いの隙をカバーしあう形でゴブリンやオークと戦っている。

と、背後から襲い掛かってきたゴブリンの顔に刺さる1本の矢。

「よう、やるじゃねえか」

声をかけてきたおっちゃんをカバーするように俺は剣を構え、飛び掛ってきたゴブリンを蹴散らす。

「少しは覚えがあるんでね。このままならいけそうだな」

答えながら、俺は戦場に違和感を覚えていた。

何かが足りないのだ。

土煙の発生源はまだ遠いだろうが、それ以外に確かいたはず……。

慌てて視界を戦場の輪の外にやれば、オークとウッドゴーレムに守られるように、

杖を持った人影、見覚えが無い相手が何匹もいた。

構えた杖に魔力が集まるのがここからでもわかった。

「魔法が来るぞ！ よけるー！ー！」

一人、その集団に駆け出しながら叫び、警戒を促すも1歩、遅い。

杖の先にはつきりと赤い、炎が生み出されるのが見えた。

（味方ごと！？ なんだってんだ！）

都合3発の、恐らくはファイヤーボールが、

一番混戦しているように見える集団に問答無用で放たれる。

今もゴブリン達と斬りあっている彼らに回避する余裕は無い。

迷わず、俺は火球と彼らの間に身を躍らせた。

背筋を焦がす緊張と恐怖、モンスターたちの魔力が俺を上回り、ファイヤーボールの威力が高い結果であれば、ここで終わる。

だが、俺は自分の体と勘を信じた。

魔法で生み出される何か、はそのままでは干渉できない。

ファイヤーボールを剣で斬っても、素通りするだけだ。

今構えている2本の剣は所謂魔法剣になるので、何らかの干渉を行うことは出来るはずだ。

時間差でまっすぐ迫る3発のファイヤーボール。

最初に到着する1発目に外側から左手を振るい、軽い手ごたえとともにそのコアと思われる部分に干渉することに成功する。

爆音、そして何かにはじかれるように左手が剣ごと飛ばされそうに

なる。

上手くファイヤーボールの効力を誘発することに成功したようだ。
力を込めて耐え、右手で2発目へと同じように切りかかる。

そして爆発。

今度は威力が高いのか、反動が重い。

(くっ！ 腕を戻せない！ ならっ！)

3発目のために姿勢を整えることが出来ないまま、
俺はその体でわざと3発目を受け止めた。

要は、直撃を受けたわけだが。

「ぐううううっ!!」

体を焼く炎、吹き飛ばさんとする爆発。

なんとか踏ん張ることには成功し、髪の毛がアフロになっていそう
だなあなどと、どうでもいいことが頭をよぎる。

こうして思考できているということは、火球は俺を倒すには至らな
かったということだ。

だが……

「あっちいいいーっ！っ！っ！」

俺は剣を握ったままで叫ぶ。

全身を炎が包んだわけで、ダメージは余り無くても熱いものは熱い。

「服がつ、服がつ！」

特別、アイテムではない部分の服が燃えているのを見るや、俺は草原を駆け回った。

幸い、ファイヤーボールに巻き込まれたのか、逃げたのか、近くに人間もモンスターもいない。

チラッと視界に入った限りでは、本来の目標だった集団も無事なようだ。

「はー、はー。よし、やるか！」

消火を完了し、俺は気を取り直して構えを取る。

何せ、こうしている間にも周囲では戦闘が続いているのだから。

後で聞いた話だが、ファイヤーボールの直撃を3発も 外から見ると2発目までも直撃に見えたらしい 受けながら戦い続ける俺の姿に、神の使いだと思った人がいたとかいなかったとか。

新しい敵集団、ウッドゴーレムへと駆け寄りながら確認したダメージは自然回復で何とかなる程度だった。

これでわかったことは、ダメージそのものは低くても、熱さや物理現象とでもいうべき物達にはそのまま、影響を受けてしまうということだ。

恐らくは台風のような暴風の元では動きにくいし、溶岩を泳ぐ、というのも無理じゃないかもしれないが俺の心が持たない予感だ。

そうになると、見た目はマングローブの木々の幹を太くして上に伸ばしました、という様子のウッドゴーレムの攻撃も、ダメージは無くてもその衝撃は十分脅威だと思われる。

声なのか、木がきしむ音なのか区別がつかない声をあげ、ウッドゴーレムの枝が迫る。

長剣と長い枝では、射程的に勝負にならない相手なので、攻撃を受けるたびに回避しては横合いからその枝を切りつけていく。

周囲の声から、まだ戦いは続いているようだ。

このまま俺がこいつらを抑えることで、後ろの面々は普通の相手と戦えることになるはずだ。

枝の1本1本も、人間で言う腕にあたるのか、切りつけるたびにウッドゴーレムが叫ぶ。

「ジエームズ達は無事だといいたが……」

「呼んだか？」

帰ってくるとは予想もしていなかった声が背中に届き、大剣の強烈な一撃が弱っていたウッドゴーレムの幹に半ばほどまで食い込む。

『~~~~~ツツ!!!!』

「凍てつく飛礫、唸れ！フリーズブレット 氷の弾丸！」

動きの止まったそのウッドゴーレムへと、こぶし大もある氷塊が次々と叩き込まれ、その命を刈り取る。

動物とは違う、叫び声とも思えないくい声が響き、その絶命を知らせる。

コーラルの魔法だ。振り向けば、クレイもコーラルを守るように、その剣を振るっている。

「このっ！ えいっ！」

ゴブリン3匹を相手に、しっかりと戦っている。

まだまだ荒削りなようだが、力の良く乗った良い攻撃だ。

「助かる。あっちはどうなったんだ？」

「半分ぐらい倒したところで、こっちの伝令が到着したから、半分に分かれて援軍に来たって訳だ」

周りを見れば、各所の攻撃も人間側が優勢なようだ。
これで行けるか、という時、どこからか叫びが聞こえる。

「ド、ドラゴンだーっ！！」

顔を向ければ、遠くで人影が空を舞い、吹き飛ばされているが見える。

恐らく、騒動の中心にいる相手に吹き飛ばされたのだ。

空には何もいない。その上でドラゴンといえは奴しかない。

俺は無言で二振りの剣を見、特に刃こぼれしていないのを確認する。

(うん、まだ大丈夫だ)

「ジエームズ、フォローよろしく」

「お、おいつ！」

背中にジエームズの声聞きながら、俺はそれでも自分の予想が外れてくれることを祈りながら、駆け出した。

後になって思えば、俺は全部自分で背負い込もうとするのは、
覚悟を決めるのとは違うということを知っていなかったのだ。

今回は、周囲の面々と協力すべきだったし、そうすることで自分が
目立ちすぎること無かっただろう。

もっとも、相手は正面から挑んで簡単に勝てる相手ではなかったの

だが、人生は、そんなことの繰り返しではあり、ままならないものだ。

「地竜、だな」

土煙を上げ、迫ってくる存在、地上を走る強モンスター、地竜だ。

（かなり……でかい！ こいつはジェームズ達がいても、勝てるか？）

相手は、海にいる鯨と良い勝負が出来そうな大きさだった。

モンスターは長く生きるほど大きく、強くなる。

当然、寿命はあるのだろうが、寿命を迎えた老モンスター、なんてものはMD時代でも見たことが無い。

代わりとってはなんだが、幼生ともいえる時期はあり、クエストでも成体では倒せないような相手の幼生時期を狙って倒すことが条件な物もあった。

前に見える相手は、逆に長く成体として生きていた相手だろう。

こうして相対していても、プレッシャーを感じる。

ふと見れば、地竜の背中にまたがった杖を持ったモンスターがにやりと笑う。

きつと、矮小な人間が1人で挑んできていることをあざ笑っているのだろう。

湧き上がる闘志を隠さず、両手の武器を構えて迎撃の姿勢をとる。

相手は成長した地竜だ。

だが、一撃で持っていられるほど俺の命は、MD時代の努力は安くない。

「あああああつ!!!」

絞りだすような叫びとともに、真正面から地竜の突撃を両手の剣で受け止め、その威力を確かめる。

硬い鱗に当たる金属同士のような音、そして確実に感じる質量差による衝撃。

俺はダメージこそ少ないものの、ガードしたまま大きく後方へと吹き飛ばされていた。

「ははっ、こいつ相手じゃ、辛いな」

痺れかけている左手をちらりと見ながら、俺は強さ的には地竜あたりが重傷を負うか負わないかのラインだと肌で感じていた。

恐らくはこの世界で言えば既に、余程の冒険者でなければ有り得ない強さなのだろうが、俺自身は落胆していた。

自分が、この程度なのだ。

勢いのままぶつかった地竜の肌は軽い傷があるだけだ。

恐らくは、適当に斬りつけてはまともにダメージが通らない。

それでもやることに変わりはない。

アクションゲームのように迫る地竜の爪を、MD時代のモーションを思い出しながら回避していく。

思ったとおり、モンスターの動きには共通点がある。

連撃も、思い出した軌道のままに迫ってくるのを見、俺は勝利が見えた気がした。

「なんだこいつ！ ええい、ファクト！ 下がれっ！」

追いついてきたジェームズの一撃が地竜に迫るが、バックステップで回避される。

よけるということは、ジェームズの攻撃はダメージになるといえる。うだ。

地竜と俺たちを中心に戦場は作られ、周囲の剣戟も再開される。

「俺とクレイであいつを誘導する！ コーラル、アースストリームの準備を！ ジェームズはごついのを決めてくれ！」

「オツケーッ！ 任せろ！」

「…っ！（じくっ）」

元気良く答えるクレイと、黙って頷くコーラル。

「しくじるなよ！」

「そっちこそ！」

駆け出し、目や肌の柔らかい部分を狙いながら、高速で両手の剣を何度も振るっていく。

地竜は背中にいるモンスターの指示を理解しているようで、的確にガードや回避をしていく。

（引っかかってくれと良いんだが……）

俺が狙っているのは、コーラルの魔法により、顎から胸元にかけてをジェームズの前にさらけ出すことだ。

ダメージの通らない攻撃を繰り返しながらも、コーラルの魔法が決めやすい位置関係を作るべく、回避先を調整していく。

俺の隙を埋めるように、クレイの攻撃が的確に地竜の攻撃を邪魔する。

「……来た！」

逃げ回る俺達にいらついたのか、大振りになった爪を余裕で回避し、その前足にあるやわらかそうな部分を切りつける。

「クレイ！」

「おうさ！」

俺が合図を叫んだ頃には、クレイは駆け出しており、反対側の足を切りつける。

まったく致命傷とはいえないが、なんとか決まった攻撃。

相手が怒ったように叫び、そして……

「弾ける大地、噴出せ！
アースストリーム地の噴流！」

噴水のように巻き上がる土が地竜の体をわずかだが、浮かせることに成功する。

「これで決めるぜっ！」

ジェームズの渾身の突きが、無防備になった地竜へと迫る！

結論から言えば、決まったと思った攻撃は 外れた。

俺の視界に入ったのは、黒い、影。

「と、飛んだ!？」

誰かの声が聞こえ、俺は地竜がジャンプしたことを悟る。

(コイツ、MDじゃ飛んだことなんか一度も無いはずっ!?)

俺は失念していたのだ。

MDに共通点があり、似ている世界だからといって
全てが同じではないと言ったことを。

モンスターが同じ行動をするなんて、誰が保証したのか。

俺の真上に落ちてくるようで、回避しようにも、今からでは間に合
わない。

身体能力を駆使したとしても、ぎりぎり間に合わないだろう。

ジェームズ達が範囲の外にいたことが救いといえば救いだ。

追い詰められた思考がフル回転し、ゆっくりとそんなことを考えな
がら、

これで終わりか?とどこかで俺がささやく。

と同時に、まだ動ける!ともう一人の俺が叫び、最後の1手を取り
出した。

MDじゃほとんど使うことも無くなった一手。

「廻る精霊の恵み！

マテリアルドライフ
制限開放・武器生成！」

地響き、そして土煙。

地竜の巨体が生み出す衝撃が近くの人間やモンスターも吹き飛ばし、落下地点の惨劇を容易に想像させる。

うめき声とも取れる地竜の声が土煙の中から聞こえ、周囲のモンスターは歓喜し、ファクトが落下地点にいたことを知るジェームズらは動揺する。

土煙が収まり、地竜の巨体が見えてきたとき、両者に同様の更なる衝撃が走った。

全身を何かに串刺しにされた地竜がうめき、その顎付近にファクトが無事な姿でいたからだ。

その体は自身の物と、地竜の返り血で染まっている。

手に持ったままの剣は2本とも地竜の顎を貫き、その牙が肩に食い込んでいる。

目は光を失っておらず、生き残っていることを証明している。

驚異的な身体能力で押しつぶされる運命から、相打ちになるところまで持っていた。

これはなんとか周囲の人間にも理解できた。

だが、あの剣や槍達はなんだ？

当然、ファクトはそこまでの武器は持つておらず、誰しもが突然出てきた武器たちに疑問を覚えていた。

「ジエームズ、止めを」

「はっ！？ わかった！」

搾り出すようなファクトの声に我に返ったジエームズは力強く一撃を地竜の頭に叩き込み、それは無防備にさらけ出されていた頭へと無事に止めとなって決まる。

地竜から力が抜け、地面に倒れこむ。

そして、無数に刺さっていた武器たちはなぜか消え去った。

それを見たゴブリンをはじめとして、モンスターたちは全てが撤退を始める。

モンスターがかなり離れたのを確認し、ファクトもようやくと言う様子で剣を収め、大きく息を吐いた。

「助かった……か。グッ」

全身を蝕む予想外の痛みにも声を漏らしながら、倒れないように踏ん張る。

なんとか発動した奥義、マテリアルドライブ制限開放・武器生成のおかげで地竜を足止め、迎撃できたことに満足しながら、代償に内心頭を抱えていた。

ゲームであるMDの名前を冠したスキルは、魔法のように呪文のようない一言で正確にはスキルとはいいがたい効果を生む。

あらかじめ登録されたスキルの、再詠唱、再使用の時間をキャンセルし、さらには使用時の魔力消費を無くし、必要アイテムの制限解除の効果を発生させる。

使用時には、現時点の魔力全てを消費する上、使用後は1LV上昇するか、

- ・ 3日目までは魔力が回復しない
 - ・ 4日目以降、2週間は回復量が半減する
 - ・ LVか、期限の条件を満たすまでは登録スキルは使用不可能
- と、廃人泣かせの代償を負う必要がある、後半ほど使いにくい奥義になる。

だが、前衛タイプで言えばどんな強力な技も効果時間内であれば連続で繰り出せるし、無数のファイヤーボールを叩き込むことも出来、俺であれば普段作れない武器をほぼ同時に作成可能だ。

今も、普段であれば材料確保にかなりの時間を必要とする武器たちを一気に生産したのだ。

が、攻撃として使うほどの余裕は無かったので、地竜は罫のある落とし穴に落ちたかのように、自分から刺さってきたという状態だ。

頭が痛いのは、作成が出来ないということは、鍛冶職人として致命的だということだ。

多少は現実の鍛冶の手順も覚えているとはいえ、それもゲームでの必要にかられての補助的な知識だ。

さすがに1から作成の手順や必要なこと、は覚えていない。

何より、突然製作の速度やら対応範囲が変化するのもおかしな話だ。

どうしたものか、と悩みながら、俺の意識は遠のいていった。

気を失ったファクトをジェームズは抱きかかえ、コーラル、クレイとともに街へと戻っていく。

「ファクト……お前、一体……」

目を覚ませばやってくる騒動を知らないまま、ファクトは深い眠りに落ちていた。

17 「冒険者稼業 - 4」 (後書き)

次で1部完、な流れになります。

18 「明日の行き先」(前書き)

説明とかが長いかも？です。

18 「明日の行き先」

夢、夢を見ていた。

真っ白な世界。

真っ白な空。

真っ白な地面。

響く小さな声。

1度は面倒くささに見捨てた俺だが、すぐさま取って返して捨てしまった。

小さな、小さな命。

ゲームをするのもそこそこに、面倒を見ることになった小さな子猫。

一人身の寂しい空間を埋めてくれた存在。

自分にも何か出来るかな？と思わせてくれた存在。

いつのまにか帰ってこなくなったが、窓辺に居ついていたあの猫は今どうしているだろうか？

元気でやっていると良いのだが。

俺は、今も選べるだろうか？

自分が後悔しない様、何かを、誰かを。

この、現代文明の欠片も見当たらないファンタジーな世界で。

目が覚めたとき、俺はベッドの上だった。

何か、ごちゃ混ぜになった夢を見ていた気がする。

天井を向きながらぼんやりと過ごすと焦点が定まってきた。

部屋の感じから、街中にある宿屋のようだ。

窓は暗く、壁にあるランプの光が部屋を照らしているところから、朝や昼では無いように見える。

「ここは……くっ」

体を起こすと、痛みというより立ちくらみに近い症状が頭を襲う。

どうやら魔力の枯渇によるふらつきのようなのだ。

確かMDでも総魔力の1割を切ると、ハードの制限内ではあるが、不快感が襲ってきた覚えがある。

すっかり食事も取らずに丸一日、ゲーム内にいた後の目覚めのよう

感覚からして、半日か1日以上はここで寝てしまっていたのではないだろうか？

まだ動かない頭でそんなことを思い浮かべていると、部屋の扉が静かに開く。

「お邪魔しま……あ！目が覚めたんですね」

部屋に入ってきたのは、水桶を持ったコーラルだった。

防具を外し、女の子然としたかわいらしい私服姿だ。

胸元は少々ささやかなようだが。

「おはよう、でいいのかな？ ジェームズはここにいるのか？」

「あ、はい！呼んできますね！」

俺が呼び止めるまもなく、水桶を部屋に置いてすぐに駆け出すコーラル。

その元気な様子を見て、出会った頃の印象との違いに一人、笑う。

出会った頃のコーラルは少しおどおどした様子が目立った。

清楚な美少女、といったところか。

今は少し丁寧すぎるかな？ぐらいに収まっている。

戦闘中はどちらかというと冷静に勤めようとしているのか、冷たい口調が目立つ気はするが、戦時に口調やらが変わるのは良くあることだ。

待っている間、ぼんやりと空中に自身のステータスを含めてウィンドウ群を展開させてみるが、
まだ魔力のバーは真っ黒のまま、ゼロだ。

回復ポーションを使えば強制的に少しは回復するだろうが、今は必要ないだろう。

バーが動く様子も無いので、まだ3日は経過していないということになる。

ゲームではHPに相当する体力用のバーは少し黒い。

今もじわじわと白くなっているところをみると、
戦いのダメージは抜け切っていないようだ。

MD時のように具体的な数値が見えなくなっているので詳細はわからないが、後1割ほどは黒い。

数値そのものがわからないのはその他のステータスも同様のようで、
数値の書き込まれていないメモリが時折あるだけで、
筋力やその他の値も、バーの長さで相対的にわかる程度だ。

基本的には最後にゲームで確認したとおり、所謂DEXに相当する
値だけとはかく高い。

他人と正確に比較が出来ないので不明瞭ではあるが、武器などのアイテム補助なしでは米俵を2つ担ぐのが限界というぐらいだろうか？

それでもこの世界の冒険者からすれば、中堅以上の動きは出来そう

ではある。

特に、特定の部位を狙ったり、器用さが要求される状況では俺の思考が追いつく限りは様々なことが出来そうだ。

落ち着いたら、本格的に訓練を試みようと思っている。

ステータスとしては強くても、まだまだそれを使う術が甘いのだと思う。

自分の実力を把握し、有効活用すべく経験を積まなければいけない。

バタバタと廊下を走る音。

どうやらコーラルが帰ってきたようだ。

複数聞こえることから、ジエームズも一緒なのだろう。

「ようー！ 思ったより元気そうじゃないか」

開口一番、ジエームズは豪快に笑い、ベッドにいる俺の肩を勢い良く叩く。

「だからといって手加減なしで叩かないでくれないかな」

さすがに本職に勢い良くやられると体に響く。

「細かいこと言うなよ！ ま、倒れた時は少し焦ったぜ」

「そうですよ。あのまま起きないのかと思っちゃいました」

真面目な顔に戻ったジェームズにコーラルが続く。

おや？

「クレイはどうしたんだ？ 用足しか？」

「たいしたことじゃない。研ぎなおしにいつてもらってる。ほれ」

答えてジェームズは椅子に座り、持っていた大きなスイカぐらいの何かを投げてきた。

「つと。なんだよ……おおっ!？」

布袋に入っていたのは、鱗模様の何か。

いや、この色、この感触！

「まさか、オジハルコンか？」

手にとってウィンドウをさりげなく確かめるが、間違いは無い。

が、ゲームで入手していたものとは明らかに雰囲気が違う。

思えば今回相手にした地竜はかなりでかつた。

素材達も、相手によって性質を変えてくるということだろうか。

「おう。やっぱりわかるか。初見で見分けるとかさすがだな。国の担当者ですら何日も検査にかかるっていうのによ」

「私も初めて見ました。ジェームズは知ってたみたいですけど……」
なんでもないようにジェームズが言い、コーラルはオジハルコンの輝きに目を奪われている。

冒険者稼業の長そつなジェームズのことだ、どこかで見る機会があったのだろつ。

「まあ……な。それでこれをどうしろと？」

「どうもしないさ。やるよ、お前に」

何かを作れといわれるかと思ったが、出てきた言葉は驚きのものだった。

この世界でのレア素材の価値はまだはつきりとわからないが、相応に価値のあるものなのは間違いない。

「他の奴らは普通の鱗やら、爪やらで既に頭が一杯さ。俺はさつさと牙やらをもらって、こつそりとこいつを取ってきたわけだ」

曰く、遅れてやってきた貴族のお偉いさんが、分配を宣言したそう
だ。

何でも、予定より大規模な襲撃だった割に犠牲は少ないということ
で、約束の報酬外のボーナス扱いなのだそうだ。

貴族にしてみれば、自分の領内でこれだけの強敵が防げたということ
とで良い材料になるらしい。

「ほー……ところでこいつ、どこにあった？」

牙やら爪というようなわかりやすい部位と違い、何々の心臓、のよ
うなアイテムはMDでは、相手の構造データが消え去った後に残る、
という具合だったのでオジハルコンの具体的な採取場所などは不明
なのだ。

「……ここだよ、ここ」

ジエームズが微妙に嫌そうな顔をして、自分の下の方を指差す。

足？ いや、あの位置は……。

「え？ おい、これ金……」

コーラルもすぐにわかったようで、真っ赤になって部屋を出て行っ
た。

「そういうことだ。こんなんぶら下げて動くんだから、すげえよな」

あの地竜、雄だったのか……。

「貴重品には変わりはないから、ありがたくもらっておく」

ベッドの傍らにおいてみるが、聞くまでは神々しかった輝きが、今
は妙なものに見えるから人間不思議である。

「そうしとけ。で、どうする、今後。このまま戻ってもアレは何なんだ？ お前は何者だって聞かれるぜ？」

丁度二人きりになったからか、ジェームズは真面目に話を切り出してきた。

俺は、異世界から来たんだ。

そう告白できたらどんなにすっきりするだろうか？

無論、いくらジェームズ達でも信じてはくれないだろう。

それに、信じられても後が怖い。

何故来れたのか、俺にも説明は出来ないし、証明も出来ない。

奇跡の力、と言われてしまふのだろう。

「村に伝わる遺物だったのさ。あれで壊れてしまったけどな。見ての通り、すごいことが出来るが、すぐ消えてしまふ。普通じゃ使えようが無いだろ？」

何故出来たのか、何故今出来ないのか。

相手の納得できる答えを用意できない俺はこう答えるしかなかった。

「ま、そう言うしか普通はないわな」

ジェームズも色々と想像していたようで、すんなりとそう答える。

「……すまない」

なぜか、俺は謝っていた。

「何を謝る？ お前は街を、守っている人間ごと救った。それでいいじゃないか」

ジエームズの言葉に嘘は無いように聞こえる。

だが、現実的には追及してくる人間のほうが多いだろうことも予想できる。

「ただ、他の奴らは納得しないだろうな。そんなほいほいと良い遺物があつてたまるか！ っつてな。と、ここで1つ、手がある。教会を知っているか？」

考え込んでいた俺に、ジエームズがそんなことを言い出した。

俺は黙って頷き、先を促す。

「ま、大地や空、全てに宿る精霊と共に、っつて奴だな。これの教義の中に、奇跡があるんだよ。精霊に好かれた者が、時折起こすつてな」

川が左右に割れたり、鳥達が遠くまで運んでくれたり、枯れ果てた森が元の姿に戻ったり、等々。

大体10年に1回あるかぐらいだそうだが、皆無ではないらしい。

「俺が精霊の奇跡で武器たちを生み出せた、と」

そういうことだ、とジェームズが頷く。

「なにせ、奇跡は決まったことが起きるわけじゃないからな。そんなことあるわけがない！とは誰もいえないのさ。もつとも、教会の関係者に地味にマークされるだろうことは間違いないがな」

それでも、現状よりはマシそうである。

「それしかないか……」

大分楽になってきた体を起こし、俺もベッドに腰掛ける形でジェームズと向き合う。

「一応、今は戦いの疲れで寝込んでいる、としてあるから何日かはこのままでも過ごせるだろう。街は勝利の宴の真っ只中だ。誰も気にしないさ。ただ、グランモールには戻らないほうが良いだろうな」

「え？ 何かあったのか？」

グランモールに、とはどういうことかと聞くと、武器を渡したグランモールの使者が、貴族と一緒にここについた頃には戦闘が終わっている、ということと慌てて情報を集め、俺がかかわっていることを知ったらしい。

そこで、グランモールにある工房が差し押さえられそうだとかなんとか。

隠すことなく、貴族が街の入り口で叫んでいたためにジェームズたちにも聞こえたらしい。

「この場所は誰も喋っちゃいけないし、後は目の前の地竜の有効活用のほうも重要なようだな」

どこにいるかもわからず、目覚めるかわからない俺自身より、在庫として工房にある武器やあるかもしれない秘密と、地竜の素材のほうが重要ってところか。

今戻っても、貴族子飼の兵士がずらりと……か。

部屋に放り込んでおいた祝福された武器達が多分、回収されているのだろうが、仕方がない。

と、廊下を歩く複数の足音。

「ただいまー！ あ、おはよう、ファクトー！」

「はわわ、戻りました」

武器を抱えて元気良く入ってきたクレイに、先ほどのインパクトが微妙に抜けていないコーラルだった。

「おう、ちゃんと巻いてきたか？」

「もちろん！ 色々裏口から出てきたぜ」

どうやら、ここに直接は来ないように色々と考えていたようだった。

「迷惑をかけた。みんな無事でよかった」

「へへっ、まあな！」

「私の魔法がもっと上手ければ……」

「最後は持ってつちまっつて悪いな！」

三者三様、わかりやすい反応である。

合計4人と少し手狭になった部屋で、俺の心は少し、軽くなっていた。

「よし！　じゃあまた明日来るぜ」

「あれ？　これからファクトとどこに冒険に行くかを決めるんじゃないかったの？」

退出しようとしたジェームズにクレイが何でも無いようにそんなことを言い放った。

「ん？　そうだったのか？」

「あー……ほれ、これで街で暮らしにくくなるだろうから、一緒に冒険できたら楽しいかな、ぐらいは言ったけどよ」

俺の追及の視線に、ポリポリと頭をかきながらジェームズが答えてくれた。

「で、でも！　ファクトさんがいてくれれば心強いですっ！」

フォローのためか、コーラルまでそんなことを言ってきた。

「んー、世界の色々な場所、色々な事を知りたいから誰かと一緒にいうのはありがたいが、ずっとは難しいぞ?」

俺が欲しい情報である世界のことであったり、街やダンジョンのことなどを聞ける環境は非常にありがたい。

「そりゃそうだ。出会いがあれば別れがあるってな。気の済むまで一緒にいれば良いし、目的があれば分かれば良い。で、どうだ?」
ジエームズとしては俺の体調が戻ってから酒の一杯でも引っ掛けながら、というつもりだったのだろう。

妙に照れくさそうな表情だ。

「そうだな。そんな形でよければ、こちらからお願いするよ」

俺の返事に、若い二人ははしゃいでいる。

「それで、どこに行くんだ?」

「ここから北。岩山と森、湖に大河と、精霊の恵みあふれた土地、ガイストールさ」

モンスターの住処も近いから、最前線だけだな、とジエームズは付け加えた。

俺がOKを出すと、3人は自分の部屋へと帰っていく。

(ガイストール……か。そこならわかるか?)

俺は一人、思考をめぐらせる。

激戦区であれば、わかるかもしれない。

この戦闘で感じた違和感、見覚えのないモンスターたち。

自慢ではないが、MD時代には攻略サイトは良く目を通していたし、戦えないクラスのボスですら、画像や動画でその姿を覚えてもいる。だが、ウッドゴーレムの傍にいた影、そして地竜に乗ってまるで指示を出していたかのような奴らは覚えがない。

アイテムですら、遺物を除けば、見覚えがないものは無いのだ。

新しい発見は、俺に何をもたらすのか。

この世界での明日の行き先は、まだ、トラブルが多そうである。

18 「明日の行き先」(後書き)

各種設定更新後、2部開始予定です。

19 「北の地で - 1」 (前書き)

短め。導入話ですので、進展は基本的にありません。

19 「北の地で - 1」

地竜達との戦いから2日。

目覚めてから1日。

どうせガイストールまでは馬車でも何日もかかるといふことで、道中で休むことにして早々に宿屋を引き払った。

グランモールへはほとぼりが冷めた頃に様子を伺いにいくとしよう。

「思ったより荷物は軽いんだな」

御者席で日に当たっていると、手綱を握っているジエームズにそんなことを言われた。

「さすがに材料全部は持ってられないからな。金目の物と、装備ぐらいい」

答え、空を眺める。

ジエームズはただの暇つぶしだったのか、そうか、と小さくつぶやいて

なんでもないように前に向き直った。

俺も特に続けず、ぼんやりと上を向く。

真っ青な空。

時折ある白い雲が高さを感じさせる。

気にしていなかったが、俺がこの世界に来たのは夏だったらしい。

現実世界の日本と違い、暑いと言っても湿気の少ない気候だったからか、

余り気にならなかったともいえる。

頬に冷たい風を感じながら、俺はまとまりのない思考に溺れていた。

この世界への転移、あるいは転生。

新しい生活、そして戦い。

大人しく暮らしたければ、手持ちの銀貨だけを使って親の遺産を受け継いだとしてもしておけばよかったのだ。

あるいは、遺物の存在を知った時点で、どこかに取り入って死の商人のごとく、

戦争に影響を与えるような供給者になることだって出来た。

だが、結局は自分で現場にいられるような行動を取ってきた。

それはプレイヤーとしてのゲームクリアへの欲望なのか、自身の強さへの疑問なのか、それとも、この世界への問いかけなのか。

自分のことながら、はっきりとはわからない。

だが、俺はこの世界で生き残らなければいけない。

この世界が、機械仕掛けの何かが用意した場所なのか、無数にあるといわれる平行世界の1つなのかはわからないが、現実なのだ。

正しく理解し、正しく付き合うべきなのだろう。

（自分の作った装備が英雄の強さを支えている、とか格好良いよな）
幾度かの訓練の結果、俺自身の筋力などは人並み以上には上がらないことがわかっている。

恐らくは、Lvが上昇しない限りは能力に変化がないのだろう。

となれば、上がる機会に恵まれない状況である以上、俺はこれ以上強くなれない。

俺自身は、英雄になれない。

遠回りだったが、その事実俺自身に、ゆっくりと染み込んでいく。

一緒に旅をするジェームズたちを支えて行くのか、どこかで違う相手に出会うのか、それはわからない。

わからない……が。

外套のポケットから、緑色の石を取り出してぼんやりと眺める。

預かっている壊れた杖から、石の部分だけ取り外したのだ。

適当にカッティングしたようなその表面も、良く見ると何らかの規則性が見て取れる。

ふわりと、唐突に浮かぶ白い人影。

ミニフィギュアのような大きさの精霊が何人か石を中心に浮かぶ。

今は鍛冶の際に、勝手に力を借りたり、入り込んできたりする彼らだが、

俺がちゃんと理解していけばもっと深く、関われるのかもしれない。

見ていると、精霊の1人がこちらを向いたままその姿を消していく。

石と同じ、濃い緑の瞳。

幾重にも重なった森の中に注ぐ日差しのように、輝きを含んだ瞳に見つめられながら、

俺は消える様を眺めていた。

切り札を使ってから丁度3日目の夜、ステータスウィンドウを確かめた俺は、

わずかながら魔力のバーが白くなっていることを確認する。

今は見張りの時間だ。

街道沿いの一角に、キャンプを張っている。

ガイストールまでは、話によれば後4日はかかるらしい。

回復量が半分とは言え、それだけあればかなり回復できそうだ。

「武器生成 - 近距離C - 《クリエイト・ウェポン》」

小さくつぶやき、スキル実行を試みる。

わずかに手ごたえはあったが、何も起きなかった。

魔力量としては、足りないということはないぐらいの消費量なので、やはり使用不可能なようだ。

ため息をつき、大量の星が散らばる空を見る。

大きな月、まばゆい星空。

きつと火を消せば、無数の星が見えるのだろう。

のんびりと一夜が過ぎていく。

「ガイストールには有名人っているのか？」

途中、俺はそんなことを聞いてみた。

ガイストールまでは後1日といったところのようだ。

ガイストールはグランド帝国の時代からあるらしく、その占領範囲も時代によって変化し続ける、まさに最前線なのだという。

近くには豊かな森や、豊富な鉱山類もあり、土地も肥えているらしい。

その分、モンスターも過ごしやすいのか、戦闘も度々起きているのだそうだ。

それでもこの土地から供給される資源や物資達は各地で重宝されているようで、

職人の引き抜きも、この街からはほとんどおきていないらしい。

もっと早くこの話を聞けていれば、目的地に出来たのだろうか、後の祭りだ。

ともあれ、MD時代も合わせればこの世界の人類の歴史は2000年以上続いているのだ、中には英雄であったり、伝説級の人物が1人や2人は出てきているに違いない。

ガイストールにもそんな存在がいれば、何かの手がかりになるかもしれない。

「いるにはいるが、変なものも多いらしいぞ？ 神出鬼没の怪盗が最近はいるっていうな」

そういうジェームズの表情は微妙に苦い。

……どうやら、長い歴史は色々と生み出すらしい。

「よし！俺が捕まえてやる！」

話を聞いていたクレイが叫び、馬車の中にも関わらず、立ち上がる。

「あっ」

危ないから注意しようかと思った時、コーラルの小さな声と同じくして、馬車が石でも踏んだのが、大きく揺れる。

悲鳴も上げれぬまま、クレイは馬車の中をバランスを崩して転がっていった。

「お約束だな」

「まったくだ」

「……はい」

道中、モンスターの襲撃もなく、平和そのもの過ぎて体がなまりそうだなと思う頃、ようやく建造物らしきものが見えてくる。

「あれがガイストールの第一の壁だ。街はもつと先さ」

モンスターの襲撃に備え、幾重もの囲いのように壁を作って立てこ

もれるようになっていいるらしい。

遠いその壁を見つめている俺の体を、冷えた風が撫でていく。

思ったより寒く、北の地にやってきたことを実感させる。

「着いたら、ローブが欲しいです」

「俺もさすがに夜は冷えるかもしれない……」

馬車の中にいる若い2人の声に、俺は自信満々に振り返り、笑う。

「なあに！ 街についたら何か作るさ！ 任せとけ！」

「お前、裁縫も出来たのか？」

ジエームズの疑問に、俺もはたと思う。

（布素材も、ゲーム同様にハンマーで叩けば良いんだろうか？）

防具のほとんどは金属、あるいはモンスター素材だったので深く考えたことはなかった。

「やってみて駄目だったら……奢るから何か買おう！」

我ながら駄目駄目な発言をしながら、俺の新しい生活の場所へと馬車は確実に進んでいた。

19 「北の地で - 1」 (後書き)

気がつけばお気に入り4000件近し！ ありがとうございます！

20「北の地で-2」（前書き）

じわりと登録などが増えていて感謝です！

良いなと思った箇所があれば遠慮なく書き込んだり、つぶやいていただけると小躍りします。

誤字脱字等ありましたら、こっそり直しますのでご報告願います。

20 「北の地で - 2」

街はまさに活気にあふれていた。

街が大きくなる度に防壁の外に新たに区画が作られ、さらにそこを囲むように防壁が、の繰り返しで何層にも分かれた造りらしい。

内側に行くほど古く、歴史ある街になっていくようだった。

中心に行くほど、住宅街となるらしく、外側ほど冒険者や彼らを相手にする商売人が忙しそうに行き交っている。

酒場も多く、パーティーを組んでいると思わしき集団が朝から騒いでいるのが見て取れる。

「へー……すごいな」

「いつ来ても騒がしいぜ。おい、クレイ、コーラル、飲まれてるんじゃない」

俺自身の感想はあっさりしたものだったが、クレイ達は街の雰囲気飲まれたのか、ぼかーんとした様子で馬車から顔を出していた。

「!? あ、うん。燃えてきたぜ！」

「クレイったら、もう」

必死なクレイの様子に、コーラルが誘われて小さく笑う。

良い感じに緊張はほぐれたようだ。

「ジエームズ、今日は宿で部屋を取ったあとは街をのんびりでいいのか？」

「ああ、情報も集めなきゃいけないしよ」

そういつてジエームズは馬車を止める。

どうやら専用の場所に預けるようで、荷物を持って4人で連れ立って歩くことになる。

「よし、じゃあ俺は露店のほうから回ろう」

先ほどからジエームズが飲みたそうにうずうずしているのを見て取った俺は、

役割分担を自ら申し出る。

「じゃあ私はジエームズについていきます。魔法使いの冒険者がいるかもしれないし……」

コーラルの一言に、ジエームズの動きが一瞬固まったのは気のせいではないだろう。

別にお酒が駄目だという子ではないが、飲みすぎにはうるさいようなのだ。

「じゃー、それなら俺はファクトとだな！ よろしくー！」

「良いものがあつたら奢つてやるさ」

答えながら前を向くと、大き目の宿屋が見えてきた。

「あれだ。よし、何にしても荷物を置いてそれぞれ出発つてことでジエームズに従い、それぞれに横並びで部屋を取つて宿屋の前で合流し、2組に別れて街中に歩き出すことになった。

街の構造そのものは複雑なようだが、賑わっているのか、騒がしいほうへ向かうと、
すぐに多数の露店が壁に沿う形で大量に並んでいるのがわかった。

どちらかというと、生活より冒険のにおいを感じる中身だ。

ここでは武具も多く扱われているようだった。

新品のものから、冒険者達のお古なのか、使い込んでいる様子のもので様々だ。

あちこちの店頭での交渉事の叫びや、行き交う馬車等の音が響いている。

いくつかの店に顔を出し、話をしながらアイテムとして手に取ってみるが、

残念ながら全て一般品ばかりだ。

ならば情報は、と思ひ色々と話しかけてみるも、
今までに聞いたものと余り変わらない。

これはこつちは外れか？と考えた頃、一際目立つ声が離れた場所から聞こえた。

「なんだあ？ この汚え壺は。子供の工作かよ」

目を向ければ、離れた場所にある木の下に出ている小さな露店を取り囲むように数名の男。

いかにもなチンピラ風だ。

「ファクト、あれ……」

「大きな街だと良くありそうだな」

小さな店に因縁をつける図、といったところか。

背中に走る昔の光景を見ているような不快感を覚えながら、遠巻きに様子を伺っていると、特に暴力を振るうわけでもなく、一通りの嫌味のような言葉を浴びせ、男達はすぐに動き出した。

「深部に潜れない奴にはお似合いの店だぜ」

男達の、店主を馬鹿にする声を聞きながら、

俺は興味を引かれ、ガラクタばかりだと男達が言っていた店に歩み寄る。

「見させてもらつよ」

「ああ、じゅつくり」

あんなことがあったばかりだというのに店員の彼は落ち着いた様子だ。

ああいったことに慣れていいのか、別の理由か。

(深部ね……ダンジョンでもあるのか?)

「安いけど、使い道がわからないんだけど」

クレイのぼやきどおり、ぱっと見は確かに、錆びた金属の板や、ヒビの入った壺等、

アンティークだ、とでも言わないと二束三文にもならない感じた。

頭をよぎった男達の言葉を隅にやり、良いものでもないかと

色々と手に取る度に出るウィンドウも、アイテム名は壊れたなんとかとかばかりだ。

俺がスキルを使って還元すれば素材になるし、フィールドにもやさしいのだろうが……

と、店主の傍に分けて置かれた、珍しく刃こぼれもないダガーが目に入り、思わず手に取る。

値段的にはこれまでに他の店で見た良質の武器より何倍もする値段がついている。

ウィンドウに出てきたものは……

「これ……ヒートダガーだ」

俺の言葉にクレイと店主が大きく反応する。

クレイは新しい武器への興味、彼は……？

「わかるのか、あんた」

「まあね、これでも色々作ってるんでね」

探るような店主の視線に、俺は肩をすくめて答える。

俺が思わず声に出したのには理由がある。

ヒートダガー、名前の通り追撃として炎の追加ダメージが発生する魔力剣の1つだ。

刀身が熱いのか、炎が襲い掛かるのかは、良く覚えていない。

ただ、わずかな魔力で効力を発揮するので、初心者から中級者まで、人気のサブウエポンだった。

入手方法として有名なのが、ドワーフの里でのクエストによる入手である。

ドワーフはMDでは最初はそう友好的ではない。

商売などのやりとりはあるが、深入りはしない、といった感じだ。

里でのクエストをこなすことで、信頼の証としてこのダガーが送られるのだ。

エルフと違い、比較的近い場所にいるので、MDではポピュラーな異種族である。

(そうか、ドワーフがいるのか)

MDでもドワーフ達の居場所は一箇所ではなく、ガイストールのよ
うな街の傍に
必ずといって言いほど隠れているのだ

店主の反応は、掘り出し物が1発で見つかった、という反応ではな
く、知っていることへの驚きだった。

「近くに彼らの里があるのか？ 出来れば挨拶をしておきたいんだ
が」

「なんだ、そこまで知ってるのか。ああ、こっから1日も馬で走れ
ば着くよ。」

「ちょっと迷うけどな。入り口代わりに小さな廃墟があるからそこ
を目指すと良い」

ドワーフ達を知っているかのように装うと、彼はすぐさま話し出し
てくれた。

ただ、入り口から先は詳しくは教えないのがルールだと言い、
行けばわかるとだけ店主は付け加えてくる。

「ありがとう。でもこのダガー、売ってても良いのか？ 贈られた
品だろう？」

俺が問うと、店主は首をかしげた。

「いや？ 作ったのはドワーフに間違いはないけど、そいつ自体は
遺跡で見つけたもんだ。詳細は彼らに会ったときに教えてもらった

んだけどな。俺は必要な場所まで行かないからよ」

特に冒険者として働いているわけではないという彼は、日々をあちこちの遺跡で過ごし、適当に漁っては売ることを繰り返しているらしい。

それでもこの街だと日銭は十分に稼げるようで、ヒートダガーはたまたま見つけた隠し部屋にあったとか。

確かに、握りの部分は若干古さを感じる。

ドワーフはこのダガーを見て、彼のことを、ダガーを贈られた相手と勘違いしたのだろうか？

(可能性としては有り得る。となると、買いだな)

「そうか。これ、もらうよ。後、そっちの壊れた奴らも」

予想通りなら話が早いので通行証代わりにと購入することにした。おまけに、素材に戻すこと前提で壊れた武器や金属製の何かをまとめていくつか買い込む。

「まいど！ 1、2……うん丁度だな」

値段的には普通のダガーが20人分買える位だったが、性能的にも申し分ない。

クレイ、もしくは護身用にコーラルに持たせても良いだろう。

クレイと2人、他の店も見ろべく歩き出したときだった。

「なあ、ファクト。俺、ドワーフ見てみたい！ さっきの話だと近くにいろんだらう？」

「クレイは異種族に会うのは初めてか？」

俺が持ったままのヒートダガーに目をやりながら、そんなことを言ってきた。

「いや、前に見たことあるけどさ。ドワーフってすごい武器作るんだらう？ 格好良さそうじゃん！」

冒険者でも男の子！と言った感じが、クレイの言葉には力が籠っていた。

確かに、森の民なエルフと違い、ドワーフはどちらかという土、岩などの地面に近い種族だ。

隠れ住む都合上、森が多いが、近くに山があることが多い。

基本的な素材を入手するにも、お世話になる相手だった。

「確かに。近くにいろなら、一緒にこなせる依頼がないか、ジエームズたちと合流して探してみるか」

俺の技術的な修行にもなりそうだと感じ、俺は快諾した。

宿屋にて

「なるほどな。そいつがあれば顔パスってわけか」

「かもしれない、だけどな。2人の武器の強化も出来るかもしれないし、ドワーフにも魔法使いはいるはずだからな、良い話が聞けるかもしれない」

ジエームズもドワーフには出会ったことがあるらしいが、まだ親しくなったことは無いそうだ。

ちなみにここはクレイの部屋だ。

部屋割りは両端を俺とジエームズ、中2つを若い二人が、となっている。

こうしておけば内緒話も聞かれにくいし、襲撃の際も、俺とジエームズが最初に気がつける状態になっている。

「いきなり落とし穴が作れる魔法があるらしいので、それをぜひ知りたいです」

何か思い入れがあるのか、コーラルがぐぐつと拳を握って力説してきた。

土系統の魔法は、文字通り地面を操る。

いきなり土の壁が出てきたり、鋭い岩が乱立したり、今言ったよう

に穴が開いたり等だ。

直接のダメージ以外に、足止めという点では相手を殺すことなく行えるので火等より有効な場合もある。

「いつ行くんだ？ 明日？」

「待て待て。場所はここから北西だったな？ そっちで一緒にこなせる依頼が無いが、1日かけて確認の上で向かう。路銀も無限じゃないんだからな」

鼻息荒く、勢いの良いクレイをジェームズが宥め、方針が決まった。

「モンスターの素材集めか、採取なんかかな。コーラルはどう思う？」

「そうですね、薬草類はいつでも需要がありそうですし、いいんじゃないかと」

丁度その方向に退治して欲しいモンスターの住処がある、なんてことは恐らく無いだろうから、
こういった依頼に落ち着くことだろう。

食事の時間となったが宿屋ではなく、酒場でとることにした。

依頼探しがついでに行えると思ったからだ。

良さそうな酒場に3人で入り、酔って騒ぎながら、丁度良さそうな依頼を見繕って夜は更けていく……

21 「北の地で - 3」 (前書き)

余りお話が進んでいません。力不足を感じます。><

21 「北の地で - 3」

「おい、聞いたか？ 地竜が街を襲ったって話」

「ああ、聞いた聞いた！ しかも、倒されたんだろ？」

俺はそのとき、2階のカウンターに移動して洋酒に似た香りの強い酒をちびちびと飲んでいた。

いよいよ情報収集に向かうかと思っていた矢先、無視できない話が耳に飛び込んできたのだ。

ちなみにクレイ達とは少し離れている。ジェームズもこの階にいないはずだ。

この酒場は2階建てになっており、2階は飲んでいる面々も熟練を感じさせる冒険者や、ゆっくり飲むつもりの人間が多いようだ。

雰囲気を抑むためにゆっくりとしていたところで、別の意味で当たりを引き当てたようだ。

確かに黙って街を出てきたのだから、何らかの騒ぎにはなっているだろう。

怪我が悪化して死んだ、とは思われていなくてもややこしいことに

は違いない。

(変な噂になっているかな?)

さりげなく聞き耳を立てていると、男2人の声が他にも聞こえたのか、

俺も聞いたぞ!などと乗ってくる相手が増えてきた。

これはまずい、と思ったが話は妙な方向に動いていた。

「違っつて。金色の髪をした大男が素手でふっ飛ばしたんだって!」

「いやいや、赤く目を光らせた魔女が魔法で切り裂いたって言うぜ?」

「なんだお前ら、全然違っつぞ。究極の技術を身につけた不老不死の職人が勇者に武器を授けたって話が本当に決まってる!」

……俺が言っつのもなんだが、この世界の冒険者はゴシップ好きなのだろうか?

もちろん、興味を持つのは儲けるためには必要なのかもしれんが……。

いつの間にか酒場の一角を完全に巻き込んだ、【誰が倒した】論議は、

酔っ払った冒険者のテンションと相まって、たまに混ざる本当の話、大多数の違っつ話、とが完全に混ざり合っつて良くわからないことになっつていた。

これで上手く噂が広がれば良いだろうが、そうもいかないだろう。

究極魔法だの、聖剣だの、さすがに荒唐無稽な話は信じる人間は少ないはずで、

自然と有り得る話が残るだろう。

多少は脚色されたとしても、俺の名前はともかく、姿は話に昇ってもおかしくは無い。

グランモールの貴族の手が迫ってこないとも限らない。

今のうちに何か手を打つことを考えなければいけないだろう。

「っと、いかんいかん」

考え事に集中していると、手元のグラスで氷が音を立てた。

気がつけば結構な時間がたっていることが氷の溶け具合でわかる。

軽くグラスを回して濃さを調整し、一気にあおって喉を焼くアルコールの感覚に気を引き締める。

話の振り方は……強い武器が欲しい、潜り甲斐のあるダンジョンを探している、あたりで行こうか。

空きのあるテーブルに無造作に立ち寄り、適当におごりながら酒に付き合い、混ざり合う話から有効な情報や、依頼につながりそうな話を聞きだしていく。

やはり、ドワーフそのものは街でも知られているらしく、

たまに街に商売でやってきてはその武器は高値を呼ぶらしい。

どうも、街にいる著名人の主催オークションらしいのだが……。

ドワーフはどこから来るのか？も酒のつまみになっているようだった。

ドワーフの里に先に顔を出すべきか、コネのありそうな主催者に当たるべきか。

俺はある意味では有名かもしれないが、この世界、冒険者としてはまったくの無名といって良いだろう。

今後はともかく、今話をしようと思えば、何か札を切らなければいけない。

これはまずい気がする。

まずはヒートダガーがあれば話は聞いてくれそうだなドワーフの里を目指すことにしよう。

また、近くにダンジョンや遺跡は結構あるらしく、昔のモンスターの住処だったり、

人間側の砦跡だったり、詳細不明の遺跡なんかもあるらしい。

誰の手によるものか、階層が増えている遺跡もあるようで、古代文明の遺産だとか皆は呼んでいるらしい。

「小銭稼ぐならやっぱり山よ山！こいつなんかいくらあってもたりねーぜ」

そう言ってヒゲの長い冒険者が取り出したのは黒い石の塊。

何かの鉱石のようだ。色合いには覚えがあるが……。

ポピュラーなものなのか、特に警戒せず手渡されたその鉱石は、
ウィンドウに ジガン鉱石 と名前が出てきた。

確か、鉄系統のスチールなんたら、の1段階上の性能を持つ武器達
が作れる素材だ。

MDだと黒曜石かと思紛う程につやのあるアイテムだった。

(元はこんなにゴツゴツしてたのか。意外だな)

「へー、思ったより軽いんだな。簡単に取れるのか？」

鉱石を返しながら聞くと、男はあっさりと頷いた。

「近い場所や表層は結構とつまったからな。少し奥に行くか、割
れ目なんかを探さないといけないだろうが、それでも結構見かける
ぜ」

この辺りの冒険者にとっては、ついでに手に入れるぐらいポピュラ
ーなものなようで、

どこの山にもあるらしい。

礼を言い、大分夜も更けてきたので1度合流することにして席を立
つ。

ジエームズ達もいくつかの話を仕入れたようで、俺の聴いた話のほか、
需要のある薬草類の情報や、最近山羊のような姿だが、
巨大なモンスターが増えているとのことと遭遇に注意という話を手
に入れていた。

翌日に備えて部屋に戻り、朝を迎える。

「よし、行くか！ ファクトも準備は良いか？」

「俺はいつでも。2人も良さそうだ」

馬に乗ったジエームズの掛け声に俺も答え、4人は連なって北西に
馬を進める。

目指すはドワーフの里である。

俺の装備はスカーレットホーンに、栄光の双剣、そして赤い鞆のシ
ョートソード。

最後に腰に刺したヒートダガー。

本当は布袋に収納しておけばいいのだが、アイテムボックスのことを
知らせていない以上、いきなり出てくるのはまずいと思い、最初
から出しているのだ。

道中、モンスターに襲われることも無く、小さな道を進む。

整備はされていないが、通るのに問題はない程度の道だ。

「クレイ、緊張しすぎて疲れるぞ」

「そうなんだけどさあ。酒場で聞いた話がすごかったんだ」

クレイはその話が気になるのか、きよろきよろと周囲を見渡している。

なんでも、件の山羊もどきは集団で走っているようで、一際大きな集団にとある商隊が一気に粉碎されたらしい。

バッファローの暴走のようなものだろうか？

確かにそんな集団がここに出たら逃げようが無い。

「あ、あれ！」

「げっ！」

唐突なコーラルの叫びにジェームズのうめき。

コーラルの示すほうに顔を向けると、道の先に小さな土煙。

目を凝らすと、数匹の山羊のような何か。

明らかに大きさがおかしい。

MDでは見たことが無いが、一般的な牛の2倍以上はあるように見える。

「群れからはぐれた数匹のようだが、避けよう」

何か目的があるのか、道をまっすぐ走ってくる様子に、俺達は左右に分かれて少し離れたところに馬を進める。

俺とクレイが右側、ジェームズとコーラルは左側である。

走る音が聞こえるようになり、土煙も大きくなってきた。

その巨体はつきりと見えるようになった途端、そのうちの1匹がいきなり曲がってくる。

距離は100mも無い。

今から馬を走らせたのでは間に合わない！

「クレイは追撃頼むっ！」

馬から飛び降り、スカーレットホーンを抜き放って相対し、わずかな時間に動きを観察する。

このまま避けても馬に当たるし、まともに受け止めるのも無傷では無理だろう。

脳裏を地竜のタックルを受けたシーンがよぎるが、今回はそれほどでもない。

「その勢いのまま、転がってるっ！」

山羊もどきの突撃はかなりの勢いがあり、俺はその勢いを利用する形で

器用に前足等に攻撃を加え、転倒させる。

大きな音を立て、茂みに突っ込む山羊もどきにクレイが追撃をかけ、仕留めることに成功した。

「ふー、後はどっかに行っただか？」

「そうだな。しかし、なんでコイツだけ曲がってきたんだ？ ファクタクト、わかるか？」

(いやいや、私賢者じゃ無いんで)

ジエームズに首を振って答え、ふと思いついてヒートダガーを取り出す。

「あ、角ですね！」

「そうそう。毛皮は、なんかごわごわしてるな」

コーラルに明るく答え、角を根元から切断する。

ヒートダガーの効果　どうやら刀身が熱くなるらしい　で、あっさり角は取れた。

「でっけえなあ……美味いかな？」

「一応モンスターだから、やめとけ」

角を袋に入れている頃、クレイとジェームズはそんな会話をしていた。

その後は無事に旅を続け、途中で薬草を採取したりで目的地と思われる廃墟が見えてきた。

「教会……か？」

「大分古いが、あの塔部分なんかは間違いはないな」

中央付近に、確か鐘をぶら下げるのに使っているはずの塔が見える。

ちなみに教会の信じる宗教名称はマテリアル教である。

現実世界だとマテ教だとか、まてきよ、だとか呼んでいた記憶がある。

誰かが手入れをしているのか、はたまたご加護でもあるのか、廃墟呼ばわりされる割には非常に綺麗な。

もちろん、人が住んでいる気配は無いが。

「馬はどうする？ 置いていったほうが良いよね？」

クレイの提案に頷き、4人は馬を下りた。

「うつすらですけど、魔法の結界みたいなのが覆っているような……」

立ち木に馬を固定し、歩いて近づいていた時にコーラルがそれに気がついた。

「俺にはわからんな。ファクト、クレイ、2人はどうだ？」

「変なプレッシャーは無いよ？」

「俺もだな。ただ、特定の魔法やアイテムがないと素通りしてしまう空間があるとは聞いたことがある」

言って、ヒートダガーを鞘ごと手にする。

「それか……よし、まず俺がそいつ無しで入ってみる」

ジェームズが言い、ゆっくりと教会跡に入っていた。

10分ほどした後、無事に戻ってきたジェームズは何も手にはしていなかった。

「何も特別なものは無いな。小部屋がいくつかあったが、カラだった」

ヒートダガーを売っていた店主は入り口代わりだと言っていた。

ただの目印なのか、果たして……。

「よし、行つて来る」

何か潜んでいるということにはなさそうだが、一応の警戒をしながら教会跡へと足を踏み入れた。

(家具もほとんど無い。まさに跡、か)

崩れていてもおかしくない高さの天井を見上げながら、室内の様子を確かめる。

ジエームズが何もなかったという小部屋のいくつかが目に入り、そのうちの1つにヒートダガーを持ったまま入ってみる。

と、暖房の効いた建物に入った時のような感覚。

「え？ これは……」

ただの小部屋のはずの空間が、長く続く通路になっていた。

後ろを振り返れば、ドアの外は先ほどまでいた教会跡。

「なるほどな」

手の中のヒートダガーを見、納得した俺は一度教会跡に戻り、3人の下へと向かった。

今度は4人でドアの前に立つ。

「手でもつなぐか。そのまま入って俺1人消えるっていうのも面倒だ」

3人とも頷き、手をつないで先ほどのようにドアをくぐる。

最初と同じ感覚。

「あっ」

「おっ？」

「うわっ」

3人の驚きの声を聞きながら、この先には何があるかと考えた時、視界に明らかに自然のものではない光が見えた。

「なんだっ!？」

ジエームズ達も気がついたようで、大人が4人横並びで一杯になり
そうな

幅の通路の中、戦闘姿勢をとる。

徐々に近づく光。どうやらランタンのようだ。

「誰かがくぐってきた気配にやって来れば新顔が4人とは、珍しいのう」

聞こえたのは自分達にもわかる人語。

どこか訛りがあるようだが……

「もしかして……ドワーフさん？」

「え？ あ、ほんとだ！」

コーラルの声に、クレイも叫ぶ。

俺も相手の姿を見るや、小柄な体に多いヒゲ、そして意外とたくましい体躯、と

MDで出会ったとおりの姿に安心感を覚える。

「まずは第一段階突破ってとこだな」

「ああ。おっと、初めまして。見ての通り人間です。少々お尋ねしたいことがあります」

一歩前に出、喋りだした俺を、ドワーフは見つめてくる。

その瞳は驚きの色に染まっている。

（あれ？ 俺、何かやったか？）

良く考えれば初遭遇なのだから何かやったわけではないのだが、思わずそう思ってしまったのだ。

と、ドワーフが持っていた袋からふわりと、光る小さなものが出てきた。

それは俺が持ったままのヒートダガーに向かい、ヒートダガーからも赤い小さなもの、精霊が出てくる。

双方の精霊は踊るように絡み合い、俺の周りを飛んでいた。

思わず目で追ってしまっただ後、ドワーフがまだこちらを見ていることに気がつき、視線を戻す。

結局、無言になったのはわずかな間だろうか？

「お主、精霊が見えるな？」

ドワーフの衝撃の一言が、広くない通路に響き渡った。

22「北の地で・4」（前書き）

4話目で区切りになりませんでした。

一応、次回でお話は区切り予定です。

9/30：フリーズ時に1部描写が消え去っていたのを確認、追加。

22 「北の地で」4

「……一応、姿は」

視線で追っていた様子を目撃されているので、とぼけることは出来ないと判断し、肯定する。

「そうか。人間にしては珍しいことだ」

言ってドワーフは後ろを向き、俺たちについてくるように促した。

「これ、1つ1つに魔法がかかってる……すごい」

コーラルが途中、現実世界の街灯のように光を放つ何かを見つめた後、そうつぶやいた。

「精霊の生み出す力の残滓を集めるようになっておる。若いのに、下手に触らないようにな。変に干渉すると消えるのでな」

ドワーフの言葉に、触ろうとしていたクレイがビクッとその手を止める。

「どこに連れて行ってくれるんだ？」

「ワシらの里じゃよ。ヒートダガーを持っている相手はもてなすが礼儀じゃからの」

ジェームズの疑問にドワーフは足を止めて振り返る。

「お主ら、名前は？」

「俺はファクトだ。鍛冶職人兼冒険者ってどこか？」

俺に続いて、ジェームズ達も名前を名乗り、最後にドワーフが口を開く。

「ワシは人間風に言えば、グラントという。ドワーフにはドワーフ語とでもいうべき言語があつての。翻訳すると都合上、同じ様な名前が多いからの、わかりにくいかもしれん」

そう言つてドワーフ、グラントは歩き出してとある壁の前で止まる。

そして、聞きなれない言葉を数回喋つたかと思うと、壁が振動して開いていく。

通路を満たす日の光に目を細め、慣れるのを待つ。

「ふむ……ようこそ、人間よ。我等の里へ」

ドワーフの里は森と建築物が融合したバランスの取れた場所だった。

MDで訪れたことのある里達はゲームの演出なのか、如何にも隠れ里、といった様相だったので想定外な光景だ。

建物の大きさは少し小さめだが、ドワーフにあわせたには大きすぎる。

「ドワーフは遙か昔から人間達、特にマテリアル教と付き合いがあるの。生活様式も我々が合わせとるんじゃないよ」

疑問を口に出すと、グラントが答えてくれた。

歩みを止めたのはとある民家風の石造りな建物。

「来客用の建物になる。中で目的を聞こうかの。まさか観光に来ました、というわけではあるまい？」

からかうようなグラントに頷き返し、4人とも連れ立って建物に入る。

「俺は後にするとして、彼は色々な興味から、彼女はドワーフに伝わる魔法や、魔法使いの話聞きたくて。ジェームズは……なんだっけか？」

「俺は特に無いぜ。敢えて言えばこうしてドワーフとコネができりや今後役に立つ、ぐらいなもんさ」

備え付けの椅子に座り、ジェームズはおどけた。

「なるほどの。で、ファクトだったかの、お主は鍛冶か、精霊の御

し方でも聞きたいのか？」

「そうなるかな、一応コレも作ったんだけど」

今回、新しく装備していた赤いショートソードを取り出し、グラントに見せる。

名前は ヒートセイバー、これは、ヒートダガーを母体にして再強化とでもいうべき手順を経て作られる剣だ。

どういう理屈かはわからないが、MDではヒートダガーと違い、これだけでは里に入れない。

一度、ヒートダガーを入手したプレイヤーはどこかにフラグが保存されていたのか、ヒートダガーなしでも入ることは出来たのだが、ヒートダガーを手に入れたことが無い誰かにこのヒートセイバーを渡しても入れない。

なお、俺がこの剣をアイテムボックスに閉まったままだったのは偶然だ。

とはいえ、日本人のRPG等におけるアイテムの収集率や、なんとなく取っておくというのは長年培われてきた文化みたいなものだ。

他にもネタアイテムは色々放り込んだままである。

「ふむ。まるつきり知らないというわけではないんじゃないか。いいじやろう。そっちの3人はちよつと頼まれてくれんかの？」

曰く、今ドワーフの魔法使いは上級者は出払っており、しばらくし

ないと戻らないとのこと。

その間、必要な鉱石やらの採取依頼をやってみないか？ということだった。

「俺はかまわないぜ」

「ジエームズがそういうなら俺も！」

「私も良いですよ」

3人は快諾し、残された俺。

「ファクトはワシの元で修行じゃ」

修行？

「え？ いきなり教えてくれるのか？」

思わず聞き返してしまう。

というのも、MDではゲームの性質上、技術とは無関係な採取などのクエストをこなす形で自動的にスキルなり、様々なものが開放、もしくは取得されたからだ。

フリだったとしても何か修行をした記憶は無い。

「詳しい話は後でな。よし、3人への依頼詳細だが……」

部屋に飾ってあった近隣と思われる地図にマーキングし、採取先などを説明するグラント。

準備をした上で、3人はすぐに旅立っていった。

「さてと、ファクト。何か作って見せよ」

「作ってって、すぐには出来ないって」

持ったままの袋から鉱石、街の酒場でも見たジガン石を投げ渡してきたグラントに、

一瞬、何か知ってるのかと思ったが、気を取り直して答える。

「何を言っておる。精霊が見えるのだろう？ ならば、普通の鍛冶のやり方などしなくてもよからう」

（どういうことだ？ ドワーフは各種スキルがまだ使えるというのか？）

内心の動揺をよそに、まだ武器生成が封じられている身としては、何が無難かと考え、小手にすることにした。

使うスキルは防具生成、だ。

小手や指輪、各種装備に分化するとスキルが無駄になるとMDの運営は考えたのか、

鎧や盾以外はこのスキルに集約されている。

「クリエイト・ガード
防具生成 - 金属C - 」

つぶやいた瞬間、予想していない量の精霊が石から噴出し、一瞬視界をふさぐ。

慌てて精霊に言い聞かせ、おとなしくなってもらい、作成に戻る。

時間にして5分もたっていないだろう時間の後、小手が無事に完成する。

「どっです？」

「……ふん。出来はまあまあといたいが、お主には致命的な問題がある」

グラントの言葉に緊張する俺。

まさか、武器生成が使えないことがわかるのだろうか？

「今のお主はせっかくの精霊を無駄にしておる。大方、精霊が好き勝手にやるとすぐ物は出来るし、調整が効かんのだろう？」

予想外の指摘では合ったが、その意味では的確すぎるグラントの指摘に、俺は頷くしかない。

「そうじゃろうな。それだけの精霊が出てくる作り手はドワーフにもそうはいまい。簡単に言えば魔力の出力過多で魔法を使おうとするような物。かといって下手に抑制すると今のお主のようになる」

グラントはそう言って、作ったばかりの小手を手に取り、眺めたかと思うと気合とともに小さなトンカチで軽く叩く。

何を、と思う間に目の前で小手がぱかりと割れる。

(は？ いやいや、なんだあれ)

仮にも作ったばかりの新品だし、ステータス上も問題なかった。

一体何が……

「ほれ、精霊のつながりが弱い。ただ使うなら能力は十分発揮するだろうが、ワシのようにわかってるものからすればいざという時には危ないぞ」

人間同士の、普通のモンスター相手なら問題はないがの、とグラントは加える。

俺の脳裏にはこれまでに売ったり作った武器、いつぞやの自警団の少年らが浮かんだが、いきなり武器が壊れる！ということとはなさそうで安心した。

曰く、ドワーフには秘伝に近い形で各種作成のような技術が伝わっているらしい。

精霊の恵みが豊富な材料の他、条件を満たした場所ではなくては使えないし、
様々な制限があるらしいとの事だが。

ドワーフが里を作って住んでいるのはその場所はその技術に適しているかららしい。

「まずは精霊を正しく認識せよ。その上で必要なだけの協力を請う

のだ。今のように、ただ拒否をするのではなく、な

(正しく、ね。さて?)

考え込んだところで、外套のポケット部分に入れたままだった壊れ^{スリ}
ピンクフロレスト
た眠れし森を思い出す。

テーブルの上に石を置き、眺めてみる。

いつぞやと同じ、深い緑の光が見える。

「丁度いいの。それにそつと魔力を込めてみよ」

「魔力を？」

言われ、スポットでそつと水滴を落とすかのように、わずかに魔力を込めてみる。

思えば、MDでもスキルと魔法は同じゲージを消費していた。

俺の各種生成もそつだ。

となると、根源は一緒なのだろうか？

そんなことをが一瞬頭をよぎった時、手ごたえと共に石から見覚えのある色の精霊が浮かび上がる。

何かを探しているかのように、きよるきよるとあたりを見渡して、俺のほうを見たかと思うと、ふわりと浮かび上がって来た。

「精霊はの、喋らん。厳密には生き物ではないからの。万物に宿り、こうしてそれに宿った力や、何かしらの魔力に惹かれて動くのじゃ」
試しに注ぐのをとめてみるというので、言われるがままに止めると、しばらくした後、精霊は石の中に戻っていった。

「何も大きなものの中に大量の精霊がいるわけではない。小さくとも、力ある武具であったり、由緒ある物品には自然と多くの精霊が宿る」

グラントは続けてジガン石をテーブルの上に置く。

「さっきはそのジガン石からもすごい出てきたんだが……」

「そう、恵みの証でもある。見た目は同じ素材かもしれんが、別の土地ではまったく違うのじゃ」

ジガン石をつついても今は何も起こらない。
少量ならともかく、大量となると魔力を込める、俺で言えばスキルを使うなどが必要らしい。

その上でも、先ほどのような量はこの土地ならではののだという。

「大切に受け継がれた家宝が、不思議な力を持つといわれることが多いのは精霊のおかげなのだ。長く、接してきた相手の魔力を少しずつ取り込み、精霊は増えていく」

「じゃあ、何かしらいつも身に付けておいたほうが良いってことに？」

俺の言葉にグラントは深く頷く。

「このような恵まれた土地の資源であったり、お主のような例外を除けば、特別に気に入られるような相性の良い状態でなければ精霊は多くは答えてくれぬ。そばに置き、信頼を得るようなものじや
の」

ドワーフはそのために、自宅に大量の鉱石を常に保管し、生活を共にするのだという。

アイテムボックスに仕舞い込んでいる鉱石類だと妙に精霊が出てきたことを考えると、

逆に言えば、MDの頃と比べて今の土地はやせているということになるのだろうか？

その後も、丁寧な講義を受けるように、確実に精霊との関係についてグラントは教えてくれた。

自然と、俺も精霊の出てくる量を調整することに成功する。

今までのように、あふれ出てくるでもなく、かといってなんとなくいる、という形でもない。

「何かを作るときに、中に込められた精霊の量とその込め方で色々と変わるのだ。ほれ、野菜でも同じ様に見えるのに美味しいのやら、そうでないのがあるだろう？」

わかったようなわからないような……。

ゲームで言うと、+1や+2みたいな感じだろうか？

「ただ中に入れるのではなく、浸透してもらおうようにするといい。その宝石は杖用じゃろ？ 近くの森で伐採してきた良い木材がある。精霊の好みを確認しながら作ってみよ」

本来は薪にでもするためにあるのじゃがな、と言うグラント。

随分と贅沢な薪だが、そのぐらいはこの辺りでは当たり前のようだ。

ただ、作ってみよ、といわれても今の俺は武器生成を使えない。

どうしたものかと悩んでいると、グラントは苦笑しながら部屋の隅にあった木材を手に、笑う。

「ファクトよ、硬い硬い鉋石ならともかく、木材程度は削ればよかるろっ？」

「はっ！？ た、確かに……」

もっともな指摘に、俺は恥ずかしさに縮こまりながら、グラントが持ち歩いているらしい工具一式を借り、杖を持つ相手、魔法少女(?)コーラルを思い出しながら長さなどを調整していく。

「石をはめ込んだら杖部分と両方に魔力を通してみよ。後は精霊が助けてくれる」

グラントの助言を耳にしながら、俺は久方ぶりの彫刻という行為に没頭していた。

森の奥

「やべえな、あいつは」

「山羊もどきがいなかったらどうなったか……コーラル、大丈夫か？」

「うん。私は大丈夫」

森の中、目的地に程近い場所でジエームズたち3人は身を潜めていた。

依頼どおりの鉱石や草花を採取した後、帰路の途中で強烈なプレッシャーを感じたのだ。

とっさに森に駆け込めたのは偶然といって良い。

さらにはそのプレッシャーの源、山肌を駆ける熊の姿をしたモンスターが逃げ惑っていた山羊もどきを襲い、食事となることで動きが止まったのも幸いし、3人は退避の時間を得たのだ。

「あいつら、この辺りを逃げ回ってたのか？」

「みたいだな。あの1匹は逃げ切れなかったようだが。随分と混乱した様子だったな」

出かけているというドワーフの魔法使い達がこの熊もどきに襲われた可能性をジエームズは考えたが、思いなおす。

仮にもこの土地に生きるドワーフがむざむざとやられることはないだろうと考えたからだ。

(この熊もどきはイレギュラーに違いない)

ジエームズの脳裏には、これまでにこの森で出会った動物達が浮かんでいた。

どこか人間の世界のそれとは違うが、基本的な部分は同じという相手がかりで、

この熊もどきが当たり前にいるとは思えなかったのだ。

動物としての熊も相応に巨大だが、目に見える相手は動物のそれとはいろいろと異なっていた。

目に見えるほどのオーラというべきか、何かをまとっており、その効果は不明だ。

(強さそのものはなんとかかなりそうだが、一発の重さと速さがやべえな)

手に持つ武器の重さに気を取り直し、2人にジエームズは向き直る。

「いいか？ このままゆっくりと下がるぞ。下手に交戦する必要は無い」

初心者に近いといえど、2人も冒険者である。

ジエームズは言葉に頷き、静かに下がっていく。

(このまま戻ってあいつが里にやっけてきてもやばいな。どこかで倒さないとまずいか?)

相手から漂う気配、そして自分達との位置関係を確認しながら、ジエームズは迎撃のための覚悟を決め始めていた。

23 「北の地で・5」(前書き)

住んでいる土地、影響しあう場所、という点ではエルフモドワーフも大差が無い状態になっています。

感想などはお気軽にtwitterでもお待ちしております。

23 「北の地で - 5」

大気が震えていた。

正確には、3人にはそう感じられた、と言ったところだろうか。

「ちっ、こんなところでびびってちゃ、世話ねえな」

ジエームズは未知の相手に萎縮していた自分を叱咤し、全身にやる気をみなぎらせる。

そもそも、自らは新たな敵、未知なる相手を楽しみの1つにしていたのだから、と。

「ジエームズ？」

「そうだよな、逃げても逃げ切れないかもしれないし」

コーラルとクレイも、ジエームズに満ちる気迫を感じ取る。

食事を終え、空に向けて咆哮する熊もどき。

気配に敏感な野生の獣であり、モンスターでもある存在が近くにいた気迫の満ちた相手に気がつかないはずは無い。

おもむろにジエームズらへと向き直り、大きく咆哮した。

「上等だ！ こちら腕一本で何でもこなす冒険野郎だ！ 知らな

い相手に興味はあってもびびってちゃーいけねえよな！」

「おうよ！ やってやる！」

「あ、私は女の子だし、魔法ですけどね？」

いつもどおり、ジエームズが前衛、クレイが中衛、コーラルが後衛と陣形を取り、3人は迎撃の姿勢を取る。

ドワーフの里にて

「どっじゃ、見えるじゃろう？」

「これが……そうなのか？」

木を削りだすための道具を手に取り、作成を始めた俺にグラントは様々な指摘をしてくれた。

ただ削るのではなく、精霊の好みそうな、通りやすそうなものを目指せと。

自然の造詣や、なんでもないような街中の形に妙に気を引かれたこととはないだろうか？

ざっくり言えば、精霊の好む形というのはそういうことらしい。

こればかりは実際にそのとき作る精霊によるので、決まったものというのはいないそうだ。

ゆえに、自身のセンスだけではどうにもならない部分があるのと。

一般の鍛冶職人はもとより、ドワーフやエルフ等の種族でも一朝一夕にはいかないらしい。

「こづか……ああ、こっちのほうがいいんだな」

俺が彫ろうとする方向、深さ、その形。

様々に反応する精霊を見ながら、

使う人間、宿る精霊、どちらのことも考えてあれこれと試していく。

MDで新しい武具を作れるようになっていくときにも味わった高揚感。

自らの手で、自らの新しい扉が開いていく感覚。

俺は自分が笑みを浮かべていることにようやく気がついた。

作る楽しみ、出来る楽しみ、使ってもらえる楽しみ。

物を作るということは大事なことなのだ。

ゲームでも、ここでも簡単に作れるからと薄れていた感覚。

「うむ。いいぞ。そのまま赴くままに作っていけ」

グラントの声もどこか遠くに聞こえる。

聞こえているのに、聞こえないような……。

俺と石、杖の元となる木の周りを興味津々に精霊が舞っているのはわかるが、上手く認識できない。

彫り、削り、しならせ、整える。

段々とまさに魔法使い！という杖のような形となり、後は力の源となるであろう石がはめ込まれる部位がぽかんと大きく開いている。

「よし、はめ込むのだ！」

「……おいで」

なぜか、俺はそんなことをつぶやき、緑色の石をその穴にはめ、ふつと魔力を込めた。

周囲に舞っていた精霊が勢い良く杖と石に吸い込まれたかと思うと、陽光や電気照明とも違う、そのものを覆うような光が杖からあふれ出る。

俺の加工により、杖となったそれ全体を覆う緑色の光は、しばらくすると杖の中に戻り、石だけが光を放つ。

「……終わった？」

「ああ、完成じゃ。どうじゃ、悪くない感覚じゃろ」

呆然とつぶやく俺に、グラントは静かに答える。

「うん。ありがとう、そんな感じだ」

どこか誇らしげな気持ちと共に、俺は出来上がったばかりの杖を掲げる。

スリーピングフォレスト
眠れし森 + 1

（プラス1？ 多分、強くなったんだろうけど、無粋といえば無粋だな）

出来上がりになんか感想を抱きながら、自分では使えないことはわかっているんで、

3人が戻ってきたらコーラルに渡そうと考え、一息つくこうとした時、杖から数匹（？）の精霊が出、外に飛び出していった。

「む？ 3人が帰ってきたかの？」

「そうか！」

俺は杖を持ち、3人を迎えるべく家を飛び出る。

きよろきよろと辺りを見ると、里の入り口の1つに10人ほどの集団が見えた。

体格差から、3人はジェームズたちだろう。

となると他は？

「おお、皆も戻ったようだな。あれは……モンスターか」

集団の後ろに荷台が引かれており、そこには巨大なモンスターの死骸らしきものが乗っていた。

「3人とも、無事だったか！」

「よう！ まー、すんなりとは行かなかったがよ、無事さ」

答えるジエームズと、クレイ、コーラルまでがその防具を汚し、いくつかの傷を負っている。

それにしても、依頼の場所は半日程度とは言え、そうすぐには戻れないはずだが……。

「そうそう！ ファクト、ドワーフってすごいんだな！ 森が勝手に動くんだけ！」

森が、動く？

「こら、クレイ。そんなんじゃないわよ。えっとですね……」

コーラルが語るところではこうだった。

森の一角にて

「はあはあ……やるじゃねえか」

ジエームズの声にも疲れが見えていた。

相対する熊もどき。

元から体力のありそうな姿に見合う体力がモンスターには備わっていた。

幸い、まだ3人には大怪我は無い。

だが、かする爪1つとっても勢いが乗った一撃であり、モンスターにとっては小さな体躯である人間にはダメージの元であった。

（世の中には少人数で空を舞うドラゴンと戦える奴らがいるってんだから、まだまだ俺も甘いぜ）

「ジエームズ！」

刹那の思考、その瞬間を狙う攻撃をクレイの声に知らされてジエームズが回避する。

互いに致命傷には遠く、時間だけが過ぎていく。

素早い動きにコーラルの魔法も手持ちの中では決定打を欠いていた。

「攻撃魔法そのものでも、何かを使う拘束タイプも間に合わない…

…！」

（雷の魔法であれば当たる？ いや、でも回避されやすい！）

自分の手札の少なさに歯がゆさを感じるコーラル。

誰かが決定打のために囷にならなければならぬか、

そう冒険者らしくどこかで考えた時、3人の耳に聞きなれない声が届く。

いや、響きそのものであれば3人は聞いた記憶があった。

それも、ごく最近に。

叫ぶような声、その瞬間に熊もどきの足元が大きく陥没する。

ピンポイントに熊もどきの移動先を狙った見事な穴開きの魔法。

胸元まで一気に落下した熊もどきに、ジェームズは声を張り上げる。

「今だ！ コーラル、電撃！ クレイ、行くぜ！」

「はいっ！ 轟く雲間の怒り！ サンダー・スプリット 雷の射線！」

コーラルの杖から、ホースほどの太さの電撃が走り、熊もどきの胸元に直撃する。

速度はあるが、魔法の判定そのものは小さく、素早く動く相手に直撃させるには技術がいる、そういう魔法である。

「よしっ！そこだっ！」

勢い良く走りこんだクレイと、振りかぶったジェームズの攻撃がほぼ同時に決まり、急所に近い位置を攻められた熊もどきはその体力を大幅に減少させ、勝負は決まった。

「今のは、ドワーフ……ですよね？」

「だと思っただがな」

コーラルの疑問に、ジェームズも自信無さ気に答える。

一人、クレイだけは目を輝かせていた。

「絶対そうだって！ グラントのおっちゃんと同じだったもん！」

騒ぐクレイの声が聞こえたのか、最初から姿を現すつもりだったのか、

森の一角から何名ものドワーフが出てくる。

「人間よ、無事だったようだな。グラントの名を知っているということは客人か」

代表者と思われる1名が前に出、3人に語りかける。

「ああ、俺たちともう1人で、ほんの少し前に世話になり始めたばかりさ」

熊もどきが絶命しているのを確認し、ジエームズは答える。

「なるほど。その様子だと里に戻るところなのだろうか？ 我等と共に」と行くが良い」

先頭のドワーフが3人に提案し、返事を待つまもなく片手を挙げ、何事かをつぶやく。

すると、3人とドワーフ達の目の前で、森の一角が音も無く新たな道を作った。

「我等はこの土地と共に生きる者。互いに融通しあうのだよ」

目の前の光景に言葉を失う3人に、ドワーフは何でも無いように言い、
時には、移動の要望にこたえて直接土を掘って木々を移動するのだと3人に教えてくれた。

ドワーフの里、現在

「」という感じで、かなり距離を短縮できたんです」

「そうか、もう少し早ければこれが間に合ったかな？」

コーラルに、出来たばかりの例の杖を見せる。

「あ！ 新しい杖じゃん！ すげー！」

クレイが俺の手元に駆け寄ってくる。

自分は装備できないというのにこの喜びよう。

男の子、ということだろうか。

かという俺自身も、真に新しい武器、に内心興奮しっぱなしだ。

「ほっほ。まずは体を休めたらどうじゃ？ 色々と聴きたいこともあるのじゃろう？」

グラントの提案に、3人も頷き、今日は里に泊まることになった。

里の憩いの場である酒場のような空間に、

俺たち4人以外にグラントや何十人もドワーフが入り乱れていた。

冒険談であったり、土地独特の話であったり、貴重な鉱石の話であったり。

コーラルはどこかのテーブルに1人、話を聞きに出かけている。

ジェームズやクレイも、ドワーフ自慢の武器達に目を輝かせ、

話が盛り上がってはとあるドワーフがふらりと席を立ったかと思うと、近くの

自分の工房から新しい武器を持ってきてはさらに盛り上がる、を繰り返している。

ドワーフは必要以上に儲けるつもりはないようで、聞こえてくる範囲でもその要求してくる金額はお得なものだった。

互いの技術を確かめ、語り合うのが楽しいようで、2人が実際に買わなかった武具の製作者達も、特に不機嫌な様子は無い。

「彼らは好みの武器を見つけられたようじゃの」

「そうみたいだ。ありがたい。本当は俺が作れれば話が早いんだけどな」

そんな2人を眺めていた俺にグラントが話しかけてくる。

「ふむ……お主、普通の人間ではないのかの」

「モンスターでも、ないさ」

どう答えたものか悩んだ拳句、変な答え方をしてしまう。

「いや、言い方が悪かったの。あれだけ精霊に愛されているのだ。上手く付き合わねばいかんぞ、ということよ」

グラントはそういって、エールのような飲み物を一息に飲み干す。

「お主とてわかっておろう。大きな力、都合の良い何か、は容易に様々なものを引き寄せる」

「ああ、だからここに来たようなものだしな」

俺も手元のグラスからアルコールの強いそれを一口飲み、息を吐く。

「ただ、道を曲げてはいかん。自分を信じ、進むようにな」

グラントはその言葉を最後に、後はちびちびと追加の飲み物を飲んでいく。

俺も無言で答え、静かに夜が過ぎていく。

翌朝、出発の準備をして里を出るべく先に3人が家を出たとき、グラントが俺を呼び止めた。

「ファクトよ、これを持って戻ってみんかの」

渡される1本の槍。

特別な属性は感じず、純粹に貫く力だけを特化した感覚を受ける。

受け取って出てきたウィンドウには、キラースピア とある。

どうやら命中の他、所謂クリティカル確率に補正があるようだ。

「これをどうすれば？」

「ガイストールにとある有力者がある。教会の関係者じゃがの。そ

の者に渡して欲しい。お前さんがどんな状況かはわからんが、力になってくれるじゃろっ」

手渡されたメモには相手の情報が書いてあった。

そこまでしてもらうわけにはいかないと、

咄嗟に返そうと顔を上げると、深い感情をグラントの瞳に見つけ、動きを止める。

「遠慮せんと、受け取っておけ。なあに、ワシはこれでも200歳は超えておる。

若いもんを導くのも仕事よ」

それでも何かを口にしようとした俺を遮る様に、グラントはそう言っ
つて、何も聞かないでくれた。

「ありがとう。それしか言えないが……」

「ファクトよ、ワシにはお主が誰で、どんな物を背負っているか、
全てはわからん。だが、世界は、精霊はいつもお主のそばにおる。
耳を傾けるのを忘れぬようにな」

最後にグラントはそんなことを言っ
て、俺の背中を勢い良くたたいて送り出してくれた。

「ファクト、それ何？」

「街にいったら教会のお偉いさんに届けてくれだつてさ。クレイも行くか？」

布に包まれた明らかな長物にクレイがさっそく声をかけてきた。

「んー、俺はパス！ だつて教会つて真面目すぎる！」

ある意味予想通りの答えに、俺は一人微笑んでいた。

「上手くいきや、後ろ盾が出来てファクトも堂々と色々できるつてわけだ」

「そう願いたいね」

「きつと、大丈夫ですよ」

昨晚、ドワーフの魔法使いに様々な魔法を口伝してもらったようで、どこか上機嫌のコーラルはそんなことを言つて、可愛く笑う。

俺も良い天気のを見上げ、先を疑いがちな気持ちを切り替えるように、

大きく息を吸うことにした。

何がこの先にまっているかはわからないが、やれることをやるだけだ……！

23 「北の地で・5」 (後書き)

次回はどろどろした組織裏模様? …… かもしれません。

24 「ガイストールの闇・1」 (前書き)

サスペンス劇場! ……なことは多分無理そうです。

設定を含めればこれで30本目のようです。

24 「ガイストールの闇-1」

薄暗い空間。

壁にいくつも備え付けられたランタンが広い空間をなんとか照らし出している。

部屋というより、何かの建物のホールといえそうな空間は、うず高く積み上げられた書籍や、何に使うのか一般人ではまったくわからないであろう物体たちで埋まっていた。

鈍く光を反射する金属、樹齢を感じさせる巨大な切り株、見るものが見れば元は良質であったと思われる武器たち。

いずれも見た者の感想は共通していることだろう。

どこか壊れている……と。

事実、金属は殆どが腐食し、切り株も朽ち果てている。

武器もその能力を完全に失っているようだった。

部屋の中央にあるテーブルには、ほのかに光る透明な球体が台に乗せられ、それを一人の男が見つめていた。

何かを黒板のようなものに一心不乱に書きとめ、消して、書いて、を繰り返す。

と、手を止めた男は球体の中で動く何かを見つめ、ほくそえむ。

「無駄だ。お前はここで私の礎となるのだ」

他に誰もいない空間に、そう大きくないはずの男の声は不気味に部屋隅々へと響いた。

ガイストール、門付近

「里も素朴でいいけど、やっぱりこういう騒がしいほうが血が騒ぐな」

ジェームズが活気に満ちる周囲を見つめ、つぶやく。

ドワーフの里から教会跡へと抜け、ガイストールへの道中は平和そのもので、

ジェームズ達は道中の時間を、ドワーフの里で手に入れた武具になじむことに使っていた。

俺はといえば、特に装備も増えていないので主に見張りを担当していた。

本当はあの感覚を試し、より自分のものにしたいのだが、一人キャンプを発動させるわけにもいかない。

ガイスツールともなれば、工房の1つや2つあるだろうし、
上手く借りることも出来るかもしれない。

まあ、いざとなったら宿の部屋でこっそりキャンプを発動し、皆に
は工房を借りれた、とでも言うしかないのだが……。

クレイとジエームズは、武器をジガン鉱石を使った物へと変更して
いる。

ドワーフの手によって作られたそれらは、通常街に出回っている同
じ素材を使ったものより、耐久性や重心のバランスなどで優れてい
る。

実際に一度持たせてもらい、確かめたので間違いは無い。

コラルルに渡した眠れし森は、まだただ魔力増幅量の多い杖、とい
う状態のようだ。

武具の真の実力は一体化してこそ、という里のドワーフの助言の通
り、これからということなのだろう。

「ところで、教会ってやっぱり街の真ん中のほうにあるのか？」

「小さい村でも大体村長の家のそばだったり、真ん中にあるからそ
うだと思っぜ！」

俺の問いかけにクレイが元気よく答える。

「そうですね、多分、アレなんじゃないかと」

コーラルが指差す先には、教会跡と似たような、長く空に伸びた塔。

「なるほどな。俺はさっそく行くこうかと思うけど、皆はどうする？」

「グラントに受けた依頼のついでに採取なんかは済ませたしな。俺は報酬受け取りつつ、次を探すつもりだったぜ。届け物はファクトが直接頼まれたものだしな」

俺の疑問にジェームズが答え、クレイも頷く。

当然、コーラルも2人についていくかと思ったのだが、返事は無かった。

「？ コーラルはどうするんだ？」

「えつとですね、よければ私も教会に行きたいな、と」

遠慮した様子で言うコーラル。

視線をジェームズに向けると、「いいんじゃないか？」と帰ってきた。

「一応、理由を聞いても良いか？ 珍しいなと思って」

彼ら3人はパーティーだ。

一人だった俺と違って、できるだけ同じ行動をしているのが冒険者のパーティーの務めというか、基本なのだ。

「はい。笑わないでくださいね？ 杖が、行きたいって言ってる気がして……」

自分でも確証は無いようで、どこか恥ずかしそうな様子でコーラルがそんなことを言った。

（杖が？ そうなると……魔法か精霊関係か？）

俺自身は直接は強い魔法を使えない。

せいぜいがいつぞや使ったような光源用の魔法か、各種補助や初級魔法だ。

それも精度の問題から、滅多に使うつもりは無い。

どこに飛んでいくかもわからない火魔法など、危険すぎる。

ともあれ、コーラルは魔法使いとしての素質か、武器の導きで何かを感じているのかもしれない。

「よし、じゃあ一緒に行くか！ ジェームズ、集合場所はあの宿でいいんだな？」

「おう。帰ってこないようなら教会に突撃するからな」

ジェームズのポケに、笑いながら俺はコーラルと共に目的の教会と思われる建物に向かう。

塔のある建物前にて

「あのー、すみません」

「ん？ 新顔だな。祈りにでも来たのか？ だったらまっすぐ行けばすぐに礼拝堂があるぞ」

俺が話しかけたのは、教会らしき建物の入り口を守っている2人の男の片割れだった。

こういう人間がいるということは、意外と荒くれ共がいちやもんでもつけにくるのかもしれない。

「ああ、そういうんじゃないんだ。この人、いるかな？ 頼まれ物を持ってきたんだけど」

グラントの渡してきたメモのうち、名前のところが見えるように折って見せる。

すると、男の表情が驚きに変わり、「待ってる」とだけ言い残して1人が奥へと走っていった。

どうやら俺が思っているより大物のようだ。

「ファクトさん……」

「ま、いきなり捕縛、なんてことはないだろ」

心配そうなコーラルに俺は笑って答える。

数分後、駆けて行った男が戻り、案内を受けることになった。

「くれぐれも失礼の無いようにな」

案内された先で、俺達はそんなことを言われた。

男がドアをノックし、中から男性の答える声が聞こえる。

「客人です。届け物があるそうです」

男の手によって開かれたドアの向こう、
即座に目に入ったのは書物、書物、書物。

一瞬、図書館にでも来たかと思ったが、そうではなかった。

いくつも壁に備え付けられたランタンのような何か
部屋を十分に光で満たしている。

書物の量の割りに、清潔感あふれる空間は、
知的な雰囲気を感じさせる。

「ん？ 見ない顔だね、君は誰だい？」

部屋の奥、壁際にあるテーブルで書類を整理している様子の男性が
俺たちを見、声をかけてくる。

「初めまして、だな。俺の名前はファクト、こっちはコーラル。ド

ワーフのグラントから頼まれ物を持ってきた」

言って、背負ったままのキラースピアを布ごと右手に持ち、前に突き出した。

「おお！ それはありがたい。ああ、君は行って良いよ」

ドアのそばに立ったままの男に男性は声をかけ、俺達が残されることになった。

男性は立ち上がり、大きなテーブルを迂回して俺の前に来ると、キラースピアを受け取って布を解くと、手に持って穂先までをじっくりと眺める。

聖職者然とした姿の割りに、かなり様になっている。
見た目は30代後半、この世界としては結構な歳に思える。

(この男性、意外とやる……?)

「そうそう、私の名前は知っているかな？ ……ふむ、そちらのお嬢さんは知らないようだ。私の名前はクリスだ。本当はもっと長いんだが、本当に長いのでね、クリスでいい」

人のよさそうな笑みを浮かべ、クリスはそう言ってキラースピアに布を巻きなおす。

「用事はこれで終わりってことでいいか？」

グラントからは特に代金をもらってこいとは言われていないので、後は好きなように、というところだろう。

「この槍の件はそうなるね。ただ、グラントではなく、新顔の君が私のところに来たということは、君が何か問題を抱えていて、それは精霊がらみなんだろう？」

鋭い一言に、俺は内心うめきながらも、自身の状況と、打開策を探していることを問題の無い範囲で口に出していた。

「……なるほど、それはまさに奇跡としか説明がつかないね。今は使えるのかい？」

「いや、今はどうやっても無理な感じだ。夢中だったからな」

何かを探るような視線にボロを出さないように注意しながら、俺は誤魔化すように言う。

「ふーん。ま、いいかな。精霊様も嫌っていないみたいだし」

「貴方、いえ、クリスマスさんは精霊が見えるんですか？」

クリスマスの発言に、コーラルが驚いた様子で問いかける。

「いや？ この街のマテリアル教の幹部としては残念なことに、なんとなく、光っぽく見えるだけさ。その人が好かれていれば輪郭をぼんやりと明るく覆うし、逆に嫌われていると暗いか、まったく光らないから便利だけだね」

クリスマスはそう言い、コーラルも好かれているほうだ、と教えてくれる。

「それで、どうにかできそうなのか？」

「勿論。私を含めた幹部に認められれば晴れて君も奇跡を行使したものの一員さ。何よりこの街じゃ、武具の精霊は大事にされている。一気に街の仲間入りも可能！ってわけさ」

俺の疑問に、少々大きさに身振りと共に答えるクリス。

「見てないのに、認めることが出来るものなんですか？」

コーラルのもつともな疑問に、クリスの動きが止まる。

「そこなんだよねえ。話自体は、私のところにも来てるんだよ。こういうことがあったけど、アレは教会の奇跡なのか？ってね。だからあらましというか、起きたことは何人も目撃している以上、奇跡の状況証拠は十分なのさ」

話を区切り、クリスは俺の前に立つ。

「後は、君が、ファクトがそういう人間である、ということは何かしら示せば良い」

「どつやって？ 同じことをやねってというのは無茶だぞ？」

少なくとも後1週間と少しは武器がスキルで作れない。

「簡単なことさ。君が奇跡を起こしうる、信仰を持っている人間だと示せば良い。というわけで、何日か泊まってくれ」

「え？ 教会にですか？」

思考の止まった俺の変わりにコーラルが質問を飛ばしてくれた。

「そうそう、ここでちょっとした調査をやってもらいたいのさ」

クリス曰く、ここ1週間ほど、教会のいろいろな場所で変な声を聞いたり、暗い何かの塊が目撃されているらしい。

実害はないそうだが、亡霊の仕業か！などと騒動の元らしい。

「そこで、君に泊り込んでもらい、解決してもらおう。そうすれば教会のために身を呈す信仰心ある若者の一丁上がり！ってわけさ。話の材料さえあれば後は私がなんとかできる」

そういつて胸を張るクリス。

それはありがたいのだが……。

「何でそこまでしてくれるんだ？ クリスにはメリットがないだろう？？」

「なあに、マテリアル教は来るもの全てに手をつてね。ま、本音は面白そうだからなんだけどさ」

笑うクリスからは俺の思い描く聖職者の気配は微塵も無い。

不真面目そうだが、そうでは幹部だという地位にはいまい。

やることはやる人物、ということか。

「さらに本当のところを言えば、このまま自分達でやるとただの不備というか、浄化をさぼってるからだ、ってなるのさ。そこに颯爽と現れる青年！ その信仰心で事件は解決！ なんとという前途ある青年だ！ ってね。ま、そこまで上手くはいかないだろうけど、多少は上書きできそうでしょ？」

にやりと良い笑みを浮かべるクリス。

これは、逆に付き合いやすい相手だ。

何せ、メリットデメリット、要求することがはっきりしているのだから。

「了解した。どこに泊まれば良い？」

「ああ、右手の奥に部屋があるよ。1部屋だけど。君も一緒に良いよね？」

後でジェームズに伝えに行くか、使いを頼まないかと思っていると、クリスが聞き捨てならない一言を言った。

「私も、いいんですか？」

コーラルはコーラルで、なぜか乗ってきた。

「いやいやいや、男女同衾はいかん！」

俺が1人叫ぶと、2人は疑問を浮かべた顔でこちらを向く。

「何か問題でも？ まさか、聖なる教会の中で不埒なことに挑もう

とでも？」

「え？ そうなんですか？」

2人の追撃に、俺は慌てて首を横に振る。

「じゃあ問題ないよね。宿はどこだい？ 使いを出すよ」

クリスは近くにあった鈴を手に取り、静かにそれを鳴らす。

しばらくして、信徒の1人と思われる女性が1人、部屋にやってきた。

ジエームズとクレイがいるはずの宿の名前と場所を伝え、伝言を頼むことにする。

1時間ほどして、「俺達は修行でもしている」とシンプルに返事が返ってきたのには驚いた。

そんなこんなで、俺の、正しくは俺とコーラルの奇妙な教会での数日が始まるのだった。

24 「ガイズトールの闇 - 1」 (後書き)

次回は家 婦はみた! …… みたいになるといいなあとか
思ったりなんかして。

感想、お待ちしております。

25 「ガイストールの闇・2」 (前書き)

和製ホラーって見えないもの、触れないもの、が多いですね。
音とか気配、とか。

洋物は直接物理的に襲われるパターンが多い気がします。

25 「ガイストールの闇 - 2」

依頼を受けた俺とコーラルは、
信徒の1人であるう妙齡の女性に建物内部の案内を受け、
祈りをささげる場所だとか時間、その方法といった
各施設の利用方法について教わることになった。

その間には特に妙な気配もなく、特別なことは何も起きなかった。

本当に何かが起きているのか疑問に思いながらも、時間だけは過ぎていき、
特に進展もなく、夜となってしまう。

「結局、何も発見できなかったな……」

用意された部屋のベッドに腰掛、鎧は着たままで剣だけを壁に立てかける。

アイテムボックスたる布袋はベッドの脇だ。

「気のせいかもしれないんですね？」

向かい合うコーラルが首をかしげながら答え、
首飾りが小さく音を立てる。

「いや、であれば調査だけでも良い、とかそういう中身のはずだ。
クリスは解決、といった。つまり、何かは起きているんだ」

もしかしたら、神官だとかそういう類の何かで感じ取っているのかもしれない。

「そうなるよ、明日も地道に探索ですか？」

「いや、こつという超常現象といえば夜が定番だ。今からもう1周しよう」

俺がそういうと、なぜかコーラルは大きく体を震わせる。

杖を始めとして冒険用の装備を解除しているコーラルは普通の街娘のような姿をしているのだが、その顔はいたずらがばれた子供のような表情だ。

「……もしかして、夜というか、こつというの……苦手だったか？」

「……（コクリ）」

灯りのあるここにいる分には全然大丈夫なんですが、とコーラル。

俺自身も姿がはっきりしない相手が得意というわけではないが、MD時代もそうだったかアンデッドや幽霊タイプの依頼は割が良いことが多い、ある程度割り切ってたんとか我慢していた。

「それでよく一緒に依頼を受けてくれたな？」

「いや、まあ。慣れないといけないことですし、明るいうちに終わったら良いとか考えてました」

しゅんと落ち込んだ様子のコーラルに、俺はそれ以上言えずに息を吐く。

「まあ、襲われたという話はないから大丈夫だろうから、俺だけで行くよ。コーラルはここで一応、魔力的な気配が無いか、探りながら待っていてくれ」

「はい、お気をつけて」

そのうち、専用の依頼でも受けてゴースト退治したほうが良いような気もしつつ、

布袋を肩にかけ、俺は扉を開けて夜の教会内部に歩き出す。

(月明かりか……目立つから下手に光源用に魔法を使うわけにはいかないな)

採光用にか、いろいろな場所にガラスと思われるものがはまった窓があり、

そこから月明かりが差し込んでいる。

十分ではないが、足元につまづくというほどでもない。

それでもところどころ、物陰が真っ暗になっているあたりは良い気分ではない。

何かいそうな気分の時折足を止め、耳を澄ますが特に歩いている人がいる様子は無い。

今の所、巡回の信徒などはいないようだ。

人影が無いことを確認した俺は、普段は布袋にしか見えないはずのアイテムボックスから、祝福を受けた銀を素材にした剣、所謂シルバースードを取り出す。

その意味ではこの武器は何も特殊ではない。

何故銀がゴーストのような存在やアンデッドなどに有効なのか、は俺には原典の覚えが無いが、どのゲームにもあるだろうアイテムの1つだ。

この世界ではまだ遭遇したことは無いが、他の武器よりは期待できそうだ。

アイテムボックスを小さくして腰に下げ、剣を鞘に収めたままで建物の中を歩く。

まだ脅威のある相手がいるとは限らないのに向き身の剣を持ち歩くわけにも行かない。

気をつけているつもりでも、コツコツと自分の足音が静かな空間を満たしていく。

1時間か2時間か、教会内部をぐるぐると回り始めて夜も更けてきた。

外にも一応出てみたが、月明かりに照らされた空間があるだけだった。

自分の動きや呼吸、足の運びになにやら微妙な感覚を覚えた頃、
視界と音に違和感を覚えた。

まず、足音が多い。

正確には、俺の足音にまったく同じ感じで別の足音が重なっている。

そして、視線の先には……月明かりが差しているはずの通路の突き
当たりに影がある。

何かに光が当たって、という形ではなく、文字通り黒い影の塊があ
るのだ。

さりげなく、手元の剣に手を伸ばし、気配を探りながら歩く。

影のある場所まではまだ20mはありそうだ。

覚悟を決め、剣を抜き放ちながら背後へと回転しながら切りかかり、
そこにいた存在に驚愕しながらなんとか剣をそらす。

そこにいたのは、半透明の女性の信徒の姿。

これがいかにもな姿だったり、もっと恐怖を感じる姿であったなら、
俺は剣を振りぬいていただろう。

だが、目の前の相手は何かを心配するように、涙をたたえた目で俺
を見つめていた。

(まさか本当にこんな場所に来て、幽霊と遭遇するとは……)

内心の驚きを横に置き、警戒を続けながら目の前の相手を見る。

特に手が無いだとか、目が光っているだとかそういうった様子は無い。向かい合ったまま、後退、即ち通路の奥へと一歩足を動かした途端、彼女は俺の服をつまむように手を伸ばし、首を横に激しく振った。

（なんだ？ 止め様としている？）

疑問が浮かんだ瞬間、嫌な予感が背筋を走る。

そうだ、怪しい何かは後ろにもいたのだった。

迫ってくる殺気に近いその感情に、今度は迷うことなく手の中のシルバーソードで振り向きざまに切りつけた。

わずかな手ごたえ、そこにいたのは黒い、紫色を混ぜたオーラのよ
うなものをまとった小さな存在だった。

一瞬、精霊か？と思ったがそうであるならば襲ってくる理由がわ
からないし、

目の前の相手はどちらかというとモンスターののような気配を感じる。
シルバーソードの一撃は十分効いた様で、もがきながらその影は消
えた。

通路の先にはもう何も無い。

先ほどまで見えていた黒い影は今の存在だったのだろう。

それにしても、クリスの話では襲われた人間はいないとのことだが、何故だろうか？

そもそも夜に出歩く習慣が無かったからか？と思いつながら改めて振り返ると、幽霊の彼女はそこにいなかった。

慌てて周囲を見渡すと、とある壁に半分ほど体をめり込ませ、そのまま消えていくところだった。

彼女が消えた壁の辺りに歩み寄り、ふと思いついてコンコンと手の甲で叩いてみる。

上から下まで叩いていくと、丁度人間の胸元辺りの音だけが違った。

次に手のひらや指先で触っていくと、指が引っ掛けられそうなくほみを見つける。

「ん？ 開きそうだな」

つぶやき、少し力を込めて動かそうとすると、小さな音を立てて、CDケースほどの大きさを壁の石が外れる。

タイルのようなそれを手に持ちながら、石が外れた箇所を目をやりと、小さな水晶球が収められていた。

念のために剣の先で一応つついてみるが、特にいきなり反応するということは無かった。

隠されたようにある水晶球。もしかしたら教会の結界だとか、何か必要なものかも知れないが、明らかに怪しい。

このまま戻して、明日報告しようかとも思ったが、日が昇ればこ
もそれなりに人の目に着く。

これが何かの陰謀の一部であったりしたら余り人目につくのもよ
しくないことだろう。

もし、教会に良いほうの何かだったら謝ることにして、そっとその
水晶球を手に取った。

壁にタイルもどきを戻し、俺は今日の探索を打ち切ることにした。

「ただいま、何も無かったか？」

「お帰りなさい。少し前に魔力の波動を感じたんですけど、何かあ
りました？」

ドアを開けると、コーラルは杖を構えたまま瞑想していそうなポー
ズだった。

「ん？ あー、何かいたよ。後、これ」

何かいた、という部分にコーラルは体を震わせるが、俺の差し出し
た水晶球に目を見張る。

「それ、今も動いています。ちよっとずつ魔力というか、何か吸って
ますよ」

「何っ!?!」

慌ててベッドの上に転がし、距離をとる。

「でも、今はほとんど吸えてませんね。多分、どこか適切な場所におくと効果がしっかり出ると思うんですけどね」

そっぴいながらコーラルは懐から布を1枚取り出し、水晶球を包む。

「これ、こういった魔力持ちだとかのアイテムを持ち歩くための布なんです。それで、どこにあったんですか?」

効果が微微たる物だとわかった俺は安堵し、事情を説明する。

ベッドの間に小さな机、そこに水晶球が布に包まれて置かれている。

「信徒……ですか。知らせたかったのかもしれないね、これの位置を」

コーラルが視線を水晶球に向け、つぶやく。

「こういったものはどんな感じで使われるんだ?」

MDではこういった物自体はあったが、何に使うのかといわれると特に心当たりは無い。

「そうですねえ……一番多いのは、四方を囲んで拠点にそれぞれ置

く事で中にいる人間の魔力を糧に結界を貼ったり、魔法の力を増幅したり、でしょうか。でもこの教会ではそんな様子はありませんし、大体は象徴的に目立つように置くので、教会の本来のものではないと思いますよ」

語るコーラルは少し大人びて見えた。

「ということは、何か隠してやっている、後ろめたいこと……か」

「ええ。それこそ、教会に住んでいる人間、出入りしている人間からこっそり魔力を集めている、という可能性が高いんじゃないですか？」

どこかコーラルの口調は強い。

魔法を悪用していることが許せないのだろうか？

「よし、これは明日クリスに聞こう。変な影のほうはどう思う？」

小人というか、手のひらゴブリン、みたいな様相だったけど……。

「そんな大きさのモンスターというか、亜人、みたいなのは聞いたことが無いですね。多分、何か魔法で力がそういう形になっているだけだと思います」

元の世界風に言えばエネルギーの塊というところか。

あんなのがうじゃうじゃいたらちよつと面倒だなあと思いながら、これ以上の結論は出ないだろうということまで、寝ることにする。

「これが激しく動くようなら教えてくれよ」

「はい、勿論。そこまでのことが起きたら布が魔力との抵抗で燃えたりしますから大丈夫ですよ」

コーラルはそういつてベッドに横たわる。

どうやら思ったより便利な布だったようだ。

高いのか、安いのか、そんなことに思考をめぐらせながら夜は過ぎていく。

「これは……思ったより厄介なものが出てきたね。君に頼んで正解だったよ」

翌朝、クリスに会いに行った俺たちは、すぐに水晶球と影について切り出す。

それに答えたのは個人的には満足そうな、それでいて立場ある人間としては複雑な感情をにじませたクリス。

教会、ひいてはガイストールに潜む闇の断片と事件への入り口が

俺の前に開いた瞬間だった。

26 「ガイストールの闇・3」 (前書き)

地下っていいですね、怪しくて。

26 「ガイストールの闇 - 3」

「どんな魔法、どんな儀式かはこれだけじゃはっきりしないけれども、良くない物なのは間違いないね」

クリスはそう言って、ここ一年ほどで起きている不可解な事件について語ってくれた。

訪れて来た魔法使いの原因不明の昏睡を始めとして、時折倒れる人間がいたらしい。

最近は落ち着いているようだが、一時期は数人まとめて倒れたので大騒ぎだったらしい。

今考えれば共通しているのは、魔力の運用に長けた人間だったという点である。

水晶球は一度調べるから預かるということでクリスに手渡し、俺達は部屋に戻ることにした。

「どつしまししょうね？ どこかに犯人がいそうですね」

「そうだな。外部の人間が仕込むには難しい状況下だろう」

わざわざあんな仕掛けまで施して隠していたぐらいだ。

確かに夜間は人の目がほとんど無いようだが、

それにしたって壁に穴を開けたりなどは難しいだろう。

どういった形にせよ、余程念入りに計画したに違いない。

（魔力運用か、俺やコーラルも適用されそう……だな）

魔法使いのコーラルはもとより、スキルの魔力を消耗している自分も魔力を運用しているというって問題ないだろう。

ふと、コーラルに視線を向けてウィンドウが出てこないか試してみるのが、無理だった。

やはりステータスが確認できるのは自分だけのようだった。

そんな自分の魔力はじわりと回復している。

ただ、平常時の半分の速度だとしてもやはり、微妙に遅い。

「コーラル、今も微妙にどこかに魔力を吸われてないか？」

「え？ どうなんでしょう。……自覚できるほどには吸われていないようですけど」

言われて意識を集中した様子のコーラルだが、わかるほどには影響は無いようだった。

一つとはいえ、水晶球を排除できた結果なのか、元々そう強力でもないのか、

最近は何も倒れる人間がないということだから、効力が薄まっているのかもしれない。

「とりあえず、歩き回って同じ様な反応が無いか、探りましょうか」

「そうだな、近くに行けばより反応がわかるかもしれない」

コーラルの提案に頷き、一応装備だけは整えて部屋を出る。

まずは夜に俺が襲われた場所に行ってみるが、特には何も無い。

周囲は信徒や教会関係者と思わしき人間で意外と人通りがある。

変な影がいた場所や、女性と思われる幽霊に遭遇した付近でも、特にこれといったものは無く、拍子抜けといったところだ。

「……ファクトさん、右の奥の通路に」

途中、くいつと俺の服を引っ張るコーラルがそんなことを言うので、メインの通路から外れた細い通路に入っていく。

秀团的には普段は使われていなさそうな感じのする、空気の動きが無い様子の場所だった。

突き当りには扉が見える。

その前にバケツのような入れ物があることから、物置か何かだろうか。

見た目は現実世界で言えば、白塗りの教会の一室、のような扉だ。

中央には手前に開くためのノブがある。

「あの中に水晶球から感じたものと近いものがあるみたいですよ」

「何？」

慌てて剣に手をやりながらこつそりとステータスを開くが、確かに増加量がかなり鈍くなっている。

俺ですらこれなのだ、コーラルも体で感じているのだろう。

「最初に見回ったときには特に感じなかったところからして、かなり巧妙なやり方だと思います。今は意識するとようやく、という感じですね」

いつの間にか魔力を吸われている、というわけか。

「見ないわけにはいかない、か。一応コーラルも警戒を頼む」

「はい、勿論。明るいうちですから大丈夫ですよ！」

満面の笑みで眠れし森を構えて答えるコーラル。

（それは、大丈夫というんだらうか？）

少しの不安を胸に、俺はゆっくりと扉に近づき、開く。

見た目は綺麗な状態のノブは見た目どおり、素直に動いてくれた。

小さな音を立て、開いていく扉。

中から何か飛び出してくるだとか、淀んだ空気が、ということは無かった。

「む？ 特に何もなし……か」

一度扉から離れ、開いた隙間から中をうかがうが散らかった様子も無く、
妙な光があるというようでもない。

警戒を続けながら中に入ると、整頓された物置、という状態で各所にクローゼットのようなものから、壺、棚などが置かれていた。

「うーん、近すぎてちょっとわからないですね」

続けて入ってきたコーラルが意識を集中してみるが、特定は出来ないようだった。

「コーラル、明り用の魔法を適当に上に向けて投げてくれないか？」

以前、俺は鉱山跡を探索する際に使用した光源用の魔法は照明弾のように、ある程度飛ばしたりもできる。

俺の予想が正しければこの場所で使えば……

「え？ あ、やってみます」

コーラルが小さくつぶやき、すぐさま光が生まれ、天井際まで飛んでいく。

「あ！」

「やはりか……魔力をそのまま持っていつてるな」

天井際まで浮かんだ明りが、とある物へとゆっくりと吸い寄せられるように動いていった。

ビール樽ほどもありそうな壺、既に大きな水がめのようなそれに寄り、覗き込むとそこには何かの粉。

「汚れ落しに使う磨き粉ですね、これ」

塩や洗剤というわけではなく、研磨剤のようなものらしい。

袖をまくり、中に手を突っ込んでみると、底の方に木の板らしき物があった。

外から確かめると、明らかに上げ底だ。

周囲を見渡し、同じ大きさの物を見つけるとそちらに中身を移す。

思ったより重かったが、なんとかあったようだった。

そして、見えてきたのは少し古くなった様子の木の板。

適当にシルバースードで端の方をつつくと、上手くめり込んだので引き抜くことにする。

小気味良い音を立てて取れた板の向こうにあったのは鈍く光る水晶球。

「当たり前だな」

「それです、すぐ仕舞いましょう！」

コーラルが昨日も使っていた布を懐から取り出し、俺にさせるように促す。

木の枠で固定された水晶球を取り外し、眺めてみるがこれ単体ではまがまがしさは特には無い。

そっと布の上に乗せ、コーラルがそれを包むと少し空気が軽くなっただ気がした。

どうやら、感じていないところでも影響は受けていたようだ。

「これも届けてきますか？」

「そうだな、行こう」

部屋を出、通路を進むと男性の信徒がきよろきよろとしながら歩いてくるのが見えた。

「貴方がファクトさんですよね？ クリスさんが探してましたよ」

俺の姿を見つけると、駆け寄ってきてそう伝言してくれた後、どこかに行ってしまった。

「なんだろうな？ もう詳細がわかったとは考えにくいし……」

コーラルと顔を見合わせながらも、クリスがいつもいる部屋へと向かう。

途中、何人かから視線を向けられた気がしたが、はてさて？

入室のために、ノックをしようかという段階で中に何人も人がいることが気配でわかる。

(ん？ 1人じゃないのか……入って良い……よなあ？)

「失礼します」

念のため、口調を改めて入室する。

一応、今回の目的というか流れは敬虔なる信徒が、なのでそれっぽく。

ドアを開ければ相変わらずの棚、棚。

そして、クリス以外に見覚えの無い男性が3名ほど部屋にいた。

全員の視線が一斉に俺たちを集まる。

「ああ、来たね。そこにでも座ってくれないか。ん、それはアレかい？」

語りかけてきたクリスがコーラルの持っている包みを見るや、反応してきた。

「ええ、そうです。今朝のアレと同じようです」

コーラルから包みを受け取り、こちらに歩み寄ってきたクリスに渡す。

気のせいかな、他3名の態度が変わった気がする。

「なるほど、それっぽいね。いやー、良い仕事するね」

笑顔のクリスの真意は読めないまま、俺達は改めて促されて椅子に座る。

目の前にはテーブルがある。

形としては普通の四角いテーブルで、大きさはかなりある。

正面にクリスともう一人、左右に一人ずつ、俺達は手前に、といった具合だ。

「2人に紹介しておこう。彼らは私と同じ、この教会の幹部さ。幹部といっても、儀式を仕切ったり式典に出たり、とかまあ、4人ともある意味雑用だよな」

簡単な自己紹介を受けた後、そのうちの一人が口を開く。

「それで、彼らが見つけたというのは本当なのかね？」

ロマンスグレーの髪の毛をふさふさ生やした壮年の男性が疑わしい、という態度で俺たちを向きながら言う。

「本当でしょう。現に今だってもう1個持ってきたではないですか」
答えたのはもう一人の金髪の若者。クリスより若く、20台前半と
いったところか。

「誰がというのはどうでも良い。本題は何のために誰がこれを設置
して行っているかだ」

最後に話を切ったのはくたびれた研究者然とした男性。

イマイチ年齢がわからないが、若くはなさそうである。

「確かに、今の場では誰が、はたいした問題ではないよね。ただ、
これまでの不可解な事件の原因であろう物を彼、彼らが持ってきて
くれたのは間違いはないよね？」

クリスの言葉に、3人は頷く。

不承不承だったり、明確にであったりと違いはあったが。

「先ほどの2つ目とあわせて考えれば間違いない。設置者は精霊を
ゆがめている」

(ゆがめている……?)

「駄目だよ。わかるように言ってあげないとね。万物に精霊はある。
魔法も、剣も、川も風も火山ですらそうだ。それはファクト君たち
も知っているだろう？」

年齢不詳の男性の言葉をクリスが引き継ぎ、それに俺は頷く。

「そう、魔力が精霊と同一視されることもあるのはこの所為なんだ。実際、精霊によって魔力が生まれるのか、精霊そのものが力の塊なのか、わかってないけどね」

「今回のこれは、精霊のあり方をゆがめて、何かを収集している、そう言いたいのか？」

壮年の男性が信じられないという様子でつぶやく。

「我々としては許しがたい暴挙ですね」

最後に若者が苦々しい表情で言い、クリスの手元の水晶球を眺めている。

「そ、私たちはこれを止めなければいけない。ファクト君、今後も頼めるかな？ 奇跡を起こした君だ、大丈夫でしょ？」

「ご期待に添えられるよう、祈りとともに精進いたします」

クリスの言葉に恭しく頭を下げ、申し出を受ける。

元々、そういう依頼なのだから何の問題も無い。

壮年の男性は、いきなりやってきた部外者に近い俺たちに任せるのが不満な様子で、若者は興味深そうにどちらもちらちらと視線を向けてきていた。

「話は終わりか？ 私は研究に戻る」

年齢不詳の男性は興味がなさそうな態度で、そう言って部屋を出て行った。

「うーん、ミスト君は愛嬌が無いのが残念だね」

クリスのそんな評価とともに、集まりは終わりを告げた。

部屋にて

「今日も夜、動くんですか？」

「ああ……今夜はコーラルも来て欲しい。2個目みたいに場所を探して欲しいんだ」

俺には魔法の才能は無いようで、コーラルが感じたような感覚は味わえなかった。

ステータスを開きながらという手もあるにはあるが、それでは不安である。

「うっ……わ、わかりました……」

コーラルはうなだれた様子でベッドに座ったまま下を向いている。

可愛い姿ではあるが、それはそれ、である。

その後は適当に他の信徒の話の聞いたりして時間を過ごし、夜。

「さて……今日はこっちで」

俺が進むのはメインではない様々な迂回用の通路。

ここは各人の部屋があったり、ただただ通路が繋がっていたりする。

何かの儀式に使うのかもしれないし、改築を続けたゆがみなのかもしれない。

1時間ほどあちこちと歩き、壁を調べたりとで思ったより移動していないことに
内心嫌気が差してきた頃、コーラルが歩みを止める。

「？ ファクトさん、そこ怪しくありませんか？」

「む？ これは……水？」

とある壁際に、水たまりがあった。

壁と床のぎりぎりなのだが、壁には水がついた様子が無い。

まるで、目玉焼きをコテで二つにするように、壁が降りてきたかの

ようだ。

そして、その例え通りに周囲を調べると壁が動かせる仕掛けが見つかった。

開き戸になっっている様子の壁をゆっくりと開いていくと、空間。

月明かりが地下へと続く階段があることを照らし出していた。

「大分深そうだな……閉めていこうか」

「そうですね、何かがここから外に出て行ったり、誰かが中に入ってしまったら大変です」

光源魔法を少し先に投げてみるが、ゴールは見えない。

覚悟を決め、2人で中に入り、壁を元に戻す。

「さあ、鬼が出るか蛇が出るかってな」

「それ、なんです？」

コーラルが俺のつぶやきに疑問を浮かべる。

その構えた杖の先には小さな光源魔法。

狙いも付けられるし一石二鳥な使い方だ。

「俺の故郷の格言さ。どんな厄介ことが出てくるかってね」

適当に誤魔化して、階段を下りていく。

小さく、俺たちの足音が空間に響いていた……。

27 「ガイストールの闇・4」 (前書き)

ほぼ2話分。

結構駆け足なので、誤字脱字等あると思います。

すぐに微修正を行うかもしれませんが。

27 「ガイストールの闇 - 4」

「深い……ですね」

魔法の明りが届かない暗闇に視線を向け、コーラルがつぶやく。

光の明滅の都合か、その体が細かく震えているような気がした。

彼女の手前、表には出していないが自分も薄ら寒さを感じていた。

夜の海や、新月の森のような闇しかないものよりも、
わずかな光がその闇の深さを感じさせるような光景。

扉の先は階段になっており、先ほどからゆっくりと降りているのだ
がゴールが無い。

時折、踊り場のような場所があり、少しまっすぐ進むとまた降りる。
時にはカーブもあり、確実に地下に降りていることはわかるのだが、
歩いている距離や、位置関係が曖昧なままだ。

幸いなことは、何かセンサーのような仕掛けでもない限りは
このような状況では奥に誰かいるとしてもこちらのことがわからな
いだらうということだろうか。

勿論、すぐそばにゴールがあるということも有り得るのだが、周囲
の造りからしてもまだまだ先がありそうである。

魔力を吸い取る儀式はこの地下が中心になっているのか、何度も魔法の明りをもさなければならなかった。

今も、わずかずつだが光量が減っているのが見て取れる。

かといって余り強い魔力で明りを作れば、攻撃系統の魔法より魔力の量は少ないとはいえ、誰かに気がつかれないとも限らない。

自身のステータスとコーラルに確認を取ったが、今のところは減っていくというより自然に回復する量が制限されている状態だ。

戦闘が発生し、それが長引けば相当に面倒なことになるだろう。

そんな思考をよそに、地下への道は続く。

思うに、ここは昔の修行場か、何らかの礼拝堂のような場所だったのではないだろうか？

長く、時間の感覚がなくなりそうな時間を歩いて過ごすことで、自問自答をするというような。

事実、今は灯っていないが壁には本来は明りだったであろう何かが定期的に見て取れる。

そうでなければこの造りは不便極まりないし、誰か怪しい人間が作り上げたにしては、地上ではなく地下という空間を考えれば無理な規模だ。

「不思議です。下にいくほど嫌な予感はあるのに、逆に気配がありません」

疲労なのか、魔力の減少なのか、はたまた両方が、コーラルの息が少し上がっているのがわかる。

「確かに妙な感じだな……ああ、気休めかもしれないが、これを」
外套の内側に忍ばせていた常備薬としてのポーションを1つ、手渡す。

見た目はガラス瓶だが、MD製作者の拘りか、ゲーム中の整合性の都合か、そうそう壊れない素材で出来ている。

具体的には、地面にたたきつけたぐらいでは割れない。

最初にその事実を知った時には、ペットボトルかよ！と叫んだものだ。

見た目の色は悪いが、一応体力と魔力を両方回復する物だ。

とはいえ、自分自身としては使い道の少ない回復量ではある。

「はい！ 何でも持ってるんですね」

「何、大人のたしなみさ。ジェームズだって備えはしているだろう？」

コーラルの純粹な言葉に、誤魔化すように熟練の冒険者であるジェームズを例えに出す。

彼も、予備武器の1つや2つ、常に忍ばせているし、ブーツの中にまでいざという時のお金やピッキング用具を持っていると聞いている。

ただ、薬草を忍ばせていると聞いたときには、それを使う彼を見るのはともかく、使う側にはなりたくないな、と思った。

頭の隅でそんな取りとめのないことを思い浮かべていると、視界に入る壁の様子が変わるのがわかる。

例えるなら、門から玄関へとたどり着いたような違い。

無言で、コーラルに合図を送り、自分自身はシルバーソードに手をかけ、先をうかがいながら進む。

角を曲がったところで見えた大きな門。

高さは俺の約2倍といったところか。

その扉は半分開かれており、その奥は暗闇かと思いきやほんのり明るい。

コーラルの顔に緊張が走るのを確認し、明りを消した上で俺は先頭に立って門をくぐった。

(誰か……いる?)

外から見た通り、中にはわずかながら光があり、なんとか周囲の状

況を俺に知らせてくれた。

見えてきたのは本、本、本。

そして、足元に転がるガラクタ。

ただ壊れているにしては妙だ。

何かが、足りない。

と、コーラルが俺の服を掴み、首を振る。

「ここ、おかしいです」

小さな呟きには恐怖が混じっている。

「ああ、注意して進もう」

広さとしてはちょっとした体育館ほどだろうか？

物で入り組んだ中を進むと、明りの源らしき場所が見えてきた。

そして、そこに人影。

(!!) 一体誰が!!)

「おや、お客さんですか。おお、君ですか。思ったより速かったです
ね」

振り返ったのは、昏間に出会った金髪の若者。

だが、その表情は地上で見たものとはまったく違う。

どこかを見ているようでどこも見っていない。

何か、おかしい視線に表情。

「ここにいるということは、全てはお前が？」

「全て、となると難しいですが、今起きていることは自分の仕業ですよ」

あっさりと、青年は認めた。

「一体何のために！ それに、ここは一体何！？」

コーラルが叫び、周囲を見やる。

杖を持つ手に力が入っているのがここからでもわかる。

顔には珍しく怒りの感情。

感情に従うように魔力がその体を包んでいるのがわかる。

「コーラル、今は抑えたほうがいい」

俺が言うが速いか、コーラルも魔力を吸い取る儀式が動いたままなのを感じ取ったのか、呼吸を整える。

「おや、ただの信徒ではないようだ」

「伊達に奇跡を起こしたわけじゃないさ」

俺は皮肉めいて答え、ここで何をしているのかを再度問う。

すると青年は大げさに両手を広げ、歌うように喋り始めた。

「私はこの場所で偉大なる上位精霊を復活させようとしているのです。君も知っているでしょう？ 世界は精霊とともにある。水には水の、風には風の。だが、人間にも主従があるように精霊にも主従と言える立場があります」

「お父さんに聞いたことがある……とある呼び名は古の意思……エンシエンテマインでも、それはただの概念だって！」

「一般的にはそうでしょう。私もここを見つけるまではそうでしたよ」

青年が語るのは過去の歴史。

小競り合いを含めて国境線やモンスターと人間の住処とが入り混じったほかの土地と違い、ガイストールは昔から人間の砦だった。

ゆえに、多くの伝承、伝説が残っていたようだった。

街を救うために様々な魔法を駆使した過去の勇者達。

中には所謂召喚魔法を用いた魔法使いもいたらしい。

モンスターの大量を前に、命を賭して偉大なる癒し手や魔法使い達が召喚したものは精霊の上位存在。

これという属性を持たず、どれにでもなれる力。

世界のどこにでもいて、どこにもいない。

世界により近い精霊。

ゆえにはつきりとした自我は本来持たず、ただ流れるように力を流すのみ。

本来は自然現象、天災等の時にしか存在を感じられない相手を限定的ではあるが、自らの味方として召喚に成功したのだという。

が、その力は当然のことながら巨大すぎ、かろうじて人間側への被害は抑えられたものの、多くの英雄が命を落としたりしい。

その際に、力の破片、精霊の分身ともいうべき存在が、力の干渉を受けて

ガイストールの地下、今いるこの付近に沈んでいったということだった。

大きな犠牲も払ったとはいえ、偉大なる精霊となれば人々はそれをあがめた。

だが、眠り続ける精霊には何も出来ず、あがめたところでご利益も無い。

そうなれば人は薄情なもので、熱心にあがめるものは徐々に減っていった。

いつしか忘れ去られ、わずかな年寄りと口伝を残して人々の記憶から消え去っていった。

「とある時に、夜の散歩をしているとめまいを覚えましてね、寄りかかったのが君達が入ってきた隠し扉だったわけです」

曰く、行き着く先で見つけたのは本の山と、水晶球。

「最初は何のための本かさっぱりでしたが読み続けるとすばらしいことがわかってきました。古の存在に関する証拠とその研究。なにより興味を引いたのは、復活への道しるべです」

そう言うって青年はテーブルの上にある水晶球を撫でる。

気のせいかな、中に何かがあって、嫌がったような？

「原理は単純でした。力を失った精霊には力を与えてやればいい。だが破片とはいえ巨大な存在です。自分ひとりの魔力では意味がなかった」

青年が生み出したのは周囲から力を集める方法。

力、即ち魔力であり精霊。

「ああ、最初は私も加減がわからず力あるものから問答無用で吸い取るというものでした。これはいけない。すぐに騒ぎになった」

「それが、宿泊した魔法使いの事件……」

青年から語られる内容に、俺もコーラルも動けないでいた。

やっていることからすれば、今にでも切りかかってとめるべきなのだが、まだ聞いておかなければいけないことがある気がする。

「今度はせっかく調整したというのに、少し敏感な人がこの場所に気がつきましてね。残念なことをしました」

青年の言葉に潜んだ事実、その内容に俺の脳裏に怒りと、とあることがよぎる。

「まさかつ、あの女性はっ！」

「おや？　彼女を知っているのですか？」

俺の叫びに、青年は心底不思議そうに俺のほうを向く。

「ああ、真面目そうな信徒の女性だったよ。儀式の水晶球がある場所を教えてくれた」

「そうでしたか。力の一滴まで利用させていただいたはずだったのですが……最後までおせっかいな人ですね」

青年が浮かべる笑みはどこか壊れ、言葉もずれていた。

「貴方はっ！　命をなんだと！」

「それだけじゃないな。その存在に、精霊を食べさせているだろう？」

手近なガラクタを手についた俺の言葉に、
コーラルのみならず青年も驚きの表情を浮かべる。

手に取った鉱石のステータスは真っ黒。

名前も虚無の鉄鉱石、と始めてみる名前だ。

ただ、はっきりしているのはこれでは何も作れないということだ。

中に、精霊がまったくいないからだ。

「正しくは精霊を世界に戻している、というべきなのかな？」

俺はその鉄鉱石だったものを青年の側に投げ捨て、剣を抜く。

これ以上は聞く必要も無い。

この状況、青年の態度、全てが1つのことを指している。

「驚きましたね。君は余程素質があるらしい。これなら、不完全な今でも君1人でまかなえそうです」

青年はほくそえみ、懐から怪しく光る、青い石を取り出すと無造作に飲み込んだ。

「何をつ！？ こ、これは！」

俺は突如青年からあふれるプレッシャーに剣を構え、コーラルは杖を前に突き出す。

「ふう……簡単なことです。かつての存在がそうであったように、この世に現れるには何かが媒体になる必要があるのですよ。最初の召喚の時も、一番力のあつた魔法使いが存在の媒体となつたそうですよ」

青年が喋るたび、呼吸するたびにプレッシャーを感じる。

力そのものはまだまだ弱い。

恐らく地竜には届かない。

だが、この感覚は単純な力を超えた先にある何かを伝えてくる。

「ファクトさん、この人を止めなきゃ駄目です！」

「応っ！！」

答えて素早く上段から切りかかるが、ぎりぎりのところで回避される。

「ははははは！ 言ったでしょう。精霊は世界とともにあると。君の動きも、世界とともにあるのですよ！」

言って青年は手をこちらにかざし、何をと思つまもなく小さくつぶやく。

「くううううっ！？」

途端、もれるコーラルの悲鳴。

俺も頭を襲う妙な重圧に吐き気を覚える。

咄嗟にステータスを開けば目に見えて減り始める魔力。

これは、まさか！

「気がつきましたか？ 儀式の作用を君達だけに絞りました。さあ、どこまで抗えますか？」

青年は哄笑とともにふわりと浮き、その周囲をガラクタが覆い始める。

ガラクタは間違いなく精霊はいない。

そうになるとアレは単純に外から精霊ともいえない力をまとわせて浮かせているのだ。

と、半端無い勢いでガラクタがいくつも迫り、俺は慌てて回避したりコーラルに行きそうなものを叩き落とす。

「1つだけ聞く！ あの小さい精霊もどきはなんだ！」

コーラルも合間を縫って魔法を放つが、途中で掻き消えるかガラクタに当たってしまい、十分な威力を発揮していない。

このペースですぐにでも魔法は打てなくなるだろう。

それに気がついた俺は隙を作るべく問いかけをする。

「ああ、あれですか。精霊の成れの果てですよ。世界に戻ることも出来ない、かといって物に宿ることも出来ない、まさに出来損ないみたいなものです」

青年はなんでも無いように言い放ち、それが合図であるかのように攻撃が苛烈さを増す。

「そんな……貴方だけは絶対に!!」

コーラルが叫び、無防備に前に出てしまう。

「危ないっ!!」

視界に入る光った何か。

まっすぐコーラルに突き進んでいた小さなナイフを、俺はコーラルをかばう形で受け止めた。

ずぶりと、深く刺さっていく感触。

直後、ダメージはほとんど無いはずの場所から脱力感が広がっていく。

「ふふふ……やはり君はすばらしい。そこのお嬢さんも良いですがね」

開きっぱなしのステータスでは、地竜との戦いからようやくある程度回復したはずの魔力が先ほどの比ではない速度で減少していくの

が見えた。

「これは、最初から狙っていたな？」

よろけながらも立ち上がるが、足元がおぼつかない。

ダメージよりも魔力吸収と行動不能にさせるのが目的の攻撃だったのだ。

毒なのか、そういつた能力なのかはわからないが、麻痺に近い感覚が体を襲っている。

コーラルはそんな俺を支えるようにそばに駆け寄ってきた。

彼女も、かなりの魔力を使い果たしているに違いない。

「殺しはしませんよ。私が、この存在が熟すまで魔力を供給していただきます」

怪しく光る青年の瞳が俺たちだけを捉えていたその瞬間、視界の外から迫った槍が無言で青年の右腕を捉える。

「ガアアアアア!？」

半ばから千切れた腕をかばうように後退する青年から発せられる人外の叫び。

既に青年は人間を辞めているのか、獣のように吼えて距離をとった。

慌てて槍の繰り出された方向を見ればクリスト、壮年の男性。

聖職者というより、戦う神官、といった様相だ。

「おやおや、随分と可愛くなっちゃったね？」

「貴様がつ！ 貴様が娘を！」

こんな時でも飄々としたクリスとは対照的に、憎しみで染まった表情でメイスを構える壮年の男性。

幽霊となってしまった彼女は彼の……

そこまで考えがいたった時、青年だったものが叫ぶ。

「小賢しい！ 君達は歴史的瞬間に立ち会えるというのに何を愚かな！」

まとう力が怪しさを増し、どうみても精霊とが思いがたい光を放つ。

「駄目……あれはなんでもない力、正義でも悪でもない、ただそこにあるだけ。彼のいつていた伝承では人間が何かを守るために呼び出したから人間を守ってくれた。でも、今は！」

コーラルのつぶやきを採点するかのように、青年の姿が変化していく。

人間らしい部分は減り、モンスターを思わせる様相へと変わっていく。

それは、彼の中にあるゆがんだ欲望なのか、行き過ぎた思いなのか。

『私はっ！！！』

青年の叫び1つ1つが、力を伴って部屋の全てを揺らす。

クリスらも立っているのが精一杯という様子だ。

俺も、ナイフを何とか抜くが失った体の自由と魔力は今に戻ってこない。

『うっ！？ ……大人しく私に従ってればいいのだ！』

(？ 一体誰に！？)

青年の叫びは俺たちではない何かに向けられている。

この場にいるのは俺たちと青年のみ。

いや、正確にはもう1つ。

(古の意志は青年を良しとしていない？)

古の意志に今どのような自我があるかはわからない。

ただ、今のような規模の力であれば通常の精霊のようになっていても不思議ではない。

シルバーソードを杖代わりに、視線だけは青年へと向けて叫ぶ。

「コーラル、撃て！」

「で、でも今の私じゃっ！ それに何の魔法で!？」

青年の力にすくんだ様子のコーラル。

その体ははつきりと震えている。

仕方が無いといえば仕方が無い。

冒険者だとしても、彼女は女の子なのだ。

何より、この状況は魔力に親しんでいるほど有り得ない状況だ。

「魔法使いの君ならわかるだろう!？ 目の前の存在の悲しみが、目の前の出来事が如何に許されないことか!」

俺の叫びにコーラルはビクツと体を震わせ、眠れし森をぎゅっと握りしめる。

「精霊の……悲しみ」

ダメージ自体は受けていないクリスらが青年に襲い掛かるが、何かに阻まれるように攻撃は届かず、あるいは回避される。

力が上手く制御できていないのか、青年もうつとおしそに残った腕を振るうだけだ。

「そうだ。古の存在がどんな相手かは関係ない。自分の意思に関係なく、あんな姿になっていることを誰が喜ぶ!？ 少なくともあそこにいる存在はあんな姿、望んじやいない!」

確証は無い。

ただ、武具を作るたびに微笑みかけてきた精霊たち。

その上位存在と言える古の意志が、あんなにゆがめられていいはずが無い。

「そうなの？ 悲しいの？……そう、皆も、悲しいのね」

コーラルの前に立ち、最後の力を振り絞って迫り来るガラクタを払い、体で受け、彼女をガードする。

と、コーラルが雰囲気を変える。

見ればその姿は何かを掴んだ熟練者の姿だ。

「お願い！ 力を貸して！ みんな！！
フォレストハンド 森の魔手！」

眠れし森を掲げ、コーラルが叫ぶ。

唱えた呪文は木々のツタや枝で対象を縛る魔法。

だがここは明らかに石作りの空間。

熟練した魔法使いでも大きな効力は発揮し得ないだろう。

青年だったものも、それがわかるのかいやな笑みを浮かべるだけだった。

……その瞬間までは。

周囲に転がる、がらくだであった様々なものの中で無事だったもの。それは書物。

様々な伝承を伝える書物達。

この世界でも紙は元々、植物だ。

そして知識の源であるそれは青年も精霊を失い、劣化することは回避したかったのか、手付かずだった書物の中には精霊が隠れ住んでいた。

コーラルの声に答え、書物だった物が元である木々たちへと姿を変え、ツタとなり、しなる枝となって青年だったものに絡みつく！

『なんだと！？』

予想外の出来事に動きを止め、その拍子にか俺とコーラルだけを狙っていた儀式の効力が分散する。

「コーラル、飲み干せ！」

素早く途中で渡した物より魔力回復に特化したポーションを投げ渡し、コーラルも迷うことなく飲み干して杖を構える。

「どちらかが強制できるような物じゃない、物じゃないの！」

コーラルが叫び、特定の魔法ではない純粹な魔力の刃が放たれ、身

動きが取れない青年だった物を貫き、その動きが止まる。

静寂。

俺たちの呼吸と、どこかに積みあがったガラクタが落ちる音だけが静かに空間に響く。

『私は……一体……ああ、すまない……』

4人の視線の先で、誰に向けての懺悔なのか、何事かをつぶやき、青年は崩れ落ちた。

その体から力が空中へと躍り出、拡散していく。

きっとこれが古の意志だった何かなのだろう。

俺とコーラル、そしてクリス達がしばし、その光景に見とれていた

……

28 「男二人、剣二振り - 1」 (前書き)

今回は短めに2話程度で終わる予定です。

28 「男二人、剣二振り - 1」

時間はファクトたちが教会に向かうために
ジェームズらと別れた頃にさかのぼる。

「待たせたな。さて、行くぞ」

カウンターに依頼の完遂を報告するジェームズのかわりに、
次なる依頼を見繕っていたクレイが後ろを向けば、そこには満足そ
うな表情をしている本人。

「ジェームズ、終わり？」

「ああ、問題なく、な」

すぐさま酒場を出るジェームズの姿に、内心首をかしげながらも良
くあることなのでついていくことにするクレイ。

クレイの視線の先ではどこか浮かれた様子のジェームズの姿があっ
た。

「良い店の話を聞いたんだ。行こうぜ」

「良い店って……またあ？」

あきれた声を出すクレイ。

それには理由がある。

基本的にはほとんど一緒に過ごすと言って良いジエームズ達3人だが、

コーラルの個人的な用事であったり、早く寝入ったときなどにはクレイはある方面へと良く誘われるのだった。

それは……10代にはまだ刺激が強いかもしれない色街方面であった。

とはいえ、ジエームズにもその辺りの自制はあったのか、せいぜいが女性達の衣服が刺激的なもの、という方面である。

それでもクレイには十分刺激的であるし、いつの間にかジエームズだけどこかに消えていたことも多く、クレイはジエームズがどこで何をしているかを深く考えたことは無い。

まだ日も高いうちにもかかわらず、2人が歩く先は独特の空気をまとった空間となっていた。

ジエームズは店の概観で目当ての場所を見つけたのか、迷うことなくその店に入っていく。

クレイも慌てて追いかけるように入店するが、即座に足を止める。

目の前に広がる暗い中にも光る色とりどりの明りに驚きを隠せなかったからだ。

「わっ……すげいや」

「そうだろうか？ 酒場のおっちゃんの言うとおりであったな」

クレイの驚く様に、満足そうなジエームズ。

2人の視線の先では、わざと締め切った様子の暗い店内を恐らくは魔法であろう明りが照らしていた。

しかし、その色は単純な白さではなく、赤や紫、の混ざったものだった。

光がそれらの色をしているのではなく、最初から色のついた透明な容器の中で、

魔法の光がともされているのだと2人は理解した。

ファクトが見れば一言「イルミネーションみたいだ」などと言ったかも知れない。

見るものが見れば無駄遣い過ぎる空間ではあるが、その意味では研究と経験の積み重ねにより、適した雰囲気作りに成功した例が2人の前に展開されていた。

「いらっしやい。あら、こんな若い子、いいのかしら」

受付兼客の見定め役といった様子の女性が体をわざと揺らしながら2人に近寄る。

その男の中身を探るような動きにクレイは動揺を隠せず、顔を赤くするが

ジエームズは落ち着いたものだった。

そんな彼の姿に一瞬不思議そうな表情を浮かべた彼女だったが、すぐに仕事を思い出してさらに口を開こうとしたところでジェームズが手を軽く上げる。

「それも楽しみなんだがな、ほら、頼み事で来たのさ」

ジェームズの手のひらには、いつの間にか握られていたブローチ。

クレイには心当たりは無かったが、これは酒場でジェームズが依頼として受けた話の符丁のようなものだった。

「あら……ありがとう。そういうことならサービスしなくっちゃね！ さ、上へ上がって」

ほころんだ笑顔で案内をする女性。

二階は少なくない客がいる一階のフロアと違い、ある程度小分けになっているのだと2人に言いながら、案内をしていく。

「ねえ、ジェームズ。帰っちゃ……ダメかな？」

「なあに言ってんだ！ 経験だぜ、経験！」

二階に案内されて数刻。

既に出来上がって陽気に騒ぐジェームズに、どこか落ち着かない様子の子のクレイ。

理由は単純で、入れ替わり立ち代り様々な女性が自分に抱きついてくるからだっただけ。

大人の魅力満載な妙齢の女性から、自分より年下に見える若い少女まで、

どこから来るのかいつの間にかそばにいて、いつの間にか触られていた。

触れる柔肌、すべすべとした指が自分の肌を撫でる感覚、

そういったものに正直に反応してしまうクレイ。

アルコールにまだまだなれることが出来ず、素面のままというのも自分が味わう感触に拍車をかけていた。

彼もこういったことが嫌いではない、嫌いではないのだが……素直に楽しむにはまだ若かった。

そんな新鮮な反応に、店の女性達はどこかくすぐられるのか、一人もてている様子だった。

「お連れさんはモテモテね。良いの？」

「俺があいつぐらいの頃は男っ気しかなかったからな。たまの遊びも下っ端だからってほとんどお預けでよう……若いうちに楽しみたかったと思ったもんさ」

ジエームズは隣に座る、どこか疲れた様子が隠せていない髪の長い女性に答えていた。

酒場での依頼から、彼女が依頼主だろうということはジェームズにもわかっていた。

「優しいのね。それで、依頼の件だけど……」

本題に入ろうとした彼女の口を自らの指で押さえるジェームズ。

そんな彼に女性が文句を言おうとした時、隣の区画から怒声がかかる。

「もういっぺん言ってみろ！」

「何度だって言ってやるよ！ 器が小さいってね！」

こういった場で起こる話には痴話げんかであることが多い。

ジェームズ達がいる区画の女性達もそれがわかっているのか、またか、といった様子で深刻な表情ではない。

ただ、まとめ役であろう何名かの女性だけは様子を見に行くべく、部屋を移動していくのをクレイも感じていた。

「ったく……陽気に楽しめんもんかね？」

「……色々あるものよ、色々ね」

ジェームズの行為が爆発寸前の隣の気配を感じたからだと悟った女性性は、ため息をつくようにつぶやいた。

と、そのつぶやきに答えるわけでもないだろうが、瓶が投げられた

のか壁に何か当たって砕ける音がした。

少なからず上がる悲鳴。

「こんなことも日常なのか？」

「まったく無いってわけじゃないけど、そうは無いね」

ジエームズが周囲に問うと、帰ってくるのはそんな答え。

そんなもんだわな、とジエームズが内心つぶやいた時、隣の区画から逃げてきたのか、乱れた服のままの女性が駆け込んでくる。

すぐさま怒声の主であるう男性が追いかけてくるのがその場にいた全員がわかった。

「クレイ、お前やれよ」

「えー？ まあ、ジエームズは飲んでるからなあ……」

ジエームズのそんな言葉に、いやいやそんな返事をしながらもすぐさま立ち上がりて表情を改めるクレイ。

そんな2人のやり取りに困惑した様子の女性陣を尻目に、クレイは駆け込んできた男の前に立ちふさがる。

「なんだあ？ どけガキが！」

「ダメだなあ、おじさん。楽しく過ごそうよ」

叫びと共に襲い掛かるアルコール臭い息に顔をしかめながら、クレイは殴りかかってきた男を体術のみであっさりと床にひっくり返す。ほとんど音も無い動作に男性だけで無く、ジェームズ以外のその場の人間の動きが止まる。

冒険者としてはまだまだと思えるクレイだが、それでも命のやり取りを繰り返していることに変わりはない。

そんじょそこらの相手に負けるようではモンスターに勝てはしないのである。

「なっ……」

床に仰向けにされたまま、ぱくぱくと言葉を失う男性。

何が起きたかがじわりと認識されていくたびに、恐怖も競りあがってくる。

「暴れちゃダメだよ、おじさん？」

クレイにとっては特に意識をしていない、しょうがないなあという微笑。

だが、仰向けにされた男性からしてみれば、それはこれ以上何かするようならわかってるよね？という宣言でしかなかった。

「わ、わかった！ は、払いはすぐして帰る」

何故男性がそこまでおびえているのかはわからないが、解決したならよし、と手を離すクレイ。

慌てた様子で支払いを済ませ、追い払われるように出て行く男性を女性陣はにらみつけ、その後にはクレイへと満面の笑みで迫ってくる。

「やるじゃない少年！ いやー、スマートだね！」

「ほんとほんと！ ねえ、彼女いるの？」

「いたっていいじゃない。いつでも遊びにおいでよ！」

「わわっ、ちよっ、ジェームズ!？」

「お、更にもてもてだな」

選り取り見取りといった様子で自分に抱きついてくる女性らに圧倒されながら、ジェームズに助けを求めるもスルーされてしまうクレイ。

しばらくの間、騒ぎは収まらなかった。

「うらやましい事じゃないか。で、依頼の件だが」

まだ何名もの女性に歓待を受けているクレイを見やりながら、ジェームズが本題を切り出す。

「ええ、実は……」

女性が語るところではこうだった。

仕事帰りや用事後、街中を歩いていると路地に何か光る。

ふと路地に入ると何かに飛び掛られ、アクセサリーを奪われたり、ちよつとした怪我をするということが続いているらしい。

最初はただの猫かと思ったが、動きやその姿がどうにも違うということだった。

ただ、モンスターにして軽微な被害しかないので大事にもしくいということだった。

「へえ……そりゃあ、不気味だな」

「そうなのよ。その……さ、立ってる子も場所がね」

ジエームズの短いつばやきに対抗するかのよう言葉少なに答える依頼主の女性。

「心配すんな。すぐ何とかしてやるよ」

安請け合いとも取れるジエームズの台詞だが、女性は元気をもらった様子で被害にあった女性達の特徴や時間などを語っていく。

「ど？ どうするのさ」

「どうもどうもねえよ。歩く、調べる、それだけだ」

すっかり更けた夜。一度宿屋に2人が戻るとファクトからの知らせが届いており、

ジエームズはその内容にさっさと返事を書く、宿の主人にそれを託す。

街をうろつくのに不自然でなく、それでいて必要な装備はしっかりと。

主に武器はナイフや短剣等、目立たないものといった装備を整え、2人は改めて夜の街に歩き出す。

「相手は女の人を襲ってるんでしょ？ 俺達でどうするのさ？」

「簡単さ、適当に夜の街を楽しみながらちよくちよく路地に入りゃ、勝手に見つかるだろ」

そんな単純なことがあるのか？とクレイは疑問を覚えるが、

1時間も経たないうちに自分に襲い掛かる恥ずかしさと、

その後見つかる糸口に驚くことは想像できないでいたのだった。

29 「男二人、剣二振り - 2」 (前書き)

コーラルを所謂綾 タイプにしないようにしていたら、イマイチどんな子なのか伝わりにくい状態に。まだまだ作りこみが足りません。

29 「男二人、剣二振り - 2」

クレイは一人、赤面していた。

今が夜であることが幸いし、近くにいなければ顔色まではわからな
いだろう。

だが、逆に言えば近くにいれば丸わかりの赤面具合であった。

「ん〜？ 恥ずかしいのかな〜？」

「いやっ、そのっ、当たってっ」

自身の左腕にぶら下がり気味に体重を預けてくる少女に視線を向け
ることも出来ず、

クレイは途切れ途切れに抵抗を試みる。

「私はこれがお仕事だし、当ててるんだよ？」

クレイの耳をくすぐる甘い声。

(コーラルと同一年ぐらいのはずなのに全然違っっ)

今にもそんな心の叫びが口から出てきそうなクレイだったが、

何故コーラルがそこで出てきたのか、彼自身は自覚できていない。

ただ今は、自身に集まる視線を何とかしたいという考えばかりだっ
た。

周囲からの視線が、まだまだ少女といえる相手にクレイがしている行為、にはではなく、慌てた様子のクレイの初々しい態度へのものだ。彼が気がつくことはなかった。

何故クレイがこうした状況になっているか、は少し前にさかのぼる。

「なんでっ!?!」

「お前も言っただらろ? 襲われてるのは女だつてよ。だからさ」

いつの間に話をつけていたのか、ジエームズの後をついていった先には、

大人の魅力にあふれた女性と、元気の良さがどちらかといえば表面に出ている少女、の2人がクレイたちを待っていた。

理由を聞けば、それぞれが今日のお相手、という形であちこちデートのように歩くのだという。

「いや……でも」

冒険者である彼も驚くような素早さで腕に体を絡みつかせてきた少女に、

驚きの表情を浮かべながらもクレイは言葉をつむぐが、自分を見つめる潤んだ瞳に口を閉じる。

「クレイ君は私みたいな子、好みじゃない？」

「いやいやいや、全然っ、可愛いよっ」

頭のどこかで、これは彼女の生きる術だとわかっていても、目の前の光景にクレイは自らの敗北を悟ることになる。

「それにだ。彼女達が引き受けてくれなかったら、お前が女装する予定だったんだ」

ぼそりと、ジエームズの口から出てきた恐るべき計画にクレイは一人、冷や汗をかいていた。

結局、納得せざるを得ない状況にクレイはどこかまよまよとしながらも、夜の街に繰り出したのだった。

そして、現在。

「にじみしてるのも楽しいな」

少女はクレイに捕まりながら、砂糖菓子を口に行っている。

色合いはリンゴのように真っ赤で、何かで着色しているだろうことがわかる。

夜だからこそ出ている屋台等を冷やかしながら、
4人は夜の街を練り歩く。

途中、先ほどのようなお菓子など、細かな買い物しながら段々と
クレイのテンションも上がっていく。

なんだかんだと男の子である。

隣に可愛い女の子がいて、しかも一緒に何かをしているとなれば
自然とテンションも上がるうというものだ。

ましてや、わざとであっても密着の具合が高ければなおさらである。

音が聞こえそうなほどに、クレイの腕にかかる力が強まれば小さな
金属音が響く。

クレイがそちらに視線を向ければ、少女の胸元に光るネックレス。

細かな装飾がふんだんに施され、意識してみると歩きたびに小さく
音を立っていた。

「ん？ ああ、これ？ 手持ちで一番派手なのを着けてくるように
言われたんだよ〜」

自慢するように胸元のネックレスを持ち上げる少女。
同時に胸元が強調される形となり、慌てて視線をそらしたクレイは
頭の隅で別のことを考えていた。

彼にとってジエームズは冒険者としても人生としても先輩である。

恐らくはこの指示もジェームズからのものだ。

普段、今もおちゃらけてはいるが、押さえるべき箇所は押さえる彼のことだ。

この指示にも何か意味がある。

と、クレイはそう考えて視線は戻さないままに少女に頷きながらもジェームズを盗み見る。

連れ合いとなつてゐる女性と腕を組みながら、ジェームズはふつと振り向くとウィンク一つ、クレイに答える。

見れば、ジェームズの隣にいる女性も明らかに装飾の多いネックレスをつけている。

(そっか……襲われた女性には共通点があるっ！)

反応の鈍いクレイに気がつき、再び体を絡めてくる少女にクレイは先ほどとは違う、どこか落ち着いた様子で自然と手を握り返した。

クレイの変化を少女は敏感に感じ取ると、嬉しそうに腕を自身の成長途中の胸元に挟みこむようにするが、それが彼をより赤面させることになる。

「ええとっ……っ!？」

話題を探そうと頭をめぐらせていたクレイの視界に、何かが引つかった。

4人からはまだ20メートルほど離れた場所にある路地。

丁度露店と露店の間にある空白地帯。

何かが、彼の視界をよぎったのだった。

「ジェームズ。右前方、何かがいた」

「？ おう、行くか」

ジェームズはクレイの報告に顔を引き締め、ちゃんと守れよと言って先導するように前を歩く。

自然な様子で路地に近づく4人。

そして、これからお楽しみだと言わんばかりの様子で先頭を行く2人はクレイと少女を置き去りに先に路地に入っていった。

追いかけるべきか、他から見たときの不自然さを考え、他の行動を取るべきか悩んでいる間に、クレイの腕を少女が引く張る。

「ねえ、あれ……」

「え？ あれは！」

少女が指差す先には別の路地、そして猫のような何か。

首元にはまがまがしい雰囲気を感じる首輪をつけている。

2人の視線に気がつくのと、その影は素早く路地に引っ込んだ。

「行きましょ」

「え、ちよっ」

守るべき対象が駆け出したのでは追いかけるしかない。

クレイは慌てて少女を追いかけて、路地に身を躍らせる。

「下がって……」

路地に入っただけで、クレイは相手の異様さを感じ取り、ナイフを素早く抜き放つ。

左手で少女をかばうように下がらせ、路地の奥、何かの樽の上に座る猫のような何か、猫もどきに視線を向ける。

目は赤く輝き、どこかその体も倍に膨らみそうな気配さえ漂っている。

毛並みや、ほとんどの部分は通常見かける猫と大差が無い。

だが、何故だか彼の耳に先ほどまで聞こえていたはずの喧騒がどこか遠くに聞こえていた。

「あ、あれ！ 大家さんとこの猫だ！」

それを疑問に思うまもなくクレイの背後で、猫もどきを見ていた少

女が叫ぶ。

「間違いないの？」

「ええ、この辺にあの毛並みは1匹しかいないわ。でももう1匹、別の毛並みの子がいるはずなのよね」

視線を相手に向けたままのクレイの質問によどみなく答える少女。

警戒を続けながら、クレイは思考をめぐらせる。

これまでの経験や、ジエームズから聞いた話、酒場の冒険者の経験談。

そしてファクトから聞き出した不思議な道具達の噂話。

導き出された結論は、相手はモンスターではなさそうだということ。

(あの猫もどきがこの子の言ってる猫なら、斬っちゃまずいな)

クレイから相手への殺意が消えたのがわかったのか、勢い良く猫もどきは体をしならせて素早く2人に飛び掛る。

「攻撃が軽いんだよっ！」

「きゃっ」

左腕で少女を抱えるように横に飛んだクレイは、右手に持ったナイフの腹部分で相手を薙ぎ払うようにたたきつける。

見た目どおりの体重なのか、クレイの攻撃に猫もどきは体制を崩し、2人から距離をとった。

威嚇のつもりなのか、2人の耳に届く小さな声。

確かに猫のようだが、どこか違う。

(いつからこうだったんだ？ 正体を隠していただけで最初から？
いや、それだと今更な意味がわからない)

クレイは視線を猫もどきに向けながら、腕の中の少女の無事を確かめる。

密着、という言葉が似合う状況に少女の頬がどこか赤いことに、そちらを向くことが出来ないクレイは気がつけないうちに猫もどきの攻撃が再開される。

「またっ！？ くっ！！」

今度は建物を足場にするように、アクロバティックな動きで斜めから猫もどきは2人に襲い掛かり、それをクレイが迎撃する。

思わず声が漏れたのにはわけがあった。

クレイ自身ではなく、少女のほうに猫もどきが向かったからだ。

弱そうなほうを狙う知能があるのか、それとも、とクレイが疑いを持った時、

彼の脳裏に1つの回答が浮かぶ。

「それ、投げてみて」

クレイは唐突に振り向き、少女の胸元に視線を向けて声をかける。

「え？ これ？ わかったわっ！」

少女がその意味を悟り、首もとのネックレスを猫もどきに投げつけた時、

猫もどきはそのネックレスへと無防備に飛び掛ったのだ。

「今だっ！」

クレイは叫び、少女をその場に置いて無防備な猫もどきへと飛び掛り、その小さな体を押さえつける。

反撃を待つこともなく、手際よくその首輪と体の間にナイフを滑り込ませ、バンドの部分を切断することに成功する。

ハラリと落ちる首輪。

そして、クレイは手の中の猫もどきからプレッシャーが消えるのを感じていた。

「……終わったの？」

「みたいだ。これ、何かのマジックアイテムじゃないかなあ？ 呪
的なの」

大人しくなった猫もどき、もとい猫を外套で抱えたクレイが少女に答える。

幸いにも、先ほどまでのクレイからの攻撃は今の姿にはダメージを残していないようだった。

ナイフを仕舞い、あいているほうの手で首輪だったものを持ち上げるクレイの視線の先に、力を失ったのか光が鈍くなった首輪についた石部分がある。

「へー……高いの？」

「いや、つけた相手がこんなになるんじゃない、結構限られるんじゃない？」

路地から露店の立ち並ぶ空間へと戻ると喧騒が2人を覆う。

どうやら簡単な結界のような効力も発揮していたようで、道端の彼らが先ほどの戦いを気にしている様子も無い。

手近な店にあった籠を買い求めたクレイはそれに猫を入れる。

バスケットのようなそれは、猫も気に入ったようで顔だけを出して大人しくしている。

「かわいいー！ あっ、あっちも帰ってきたよ！」

少女の声にクレイが視線を向ければ、ジエームズと女性も路地から出てくるところだった。

と、女性の手元には1匹の猫。

どうやらあちらも同じだったようだと思いながらクレイが手を振ると、ジエームズは笑顔でそれに答えた。

「無事だったか。なんだ、お前のほうも猫か」

「うん。知り合いの猫らしいんだけど」

「ええ、3つ目の角を曲がったところの猫ですよ」

少女だけでなく、女性側も猫の飼い主のことを知っており、そう言っ
てクレイの持つ籠へともう1匹も入れる。

仲が良いのか、飛び出すことも無く2匹の猫は籠の中でご機嫌そう
であった。

ジエームズとクレイは2人の案内でその家へと向かう。

「変な露店で安かったから買った？」

「う、うん」

猫を見るなり笑顔で飛び出してきた女性の語る内容に、ジエームズ
はあきれたように叫ぶ。

「明らかに変なマジックアイテムだぜ、これ。今回はアクセサリを

狙うだけですんだけど、ちゃんとしたのを買ってやれよ?」

特別強い言葉というわけではなかったが、実際に被害が出ているという事実が女性を十分後悔させたようだった。

ぶんぶんと縦に首を振る女性にそれ以上の追求はせず、2人は宿に戻る事になった。

女性と少女に別れを告げ、のんびりと宿に戻る2人。

「なあクレイ。脈がありそうじゃないか」

「な、何言ってるんだよっ! あの子だって商売だろ?」

慌てたクレイの言葉に、ジエームズはにやりと笑ってその背中を勢い良くたたいて続ける。

「俺は何もあの子との仲が、なんて言っていないぜ? そっかそっか。いいことだ」

「だからっ……もういいよ……」

反論しても無駄だと悟ったクレイは力なく肩を落とす、とぼとぼと歩く。

その後、ファクトとコーラルが帰ってくるまではしばしの休息を楽しみ、

数日後に戻ってきた2人と連れ立って次なる依頼を探しに酒場へと向かう。

「へー、そんなのが売ってたのか。危ないな」

「まったくだ。人騒がせにも程があるぜ」

肩をすくめてファクトに答えるジエームズの視界に、何人もの少女が走ってくるのが見えた。

ジエームズはそちらを見るなり全てを理解したようににやりと笑い、クレイが目立つようにさりげなく立ち位置を変える。

「ん？ どうしたのジエームズ……うわわっ!？」

急に動きを変えたジエームズに振り向いたクレイだったが、その背中に数名の少女が体当たり気味にぶつかってきてくることで倒れそうになる。

「いたー！ー！！ 探したんだからね！」

叫ぶのはあの日、クレイと出かけた少女。

「え、なんで？」

何故彼女がここにいるのか、その上何人も連れ合いがいるのか。

それらがクレイの思考能力を奪う。

「なんでって、みんながお礼を言いたいって言うから」

少女は向き直り、そういつて一緒に走ってきた面々を紹介する。

口々にお礼を述べてくる少女達に、クレイはどう答えたものやらと苦慮しながら応対し、ある意味微妙な空気を生み出していた。

「本当にありがとう！　じゃ、これお礼ねっ」

手ぶらのはずの彼女にそう言われ、何が出てくるかと考えたクレイを裏切る形で、少女がクレイの胸元に飛び込んでくると同時に彼の頬にやわらかく暖かな何かが触れる。

それが何かを正しく理解する前に、他の少女もクレイに駆け寄り、彼の両頬に続けて同じ様な感触が襲う。

「えっ……今のっ」

「えへへへ、じゃね！」

周囲の視線がさすがに気になったのか、顔を赤くした少女はそういつて仲間とともに店のほうへと走り去っていく。

後に残されるのは、4人と周囲の面々。

状況を楽しんでいるジエームズと、理由はわからないが面白そうな事になっていると考えるファクト。

そして……。

「何よ、クレイってばずっと女の子と遊んだの？……不潔」

小さな少女の眩きが少年をえぐり、大人2人の笑いを誘う。

色々と不穏な気配はあるが、今日、この瞬間はおおむね平和だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3117u/>

マテリアルドライブ

2011年11月8日17時31分発行